

平成14年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

前 中 西 遺 跡 III

—熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書Ⅱ—

2003

埼玉県熊谷市教育委員会

平成14年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

まえ なか にし い せき Ⅲ
前 中 西 遺 跡

—熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書Ⅱ—

2003

埼玉県熊谷市教育委員会

序

私たちの郷土熊谷には、原始・古代の集落や中世の館跡等の埋蔵文化財が、数多く分布しております。

こうした埋蔵文化財は、郷土の発展やその過程を物語る証しであるとともに、私たち子孫の繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡であります。私たちは、こうした文化遺産を継承し、次世代に伝え、さらに豊かな熊谷市形成の礎としていかなければならないと考えております。

熊谷市では、市民が暮らしやすく、生活環境の豊かさを実感できる土地利用を図ることを目的に土地区画整理事業を進めております。上之土地区画整理事業もその一つであります。事業地内には事前の試掘調査により、原始・古代から中世に至るおびただしい遺跡が確認されており、遺跡の重要性に鑑みて関係部局と保存に向けて協議を行ってまいりました。しかし、土地区画整理事業上やむを得ず計画等の変更ができない街路築造工事、調節池造成箇所等に関しては、記録保存の方策を講ずることとなりました。

本書は、平成10年度から平成12年度に実施された街路築造工事に伴う発掘調査の成果をまとめたものです。

今回報告いたします前中西遺跡の発掘調査では、多数の弥生時代中期から後期の土器棺墓や方形周溝墓等の墓跡、弥生時代、古墳時代後期及び古代の集落など、当地域における弥生時代の墓制の様相、集落の変遷を考える上で貴重な資料を得ることができました。

本書が埋蔵文化財保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発の資料として広く活用されることとなれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書刊行に至るまで、文化財保護法の趣旨を尊重されご理解、御協力を賜りました熊谷市都市整備部都市計画課、土地区画整理上之事務所、並びに地元関係者には厚くお礼申し上げます。

平成15年3月

熊谷市教育委員会
教育長 飯塚誠一郎

例 言

- 1 本書は、埼玉県熊谷市大字上之2656番地1他に所在する前中西遺跡（埼玉県遺跡番号59-107）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業に伴う事前記録保存のための発掘調査であり、熊谷市教育委員会が実施した。
- 3 本事業の組織は、I章のとおりである。
- 4 発掘調査期間は、平成10年10月1日～平成11年3月31日、平成11年10月1日～平成12年2月18日及び平成12年9月18日～平成13年3月30日である。
整理・報告書作成期間は、平成14年4月10日～平成15年1月31日である。
- 5 発掘調査の担当は、平成10年度は熊谷市教育委員会松田 哲・秋本太郎（現群馬県箕郷町教育委員会）、平成11年度は熊谷市教育委員会吉野 健・越前谷 理（現埼玉県三芳町教育委員会）、平成12年度は熊谷市教育委員会金子正之・松田 哲が、整理報告書作成事業は、吉野が担当した。
- 6 本書の執筆は、吉野が担当した。また、一部の弥生土器の実測・トレースについては松田の補助を得た。
- 7 写真撮影は、発掘調査を各々の担当者が、遺物を吉野が行った。
- 8 出土遺物は、熊谷市教育委員会で保管している。
- 9 本書の作成にあたり、下記の方々及び機関等からご教示、ご協力を賜った。記して謝意を表します。
（敬称略）
磯崎 一、吉田 稔、細田 勝、大里郡市文化財担当者会

凡 例

- 1 本文中、遺構の表記記号は、次のとおりである。

S A・・・掘立柱列、S B・・・掘立柱建物跡、S D・・・溝跡、S E・・・井戸跡、S G・・・木棺墓、S J・・・住居跡、S K・・・土坑、S R・・・方形周溝墓、S T・・・竪穴状遺構、S X・・・土器棺墓、P・・・ピット

- 2 各遺構の番号は、整理作業の段階で変更した。

- 3 土層断面図中の表記記号は、次のとおりである。

S・・・川原石、P・・・土器、B・・・骨

- 4 遺構挿図の縮尺は、次のとおりである。

遺構全測図・・・1/600、住居跡・竪穴状遺構・掘立柱建物跡・掘立柱列・木棺墓・井戸跡・土坑・溝跡土層断面図・・・1/60、住居跡カマド土層断面図・・・1/40、溝跡平面図・・・1/120・1/160、方形周溝墓・・・1/80、土器棺墓・・・1/20、ピット平面図・・・1/180、その他、遺跡位置図、周辺遺跡分布図等は、その都度スケール脇に縮尺率を示した。

- 5 遺構平面図・土層断面図中の遺物番号は、遺物挿図中の遺物番号に一致する。

- 6 遺構土層断面図及びエレベーション図のポイントの標高は、その都度、ポイント脇に示した。また、原則として、同一図版・同一遺構の標高はAポイントに表記した。

- 7 遺物実測図の縮尺は、弥生土器・土師器・須恵器・灰釉陶器・陶器・土錘・瓦・砥石は1/4、弥生土器（拓影図・底部）・石器（石斧・一部の砥石・磨石）は1/3、石鏃・紡錘車・種子、その他特殊遺物は1/2、管玉は1/1とした。

- 8 遺物実測図の中で、中心線はすべて実線で示し、遺物観察表にできる限り残存率で示した。また、断面表現は、須恵器のうち還元焰焼成のものは黒塗り、酸化焰焼成のものは白抜き、灰釉陶器は  それ以外の土師器、陶器等の遺物はすべて白抜きで示した。

- 9 スクリーントーン指示は、赤彩は  、黒色処理  、灰釉  、油煙は  、火だすき  、漆  、炭化箇所  で示し、その他についてはその都度示した。また、墨書は黒塗りで示した。

- 10 遺物観察表の凡例は、次のとおりである。

法量の単位は、cm、gである。また、推定値は括弧付けで示した。

胎土は、土器に含まれる含有鉱物を以下の記号で示した。A・・・白色粒子、B・・・黒色粒子、C・・・赤色粒子、D・・・褐色粒子、E・・・赤褐色粒子、F・・・白色針状物質、G・・・長石、H・・・石英、I・・・白雲母、J・・・黒雲母、K・・・角閃石、L・・・片岩、M・・・砂粒、N・・・礫、O・・・金雲母

色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修1997年版）に照らし最も近似した色相を示した。

焼成は、次のように区分した。A・・・良好、B・・・普通、C・・・不良

目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
I 発掘調査の概要	1
1 調査に至る経過	1
2 発掘調査・報告書作成の経過	1
3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織	2
II 遺跡の立地と環境	4
III 遺跡の概要	15
1 調査の方法	15
2 検出された遺構と遺物	15
IV 遺構と遺物	16
1 竪穴住居跡	16
2 掘立柱建物跡	49
3 掘立柱列	62
4 竪穴状遺構	62
5 方形周溝墓	65
6 土器棺墓	84
7 木棺墓	88
8 土坑	89
9 ピット	99
10 井戸跡	109
11 溝跡	127
12 遺構外出土遺物	181
V 調査のまとめ	187

挿 図 目 次

第1図 埼玉県の地形	3
第2図 周辺遺跡分布図	6
第3図 上之土地区画整理事業地内遺跡グリッド図	9
第4図 前中西遺跡位置図	9
第5図 前中西遺跡全測図(1)	11
第6図 前中西遺跡全測図(2)	13
第7図 第1号住居跡・出土遺物	16
第8図 第2号住居跡・出土遺物	17
第9図 第3号住居跡・出土遺物	18
第10図 第4号住居跡・出土遺物	19
第11図 第5号住居跡・出土遺物	20
第12図 第6号住居跡・出土遺物	21
第13図 第7号住居跡・出土遺物	22
第14図 第8号住居跡・出土遺物	23
第15図 第9号住居跡・出土遺物	24
第16図 第10号住居跡・出土遺物	25
第17図 第11号住居跡・出土遺物	26
第18図 第12号住居跡・出土遺物	27
第19図 第13号住居跡・出土遺物	29
第20図 第14・28号住居跡、第14号住居跡 出土遺物	30
第21図 第15号住居跡・出土遺物	31
第22図 第16号住居跡・出土遺物	32
第23図 第17号住居跡・出土遺物	33
第24図 第18号住居跡・出土遺物	35
第25図 第19号住居跡・出土遺物	36
第26図 第20号住居跡・出土遺物	38
第27図 第21号住居跡・出土遺物	39
第28図 第22号住居跡・出土遺物	41
第29図 第23号住居跡・出土遺物	42
第30図 第24号住居跡・出土遺物(1)	44
第31図 第24号住居跡出土遺物(2)	45
第32図 第25号住居跡	45
第33図 第26号住居跡・出土遺物	46

第34図	第27号住居跡・出土遺物	48	第70図	第11号方形周溝墓・出土遺物	81
第35図	第1号掘立柱建物跡	50	第71図	第12号方形周溝墓・出土遺物	83
第36図	第2号掘立柱建物跡	50	第72図	第13号方形周溝墓	83
第37図	第3号掘立柱建物跡	51	第73図	第1号土器棺墓・出土遺物	84
第38図	第4号掘立柱建物跡	52	第74図	第2号土器棺墓・出土遺物	86
第39図	第5号掘立柱建物跡	53	第75図	第3号土器棺墓・出土遺物	87
第40図	第6・11号掘立柱建物跡	53	第76図	第1号木棺墓・出土遺物	88
第41図	第7号掘立柱建物跡	53	第77図	第1～12号土坑	91
第42図	第8号掘立柱建物跡	53	第78図	第13～22号土坑	92
第43図	第9号掘立柱建物跡	56	第79図	第23～34号土坑	93
第44図	第10号掘立柱建物跡	56	第80図	第35～41号土坑	94
第45図	第12号掘立柱建物跡	56	第81図	第1・3・9・10・12・16・17・19・20 ・22号土坑出土遺物	95
第46図	第13号掘立柱建物跡	56	第82図	第21・25号土坑出土遺物	96
第47図	第14号掘立柱建物跡	58	第83図	第26号土坑出土遺物	97
第48図	第15号掘立柱建物跡	58	第84図	第26・28・29・42号土坑出土遺物	98
第49図	第16号掘立柱建物跡	58	第85図	第42～47号土坑	99
第50図	第17号掘立柱建物跡	58	第86図	ピット全体図区割図	99
第51図	第18号掘立柱建物跡	60	第87図	ピット全体図(1)	100
第52図	第1・2・4・5・8・11・18号掘立柱 建物跡出土遺物	61	第88図	ピット全体図(2)	100
第53図	第1号掘立柱列	62	第89図	ピット全体図(3)	101
第54図	第1～3号竪穴状遺構	63	第90図	ピット全体図(4)	101
第55図	第4号竪穴状遺構・出土遺物	63	第91図	ピット全体図(5)	101
第56図	第5号竪穴状遺構	64	第92図	ピット全体図(6)	102
第57図	第6号竪穴状遺構・出土遺物	64	第93図	ピット全体図(7)	102
第58図	第1号方形周溝墓・出土遺物	66	第94図	ピット全体図(8)	103
第59図	第2号方形周溝墓・出土遺物	66	第95図	ピット全体図(9)	103
第60図	第3～5号方形周溝墓・出土遺物	68	第96図	ピット全体図(10)	103
第61図	第6号方形周溝墓・出土遺物	70	第97図	ピット全体図(11)	104
第62図	第7号方形周溝墓	72	第98図	ピット全体図(12)	104
第63図	第7号方形周溝墓出土遺物	73	第99図	ピット全体図(13)	104
第64図	第8号方形周溝墓・出土遺物	74	第100図	第24・103・139・149・167・244 ・245号ピット出土遺物	108
第65図	第9号方形周溝墓・遺物分布図	75	第101図	第1～5号井戸跡	110
第66図	第9号方形周溝墓出土遺物(1)	77	第102図	第1～4号井戸跡出土遺物	112
第67図	第9号方形周溝墓出土遺物(2)	78	第103図	第6～11号井戸跡	113
第68図	第10号方形周溝墓	79	第104図	第6・7・11号井戸跡出土遺物	116
第69図	第10号方形周溝墓出土遺物	80			

第105図	第12～18号井戸跡	119	第126図	第50号溝跡出土遺物	159
第106図	第12・13号井戸跡出土遺物	120	第127図	第51～55号溝跡	160
第107図	第13・15～19号井戸跡出土遺物	121	第128図	第51号溝跡出土遺物(1)	161
第108図	第19～25号井戸跡	124	第129図	第51号溝跡出土遺物(2)	162
第109図	第20～23号井戸跡出土遺物	126	第130図	第52・54号溝跡出土遺物	165
第110図	第1～3・8～10号溝跡	129	第131図	第56・60・61号溝跡	167
第111図	第4・8・9号溝跡出土遺物	131	第132図	第57～59号溝跡	168
第112図	第9号溝跡出土遺物(2)	132	第133図	第62～64号溝跡	170
第113図	第10～12号溝跡出土遺物	134	第134図	第65～71号溝跡	172
第114図	第4～7・11～16号溝跡	136	第135図	第56～60・64～67号溝跡出土遺物	174
第115図	第17～22号溝跡	137	第136図	第72～78号溝跡	176
第116図	第13～17・22号溝跡出土遺物	138	第137図	第72・74・75・77号溝跡出土遺物	177
第117図	第23～32号溝跡	141	第138図	第78号溝跡出土遺物	178
第118図	第23・24・26・27・30～32号溝跡 出土遺物	144	第139図	第79・80号溝跡	180
第119図	第33～40号溝跡	146	第140図	第80号溝跡出土遺物	180
第120図	第33～36・38～40号溝跡出土遺物	148	第141図	遺構外出土遺物(1)	183
第121図	第41～46号溝跡	151	第142図	遺構外出土遺物(2)	184
第122図	第43号溝跡出土遺物	152	第143図	遺構外出土遺物(3)	185
第123図	第44・45・47号溝跡出土遺物	154	第144図	遺構外出土遺物(4)	186
第124図	第47～50号溝跡	156	第145図	前中西遺跡周辺旧地形復元図	188
第125図	第48・49号溝跡出土遺物	157	第146図	前中西遺跡方形周溝墓分布図	191
			第147図	前中西遺跡土器棺墓	192

表 目 次

第1表	第1号住居跡出土遺物観察表	16	第11表	第11号住居跡出土遺物観察表	27
第2表	第2号住居跡出土遺物観察表	17	第12表	第12号住居跡出土遺物観察表	27
第3表	第3号住居跡出土遺物観察表	18	第13表	第13号住居跡出土遺物観察表	29
第4表	第4号住居跡出土遺物観察表	19	第14表	第14号住居跡出土遺物観察表	30
第5表	第5号住居跡出土遺物観察表	20	第15表	第15号住居跡出土遺物観察表	32
第6表	第6号住居跡出土遺物観察表	21	第16表	第16号住居跡出土遺物観察表	32
第7表	第7号住居跡出土遺物観察表	23	第17表	第17号住居跡出土遺物観察表	33
第8表	第8号住居跡出土遺物観察表	23	第18表	第18号住居跡出土遺物観察表	34
第9表	第9号住居跡出土遺物観察表	24	第19表	第19号住居跡出土遺物観察表	37
第10表	第10号住居跡出土遺物観察表	26	第20表	第20号住居跡出土遺物観察表	37

第21表	第21号住居跡出土遺物観察表 ……39	第48表	ピット一覧表 ……105
第22表	第22号住居跡出土遺物観察表 ……40	第49表	第24・103・139・149・167・244 ・245号ピット出土遺物観察表 ……109
第23表	第23号住居跡出土遺物観察表 ……42	第50表	第1～4号井戸跡出土遺物観察表 ……111
第24表	第24号住居跡出土遺物観察表 ……43	第51表	第6・7・11号井戸跡出土遺物観察表 ……117
第25表	第26号住居跡出土遺物観察表 ……47	第52表	第12・13・15～19号井戸跡出土 遺物観察表 ……122
第26表	第27号住居跡出土遺物観察表 ……47	第53表	第20～23号井戸跡出土遺物観察表 ……127
第27表	第1・2・4・5・8・11・18号掘立柱 建物跡出土遺物観察表 ……61	第54表	第4・8・9号溝跡出土遺物観察表 ……130
第28表	第4号竪穴状遺構出土遺物観察表 ……64	第55表	第10～12号溝跡出土遺物観察表 ……135
第29表	第6号竪穴状遺構出土遺物観察表 ……64	第56表	第13～17・22号溝跡出土遺物観察表 ……139
第30表	第1号方形周溝墓出土遺物観察表 ……65	第57表	第23・24・26・27・30～32号溝跡 出土遺物観察表 ……145
第31表	第2号方形周溝墓出土遺物観察表 ……67	第58表	第33～36・38～40号溝跡出土遺物 観察表 ……149
第32表	第3～5号方形周溝墓出土遺物観察表 ……69	第59表	第43号溝跡出土遺物観察表 ……153
第33表	第6号方形周溝墓出土遺物観察表 ……70	第60表	第44・45・47号溝跡出土遺物観察表 ……155
第34表	第7号方形周溝墓出土遺物観察表 ……71	第61表	第48・49号溝跡出土遺物観察表 ……158
第35表	第8号方形周溝墓出土遺物観察表 ……74	第62表	第50号溝跡出土遺物観察表 ……159
第36表	第9号方形周溝墓出土遺物観察表 ……76	第63表	第51号溝跡出土遺物観察表 ……163
第37表	第10号方形周溝墓出土遺物観察表 ……80	第64表	第52・54号溝跡出土遺物観察表 ……164
第38表	第11号方形周溝墓出土遺物観察表 ……82	第65表	第56～60・64～67号溝跡出土遺物 観察表 ……175
第39表	第12号方形周溝墓出土遺物観察表 ……82	第66表	第72・74・75・77号溝跡出土遺物 観察表 ……177
第40表	第1号土器棺墓出土遺物観察表 ……84	第67表	第78号溝跡出土遺物観察表 ……179
第41表	第2号土器棺墓出土遺物観察表 ……85	第68表	第80号溝跡出土遺物観察表 ……180
第42表	第3号土器棺墓出土遺物観察表 ……85	第69表	遺構外出土遺物観察表 ……181
第43表	第1号木棺墓出土遺物観察表 ……89		
第44表	土坑一覧表 ……90		
第45表	第1～3・9・10・12・16・17・19・20 ・22号土坑出土遺物観察表 ……95		
第46表	第21・25号土坑出土遺物観察表 ……96		
第47表	第26・28・29・42号土坑出土遺物観察 表 ……98		

図版目次

- 図版 1 前中西遺跡全景〔第1区〕(右が北)
前中西遺跡全景〔第2区〕
- 図版 2 前中西遺跡全景〔第3～5区〕
前中西遺跡全景〔第6～8区〕
- 図版 3 第3号住居跡
第4号住居跡
第5号住居跡、第47号溝跡(奥)
第6号住居跡
第7号住居跡、第4号土坑(手前)
第9号住居跡
第9号住居跡カマド土師器出土状況
第10号住居跡
- 図版 4 第11号住居跡、第13号井戸跡(奥)
第12号住居跡
第13号住居跡、第3号溝跡(左)
第14号住居跡、第12号土坑(奥)
第15号住居跡
第16号住居跡
第17号住居跡
第18号住居跡
- 図版 5 第19・24号住居跡(手前)、第18・22号住居跡(奥)
第22号住居跡
第22号住居跡須恵器出土状況
第22号住居跡石製紡錘車出土状況
第23号住居跡
第24号住居跡
第24号住居跡ピット1須恵器出土状況
第24号住居跡土師器出土状況
- 図版 6 第26号住居跡カマド土師器出土状況
第27号住居跡
第2号掘立柱建物跡
第3号掘立柱建物跡、第1号方形周溝墓南溝(右)、第18～20号溝跡(左)
- 第5号掘立柱建物跡、第1号土坑(中央)
第6・11号掘立柱建物跡
第7号掘立柱建物跡
第12号掘立柱建物跡、第28号住居跡(左)、第13号土坑(奥)
- 図版 7 第16号掘立柱建物跡(左)、第1号掘立柱列(中央)、第21号井戸跡(右)
第1～3号竪穴状遺構
第4号竪穴状遺構
第6号竪穴状遺構、第70号溝跡(手前)
第1号方形周溝墓南溝弥生土器出土状況
第2号方形周溝墓東溝
第2号方形周溝墓東溝弥生土器出土状況
- 図版 8 第5号方形周溝墓、第18号掘立柱建物跡(手前)、第3・4号方形周溝墓(奥)
第6号方形周溝墓
第7号方形周溝墓、第50号溝跡(奥)
第7号方形周溝墓南溝弥生土器出土状況
第8号方形周溝墓、第33・34号土坑
第9号方形周溝墓
第9号方形周溝墓北溝弥生土器出土状況
第9号方形周溝墓東溝弥生土器出土状況
- 図版 9 第10号方形周溝墓
第11号方形周溝墓
第11号方形周溝墓北溝弥生土器出土状況
第11号方形周溝墓南溝弥生土器出土状況
第12号方形周溝墓南溝
第12号方形周溝墓東溝打製石斧出土状況
- 図版 10 第1号土器棺墓
第1号土器棺墓弥生土器出土状況
第2号土器棺墓
第2号土器棺墓弥生土器出土状況(1)
第2号土器棺墓弥生土器出土状況(2)
第3号土器棺墓弥生土器出土状況

	第1号木棺墓		第23～28号溝跡
	第2号土坑	図版15	第27号溝跡
図版11	第14号土坑、第70号ピット		第30号溝跡
	第16号土坑（中央）		第31号溝跡
	第19号土坑（手前）、第20号土坑（奥）		第31号溝跡弥生土器出土状況
	第21号土坑		第32号溝跡
	第21号土坑弥生土器出土状況		第32号溝跡弥生土器出土状況
	第25号土坑		第33号溝跡（中央）
	第26号土坑		第34・35号溝跡
	第36号土坑	図版16	第37号溝跡
図版12	第40号土坑		第40号溝跡
	第42号土坑		第43号溝跡、第44号溝跡（奥）
	第43号土坑		第44号溝跡水溜状遺構
	第1号井戸跡		第45号溝跡
	第3号井戸跡		第45号溝跡弥生土器出土状況
	第4号井戸跡、第16号溝跡（右）		第48号溝跡
	第6号井戸跡	図版17	第49号溝跡
図版13	第11号井戸跡		第51号溝跡
	第12号井戸跡		第51号溝跡木製品出土状況
	第18号井戸跡		第52号溝跡
	第19号井戸跡瓦質土器出土状況		第53号溝跡
	第21号井戸跡		第54号溝跡（中央）
	第22号井戸跡		第55号溝跡
	第23号井戸跡（底面曲物井戸枠）		第62号溝跡、第40号土坑（手前）
	第25号井戸跡	図版18	第57号溝跡（中央）、第58号溝跡（右）、 第59号溝跡（左）
図版14	第8号溝跡（右）、第9号溝跡（左）		第60号溝跡
	第10号溝跡		第65号溝跡（中央右）、第66号溝跡（中 央左）、第67号溝跡（左）
	第11号溝跡（手前）、第12号溝跡（手前 から奥）		第65号溝跡土師器出土状況
	第14号溝跡（中央）、第13号溝跡（左）、 第15号溝跡（右）		第76号溝跡（手前）、第77号溝跡（中央）、 第78号溝跡（奥）
	第15号溝跡（中央に第4号井戸跡）、第6 号井戸跡（埋戻後、手前）		第78号溝跡土師器出土状況
	第17号溝跡（手前）、第18号溝跡（手前 から奥）	図版19	第75号溝跡、第13号方形周溝墓北溝（手 前）
	第22号溝跡（中央）、第21号溝跡（左）、 第26号住居跡、第17・18号土坑（中央左）		第79号溝跡
			第80号溝跡

- 第80号溝跡弥生土器出土状況
- 図版20 第49号溝跡出土縄文土器、第2号住居跡、第1・2・9・11号方形周溝墓、第26号土坑、第13号井戸跡、第50・51号溝跡出土弥生土器
- 図版21 第1～3号土器棺墓、第21号土坑、第13号井戸跡、第9・45・49・50・80号溝跡、遺構外出土弥生土器
- 図版22 第9・11号方形周溝墓、第1号土器棺墓、第13号井戸跡、第9・32・43・50号溝跡、遺構外出土弥生土器
- 図版23 遺構外出土弥生土器、第7・9・26号住居跡、第1・11号掘立柱建物跡、第12・14・51・78号溝跡、遺構外出土土師器
- 図版24 第7・9・26号住居跡、第54・78号溝跡出土土師器、第16～18・22号住居跡、第11・12・36号溝跡、遺構外出土須恵器
- 図版25 第22・24・26・27号住居跡、第6号竪穴状遺構、第13号井戸跡、第12・17・35・51・52号溝跡、遺構外出土須恵器
- 図版26 第13号井戸跡、遺構外出土須恵器、第26号住居跡、遺構外出土灰釉陶器、第6・7号井戸跡、遺構外出土土師質土器、第19号井戸跡出土陶器、第19号井戸跡、第11号溝跡出土瓦質土器、第4号溝跡出土縄文土器、第1～5号住居跡、第26号土坑出土弥生土器
- 図版27 第3～12号方形周溝墓、第43号溝跡出土弥生土器
- 図版28 第51・52・58・59・75・77・78号溝跡出土弥生土器、第10・22・36・40・44・48・51・66号溝跡、遺構外出土須恵器
- 図版29 第1・3・4・6・7・12・20・21号井戸跡出土陶磁器、遺構外出土瓦質土器、第14・17・18・22・24・26号住居跡、第27・40・65号溝跡、遺構外出土土錘、第15号溝跡出土土製支脚、遺構外出土平瓦、第1号木棺墓出土管玉、第12号溝跡出土勾玉、第9号方形周溝墓出土石剣、第149号ピット出土砥石、第11号溝跡出土滑石製石製品、第11・22・24号住居跡、遺構外出土紡錘車
- 図版30 第24・27号住居跡出土砥石、第12号方形周溝墓、第43・49・50号溝跡、遺構外出土石器、第3号井戸跡出土挽物椀、第19号井戸跡、第51号溝跡出土木製品、第11号溝跡、遺構外出土古銭、第48号溝跡出土馬齒、第10号方形周溝墓、第3・4・18・23号井戸跡、第48・51・78号溝跡出土種子

I 発掘調査の概要

1 調査に至る経過

昭和61年6月6日付け61熊都発第148号で、熊谷市長より上之第一地区土地地区画整理事業（現上之土地地区画整理事業）地内の埋蔵文化財の所在及び取り扱いに関する照会が出された。事業地内には、全域に弥生時代から平安時代の遺跡が所在する地域であり、工事に先立って発掘調査を実施する必要がある旨を回答し、熊谷市教育委員会は、平成7年11月13日から平成8年1月19日にかけて、遺跡の所在確認調査を実施した。その結果、弥生時代から近世の集落跡及び墓跡が広範囲に分布することを確認した。この結果を踏まえて平成8年2月9日付け熊教社発第865号で、熊谷市教育委員会教育長から熊谷都市計画事業上之土地地区画整理事業代表者熊谷市長あてに次のように通知した。

事業地内には、埋蔵文化財包蔵地（前中西遺跡、藤之宮遺跡及び諏訪木遺跡）が所在する。当該地は現状保存するか、または埋蔵文化財に影響を及ぼさない方法での開発が望ましい。やむを得ず埋蔵文化財に影響を及ぼす場合は、事前に記録保存のための発掘調査を実施すること、なお、発掘調査の実施については教育委員会と協議すること。

その後、保存について協議を重ねたが、工事計画の変更は不可能であると判断されたため、記録保存の措置を講ずることとなった。文化財保護法第57条の3第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の通知は代表者熊谷市長より平成10年9月24日、平成11年9月13日及び平成12年9月11日付けで提出された。発掘調査は、平成10年度、平成11年度及び平成12年度に熊谷市教育委員会により実施された。

発掘調査に関わる熊谷市教育委員会の報告、通知及び埼玉県教育委員会からの通知は以下のとおりである。

平成10年度

平成10年9月24日付け熊教社発第620号（報告）

平成10年10月5日付け教文第3-446号

平成11年度

平成11年9月27日付け熊教社発第653号（報告）

平成11年10月1日付け教文第3-488号

平成12年度

平成12年9月12日付け熊教社発第509号（通知）

平成12年10月18日付け教文第3-475号

2 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

今回報告する前中西遺跡の発掘調査は、平成10年10月1日～平成11年3月31日、平成11年10月1日～平成12年2月18日及び平成12年9月18日～平成13年3月30日にかけて行われた。調査面積は、遺跡面積約290,000㎡のうち街路築造工事によって破壊をうける5,241.17㎡（平成10年度2,165㎡、平成11年度1,581㎡、平成12年度1,495.17㎡）であった。

いずれの年度も上之土地区画整理事業地内における南東隅付近の街路工事部分の調査を実施した。

それぞれの調査区で遺構確認面まで重機による表土剥ぎを行い、作業員による遺構確認のための精査を行った。順次遺構掘削作業を行い、遺構・遺物の実測、写真撮影を行った。空中写真は、平成11年3月、平成12年1月及び平成13年1月に撮影した。

平成10年3月31日、平成12年2月18日及び平成13年3月30日には現地における調査のすべてを終了した。

(2) 整理・報告書作成作業

本書の整理作業は、平成14年4月から平成15年1月にかけて実施した。

遺物の洗浄・注記を実施し、土器の接合・復元作業を行い、遺物の分類を行い、実測作業を開始した。また、遺構の図面整理も実施した。

次に、土器等の遺物のトレース、拓本を採り図版組を行い、遺構のトレース・図版組を行った。そして、遺構の写真整理・遺物写真撮影を行い、写真図版の割付をした。また、それと並行して原稿執筆を行い、業者の選定をし、本報告書の刊行をした。

3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主 体 者 熊谷市教育委員会

(1) 発掘調査

平成10年度

教育長	岡嶋 一夫
教育次長	坂巻 篤 (故人)
社会教育課長	氏家 保男
社会教育課副参事	鈴木 敏昭
社会教育課長補佐	北 俊明
社会教育課文化財保護係主幹兼係長	金子 正之

主任	寺社下 博
主任	渡邊 操
主任	吉野 健
主事	松田 哲
発掘調査員	佐々木健策
発掘調査員	市川 康弘
発掘調査員	秋本 太郎

主任	寺社下 博
主任	渡邊 操
主任	吉野 健
主事	松田 哲
発掘調査員	市川 康弘
発掘調査員	小林 貴郎
発掘調査員	越前谷 理

平成12年度

教育長	飯塚誠一郎
教育次長	野辺 良雄
社会教育課長	浜島 義雄
社会教育課副参事	浅野 晴樹
社会教育課長補佐	北 俊明
社会教育課文化財保護係主幹兼係長	金子 正之

平成11年度

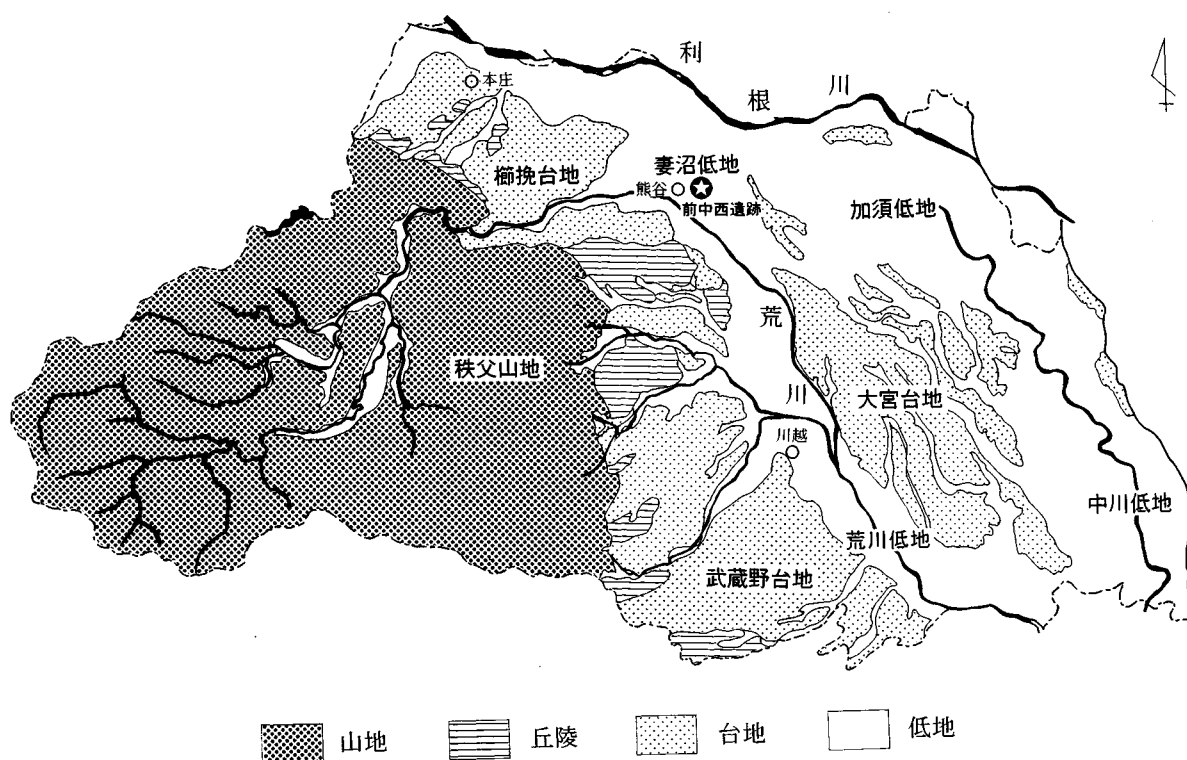
教育長	飯塚誠一郎
教育次長	坂巻 篤 (故人)
社会教育課長	氏家 保男
社会教育課副参事	浅野 晴樹
社会教育課長補佐	北 俊明
社会教育課文化財保護係主幹兼係長	金子 正之

主査	浅見 敦夫
主任	寺社下 博
主任	吉野 健
主事	松田 哲
発掘調査員	小林 貴郎
発掘調査員	越前谷 理
発掘調査員	小野寺弘光

(2) 整理・報告書作成事業

平成14年度

教育長	飯塚誠一郎
教育次長	小林 武夫
社会教育課長	岩田 隆
社会教育課担当副参事	田中 英司
社会教育課長補佐	藤原 清
社会教育課文化財保護係主幹兼係長	金子 正之
主査	寺社下 博
主査	浅見 敦夫
主査	吉野 健
主事	松田 哲
発掘調査員	加藤 隆則
発掘調査員	渡邊 大士
発掘調査員	船場 昌子



第1図 埼玉県の地形

Ⅱ 遺跡の立地と環境

前中西遺跡は、熊谷市大字上之2656番地1他に所在し、J R 高崎線熊谷駅の北東約1.2km、荒川から北へ約2.0～2.5km、利根川から南へ約7.0～9.0kmに位置する。

前中西遺跡の所在する中西・末広・上之・箱田地区は、熊谷市の中央部付近東にあたり、櫛挽台地の北端及びその北と北東に展開する妻沼低地にある。櫛挽台地は、寄居町末野付近を扇頂に荒川の両岸に広がる洪積扇状地である荒川扇状地の荒川左岸側の一帯が、浸食されてできたものである。そして、本遺跡が立地する妻沼低地は、利根川及びその支流により形成された沖積地であり、熊谷市の大半を覆っている沖積扇状地の新荒川扇状地（熊谷扇状地）と自然堤防が広がる地区に分けられる。本遺跡は、その新荒川扇状地の縁辺部上、標高24.5m前後に立地し水田となっていた。現地表から遺構確認面まではおおよそ1.0～1.5mの厚さをもっていた。

次に、本遺跡を中心に主に妻沼低地における歴史的環境の一端を簡単に見ていきたいと思う。

まず、旧石器時代から縄文時代であるが、この時期の遺跡の発見例はきわめて少ない状況である。旧石器時代で知られているのは、平安時代の住居跡の埋土中から出土した櫛挽台地上の籠原裏遺跡の黒曜石製尖頭器が唯一の例である。縄文時代になると、櫛挽台地上さらには妻沼低地上にも発見例が少々増える。妻沼低地上の寺東遺跡では前期関山式土器が、櫛挽台地上の三ヶ尻遺跡内の林遺跡でも前期黒浜式期の集落が発見されている。そして、同じく三ヶ尻遺跡内の天王遺跡では中期から後期の集落が発見されている。後期に至っては、前述の寺東遺跡で称名寺式期の埋甕を伴う土坑等が発見されている。また、深谷市の自然堤防上でも発掘調査された中期後葉から後期の遺跡が存在し、妻沼低地の自然堤防上に生活の場を展開していったことが窺える。

一方、縄文時代晩期から弥生時代前半にかけての熊谷市内の発見例はほとんどないが、本遺跡の近辺の北島遺跡で縄文時代晩期末から弥生時代中期の土器・石器が出土した。また、縄文時代晩期の深谷市の妻沼低地では、前時期の遺跡を継承した位置に再び集落が営まれたようである。

次に熊谷市内において本格的展開の知られる遺跡は、現段階では弥生時代中期まで待つことになる。須和田式期の再埋葬が16基発見された横間栗遺跡、同じく須和田式期の壺が発見されている三ヶ尻遺跡内の上古遺跡が知られる。再埋葬群や土器を伴う土坑が検出されている遺跡は、深谷市上敷免遺跡、妻沼町飯塚遺跡・飯塚南遺跡が知られる。また、上敷免遺跡では包含層から県内初の前期遠賀川式土器が出土している。本遺跡では、中期後半の土器棺墓と方形周溝墓の2タイプの葬送形態が近接して発見されていて、特異な様相を示している。また、北島遺跡・平戸遺跡・行田市小敷田遺跡も同時期の遺跡として挙げられ、北島遺跡でも再埋葬や土坑墓群が、小敷田遺跡では関東地方で最も古い段階の須和田式期の方形周溝墓が検出されている。同時期の集落や住居跡が検出されている遺跡としては、池上遺跡・飯塚南遺跡が存在し、特に池上遺跡は環濠集落として知られている。そして池上遺跡や小敷田遺跡のような中核的な集落の周辺部に、天神遺跡・平戸遺跡・北島遺跡のような小規模な遺跡が形成されている。後期には妻沼低地の各地に遺跡が見られ始める。妻沼町弥藤吾新田遺跡・中条条里遺跡内の東沢遺跡・行田市池守遺跡が存在する。本遺跡においても引き続き集落が形成されており、中期末から後期初頭にかけての集落が発見されている。東沢遺跡・池守遺跡では吉ヶ谷式土器が、弥藤吾新田遺跡では南関東系の弥生町式土器が出土している。これら弥生時代の遺跡を概観すると、すでにこの時期には低地を利

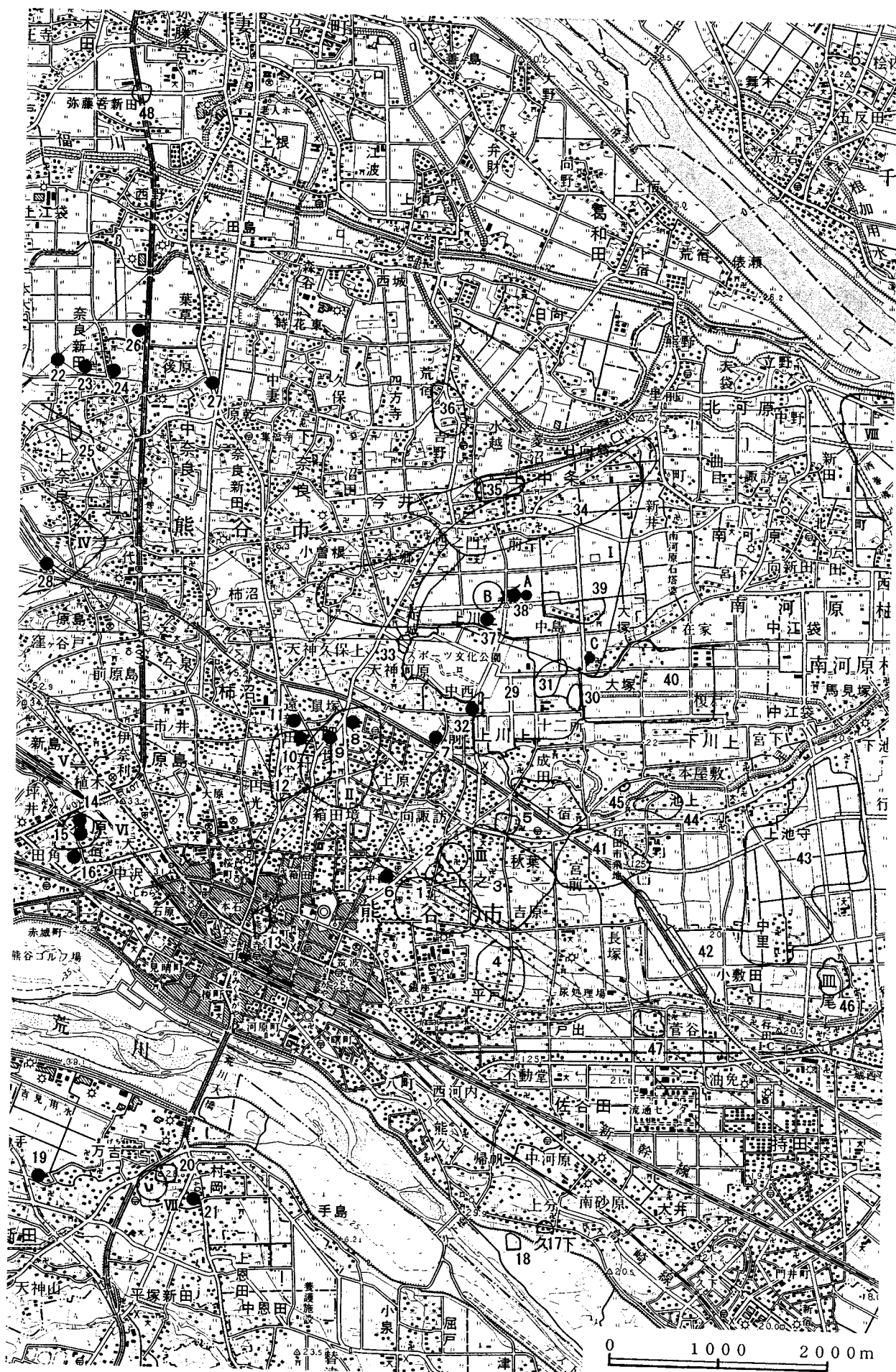
用した積極的な水田経営が行われていたと推測される。当地域における集落の時期的動向は、池上遺跡から北島遺跡、そして前中西遺跡と続くと考えられる。

古墳時代に入ると、古墳は台地・自然堤防等の微高地に形成され、集落は台地ばかりでなく低地帯の自然堤防上にも営まれるようになり、次第に遺跡数も増加傾向にある。前期では、妻沼低地に大きく遺跡が展開している。池上遺跡・池守遺跡・小敷田遺跡・東沢遺跡・北島遺跡・天神東遺跡・中条遺跡内の雷電塚遺跡・行田市星宮皿尾遺跡・弥藤吾新田遺跡・中耕地遺跡・別府条里遺跡・一本木前遺跡等がある。北島遺跡では住居跡が21軒検出されており、北島遺跡、弥藤吾新田遺跡等は比較的大規模な集落と推定されている。小敷田遺跡では畿内や東海地方等の外来系の土器が多数出土しており、東沢遺跡とあわせて河川跡から鋤・鍬をはじめとした多量の木製農具を出土した遺跡として知られている。また、北島遺跡からも当該期の木製農具が出土している。また、雷電塚遺跡では脚部に穿孔のある高坏・器台・S字状口縁台付甕等が、剣形等の滑石製模造品と伴に出土している。最近、本遺跡に隣接する藤之宮遺跡でも前期集落が初めて確認された。墓域の存在としては、小敷田遺跡・一本木前遺跡・深谷市上敷免遺跡・東川端遺跡等で方形周溝墓群が検出されており、特に東川端遺跡第2号方形周溝墓からはパレススタイルの大型壺が出土している。

中期の様相は、他の時期と比べて不明な点が多いが、集落が大規模に展開していくのは中期後半以降となるようである。北島遺跡・中条遺跡内の権現山遺跡・同遺跡内の常光院東遺跡等で遺構・遺物が検出されている。北島遺跡では住居跡から須恵器の甕を模倣した土師器小型壺が、権現山遺跡では出現期の竈をもつ住居跡が検出され、把手付大型甕等が出土している。そして、本遺跡においても中期の住居跡が4軒検出され、高坏を主体にして比較的まとまって土器を出土している。また、古墳に目を転じてみると、数こそ少ないが、妻沼低地の福川の自然堤防上に横塚山古墳が存在する。これは、B種横刷毛の埴輪をもつ前方後円墳（後円部は一部欠損）である。

そして、後期になると遺跡は爆発的な増加をみる。台地ばかりでなく自然堤防上にもさらに積極的に進出を図っていったようである。集落は、古墳時代後期から奈良・平安時代へと継続して展開する大規模なものが市内では目立つようになる。櫛挽台地上及び新荒川扇状地上では、樋の上遺跡で古墳時代後期から平安時代の住居跡が90軒以上検出され、このうち古墳時代後期のものは14軒以上を数える。また、同遺跡内の上辻・下辻遺跡でも後期から平安時代の住居跡が50軒以上検出された。一方、妻沼低地の自然堤防上では、北島遺跡・中島遺跡・光屋敷遺跡・池守遺跡・行田市持田藤の宮遺跡・一本木前遺跡・飯塚南遺跡等が存在する。北島遺跡では6世紀後半以降集落の規模が拡大し、広範囲に展開した状況が確認されている。また、多量の黒色土器が出土しているほか、いわゆる「比企型」の坏等も搬入されている。中島遺跡・光屋敷遺跡・中条遺跡内の常光院東遺跡等は、いずれも遺跡自体の規模が拡大し奈良・平安時代へと長期にわたって集落が継続する特徴を示している。現在調査中の一本木前遺跡でも後期を中心に奈良・平安時代までの住居跡が450軒以上検出されており、当該期の祭祀跡も発見されている。

一方、古墳を見てみると群を形成して築造されているのがわかる。櫛挽台地上の別府古墳群・籠原裏古墳群・三ヶ尻古墳群、新荒川扇状地上の玉井古墳群・広瀬古墳群・坪井古墳群・石原古墳群・肥塚古墳群、荒川右岸の段丘堆積層上の村岡古墳群、妻沼低地上の中条古墳群・上之古墳群・行田市酒巻古墳群等が分布する。これらは概ね6世紀から7世紀ないしは8世紀初頭にかけて形成された古墳群である。



第2図 周辺遺跡分布図

本遺跡の北東端に分布する上之古墳群には墳丘の残る古墳が存在し、試掘調査により多量の円筒埴輪が出土する箇所が確認されており、さらなる古墳の存在の可能性を示唆している。本遺跡の北西に分布する肥塚古墳群では川原石乱石積と角閃石安山岩切組積の2種類の胴張型横穴式石室をもつ古墳が確認されており、前者は荒川水系の石材、後者は利根川水系の石材と判断され非常に興味深い様相を呈している。さらに、北には鎧塚古墳・女塚1～6号墳・権現山古墳・大塚古墳等からなる中条古墳群が存在する。鎧塚古墳は全長43.8mの帆立貝式前方後円墳で、須恵器高坏型器台等（県指定文化財）を伴う墓前祭祀跡2ヶ所が確認されており、築造年代は、5世紀末～6世紀初頭に比定されている。大塚古墳は大型の胴張型横穴式石室をもち、側壁に角閃石安山岩、奥壁・天井石に緑泥片岩を使用しており、7世紀前半に比定されている。利根川の右岸に分布する酒巻古墳群の酒巻14号墳では、馬に旗を立てる道具である蛇行状鉄器をつけた馬形埴輪等が出土しており、渡来系の要素が多くみられる。そして、櫛挽台地上の籠原裏古墳群は、川原石乱石積の胴張型横穴式石室を有する古墳群であるが、7世紀末の築造と考えられる八角形の墳形をもつ古墳の存在が知られており、終末期の古墳の様相、さらには幡羅郡の郡寺的な機能を有するとも考えられている8世紀初頭創建の西別府廃寺という初期寺院との関係においても見逃すことのできない発見である。さらには、滑石製模造品を使った水辺の祭祀が行われた西別府祭祀遺跡が所在し、近接する深谷市の幡羅遺跡では最近総柱倉庫群が発見され、幡羅郡衙の正倉と考えられている。

また、広瀬古墳群中の宮塚古墳は、上円下方墳という特異な墳形を今に残し熊谷市唯一の国指定史跡として知られている。

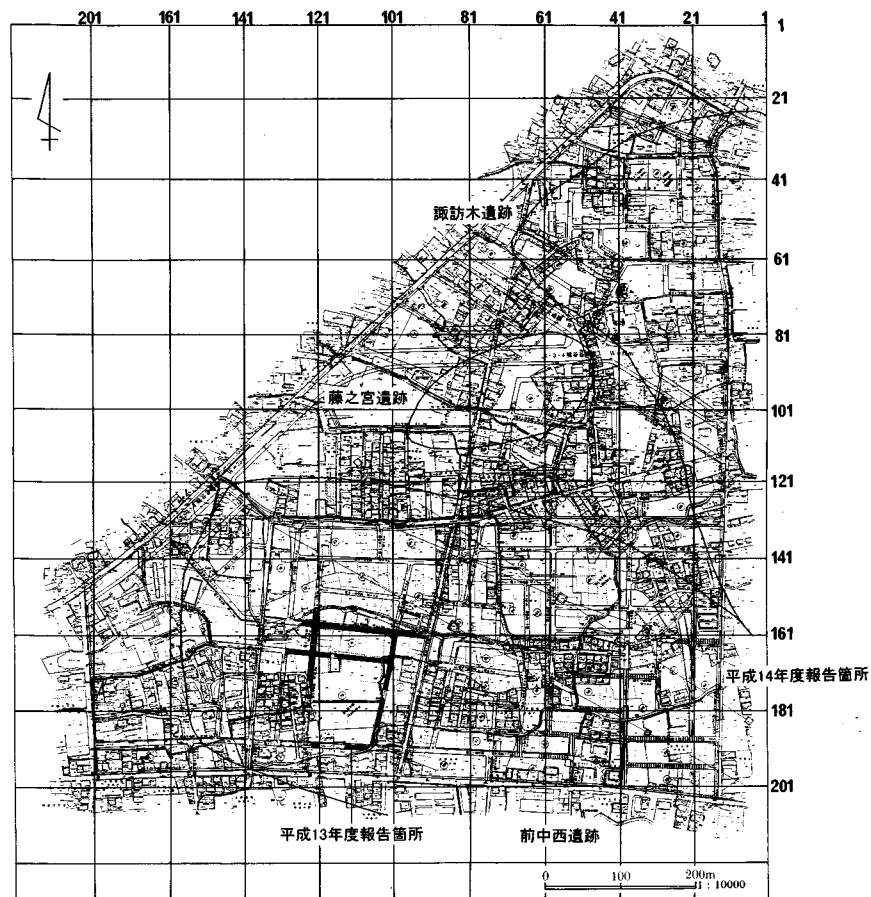
古墳時代後半に自然堤防上の微高地に形成された集落の多くは、増減はするものの奈良・平安時代へと継続されていく。奈良時代には、この地域も律令体制に組み込まれていき、低湿地一帯では中条条里・小敷田条里・南河原条里等条里制に関わる遺構の痕跡を止めている。このころの中心的集落遺跡は

第2図掲載遺跡一覧表

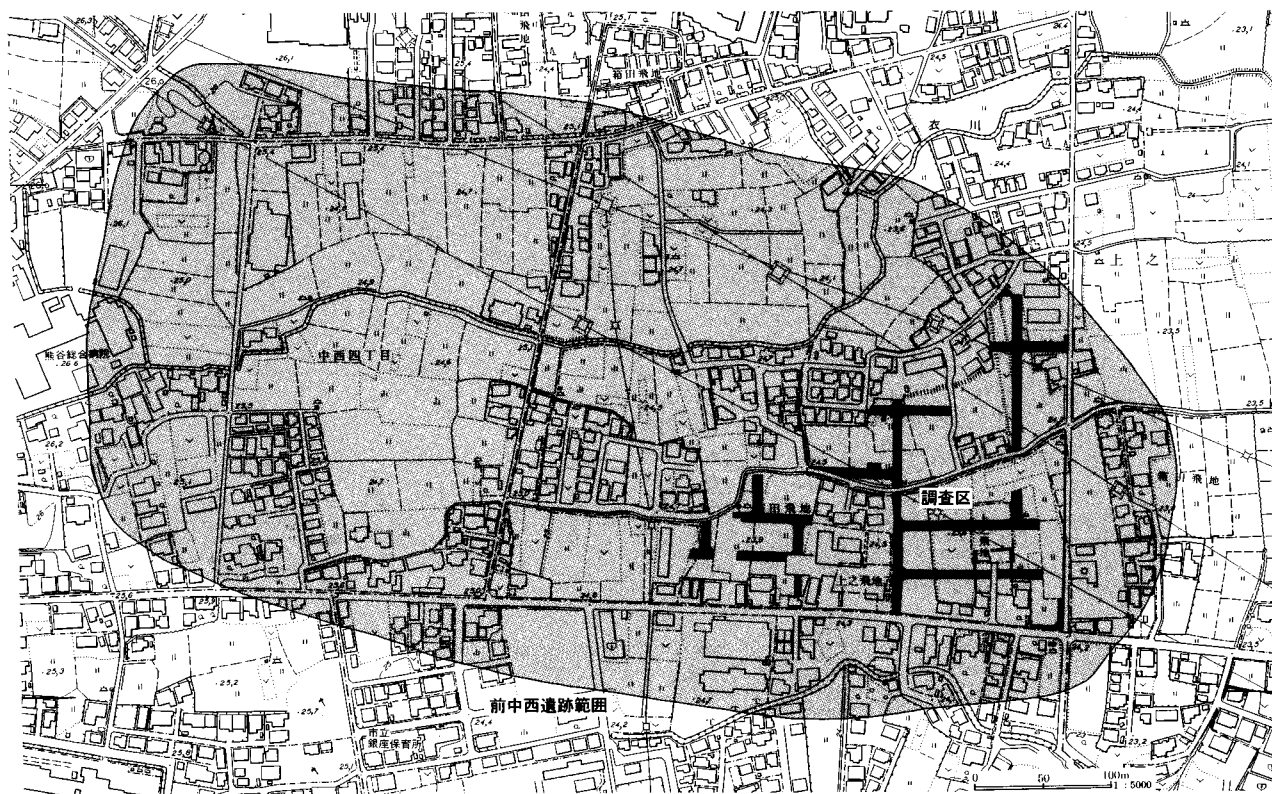
1 前中西遺跡	2 藤之宮遺跡	3 諏訪木遺跡	4 平戸遺跡	5 成田氏館跡	6 箱田氏館跡
7 河上氏館跡	8 八幡上遺跡	9 出口上遺跡	10 出口下遺跡	11 肥塚中島遺跡	12 肥塚館跡
13 熊谷氏館跡	14 天神前遺跡	15 兵部裏屋敷跡	16 御蔵場跡	17 市田氏館跡	18 久下氏館跡
19 万吉西浦遺跡	20 村岡館跡	21 北西原遺跡	22 中耕地遺跡	23 西通遺跡	24 東通遺跡
25 土用ヶ谷戸遺跡	26 横塚山古墳	27 奈良東耕地遺跡	28 下河原上遺跡	29 北島遺跡	
30 天神東遺跡	31 田谷遺跡	32 上川上東遺跡	33 天神遺跡	34 中条遺跡	35 中条氏館跡
36 光屋敷遺跡	37 女塚遺跡	38 鎧塚遺跡	39 中島遺跡	40 中条条里遺跡	41 池上遺跡
42 小敷田遺跡	43 池守遺跡	44 古宮遺跡	45 上河原遺跡	46 星宮皿尾遺跡	47 持田藤の宮遺跡
48 弥藤吾新田遺跡					
I 中条古墳群	A 鎧塚古墳	B 女塚1～6号墳	C 大塚古墳	II 肥塚古墳群	III 上之古墳群
IV 玉井古墳群	V 坪井古墳群	VI 石原古墳群	VII 村岡古墳群	VIII 酒巻古墳群	

北島遺跡にみられる。300軒以上もの住居跡が検出されている大規模集落である。7世紀から9世紀を中心に12世紀さらには中世にまで及ぶ集落であり、大規模な掘立柱建物跡・道路状遺構・河川跡等様々な遺構と遺物が検出されている。また、9世紀前半には二重の溝で区画され、区画内に大型の掘立柱建物跡と少数の竪穴住居跡で構成される地区が登場している。この区画施設は、10世紀前半には位置を変え、11世紀前半には消滅する。つまり、北島遺跡は周辺に前述の条里制地域をひかえ地域の中核となる典型的律令制集落である。また、本遺跡においても北島遺跡と同様に掘立柱建物跡をともし集落が形成されており、地方の豪族居館の様相も看取できる。さらには7世紀末から8世紀初頭頃の出挙木簡を出土した小敷田遺跡、整然と配された9世紀代の掘立柱建物跡群が検出された池上遺跡も存在する。本遺跡の東には古墳時代後期から平安時代にかけての祭祀が行われた河川跡が確認された諏訪木遺跡が存在する。祭祀関連の遺物としては、馬頭骨、管玉・切子玉・勾玉等の玉類、耳環、銅鏡、滑石製の白玉さらには斎串・人形等が土師器・須恵器・農具等の木製品と伴に出土しており、村（地域）の祭祀である民間祭祀から律令体制下の祭祀、すなわち国家祭祀へと祭祀形態が変化していったことが確認された例として注目される。また平安時代の溝に区画された集落跡や大型の掘立柱建物跡群、多数の灰釉陶器や緑釉陶器が検出されるなど特殊な様相を示し、やはり地方豪族居館の様相が看取できる遺跡である。

平安時代末から中世になると、武蔵七党やその他の在地武士団の館跡が散在するようになる。中条氏館跡・成田氏館跡・熊谷氏館跡・市田氏館跡・久下氏館跡・皿尾城（星宮皿尾遺跡）等であるが、いずれの居館も実態の判明するものはほとんどない。その中で遺構の残りの良いものの中に、中条氏館跡（県指定史跡）がある。中条家長の居館で常光院及びその周辺が当てられており、常光院の境内に土塁の一部と堀を良く残している。この他中条氏関連の遺跡としては、光屋敷遺跡・常光院東遺跡・権現山遺跡等があり、これらは主に中世前半の館跡と考えられる。光屋敷遺跡は、中条氏の祖・中条常光の館跡と伝えられている。しかし、発掘調査によって館跡の存在は確認されたが、出土遺物から室町時代の館跡が存在したというところまでの確証に止まっている。中世に関しては、資料がまだまだ不足している状態で、今後の資料の蓄積に期待されるといった状況である。



第3図 上之土地区画整理事業地内遺跡グリッド図



第4図 前中西遺跡位置図

Ⅲ 遺跡の概要

1 調査の方法

発掘調査の方法は、1辺5mのグリッドを用いて行い、土地区画整理事業施行地域全体を網羅できるように設定し、北東隅を1-1として南・東へと1・2・3・・・とし、東西軸を優先して呼称した。例えば1ラインは北から南へ1-1・1-2・1-3・・・と呼称した。2ライン以東も1ラインと同様に呼称し、グリッド設定を行った。なお、今回報告する前中西遺跡は東西軸1から160、南北軸121から201までのグリッドに収まり、本報告の調査区は北東隅13-153グリッドから南西隅68-203グリッドまでの範囲である。

2 検出された遺構と遺物

今回の発掘調査で検出された主な遺構は、弥生時代の竪穴住居跡6軒、竪穴状遺構1基、方形周溝墓13基、土器棺墓3基、木棺墓1基、土坑4基、溝跡16条、古墳時代の竪穴住居跡7軒、掘立柱建物跡6棟、土坑5基、井戸跡2基、溝跡27条、奈良時代の竪穴住居跡6軒、掘立柱建物跡2棟、土坑4基、井戸跡1基、溝跡3条、平安時代の竪穴住居跡8軒、掘立柱建物跡7棟、竪穴状遺構1基、土坑8基、井戸跡5基、溝跡17条、中世の土坑4基、井戸跡11基、溝跡3条、その他時期不明の竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡3棟、掘立柱列1列などである。出土した遺物は、縄文時代後期の土器、弥生時代中・後期土器・石器・木製品・石製品・管玉、古墳時代及び奈良・平安時代の土師器・須恵器・灰釉陶器・瓦・土製品・石製品・勾玉・馬歯、中世の陶器・磁器・土師質土器・瓦質土器・曲物・古銭などコンテナ約50箱分の出土量であった。

縄文時代の遺物は、溝跡の遺物である。

弥生時代の遺物は、竪穴住居跡、竪穴状遺構、方形周溝墓、土器棺墓、木棺墓、土坑、ピット、溝跡などの遺物である。

古墳時代の遺物は、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、ピット、井戸跡、溝跡などの遺物である。

奈良時代の遺物は、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、ピット、井戸跡、溝跡などの遺物である。

平安時代の遺物は、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、竪穴状遺構、土坑、ピット、井戸跡、溝跡などの遺物である。

中世の遺物は、土坑、井戸跡、溝跡などの遺物である。

IV 遺構と遺物

1 竪穴住居跡

住居跡は、総数28軒検出され、大きく分けて弥生時代中期末から後期、古墳時代後期、奈良時代、平安時代の時期のものが検出できた。住居跡は、調査区東側の北及び南のそれぞれの地区で集中して検出された。

第1号住居跡（第7図、第1表）

19-162グリッドに位置する。第11号土坑と重複関係にあり、本遺構が切られる。

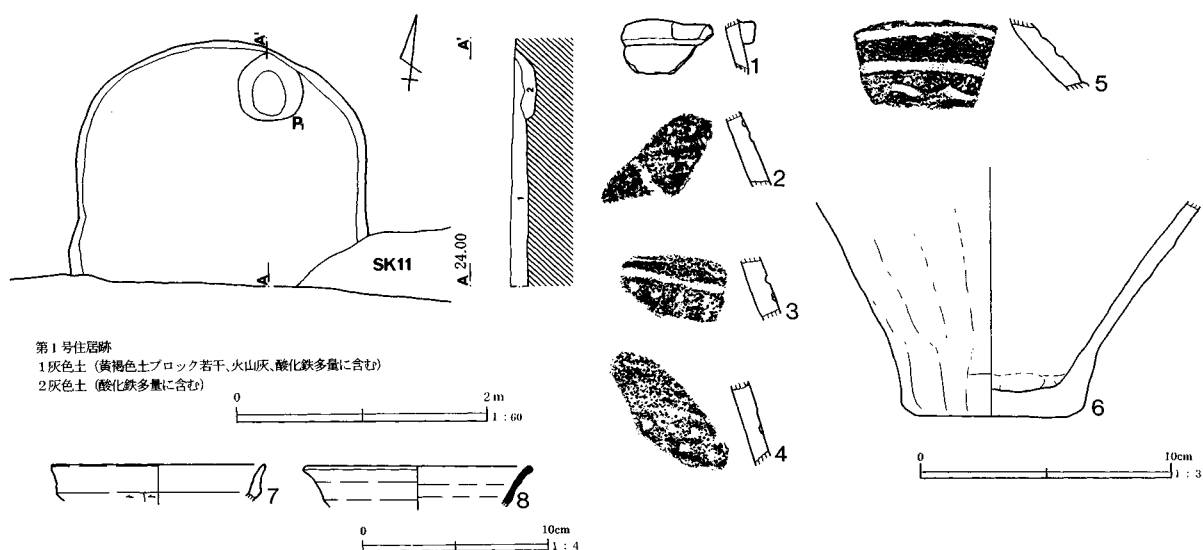
平面形は、住居跡南側が調査区域外となっているため長軸は不明であるが、短軸は2.42mを測る小判形のプランと推定される。主軸方向はおよそN-5°-Wを指す。

床までの深さは約14cm、埋土は自然堆積と考えられる。

柱穴、炉、壁溝は検出できなかった。

住居内北側に1つピットが検出され、規模は、径64×54cm、深さ約10cmであった。

出土遺物は、弥生土器壺破片などが出土した。また、他に土師器坏、須恵器坏が出土したが、周囲の遺構からの混入遺物と思われる。



第7図 第1号住居跡・出土遺物

第1表 第1号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	頸部	
2	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	胴部	竹管による刺突文。
3	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	胴部	竹管による刺突文。
4	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	胴部	竹管による刺突文。
5	弥生土器壺	—	—	—	—	明赤褐色	—	頸部	沈線文間に縄文施文？
6	弥生土器壺	—	—	(6.0)	GLNO	明赤褐色	—	底部	
7	土師器坏	(11.5)	—	—	ABH	橙色	A	10%以下	混入遺物。
8	須恵器坏	(12.1)	—	—	ABLH	灰色	A	10%以下	末野産。混入遺物。

第2号住居跡（第8図、第2表）

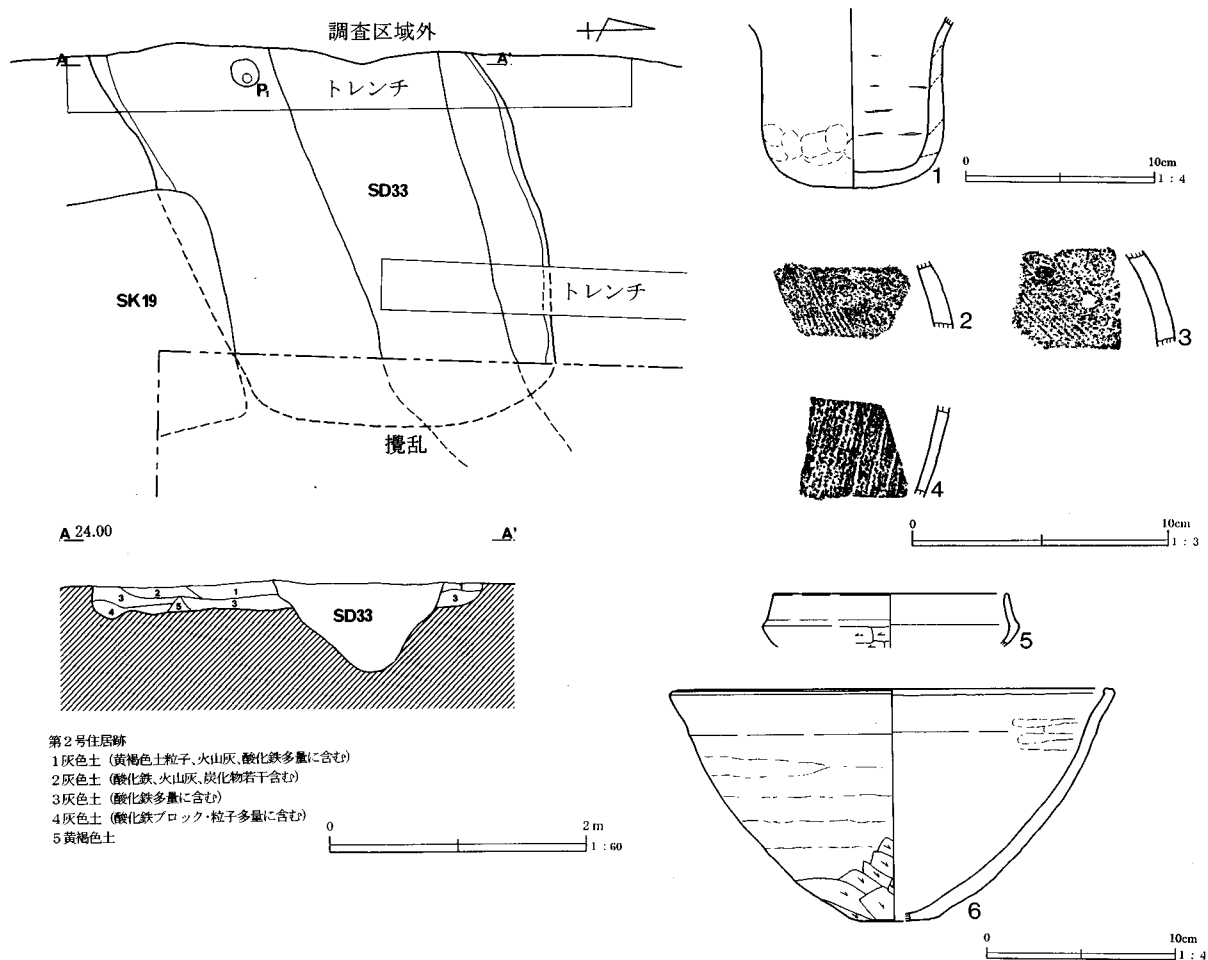
21-174グリッドに位置する。第19号土坑及び第33号溝跡と重複関係にあり、それぞれに本遺構が切られている。古い順に並べると、本遺構、第33号溝跡、第19号土坑の順となる。西側が調査区域外となっており、東側の一部が試掘調査時のトレンチによる攪乱を受けている。

平面形は長軸が不明であるが、短軸2.8mを測るやや隅丸の長方形のプランと推定される。主軸方向はおよそN-16°-Wを指す。

床までの深さは22cm～28cm、埋土は自然堆積と考えられる。

柱穴はP1のみ検出された。規模は径24×20cmを測り、深さは浅くわずか6.8cmである。

炉、壁溝は検出できなかった。



第8図 第2号住居跡・出土遺物

第2表 第2号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器壺	—	—	2.4	AJLMN	黒褐色	B	45%	
2	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい橙色	—	胴部	条痕文。
3	弥生土器甕	—	—	—	—	橙色	—	胴部	条痕文。
4	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい褐色	—	胴部	条痕文。
5	土師器坏	(12.4)	—	—	AJH	明赤褐色	A	10%以下	混入遺物。
6	土師器鉢	(22.7)	12.2	(3.3)	ABEHJM	にぶい褐色	A	20%	混入遺物。

出土遺物は、住居跡のほぼ中央を横断する形で溝跡が切っていたため出土量は比較的少なく、弥生土器壺・甕などが出土した。壺には小型のものも見られた。また、土坑とも切りあっていたので、土師器坏・鉢などの混入が認められた。

第3号住居跡（第9図、第3表）

18-162グリッドを中心に位置する。第11・12号溝跡と重複関係にあり、本遺構がそれぞれに切られている。古い順に、本遺構、第12号溝跡、第11号溝跡の順となる。また、北側は調査区域外となっており、住居の南東隅が攪乱により壊されている。

平面形は、住居跡北側が調査区域外となっているため全体が把握できず、規模を測れるのは短軸と考えられる一方軸方向のみで、3.47mであった。隅丸長方形のプランと推定される。主軸方向はおよそN-16°-Wを指す。

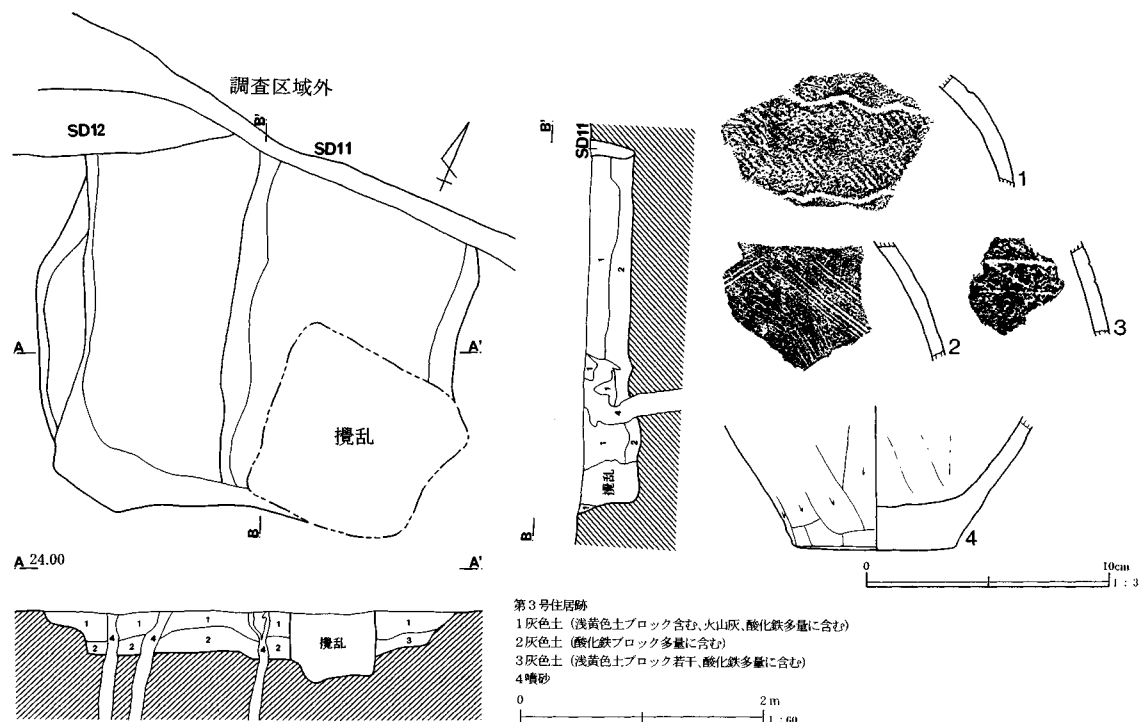
床までの深さは最も深いところで約47cm、平均35cmほどである。床面は、緩い段をもち東側が一段深い。埋土は自然堆積と考えられる。堆積土層の数ヶ所を貫く噴砂の跡が確認された。

壁の立ち上がりは、西側の一部がテラス状になっている箇所が確認された。

柱穴、炉、壁溝は検出できなかった。

出土遺物は少なく、弥生土器壺・甕などが出土した。

第4号住居跡（第10図、第4表）



第9図 第3号住居跡・出土遺物

第3表 第3号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器壺	—	—	—	—	灰白色	—	胴部	沈線文区画内にLR縄文。 条痕文。
2	弥生土器甕	—	—	—	—	黒褐色	—	胴部	
3	弥生土器壺	—	—	—	—	灰黄褐色	—	胴部	
4	弥生土器壺	—	—	6.7	—	にぶい黄橙色	—	底部	

31-171グリッドに位置する。プランの一部が後世の暗渠排水により攪乱を受けていた。

平面形は推定長軸3.5m、短軸2.9mのやや小判形を呈する隅丸長方形のプランで、面積は約9.5㎡を測る。主軸方向はおよそN-17°-Eを指す。

床までの深さは約20cm、埋土は自然堆積と考えられる。

ピットは2つ検出されたが、この内P1は柱穴、P2は炉の可能性はあるが、調査の段階では明らかにできなかった。各々の規模は、P1が径30×29cm、深さ8.7cm、P2が径35×30cm、深さ9.6cmである。

壁溝は検出できなかった。

出土遺物は非常に少なく、弥生土器高坏・壺破片などが出土した。

第5号住居跡（第11図、第5表）

38-173グリッドを中心に位置する。第47号溝跡と重複関係にあり、本遺構が切られている。また、東側の大部分が調査区域外となっている。

平面形は不明であるが、おそらく隅丸長方形のプランを呈すると推定される。主軸方向はおよそN-6°-Eを指すと推定される。

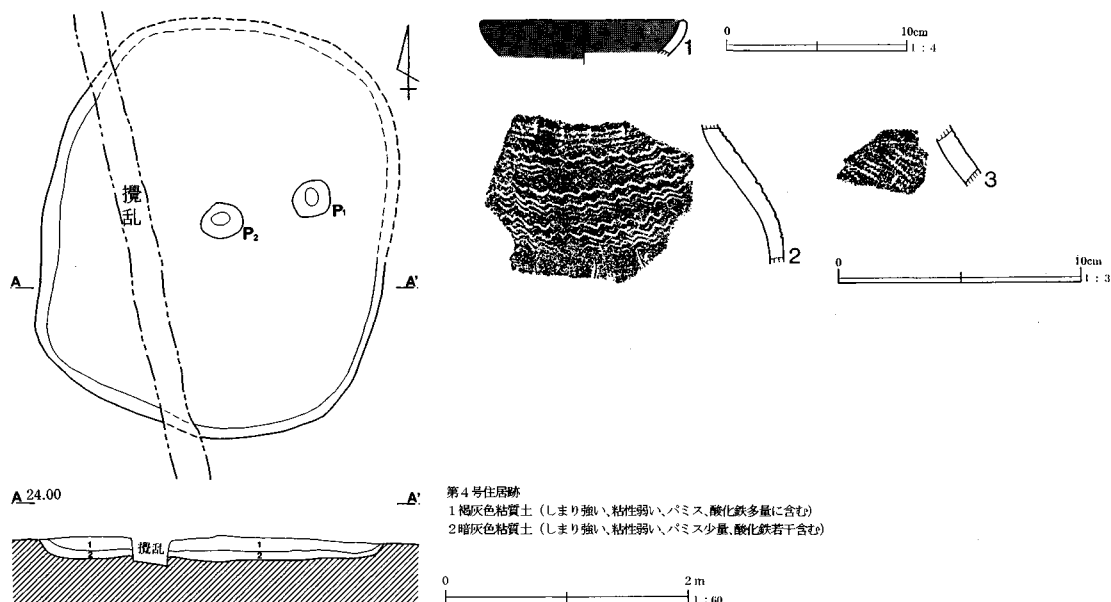
床までの深さは約30cmで、埋土は自然堆積と考えられる。

柱穴、炉、壁溝は検出できなかった。

出土遺物はほとんどなく、図示可能な遺物は少なかった。弥生土器壺・甕破片などが出土した。

第6号住居跡（第12図、第6表）

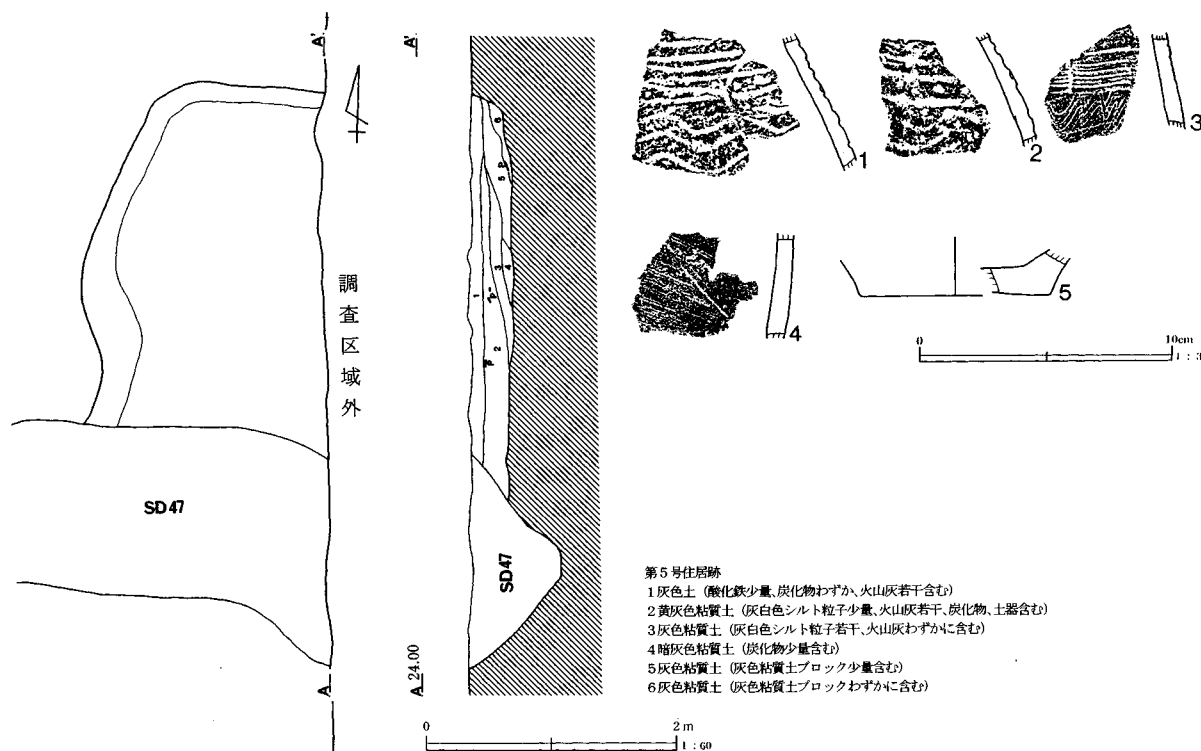
66・67-188グリッドに位置する。住居の北・東・西3方向のほとんどの部分が調査区域外となっている。



第10図 第4号住居跡・出土遺物

第4表 第4号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器高坏	(11.2)	—	—	AHJM	にぶい黄褐色	B	10%	内外面に赤彩。
2	弥生土器甕	—	—	—	—	灰黄褐色	—	胴部	櫛描簾状文及び波状文
3	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄褐色	—	胴部	地文にLR縄文。



第11図 第5号住居跡・出土遺物

第5表 第5号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	胴部	地文に縄文。
2	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	胴部	地文に縄文。
3	弥生土器甕	—	—	—	—	暗赤褐色	—	頸部	櫛描籐状文及び波状文。
4	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい赤褐色	—	胴部	条痕文。
5	弥生土器壺	—	—	(7.7)	—	にぶい橙色	—	底部	

平面形は、南東角を残すのみで軸長は不明で、隅丸の方形プランと推定される。主軸はおおよそN—37°—Eを指す。

床までの深さは、約27cmで、埋土は自然堆積と考えられる。

柱穴はP 1、P 2の2つが検出された。規模はP 1が径不明、深さ22cm、P 2が径52×43cm、深さ26cmを測る。P 1 P 2間のやや南寄りに袋状の掘り方のP 3が検出されたが、炉であるかは不明である。

壁溝は検出できなかった。

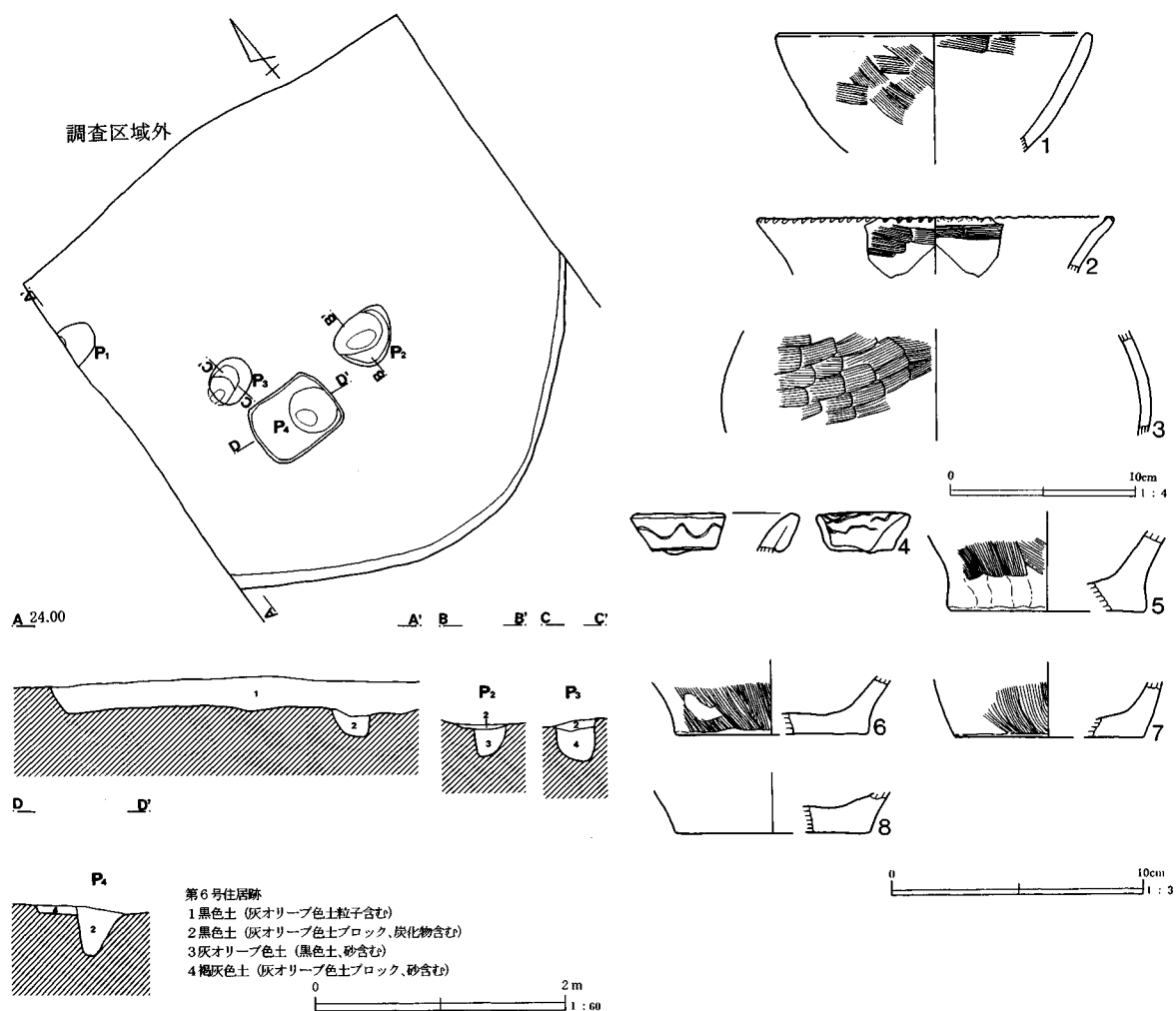
また、その他のピットとしてはP 4が検出され、その平面形は一辺72×55cmの方形プランに直径約38cmの穴が掘り込まれているもので、深さは40cmを測る。

出土遺物は比較的少なく、弥生土器高坏・壺・甕などが出土した。

第7号住居跡 (第13図、第7表)

20—156グリッドを中心に位置する。第4号土坑、第10号ピット、第2号溝跡と重複関係にあり、本遺構が第2号溝跡を切り、その他の遺構に切られる。カマドの部分は本来調査区域外となっていたが、拡張して調査を行った。

平面形は長軸約3.46m、短軸2.0mのほぼ長方形のプランで、面積は7.27㎡を測る。主軸方向は短軸方向でおおよそN—84°—Eを指す。



第12図 第6号住居跡・出土遺物

第6表 第6号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器高坏	(16.8)	—	—	AEHJN	にぶい黄橙色	B	15%	外面刷毛目。内面口縁部付近刷毛目。
2	弥生土器甕	(19.0)	—	—	AJN	にぶい黄橙色	A	10%	内外面刷毛目。
3	弥生土器甕	—	—	—	AHIJ	にぶい黄橙色	—	10%	外面刷毛目。
4	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい橙色	—	口縁部	内外面赤彩。
5	弥生土器壺	—	—	(7.7)	—	にぶい褐色	—	底部	外面刷毛目。
6	弥生土器壺	—	—	(7.7)	—	にぶい橙色	—	底部	外面刷毛目。
7	弥生土器壺	—	—	(7.6)	—	にぶい褐色	—	底部	外面刷毛目。
8	弥生土器甕	—	—	(7.9)	—	にぶい橙色	—	底部	外面刷毛目。

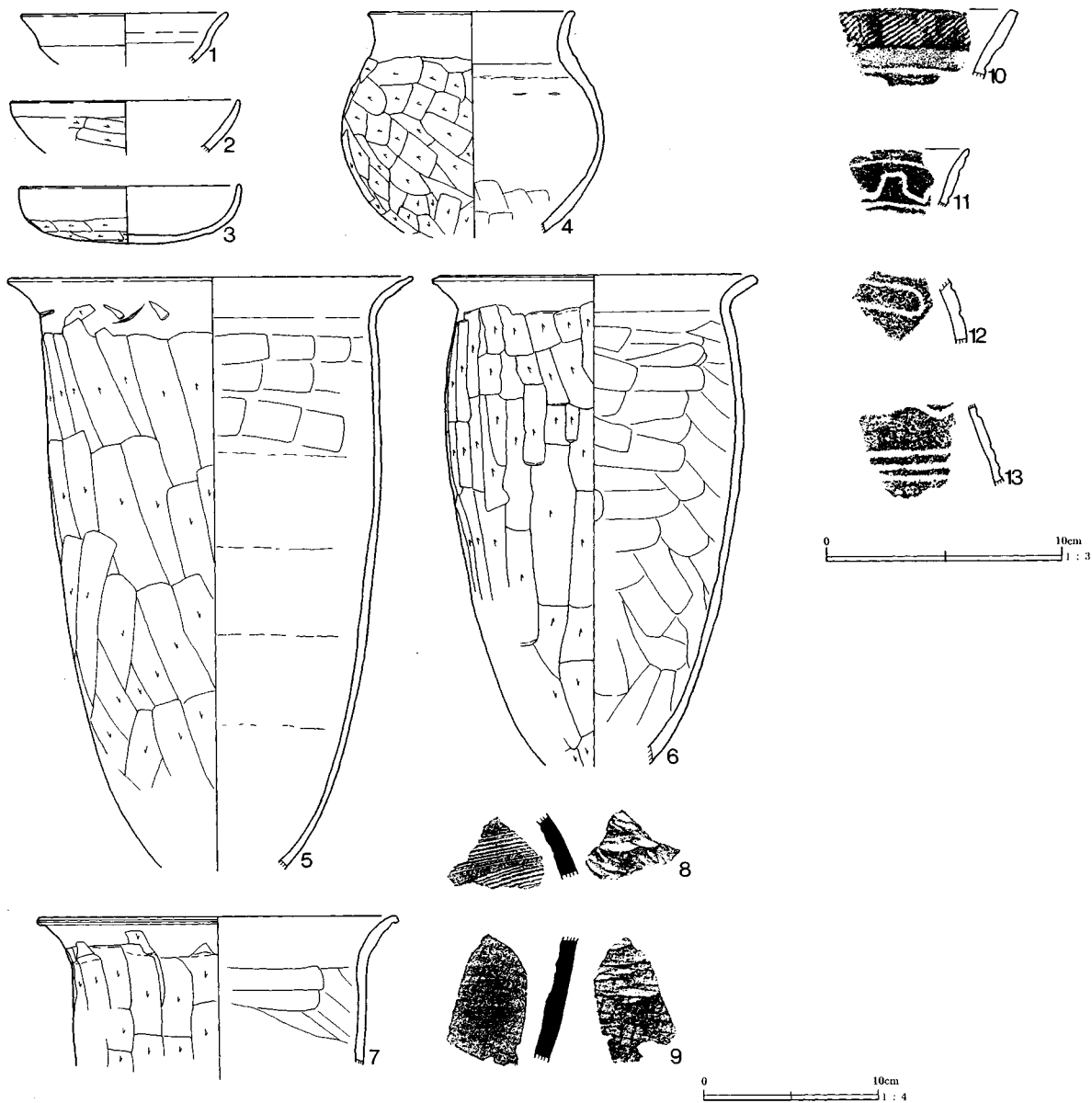
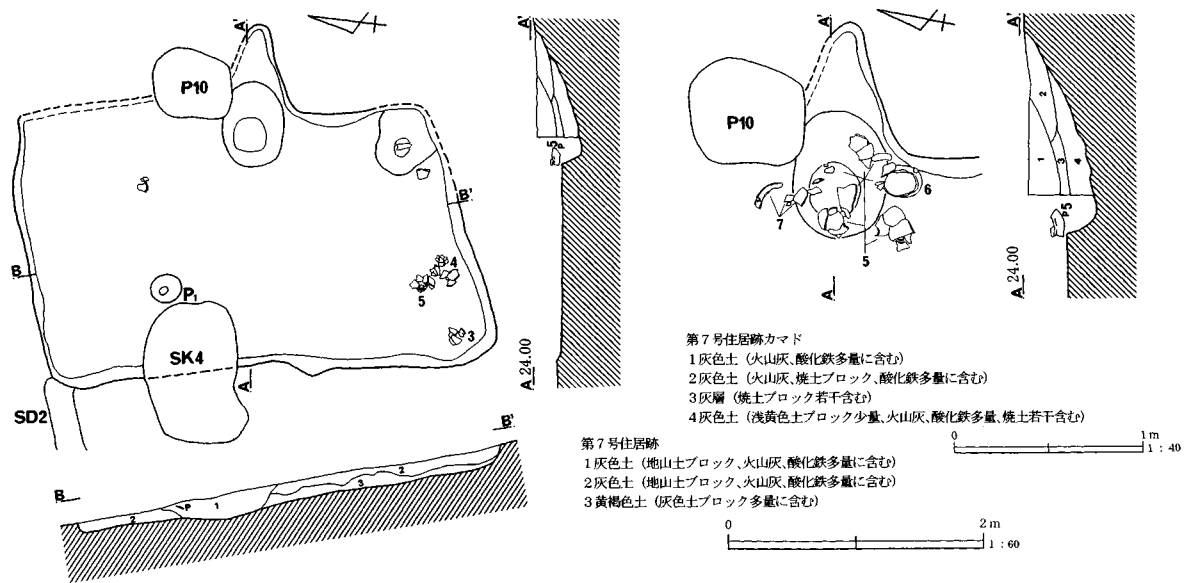
床までの深さは平均約16cmで、深いところで約20cmである。埋土は自然堆積と考えられる。

柱穴と考えられるピットP1が1つ検出できた。その規模は径25×23cm、深さ15cmを測る。

カマドは東壁のやや南寄りに設けられ、煙道は最大幅約36cmで、約70cm東に延びている。袖は、検出できなかったが、両袖の補強材として使用されたと推定できる土師器甕が倒立して検出された。また、燃焼部と考えられる規模径68×49cmを測るピットが検出された。

カマド右脇、住居の東南隅に貯蔵穴と考えられるピットが検出された。その規模は、径55×49cm、深さ33cmを測る。

壁溝は検出できなかった。



第13図 第7号住居跡・出土遺物

第7表 第7号住居跡出土遺物観察表

番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	色 調	焼成	残存率	備 考
1	土師器坏	(11.8)	—	—	AHJ	橙色	B	10%以下	内部に粘土輪積痕。
2	土師器坏	(13.2)	—	—	ABEGJK	にぶい褐色	B	10%以下	
3	土師器坏	12.7	3.2	—	ABEJ	浅黄橙色	B	80%	
4	土師器甕	(11.8)	—	—	ABCHLMN	橙色	A	50%	
5	土師器甕	(23.0)	—	—	ABEGMN	橙色	A	60%	
6	土師器甕	18.0	—	—	ABEGHJM	橙色	A	70%	
7	土師器甕	(22.0)	—	—	ABEHMN	にぶい赤褐色	A	20%	外面力キ目。内面青海波文。
8	須恵器壺	—	—	—	AEHM	灰色	A	胴部	
9	須恵器甕	—	—	—	AHM	暗灰色	A	胴部	
10	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい褐色	—	口縁部	口縁部外面及び口唇部にL R縄文。混入遺物。
11	弥生土器壺	—	—	—	—	橙色	—	口縁部	混入遺物。
12	弥生土器壺	—	—	—	—	黄灰色	—	胴(上半)部	混入遺物。
13	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい橙色	—	胴部	

出土遺物は、カマド及び南西隅付近に主に分布し、土師器坏・甕、須恵器甕などが検出された。土師器は、いずれも比較的良好な資料であった。また、付近からの混入で弥生土器壺破片が出土した。

第8号住居跡 (第14図、第8表)

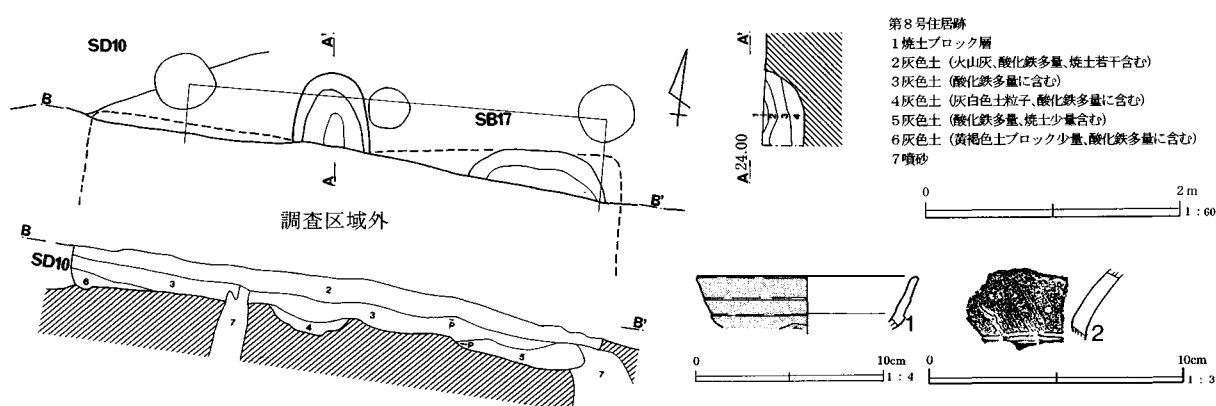
16・17-162・163グリッドに位置する。第17号掘立柱建物跡と重複関係にあるが、新旧関係は明らかにできなかった。住居の南側のほとんどが調査区域外となっている。

平面形は、カマドの一部及び北東隅がわずかに検出できただけでプランは不明であるが、おそらく長方形ないしは正方形を呈すると推定される。主軸はおよそN-7°-Wを指す。

調査区域外の壁により断面観察をしたところ、床までの深さは最深で約36cm、埋土は自然堆積と考えられる。堆積土層の一部が噴砂により攪乱されていた。

カマドは北壁のほぼ中央に設けられ、残存していた煙道の規模は、最大幅約60cmで、約60cm北に延びていた。袖は、検出できなかった。また、燃烧部も検出できなかった。

カマド右脇、住居の東南隅で貯蔵穴と考えられるピットの一部を検出した。その規模は、残存最大幅1.10mを測る。



第14図 第8号住居跡・出土遺物

第8表 第8号住居跡出土遺物観察表

番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	色 調	焼成	残存率	備 考
1	土師器坏	11.7	—	—	EHIJ	にぶい黄橙色	A	10%以下	外面吸炭により黒色化。
2	弥生土器甕	—	—	—	—	暗赤褐色	—	口縁部	頸部櫛描簾状文。口縁部刷毛目状調整。混入遺物。

壁溝は、西壁にその痕跡を土層断面上で観察できた。

柱穴は、当然のごとく検出できなかった。

出土遺物は土師器坏・甕破片がわずかではあるが検出されたが図示可能な遺物はほとんどなかった。

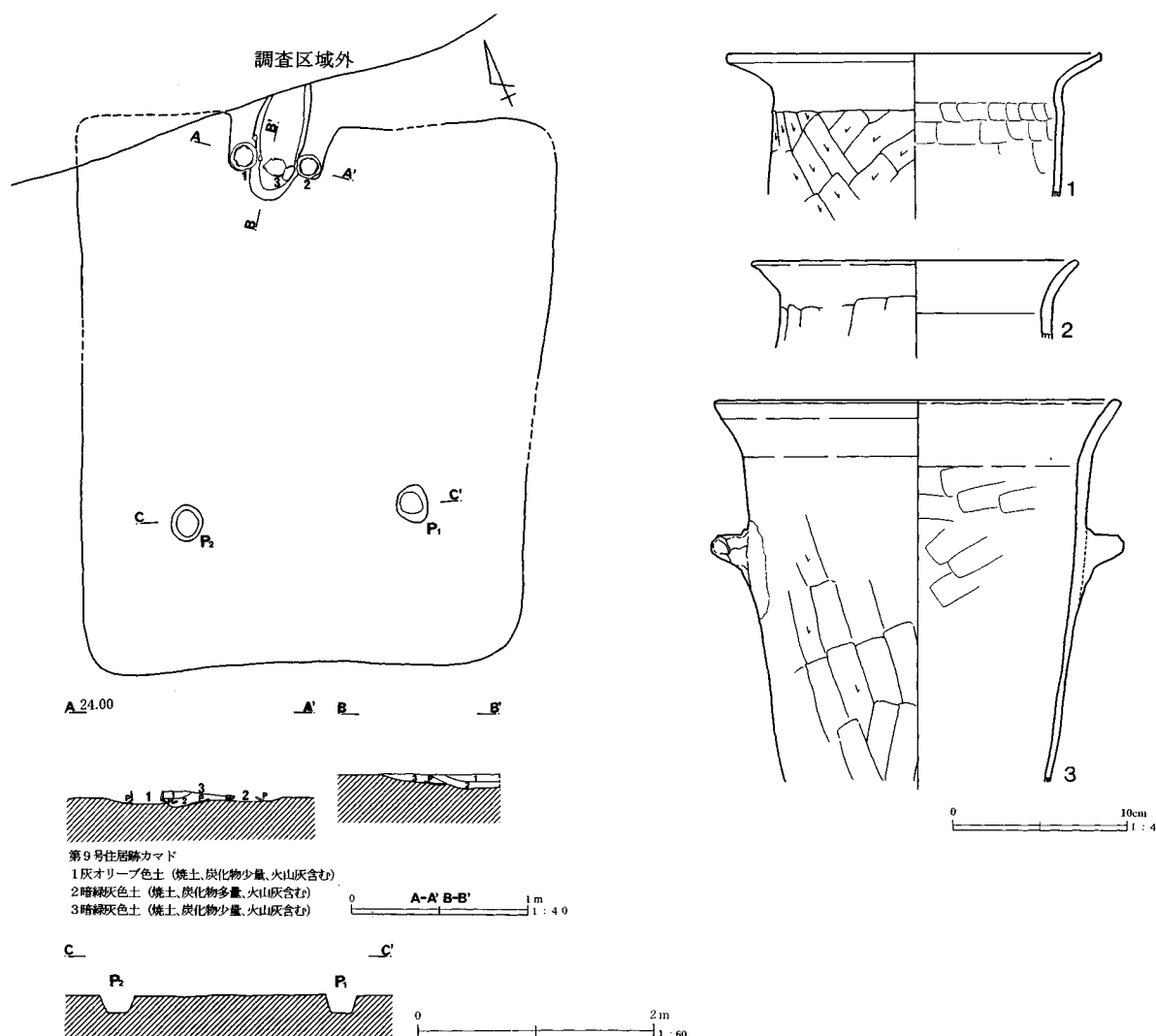
図示した弥生土器甕破片は、隣接する溝跡からの混入遺物であると考えられる。

第9号住居跡（第15図、第9表）

27-194・195グリッドを中心に位置する。カマド及び住居の北西隅が調査区域外となっている。

平面形は、土層観察が困難であったためプランを推定するに止まった。その長軸は、4.6m、短軸3.9mの長方形のプランで、面積は17.94㎡を測る。主軸は長軸で、およそN-24°-Eを指す。

床までの深さは床面ぎりぎりの検出であったため不明である。



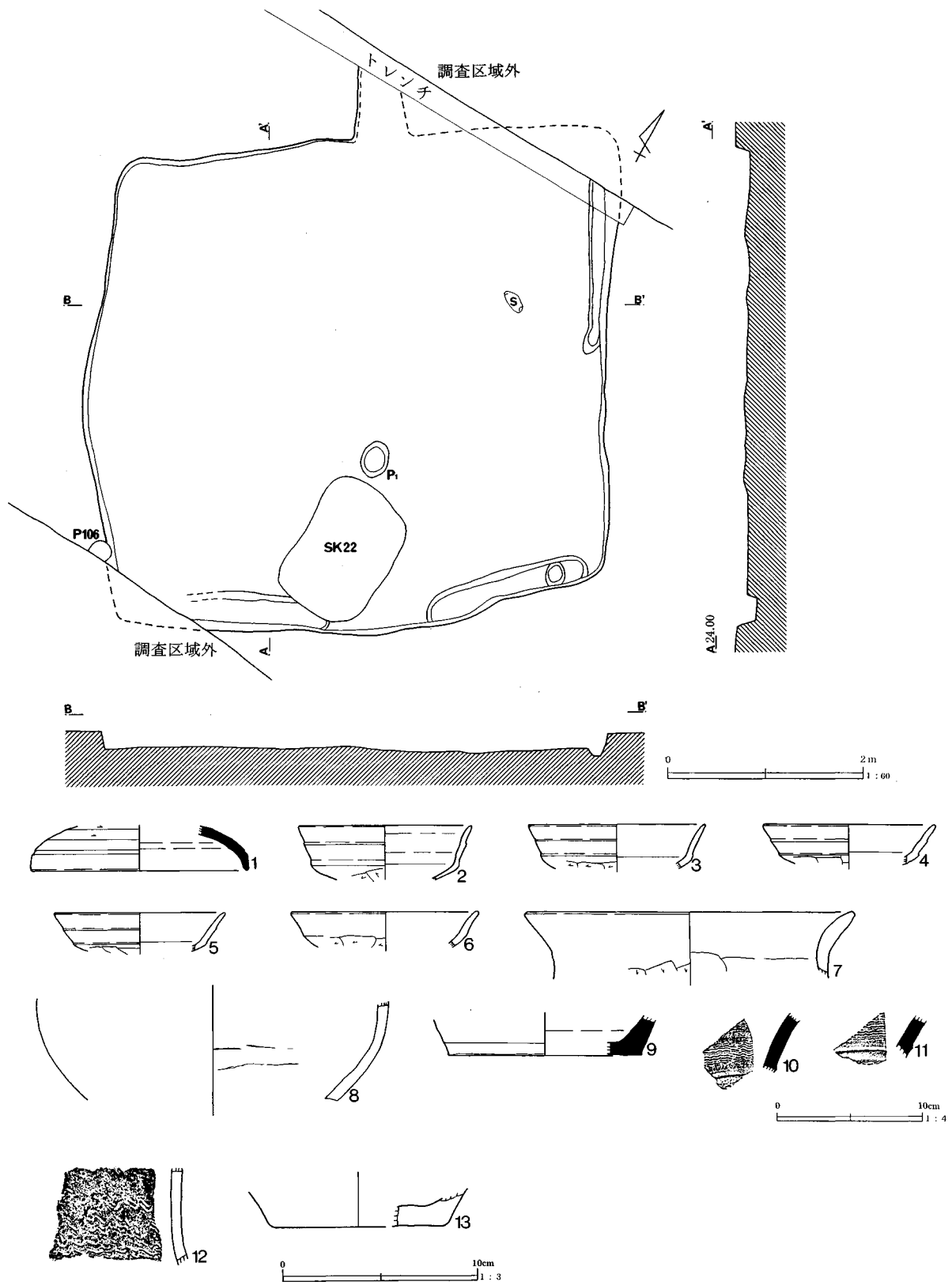
第15図 第9号住居跡・出土遺物

第9表 第9号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器甕	21.5	—	—	ABEGHIMN	にぶい橙色	B	30%	
2	土師器甕	18.5	—	—	AHMN	にぶい橙色	B	20%	
3	土師器甕	(22.3)	—	—	ABCMN	橙色	C	30%	

柱穴はP 1、P 2 の2つのみ検出された。各々の規模はP 1 が径32×26cmで、深さ16cm、P 2 が径30×26cm、深さ16cmを測る。

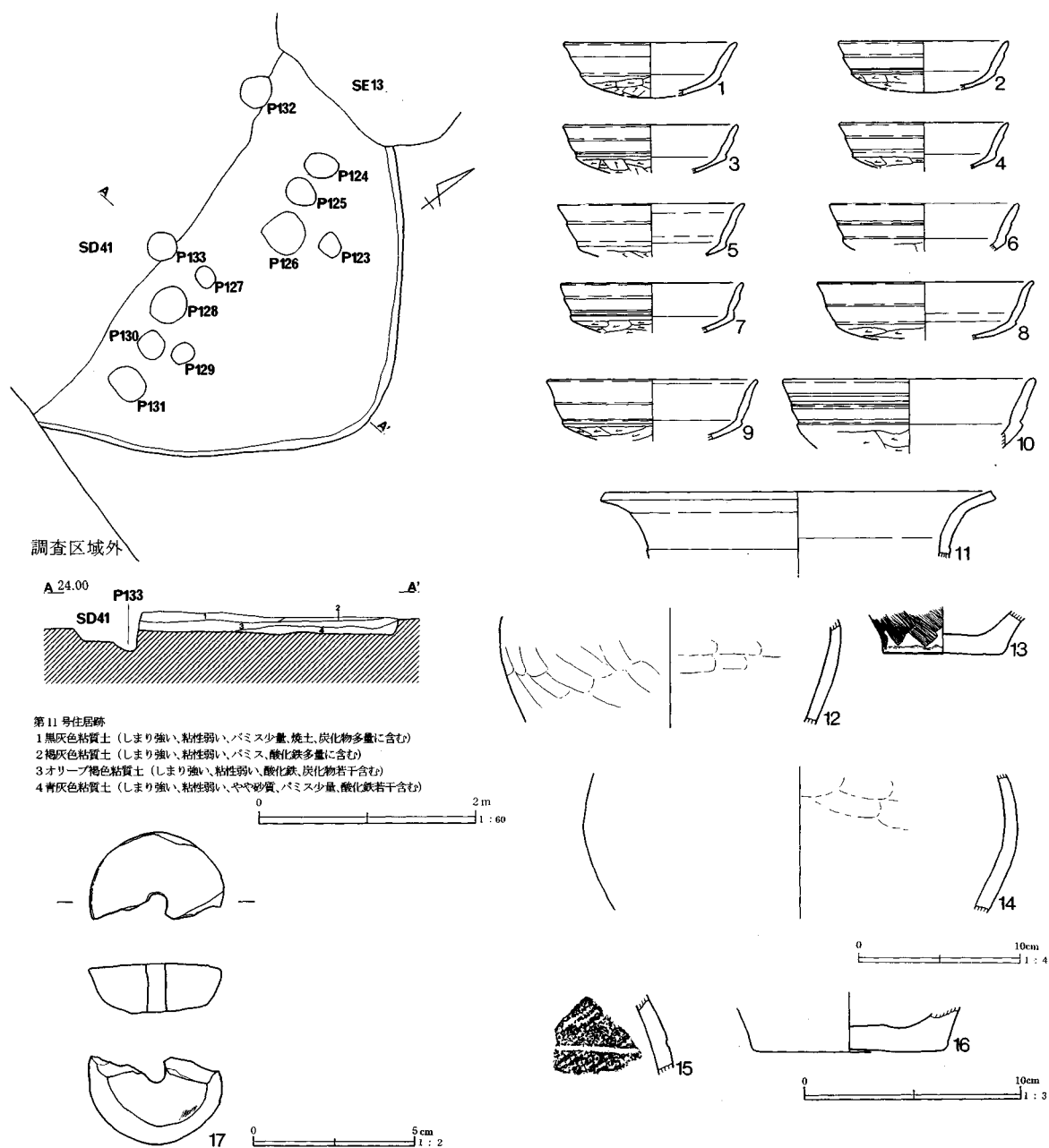
カマドは北壁のやや西寄り中央部に設けられていた。カマド軸は住居主軸より東へ約10° 傾きをもつ



第16図 第10号住居跡・出土遺物

第10表 第10号住居跡出土遺物観察表

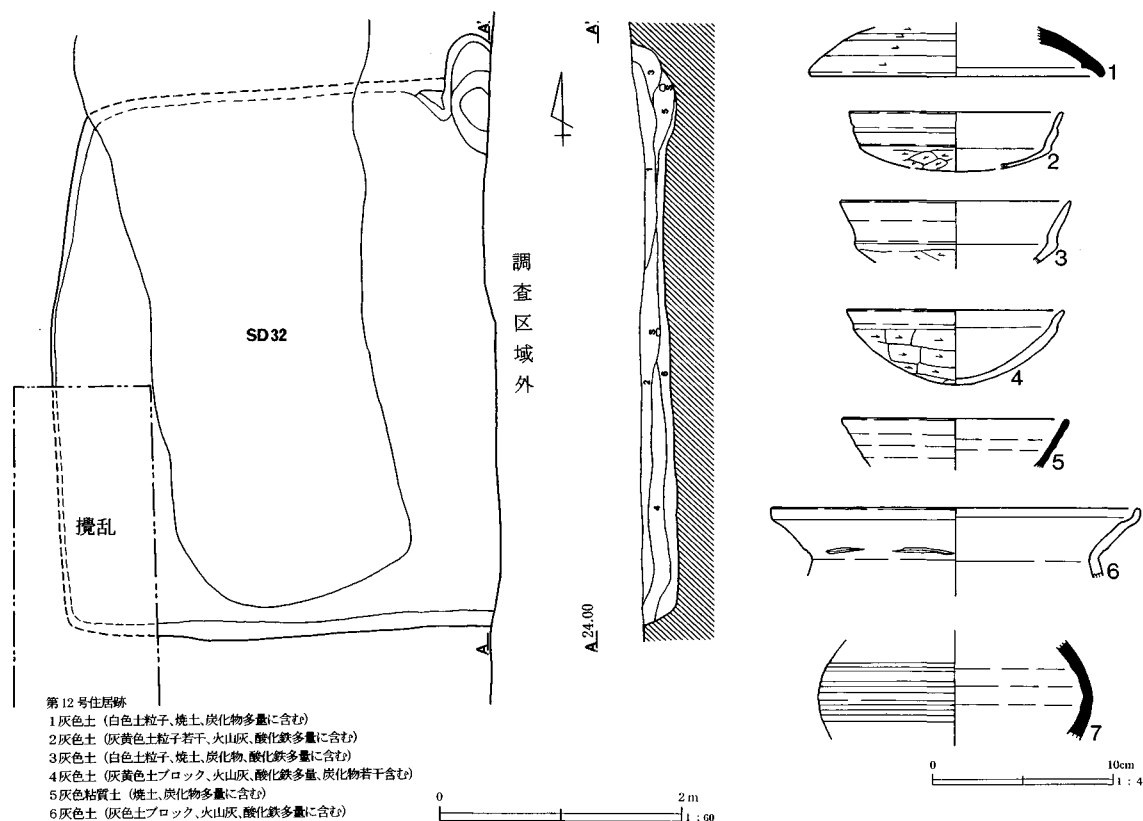
番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	色 調	焼成	残存率	備 考
1	須恵器蓋	(14.9)	—	—	ABHN	灰白色	A	10%	混入遺物。 11と同一個体。 10と同一個体。 櫛描波状文。混入遺物。 混入遺物。
2	土師器坏	(11.9)	—	—	ABCJHK	浅黄橙色	B	10%	
3	土師器坏	(12.3)	—	—	ABEJ	灰黄褐色	B	10%	
4	土師器坏	(12.0)	—	—	ABEHJ	橙色	C	10%	
5	土師器坏	(12.0)	—	—	AEJK	灰褐色	C	10%	
6	土師器坏	(13.1)	—	—	ABHKMN	橙色	B	10%	
7	土師器甕	(22.5)	—	—	ABEG	にぶい橙色	A	10%以下	
8	土師器甕	—	—	—	ABGJMN	橙色	A	10%	
9	須恵器甕	—	—	(13.4)	ABN	灰色	A	底部	
10	須恵器甕	—	—	—	AB	灰色	A	口縁部	
11	須恵器甕	—	—	—	AB	灰色	A	口縁部	
12	弥生土器甕	—	—	—	—	橙色	—	胴部	
13	弥生土器甕	—	—	(8.8)	—	にぶい橙色	—	底部	



第17図 第11号住居跡・出土遺物

第11表 第11号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器坏	(10.8)	(3.4)	—	AEIJ	明赤褐色	C	15%	
2	土師器坏	(10.5)	(3.2)	—	ACJ	にぶい橙色	B	15%	
3	土師器坏	(10.8)	—	—	ADJK	橙色	A	15%	
4	土師器坏	(10.6)	—	—	AHJ	灰黄褐色	B	15%	
5	土師器坏	(11.5)	—	—	AEIJ	浅黄褐色	B	10%	
6	土師器坏	(10.9)	—	—	AHJN	橙色	A	10%	
7	土師器坏	(11.3)	—	—	AHJ	灰黄褐色	A	15%	
8	土師器坏	(13.3)	—	—	ABEJK	灰黄色	B	20%	
9	土師器坏	(13.0)	—	—	AHJK	灰黄褐色	B	20%	
10	土師器坏	(15.6)	—	—	AEHJN	にぶい赤褐色	A	15%	
11	土師器甕	(24.1)	—	—	ABEHJM	灰黄色	B	10%以下	
12	土師器壺	—	—	—	ABEGHKMN	赤色	B	15%	
13	土師器壺	—	—	7.4	AEJM	にぶい橙色	A	底部	混入遺物。
14	弥生土器壺	—	—	—	ABEHJMN	浅黄褐色	B	15%	混入遺物。
15	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄褐色	—	胴部	地文LR縄文。混入遺物。
16	弥生土器壺	—	—	(8.8)	—	にぶい黄褐色	—	底部	混入遺物。
17	紡錘車	広面径4.3	狭面径3.2	厚さ1.5	—	—	—	半欠損	重さ23.7g。滑石製。広面は全面剥離。



第18図 第12号住居跡・出土遺物

第12表 第12号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	須恵器蓋	(16.3)	—	—	ABCGHJ	灰褐色	A	10%以下	
2	土師器坏	(11.8)	(3.3)	—	ABHKM	橙色	C	10%	
3	土師器坏	(12.8)	—	—	ABJK	にぶい橙色	B	10%	
4	土師器坏	(12.0)	4.1	—	AGKN	橙色	C	20%	
5	須恵器坏	(12.5)	—	—	ABFH	灰色	A	10%以下	南比企産。
6	土師器甕	20.6	—	—	AEHJKMN	橙色	B	10%	
7	須恵器壺	—	—	—	ABN	灰色	A	10%	胴部外面力キ目。

ていた。煙道は幅約42cmである。袖は、両袖に補強材としての土師器甕が倒立した状態で検出できた。

壁溝、貯蔵穴は検出できなかった。

出土遺物は、図示したカマド袖の土師器甕2点、燃烧部で土師器甕1点が検出できたに止まった。

第10号住居跡（第16図、第10表）

33・34—171グリッドを中心に位置する。第22号土坑、第106号ピットと重複関係にあり、本遺構がそれぞれに切られている。また、カマドの一部、住居の北東隅及び南西隅が調査区域外となっている。

平面形は長軸約5.4m、短軸5.14mのほぼ正方形のプランで、面積は27.76㎡を測る。主軸方向はおおよそN—33°—Wを指す。

床までの深さは約18cmで、埋土は自然堆積と考えられる。

ピットが1つ検出されたが、それが柱穴にあたるかは不明である。規模は、径37×27cm、深さ約67cmを測る。

カマドは北壁のほぼ中央部に設けられていたと推定されるが、詳細は明らかにできなかった。

壁溝は、東壁の北寄り、南壁の東と西に途切れ途切れに検出できた。その規模は、幅26cm、深さ8cmから幅30cm、深さ6cmを測った。

出土遺物は主に破片であったが、土師器坏・甕、須恵器甕などを検出したほか、他時期の遺物として弥生土器甕などの破片が混じっていた。

第11号住居跡（第17図、第11表）

35—171・172グリッドに位置する。第13号井戸跡、第41号溝跡、第123～133号ピットと重複関係にあり、それぞれの遺構に本遺構が切られる。南側の一部は調査区域外となっている。

平面形は、他遺構との切り合いが大きく、プランを正確に把握することはできないが、方形のプランを呈すると推定できる。また、規模及び主軸方向を判断することも困難である。

床までの深さは約18cmで、埋土は自然堆積と考えられる。

カマド、柱穴、壁溝、貯蔵穴は検出できなかった。

出土遺物は、他遺構との切り合いが大きかった割には出土量が多く、土師器坏・甕のほか、滑石製の紡錘車などが検出された。また、他時期の遺物として弥生土器壺、土師器壺などの破片が混じっていた。

第12号住居跡（第18図、第12表）

20—172・173グリッドを中心に位置する。第32号溝跡と重複関係にあり、第32号溝跡が埋まりきった後に本遺構がつくられたようである。住居の南西隅が試掘調査時のトレンチにより攪乱を受けている。また、東側は調査区域外となっている。

平面形は、軸長が測れる一方向で、長さ4.58mを測る長方形のプランであったと推測される。主軸方向はほぼ真北を指す。

床までの深さは、最深で約30cmであった。埋土は自然堆積と考えられる。

カマドは北壁に設けられていたが、東側は調査区域外となり不明である。ほぼ燃烧部のみの検出で、煙道の詳細は不明である。袖は、左袖のみ確認された。

柱穴、壁溝、貯蔵穴は検出できなかった。

出土遺物は大量に検出されたが、細かい破片資料ばかりで、図示可能な遺物は少なかった。須恵器蓋・壺、土師器坏・甕などが出土した。

第13号住居跡（第19図、第13表）

20-156・157グリッドに位置する。第3号溝跡と重複関係にあり、本遺構が切っている。また、第15号ピットに本遺構が切られている。住居の東側の大部分が調査区域外となっている。

平面形は明らかにすることができなかったが、おそらく長軸方向と考えられる軸長の測れる一方向で約5.40mの長方形のプランと推測される。主軸はおおよそN-15°-Wを指すと推定される。

床までの深さは約17cmで、埋土は自然堆積と考えられる。

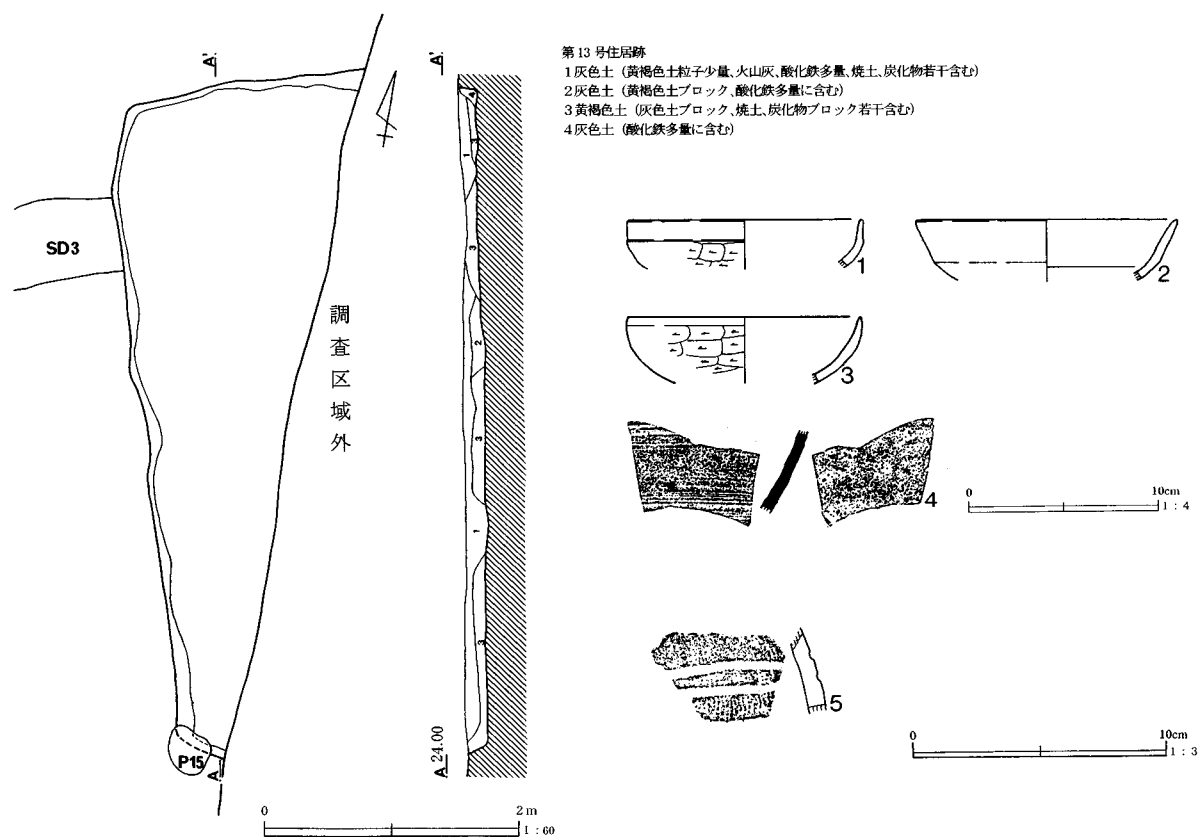
壁溝は、平面的に検出できなかったが、土層断面観察から北壁の一部にわずかに認められた。幅は、約10cm、深さはわずかに4cmほどである。

カマド、柱穴、貯蔵穴は検出できなかった。

出土遺物は少なく、土師器坏、須恵器壺などの破片のほか、弥生土器壺などの破片が混入遺物として出土した。

第14号住居跡（第20図、第14表）

21-164グリッドを中心に位置する。第28号住居跡、第12号土坑と重複関係にあり、それぞれに本遺



第19図 第13号住居跡・出土遺物

第13表 第13号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器坏	(12.3)	—	—	ABHJKM	橙色	B	10%以下	外面力キ目。 混入遺物。
2	土師器坏	(13.8)	—	—	AEJLN	橙色	C	10%以下	
3	土師器坏	(12.3)	—	—	AHJKM	橙色	B	10%	
4	須恵器壺	—	—	—	AB	灰色	A	胴(下半)部	
5	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄褐色	—	胴(上半)部	

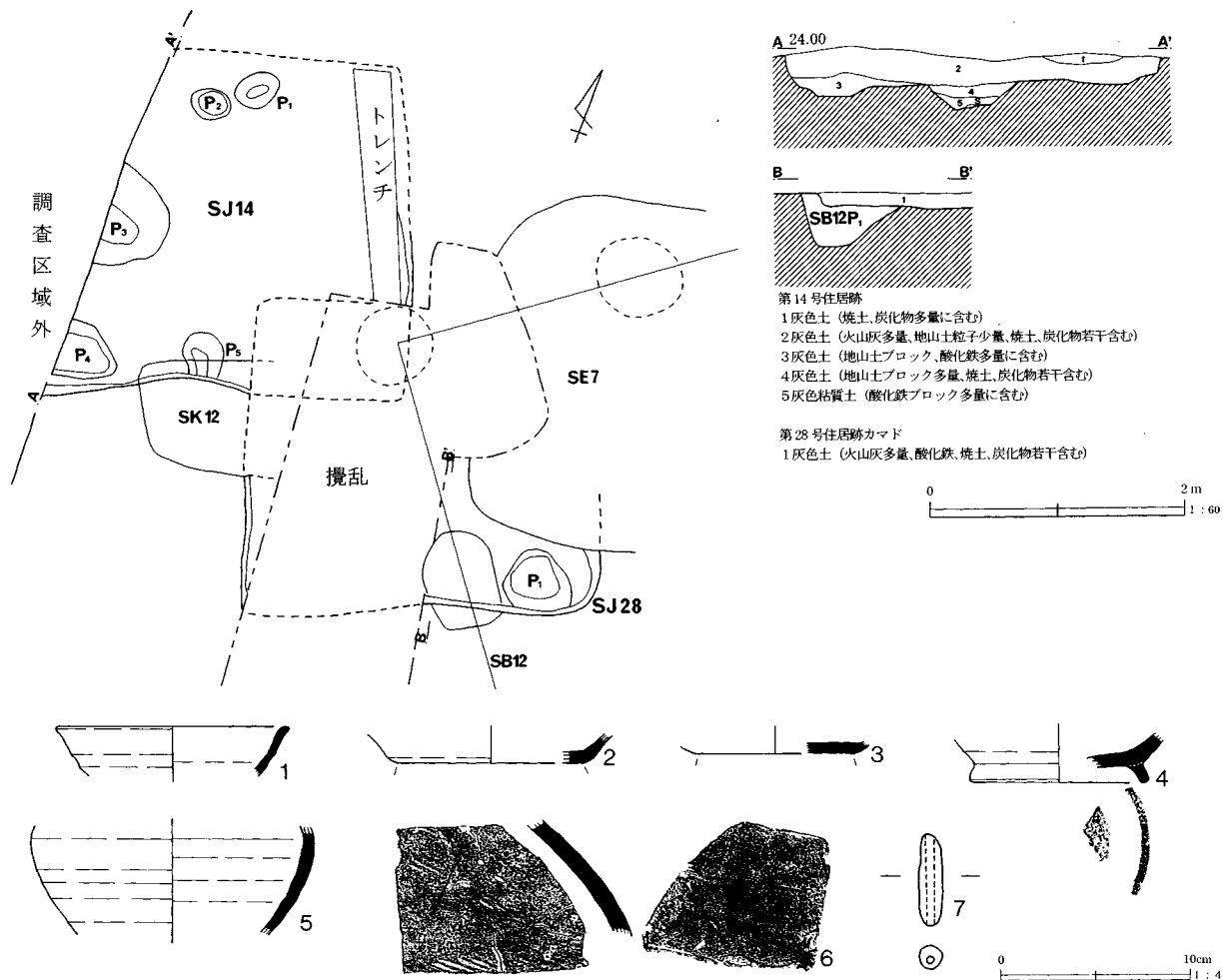
構が切られている。古い順に、本遺構、第12号土坑、第28号住居跡である。住居の西側が調査区域外となっている。また、南東隅が試掘調査時のトレンチにより攪乱を受けている。

平面形は、正確には明らかではないが、短軸方向の軸長2.72mで東西に長軸をもつ長方形プランであると推定される。主軸はおよそN-16°-Wを指すと推定される。

床までの深さは、土層断面観察の結果約28cmで、埋土は自然堆積と考えられる。

大小のピットがP 1からP 5まで5つ検出されたが、いずれが柱穴にあたるか不明である。その規模は、それぞれ径、深さの順にP 1が37×28cm、10.1cm、P 2が33×27cm、8.3cm、P 3が最大径82cm、18cm、P 4が一方径45cm、10cm、P 5が35×31cm、12.8cmを測る。

カマド、壁溝、貯蔵穴は検出できなかった。



第20図 第14・28号住居跡、第14号住居跡出土遺物

第14表 第14号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	須恵器坏	(12.1)	—	—	ABFN	灰色	B	10%以下	南比企産。
2	須恵器坏	—	—	(9.9)	ABFGH	灰色	A	10%以下	南比企産。
3	須恵器坏	—	—	(8.5)	ABF	灰色	A	10%以下	南比企産。
4	須恵器碗	—	—	9.2	ABJL	灰色	A	10%	末野産。
5	須恵器壺	—	—	—	AB	黄灰色	A	10%以下	外面肩上半に自然釉。
6	須恵器甕	—	—	—	AFN	褐灰色	A	胴部	外面一部平行叩き目。内面あて具痕。南比企産。
7	土錘	長さ4.8	幅1.3	厚さ1.3	—	にぶい黄橙色	—	ほぼ完存	重さ8.3g。

出土遺物は、図示可能だった須恵器坏・椀・壺・甕のほか、破片のため図示できなかった土師器坏・甕などが少量検出できた。また、土錘の検出があった。

第15号住居跡（第21図、第15表）

20・21-158グリッドを中心に位置する。第4号溝跡と重複関係にあり、本遺構が切られる。住居のおよそ西半分が調査区域外となっている。

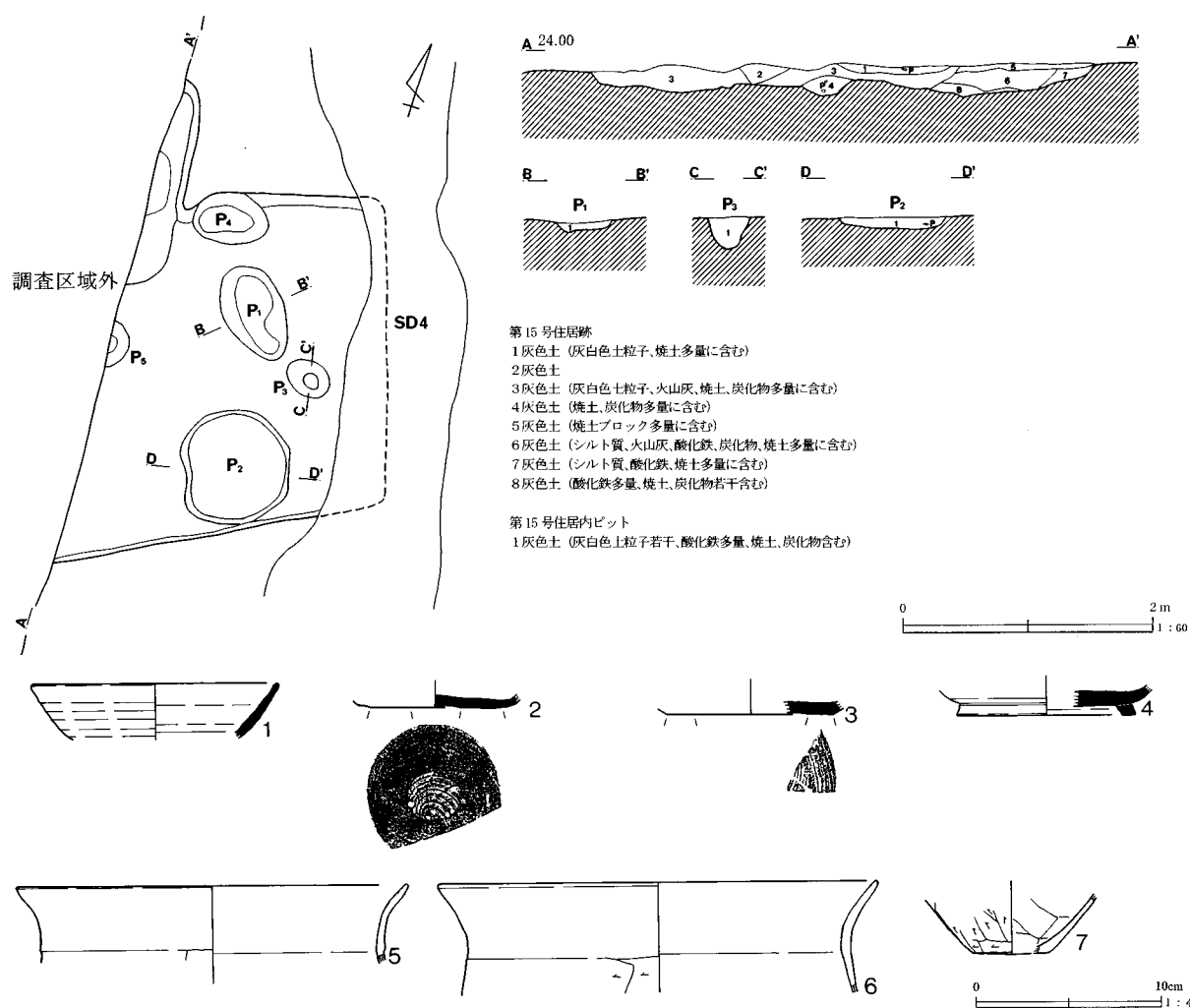
平面形は長軸が不明、短軸2.72mの長方形のプランと推定できる。主軸はおよそN-11°-Wを指す。床面の起伏がやや激しいが、床までの深さは平均約20cmで、埋土は自然堆積と考えられる。

カマドは北壁に設けられ、残存していた煙道は、約90cm北に延びていた。袖は、右側にわずかに検出できた。燃烧部はわずかな窪みが確認できた。

大小のピットがP1からP5まで5つ検出されたが、いずれも柱穴ではないと考えられる。その規模は、それぞれ径、深さの順にP1が82×48cm、7cm、P2が90×88cm、10cm、P3が38×28cm、27cm、P4が60×42cm、14cm、P5が最大径38cm、12cmを測る。

壁溝、貯蔵穴は検出できなかった。

出土遺物は少なく、須恵器坏・椀、土師器甕などがわずかに検出できたに止まった。



第21図 第15号住居跡・出土遺物

第15表 第15号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	須恵器坏	(13.1)	—	—	ABF	灰色	A	10%以下	南比企産。 南比企産。 南比企産。
2	須恵器坏	—	—	7.1	ABFN	灰色	A	15%	
3	須恵器坏	—	—	(9.0)	AF	灰黄褐色	B	10%以下	
4	須恵器碗	—	—	(9.6)	ABM	灰色	A	15%	
5	土師器甕	(21.3)	—	—	ACJMN	橙色	A	10%以下	
6	土師器甕	(23.6)	—	—	ABEHJLM	橙色	A	10%以下	
7	土師器甕	—	—	(4.2)	ABEK	にぶい赤褐色	A	10%	

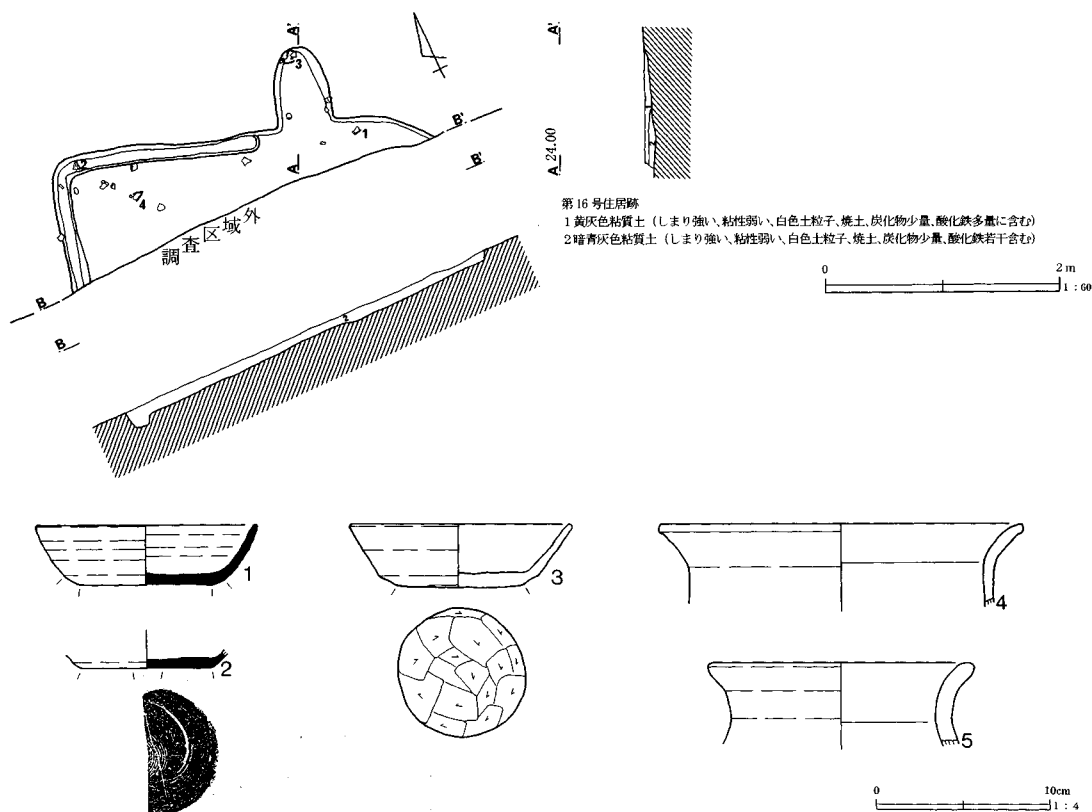
第16号住居跡 (第22図、第16表)

19-196グリッドを中心に位置する。住居の南側の大部分が調査区域外となっている。

平面形は、いずれの軸長も測れず詳細は不明であるが、正方形ないしは南北に長い長方形のプランであったと推定される。主軸はおよそN-26°-Eを指す。

床までの深さは約10cmで、埋土は自然堆積と考えられる。

カマドは北壁に設けられていた。煙道は幅約48cmで、約70cm北へ延びていた。燃烧部、袖は検出できなかった。



第22図 第16号住居跡・出土遺物

第16表 第16号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	須恵器坏	(12.6)	(3.5)	7.6	BGHJN	灰白色	C	50%	底部に窯印「X」。 末野産。
2	須恵器坏	—	—	(7.5)	ABHN	灰色	A	20%	
3	須恵器坏	(12.6)	3.7	7.4	ABHJLMN	にぶい黄褐色	C	60%	
4	土師器甕	(20.8)	—	—	AGM	にぶい橙色	B	10%以下	
5	土師器甕	(14.7)	—	—	AEMN	橙色	C	10%以下	

壁溝は、北壁のカマド付近から西壁にかけてL字形に検出できた。その規模は、幅12cm、深さ10cmを測った。

柱穴、貯蔵穴は検出できなかった。

出土遺物は、カマドから北壁寄りに分布して出土し、土師器坏・甕、須恵器坏などが見られた。

第17号住居跡（第23図、第17表）

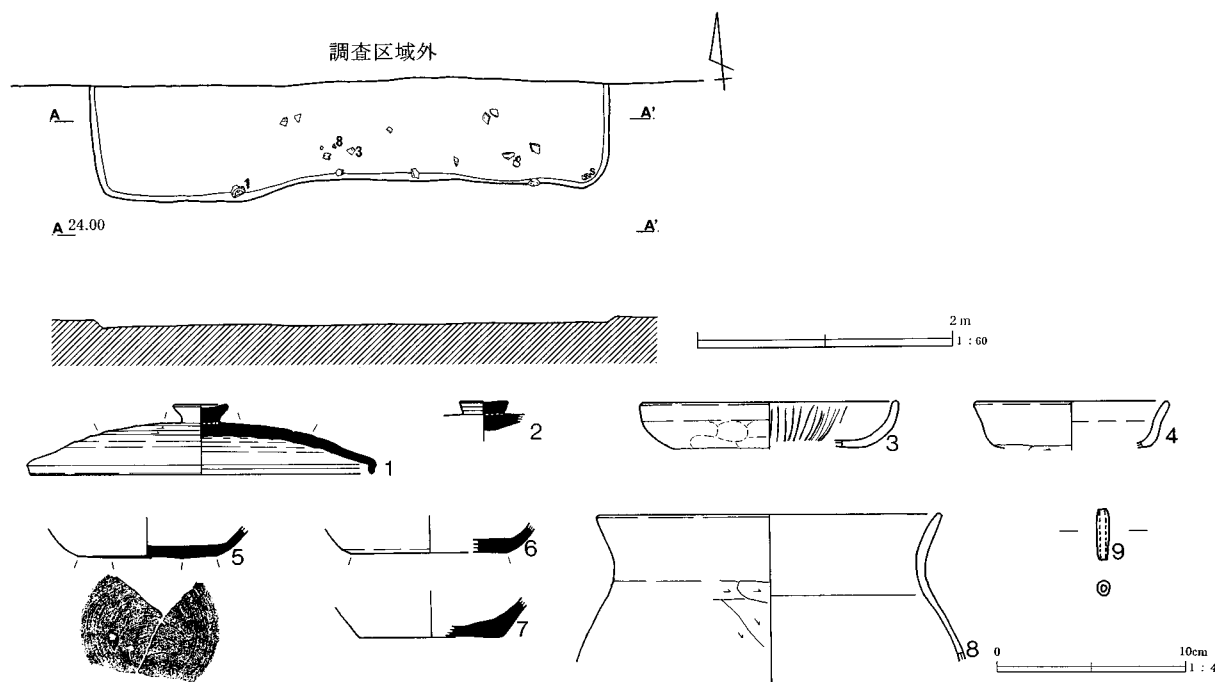
21-194グリッドを中心に位置する。住居の北側の大部分が調査区域外となっている。

平面形は、軸長が測れる一方方向で長さ4.12mの正方形ないしは長方形のプランであったと推定される。主軸は東西方向と考えられ、ほぼ真西を指す。

床面はわずかに検出できたにすぎず、床までの深さはわずかに約6cmであった。

カマド、柱穴、壁溝などは検出できなかったが、カマドの位置については、同時期の住居跡例から推定すると西に設けられていた可能性が考えられる。

出土遺物は、調査面積に比して多量に検出され、須恵器蓋・坏・甕、土師器坏・甕のほか土錘が検出できた。土師器坏には、内面に放射状の暗文を施すものも認められた。



第23図 第17号住居跡・出土遺物

第17表 第17号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	須恵器蓋	18.2	3.7	—	ABFHN	灰白色	A	45%	南比企産。
2	須恵器蓋	—	—	—	ABFH	灰白色	A	つまみ部	南比企産。
3	土師器坏	13.8	2.4	(10.2)	ABEHJM	にぶい橙色	A	10%	内面放射状暗文。
4	土師器坏	(10.1)	—	(8.4)	AHJM	にぶい橙色	B	10%	
5	須恵器坏	—	—	7.2	ABFJ	灰白色	A	30%	南比企産。
6	須恵器坏	—	—	(8.2)	AFH	灰白色	A	10%以下	南比企産。
7	須恵器坏	—	—	(7.5)	ABH	灰色	B	15%	底部静止ヘラケズリ。
8	土師器甕	(18.0)	—	—	AEGJKN	橙色	C	10%以下	
9	土錘	長さ2.7	幅0.7	厚さ0.8	—	灰褐色	—	完存	重さ1.6g。

第18号住居跡（第24図、第18表）

21-195グリッドを中心に位置する。第240号ピットと重複関係にあり、本遺構が切られている。また、カマドの一部が攪乱を受けており、南側の一部が調査区域外となっている。

平面形は、短軸方向しか測ることができなかったが、長さ3.57mの南北に長い長方形のプランであったと推定できる。主軸は短軸方向で、ほぼ真西を指す。

床までの深さは約7cmと非常に浅かった。埋土は自然堆積と考えられる。

カマドは西壁のやや北寄りに設けられていたと推定され、煙道は大部分削平を受けている上に一部攪乱を受けていた。袖は検出できなかったが、燃烧部を比較的良好な状態で検出できた。燃烧部のほぼ中央には、直径約26cm、深さ約10cmのピットが確認できた。これは、おそらく支脚を据え付けたピットであると考えられる。

壁溝は、調査できた範囲で全周して検出できた。その規模は、幅12cm、深さ7cmを測った。壁溝の一部にピットがつくられていた。そのピットの規模は、径30×27cm、深さ18.6cmを測った。

柱穴、貯蔵穴は検出できなかった。

出土遺物は、住居のほぼ全面に分布し、須恵器蓋・坏・甕、土師器甕などの土器のほか、土錘が検出された。また、土師器の有段口縁壺も検出されたが、これは周囲からの混入遺物と考えられる。

第19号住居跡（第25図、第19表）

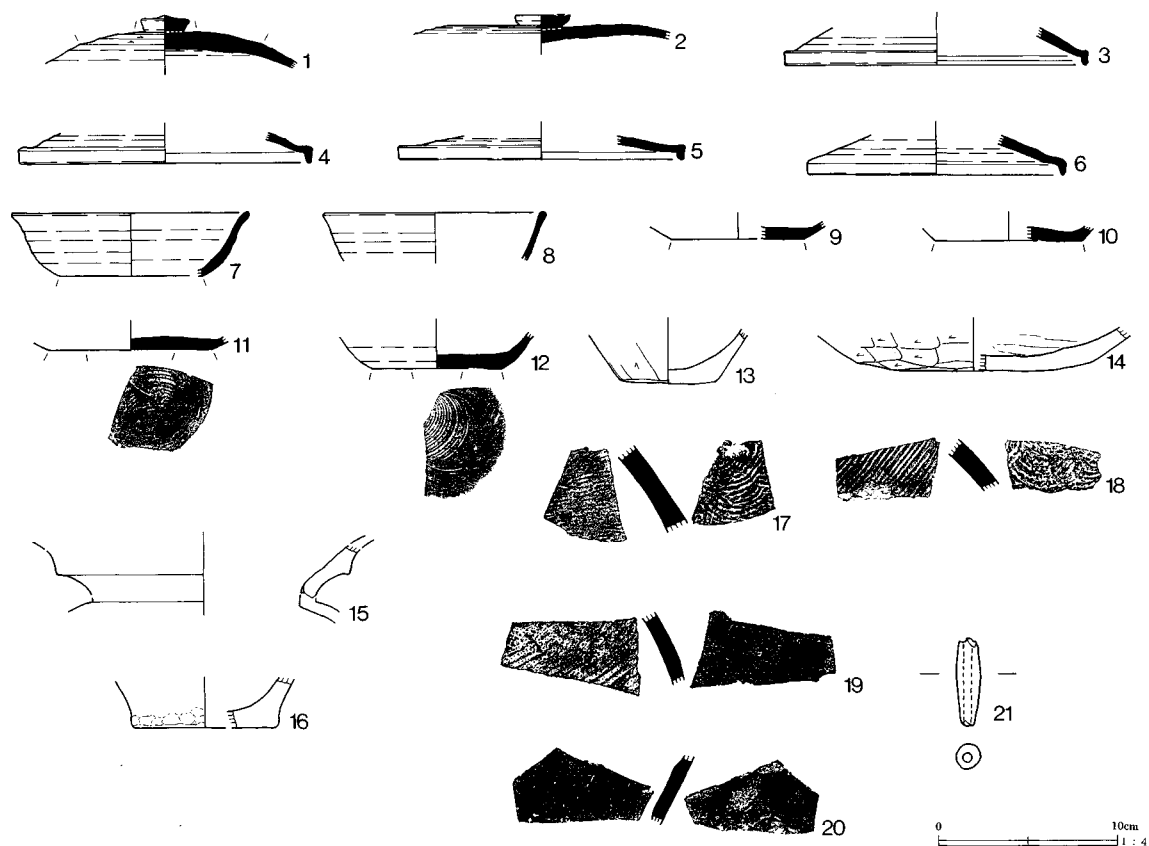
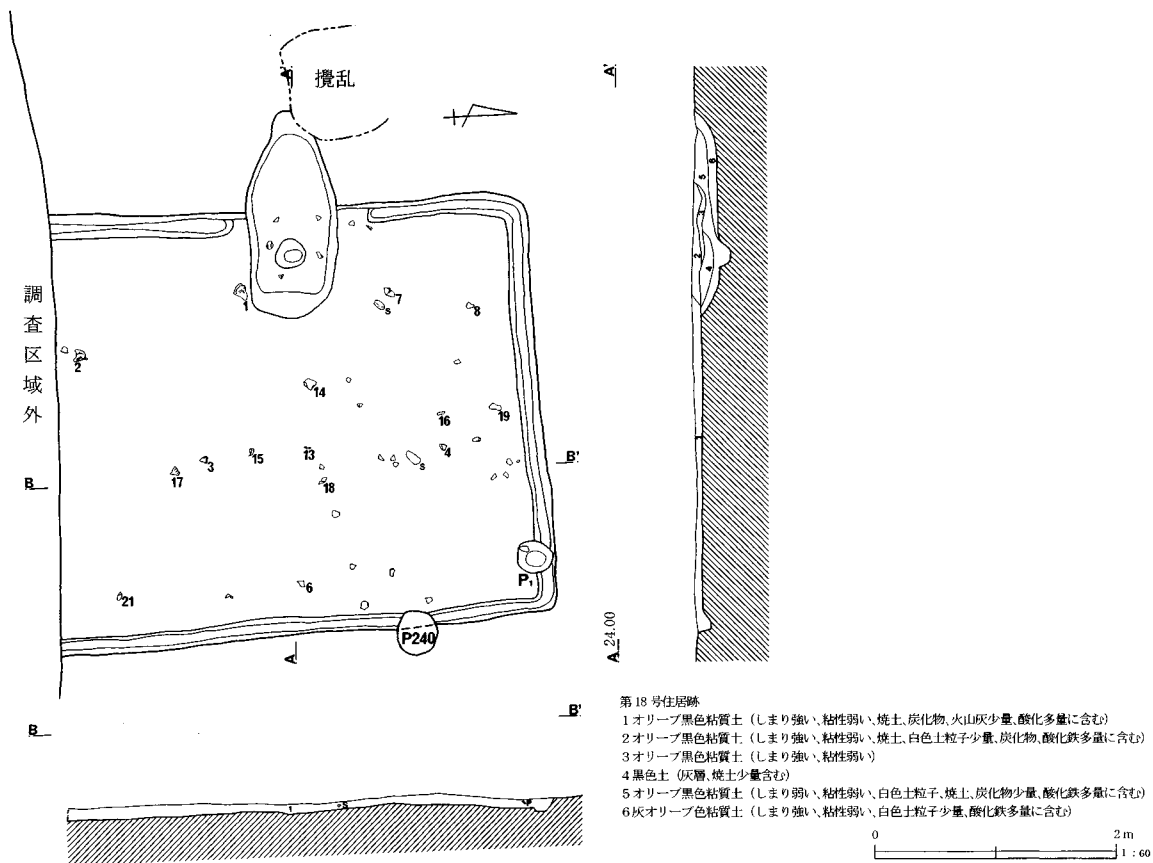
22・23-195グリッドを中心に位置する。第63号溝跡と重複関係にあり、本遺構が切っている。住居の北東隅及び東の一部が攪乱を受けている。また、南側が調査区域外となっている。

平面形は、いずれの軸長も測れず詳細は不明であるが、東西に長い長方形のプランであったと推定される。主軸は長軸方向で、およそN-111°-Wを指すと推定される。

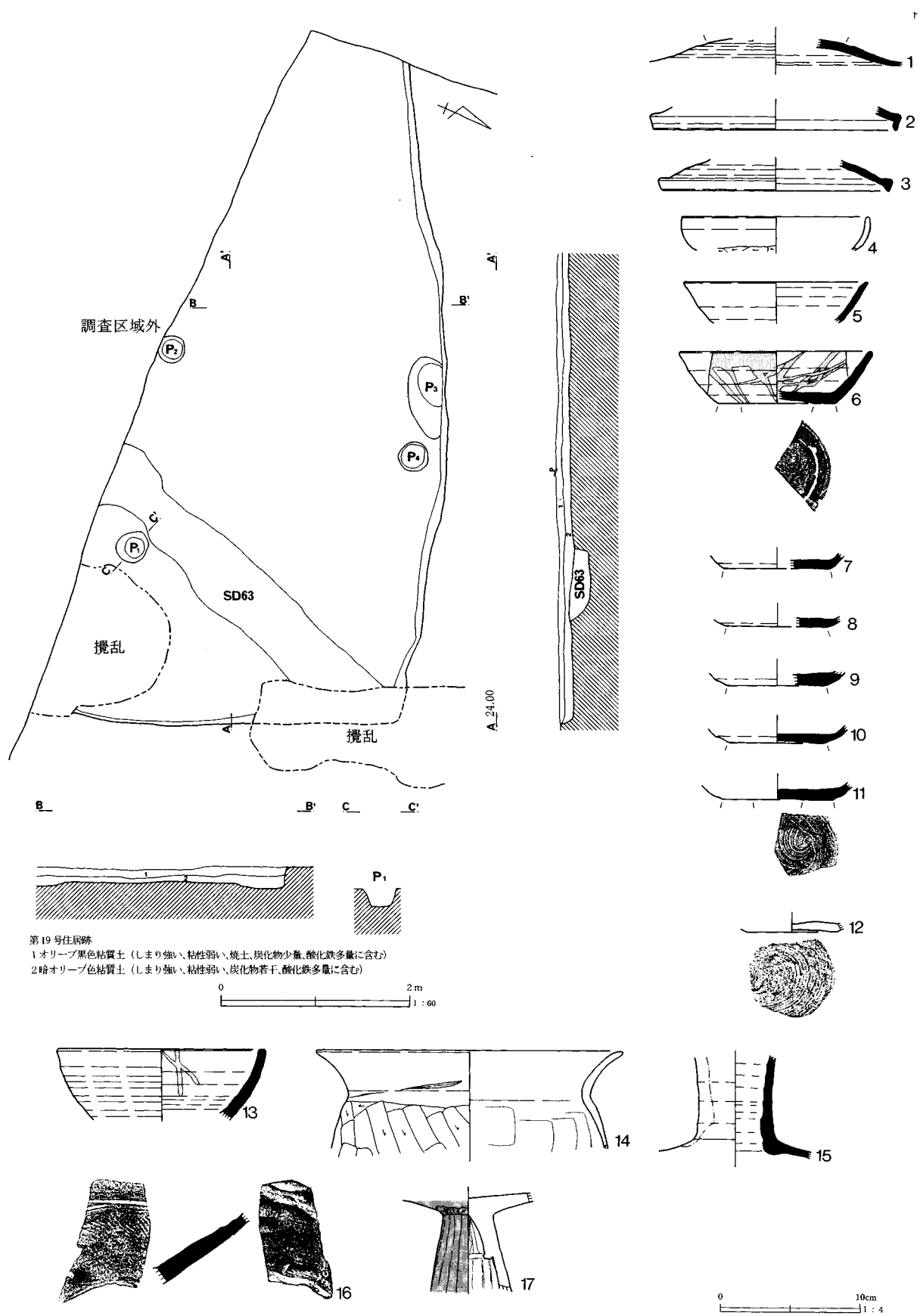
床までの深さは平均約15cmで、埋土は自然堆積と考えられる。

第18表 第18号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	須恵器蓋	—	—	—	AFGHN	灰色	A	60%	南比企産。
2	須恵器蓋	—	—	—	ABFHN	灰白色	A	35%	南比企産。
3	須恵器蓋	(16.8)	—	—	ABF	灰白色	A	10%以下	南比企産。
4	須恵器蓋	(16.2)	—	—	ABH	灰白色	A	10%以下	
5	須恵器蓋	(15.8)	—	—	AF	灰色	A	10%以下	南比企産。
6	須恵器蓋	(14.2)	—	—	ABFHN	灰色	A	10%以下	南比企産。
7	須恵器坏	(13.2)	3.5	(8.0)	ABFHJN	灰色	A	10%以下	南比企産。
8	須恵器坏	(12.3)	—	—	ABFN	灰色	A	10%以下	南比企産。
9	須恵器坏	—	—	(7.3)	GN	灰白色	B	15%	
10	須恵器坏	—	—	(8.2)	ABF	灰白色	A	10%以下	南比企産。
11	須恵器坏	—	—	(9.1)	AFN	灰色	A	10%	南比企産。
12	須恵器坏	—	—	(7.2)	ABFG	灰色	A	20%	南比企産。
13	土師器甕	—	—	(5.3)	AEM	にぶい赤褐色	B	10%以下	
14	土師器甕	(13.1)	—	—	ABCGHKM	明赤褐色	B	10%以下	
15	土師器壺	—	—	—	AGHM	にぶい橙色	B	10%以下	混入遺物。
16	土師器壺	—	—	(7.9)	AHJM	明赤褐色	A	10%以下	混入遺物。
17	須恵器甕	—	—	—	AB	灰色	A	胸部	外面平行叩き目。内面青海波文。
18	須恵器甕	—	—	—	AG	灰色	A	胸部	外面平行叩き目。内面青海波文。
19	須恵器甕	—	—	—	ABHM	黄灰色	A	胸部	外面平行叩き目。
20	須恵器甕	—	—	—	AFHN	灰色	B	胸部	内面あて具痕。南比企産。
21	土錘	長さ4.8	幅1.4	厚さ1.4	—	赤褐色	—	一部欠損	重さ7.4g。



第24図 第18号住居跡・出土遺物



第19号住居跡

1 オリーブ黒色粘質土（しまり強い、粘性弱い、焼土、炭化物少量、酸化鉄多量を含む）
 2 暗オリーブ色粘質土（しまり強い、粘性弱い、炭化物若干、酸化鉄多量を含む）

第25図 第19号住居跡・出土遺物

第19表 第19号住居跡出土遺物観察表

番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	色 調	焼成	残存率	備 考
1	須恵器蓋	—	—	—	ABFN	灰白色	A	15%	南比企産。
2	須恵器蓋	(17.3)	—	—	ABHF	灰色	A	10%以下	南比企産。
3	須恵器蓋	(16.2)	—	—	ABFN	灰色	A	10%以下	南比企産。
4	土師器坏	(13.2)	—	—	AEJM	橙色	C	10%以下	
5	須恵器坏	(13.0)	—	—	ABFN	灰色	A	10%以下	南比企産。
6	須恵器坏	(13.5)	3.7	(8.3)	ABFN	灰白色	A	25%	内外面火だすき痕。南比企産。
7	須恵器坏	—	—	(7.6)	AFN	灰色	B	20%	南比企産。
8	須恵器坏	—	—	(7.2)	AFHN	灰色	A	15%	南比企産。
9	須恵器坏	—	—	(7.2)	ABFHN	灰色	A	10%	南比企産。
10	須恵器坏	—	—	(7.2)	AFGKN	灰白色	A	30%	
11	須恵器坏	—	—	(7.9)	ABFN	灰白色	A	15%	南比企産。
12	須恵器坏	—	—	(6.4)	AFHN	にぶい黄橙色	C	20%	南比企産。
13	須恵器碗	(14.7)	—	—	ABFN	灰色	A	15%	内面火だすき痕。南比企産。
14	土師器甕	(21.8)	—	—	ABCJKM	橙色	B	30%	
15	須恵器長頸壺	—	—	—	ABN	灰色	A	20%	外面自然釉。
16	須恵器甕	—	—	—	ABN	灰色	A	胴部	外面平行叩き目。内面あて具痕。
17	土師器高坏	—	—	—	ABHJKMN	にぶい黄褐色	B	30%	外面赤彩痕跡。混入遺物。

ピットはP 1からP 4まで4つ検出されたが、その内柱穴にあたると考えられるピットはP 1である。その規模は、径36×33cm、深さ18cmを測る。その他のピットの規模は、P 2が径30×28cm、深さ18.7cm、P 3が径88×37cm、深さ18.1cm、P 4が直径33cm、深さ23.2cmを測る。

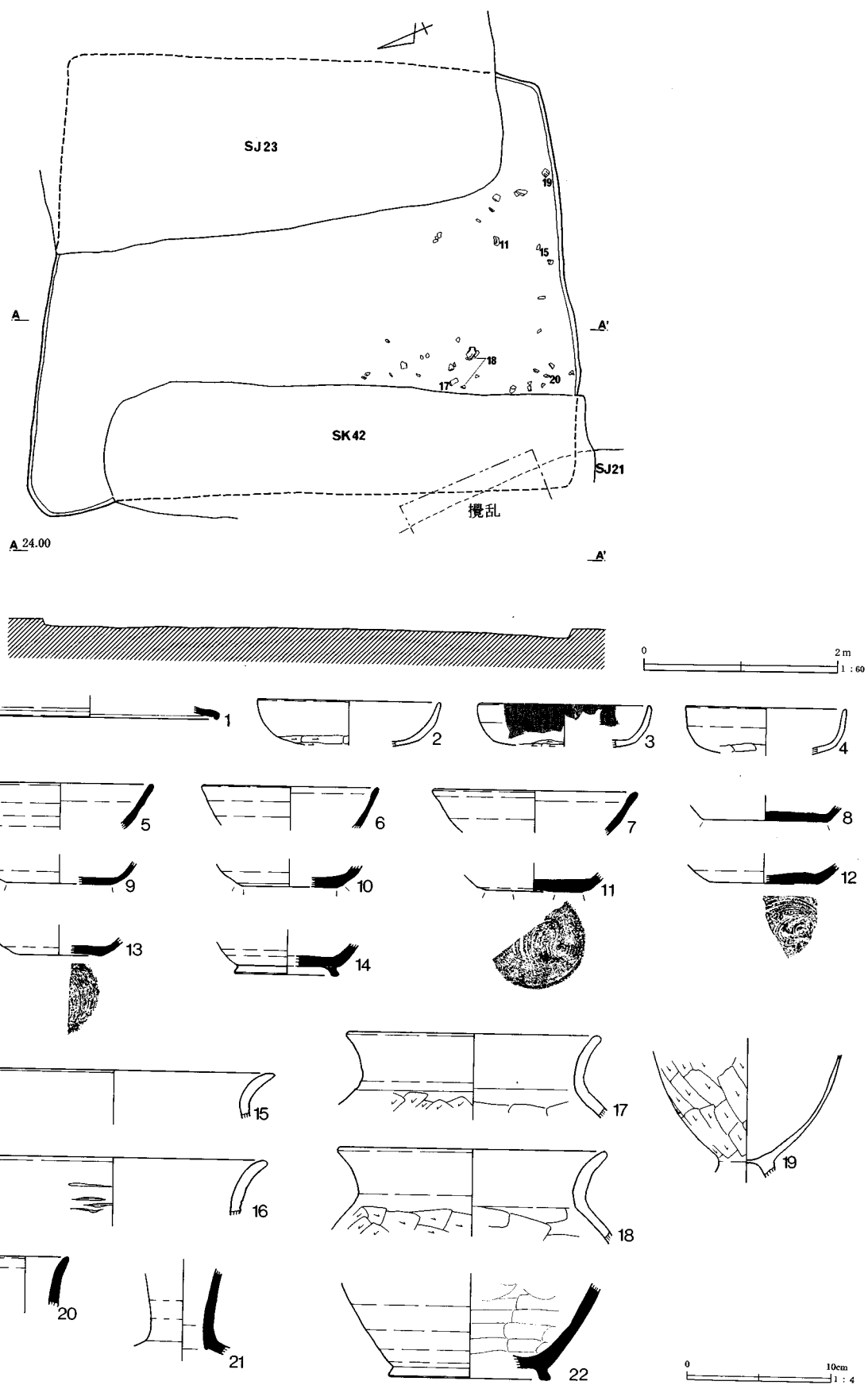
カマドの位置は不明であるが、おそらく西壁に設けられていたと考えられる。

壁溝は検出できなかった。

出土遺物は、土師器坏・甕、須恵器蓋・坏・長頸壺・甕などが検出され、本遺構の所属時期以外の遺物として、土師器高坏などが出土した。

第20表 第20号住居跡出土遺物観察表

番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	色 調	焼成	残存率	備 考
1	須恵器蓋	(17.8)	—	—	ABLN	灰色	A	10%以下	末野産。
2	土師器坏	(12.2)	—	—	BEK	にぶい橙色	B	15%	
3	土師器坏	(11.8)	—	(9.9)	BHJM	にぶい橙色	A	15%	内外面タール付着。灯明皿用途。
4	土師器坏	(11.1)	—	—	ABEHM	橙色	C	15%	
5	須恵器坏	(12.7)	—	—	ABFH	灰色	A	10%	南比企産。
6	須恵器坏	(12.2)	—	—	AF	灰色	A	10%	南比企産。
7	須恵器坏	(14.0)	—	—	ABF	灰色	A	10%以下	南比企産。
8	須恵器坏	—	—	(8.6)	ABFN	灰色	A	10%	南比企産。
9	須恵器坏	—	—	(7.3)	ABFN	灰色	A	20%	南比企産。
10	須恵器坏	—	—	(6.5)	ABFH	灰白色	A	10%	南比企産。
11	須恵器坏	—	—	(6.7)	ABCFH	灰色	A	15%	南比企産。
12	須恵器坏	—	—	(7.6)	AF	灰色	A	10%	南比企産。
13	須恵器坏	—	—	(5.8)	ABFH	灰色	A	10%以下	南比企産。
14	須恵器碗	—	—	(6.2)	AFK	灰色	A	10%	南比企産。
15	土師器甕	(21.9)	—	—	ABEGHKM	橙色	A	10%以下	
16	土師器甕	(21.0)	—	—	AJKM	橙色	A	10%以下	
17	土師器甕	(17.2)	—	—	AEHJMN	灰黄色	B	10%	
18	土師器甕	(18.5)	—	—	AEGIMN	にぶい黄橙色	B	10%	
19	土師器台付甕	—	—	—	AIJKN	にぶい橙色	B	15%	外面煤付着。
20	須恵器長頸壺	(6.1)	—	—	ABINL	灰色	A	10%	末野産。
21	須恵器長頸壺	—	—	—	ABN	灰色	A	10%	自然釉。
22	須恵器長頸壺	—	—	(11.2)	ABN	灰色	A	10%	



第26図 第20号住居跡・出土遺物

第20号住居跡（第26図、第20表）

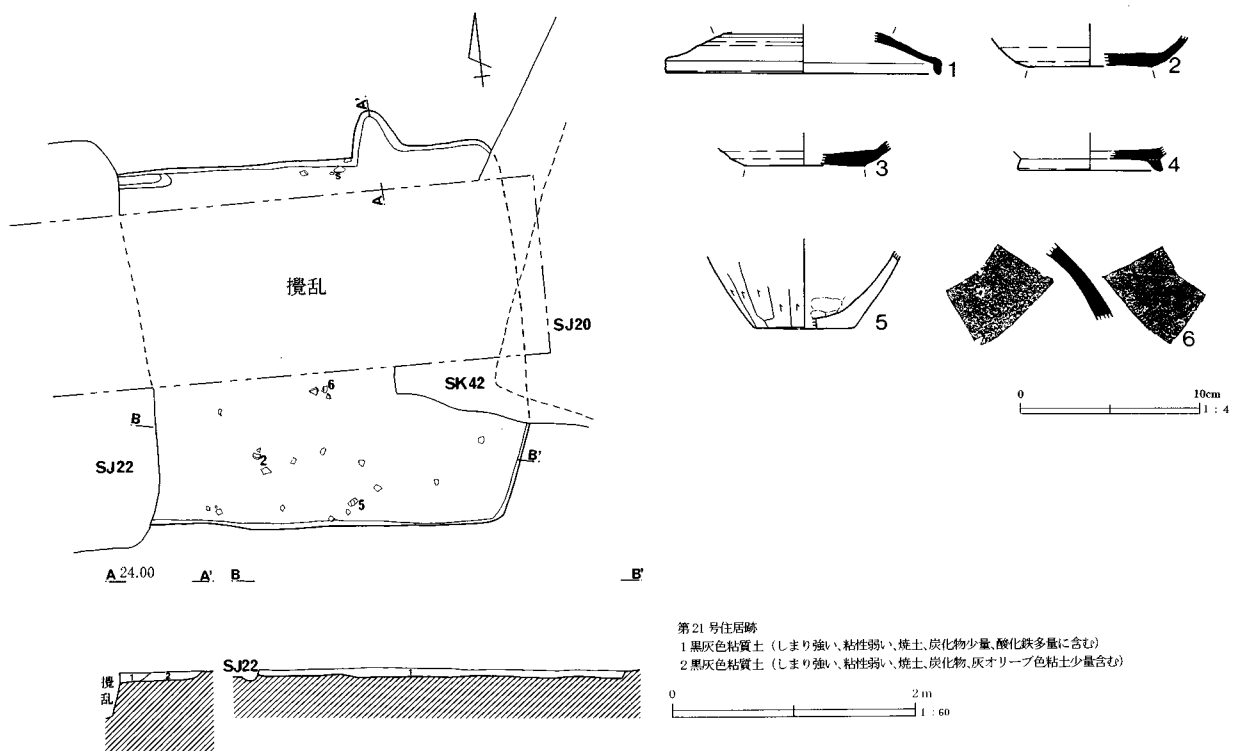
18・19-195グリッドを中心に位置する。第21・23号住居跡、第42号土坑と重複関係にあり、第23号住居跡に本遺構が切られ、第42号土坑の上部を切り本遺構がつかられ、攪乱により不明であるが第21号住居跡に切られていると推定される。古い順に第42号土坑、本遺構、第21号住居跡、第23号住居跡である。

平面形は、長軸約5.53m、推定短軸長4.5mのやや長方形のプランで、面積は24.89㎡を測る。主軸方向は短軸方向でおよそN-117°-Eを指すと推定される。

床までの深さは約10cmを測る。

カマド、柱穴、壁溝などは検出されなかったが、カマドの位置については、最も可能性がある箇所は東壁と考えられる。

出土遺物は住居南付近に集中して分布し、遺構確認面からの床面までの深さは浅かったが非常に多く検出された。土師器坏・甕・台付甕、須恵器蓋・坏・長頸壺などが出土した。



第27図 第21号住居跡・出土遺物

第21表 第21号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	須恵器蓋	(15.2)	—	—	ABFN	灰色	A	10%以下	南比企産。
2	須恵器坏	—	—	(7.0)	ABFIN	灰白色	A	15%	南比企産。
3	須恵器坏	—	—	(6.6)	ABFH	灰色	A	10%	南比企産。
4	須恵器椀	—	—	(7.9)	ABFN	灰色	A	10%以下	南比企産。
5	土師器甕	—	—	(5.6)	ABEJK	にぶい褐色	B	10%以下	
6	須恵器甕	—	—	—	AB	灰色	A	胴部	外面自然釉。

第21号住居跡（第27図、第21表）

19・20-195グリッドに位置する。第20・22号住居跡、第42号土坑と重複関係にあり、本遺構が第20号住居跡及び第42号土坑を切り、第22号住居跡に切られる。古い順に第42号土坑、第20号住居跡、本遺構、第22号住居跡となる。住居の中央が試掘調査時のトレンチによって東西に攪乱を受けている。

平面形は、軸長が測れる短軸方向で長さ3.1mを測る東西に長い長方形のプランである。主軸はおおよそN-4°-Eとほぼ真北を指す。

床までの深さは浅く約8cmで、埋土は自然堆積と考えられる。

カマドは北壁の東寄りに設けられていた。煙道は幅約40cmで、北へと延びているが、削平が激しく非常に短い。燃烧部、袖は検出できなかった。

壁溝は、北壁の北西隅付近にわずかに検出され、その規模は幅約10cm、深さ7cmを測った。

柱穴などのピットは検出できなかった。

出土遺物は、カマド付近及び住居南部を中心に出土し、土師器甕、須恵器蓋・坏・碗・甕などが検出された。また、第42号土坑との重複関係から、古墳時代後期の土師器坏・甕などの破片も混じっていた。

第22号住居跡（第28図、第22表）

20・21-195グリッドに位置する。第21号住居跡、第240号ピットと重複関係にあり、本遺構が前者を切り、後者に切られている。住居中央部を東西に試掘調査時のトレンチが横断し攪乱している。

平面形は、長軸約5.12m、短軸3.64mのほぼ長方形のプランで、面積は18.64㎡を測る。主軸方向はほぼ真北を指す。

床までの深さは約10cmで、埋土は自然堆積と考えられる。

カマドは北壁のほぼ中央に設けられていた。ほぼ燃烧部のみの検出で煙道は確認できなかった。燃烧部は方形の掘り方を呈しており、灰が大量に検出できた。袖は検出できなかった。

柱穴、壁溝などは検出できなかった。

出土遺物は、中央部が攪乱を受けていたため出土量が少なかった。カマド、住居のほぼ全体に分布して検出され、土師器坏・甕、須恵器蓋・坏などが検出でき、土錘や欠損が著しかったが滑石製紡錘車も検出できた。

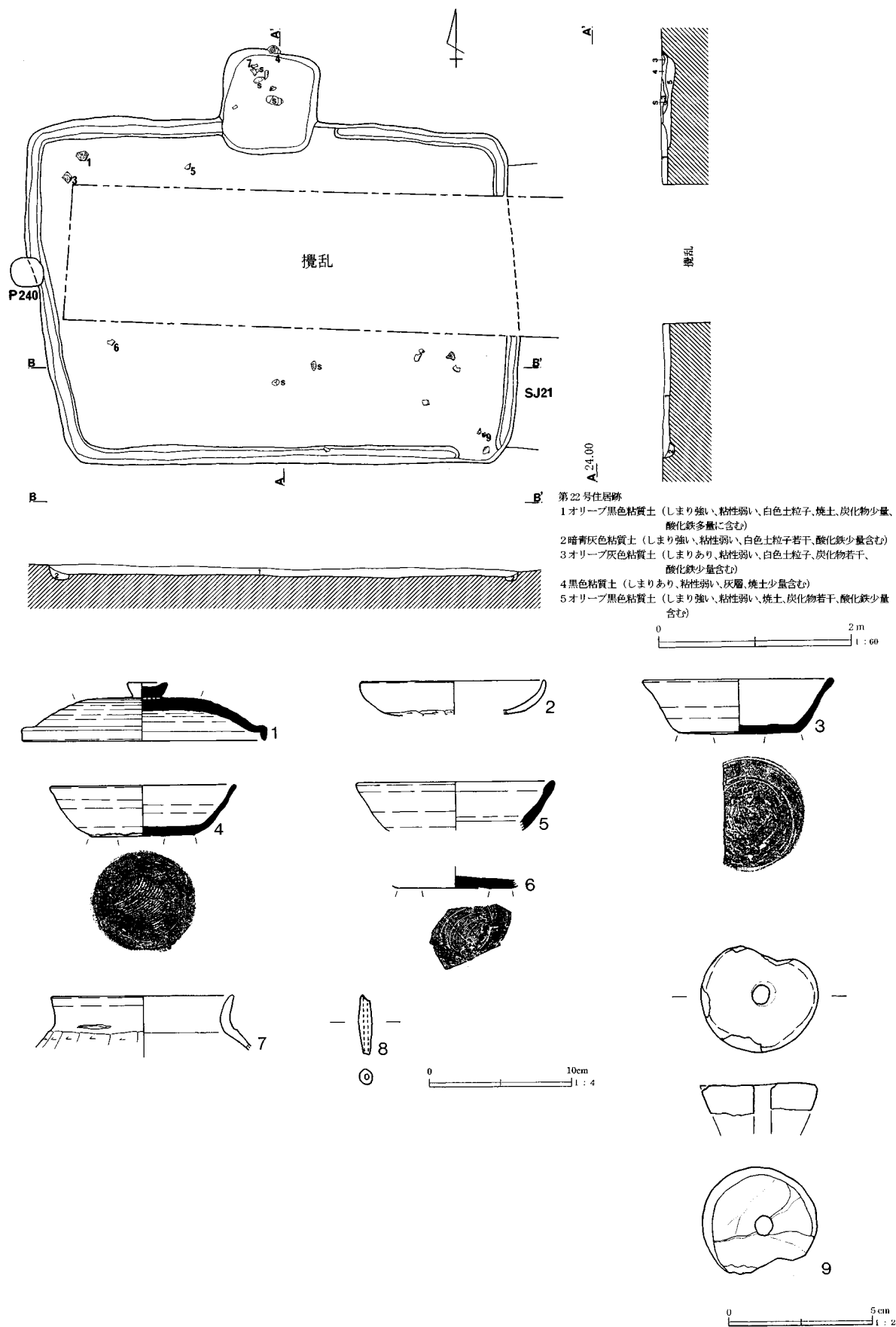
第23号住居跡（第29図、第23表）

18-195グリッドに位置する。第20号住居跡と重複関係にあり、本遺構が切っている。

平面形は、長軸約4.54m、短軸4.0mの長方形のプランで、面積は18.16㎡を測る。主軸方向はおおよそN-18°-Eを指す。

第22表 第22号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	須恵器蓋	(17.1)	4.0	—	ABGHN	灰白色	A	40%	末野産？
2	土師器坏	(12.9)	—	—	BDJM	にぶい橙色	A	20%	
3	須恵器坏	(13.3)	3.7	(8.6)	ABHI	灰白色	A	35%	
4	須恵器坏	12.9	3.0	7.5	AFHN	灰色	A	85%	
5	須恵器坏	(13.8)	—	—	BDJF	灰白色	C	10%	
6	須恵器坏	—	—	(8.0)	ABFGN	灰色-	A	10%	
7	土師器台付甕	(13.0)	—	—	ABGJM	橙色	A	10%	南比企産。
8	土錘	長さ4.1	幅0.9	厚さ1.05	—	にぶい橙色	—	一部欠損	重さ3.7g。
9	紡錘車	広面径4.1	狭面径—	厚さ—	—	—	—	半欠損	重さ23.8g。滑石製。



第28図 第22号住居跡・出土遺物

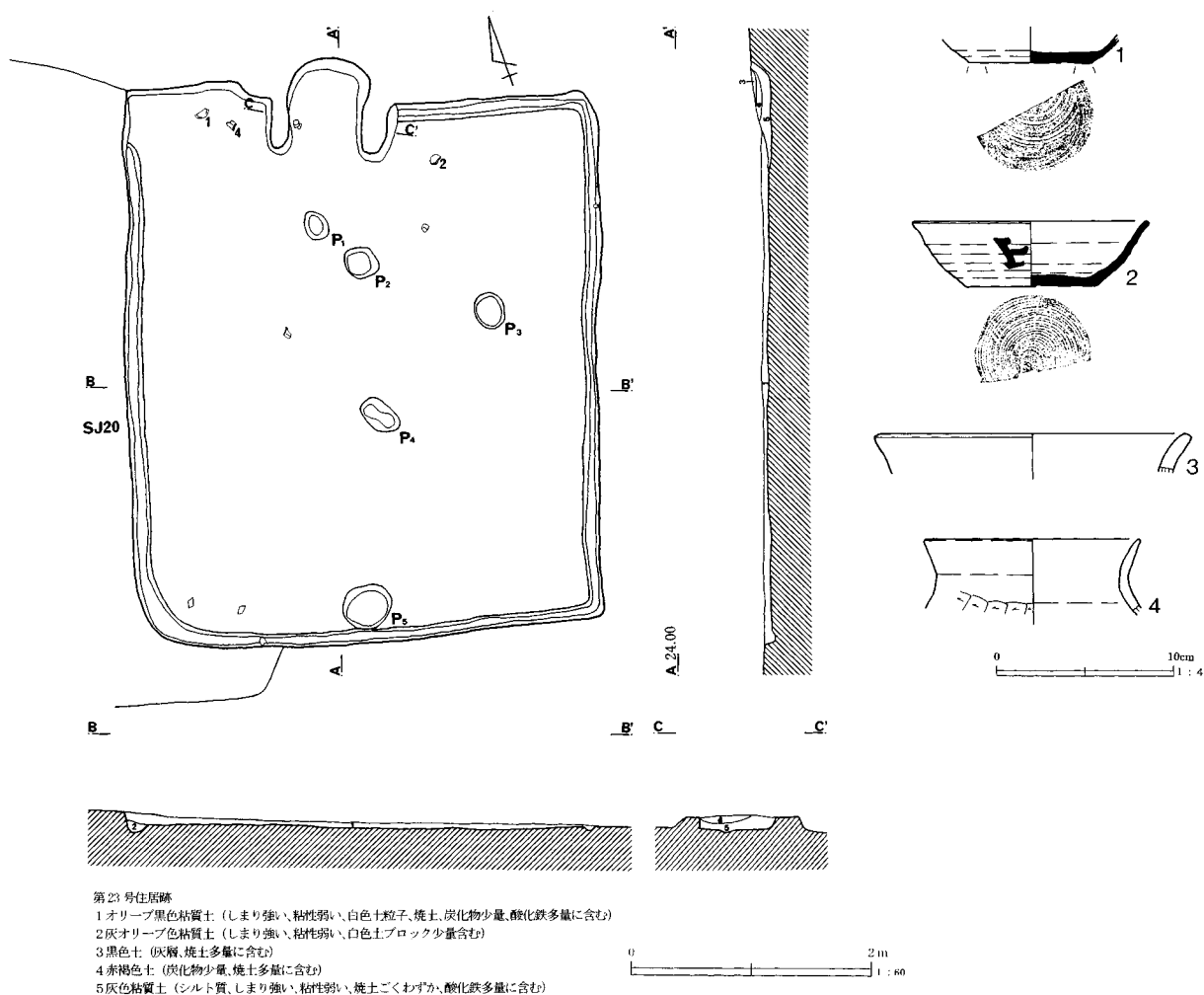
床までの深さは非常に浅く約6 cmで、埋土は自然堆積と考えられる。

ピットはP 1からP 5まで5つ検出できたが、いずれが柱穴にあたるか不明である。それぞれの規模は、P 1が径28×20cm、深さ28.3cm、P 2が径28×27cm、深さ17.5cm、P 3が径32×26cm、深さ25.4 cm、P 4が径38×23cm、深さ8.7cm、P 5が径42×38cm、深さ30.2cmを測った。

カマドは北壁のやや西寄りに設けられていた。燃焼部のみを検出で、煙道は不明である。燃焼部には灰と焼土が顕著に検出できた。袖は、左右両側に検出できた。

壁溝は住居のほぼ全周で検出でき、規模は幅約7 cmから20cmで、深さは約5 cmから10cmを測った。

出土遺物は、カマド及びカマド付近を中心に出土したが、出土量は比較的少なかった。土師器坏・甕・台付甕、須恵器坏などが検出できた。また、須恵器坏には体部外面に「山」の墨書があるものが見られた。



第29図 第23号住居跡・出土遺物

第23表 第23号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	須恵器坏	—	—	(7.0)	ABFN	灰色	A	25%	南比企産。
2	須恵器坏	(13.2)	(7.4)	3.6	ABFH	灰色	A	45%	体部外面墨書「山」。南比企産。
3	土師器甕	(17.2)	—	—	EGM	にぶい赤褐色	B	10%以下	
4	土師器台付甕	(12.2)	—	—	ABCHJM	橙色	B	10%以下	

第24号住居跡（第30・31図、第24表）

22・23-194・195グリッドに位置する。住居の北及び西が調査区域外となっている。

平面形は、軸長が測れるものではなかったが、東西に長い長方形であると推定される。また、主軸は長軸方向で、N-119°-Wを指すと推定される。

床までの深さは非常に浅く約8cmで、埋土は自然堆積と考えられる。

ピットはP 1からP 6まで6つ検出されたが、その内柱穴にあたりと考えられるピットはP 2とP 4である。その規模は、P 2が径30×25cm、深さ25cm、P 4が径28×27cm、深さ25cmを測る。その他のピットの規模は、P 3が直径27cm、深さ30.9cm、P 5が径35×27cm、深さ13.9cm、P 6が径46×40cm、深さ26.4cmを測る。

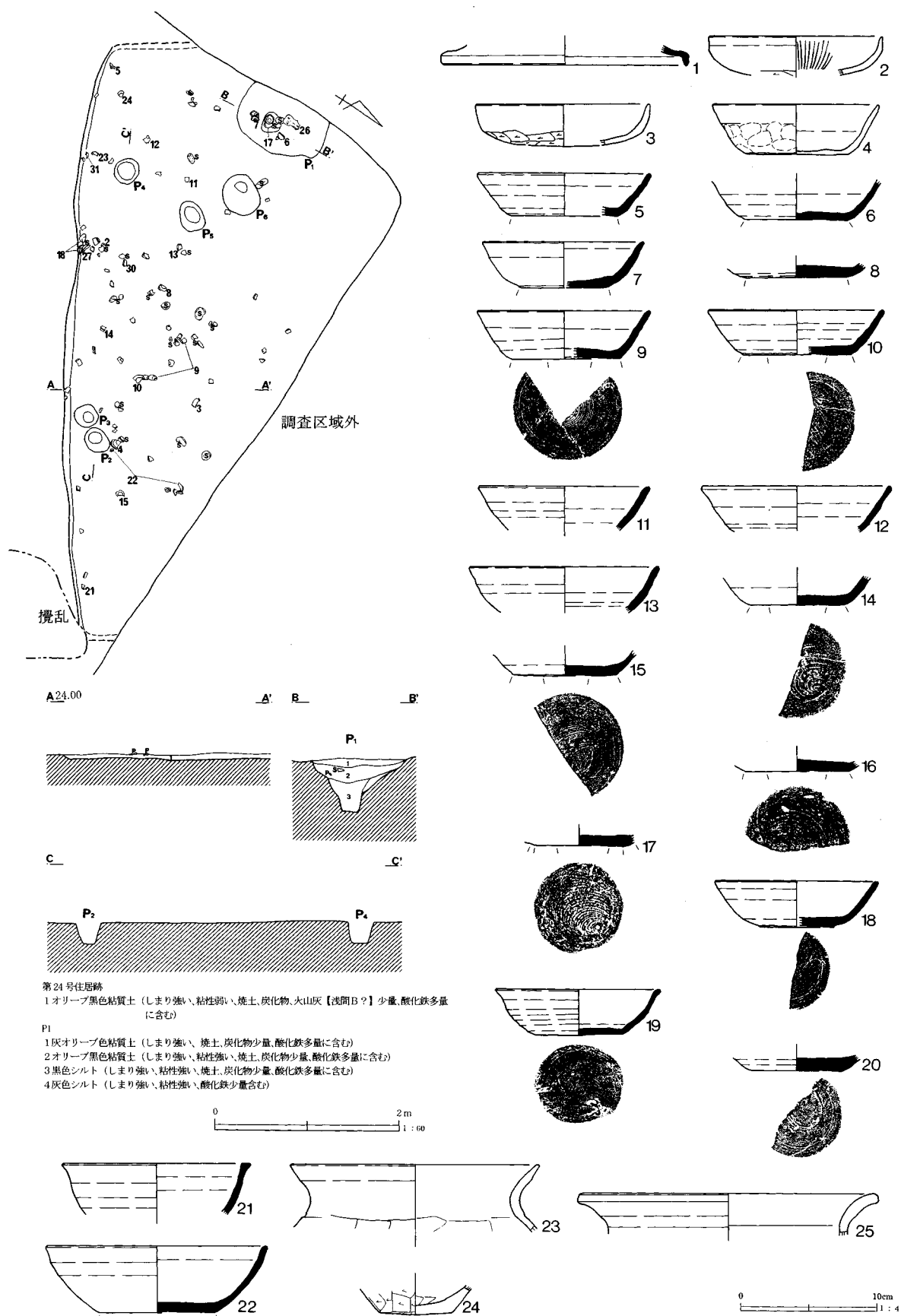
カマドの位置は不明であるが、住居西寄りのP 1（規模長軸104cm、深さ60cm）が燃焼部の可能性が考えられるので、西壁に設けられていた可能性がある。

壁溝は検出できなかった。

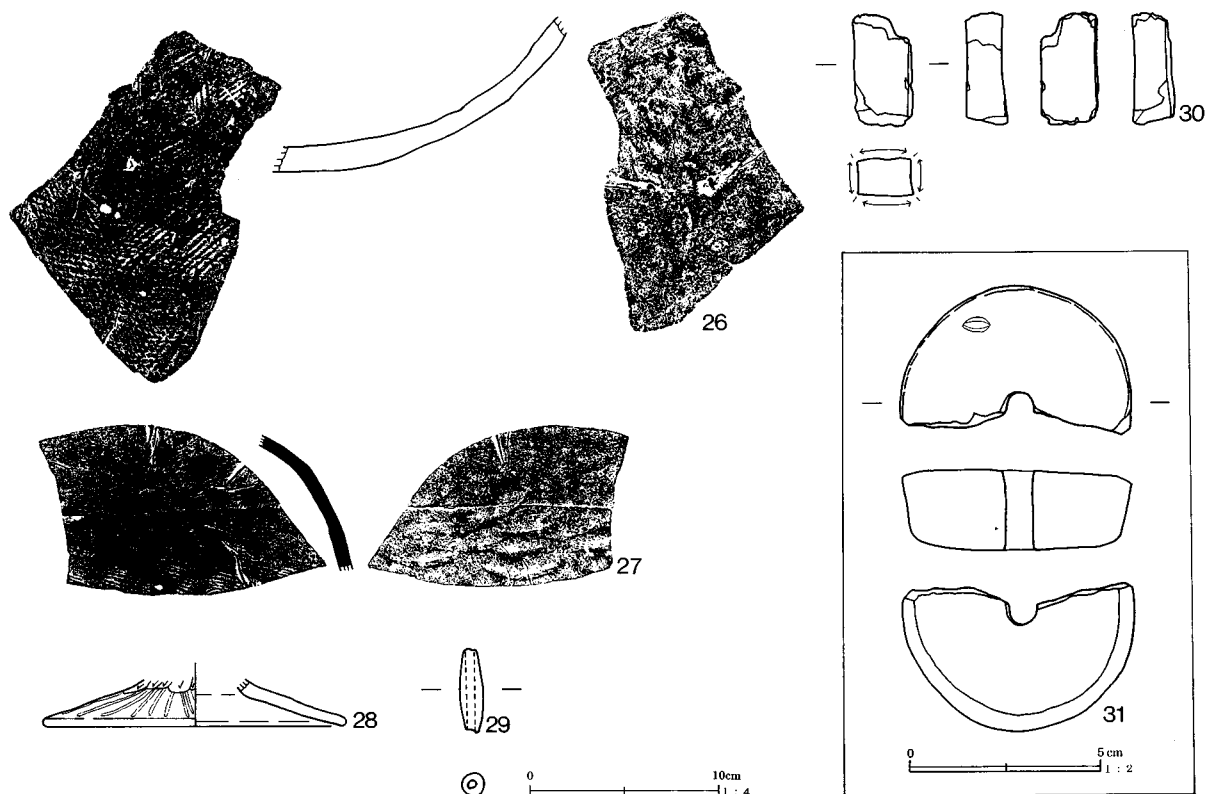
出土遺物は多く、住居のほぼ全体に分布して検出された。土師器坏・甕、須恵器蓋・坏・椀・甕のほか、土鍾、土製紡錘車、砥石などが検出できた。須恵器の坏が顕著に見られ特徴的であったほか、土製紡錘車の広端面には、米の籾痕が認められた。また、当該期以外の遺物として土師器高坏の脚裾部の出土があった。

第24表 第24号住居跡出土遺物観察表

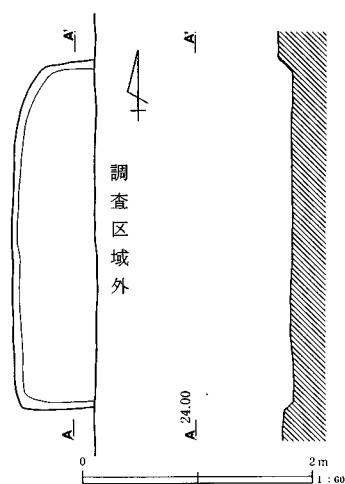
番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	色 調	焼成	残存率	備 考
1	須恵器蓋	(17.9)	—	—	AF	灰色	A	10%以下	南比企産。
2	土師器坏	(12.7)	—	—	AEJKM	にぶい橙色	B	10%以下	内面放射状暗文。
3	土師器坏	(12.1)	3.1	—	ABEJLM	橙色	C	30%	
4	土師器坏	(12.1)	3.6	7.6	AHJKN	にぶい赤褐色	A	50%	
5	須恵器坏	(12.7)	3.1	(7.7)	ABEFH	灰白色	A	10%	
6	須恵器坏	—	—	(7.6)	ABFI	灰色	A	25%	南比企産。
7	須恵器坏	(11.7)	3.3	(6.5)	ABFN	灰色	A	40%	南比企産。
8	須恵器坏	—	—	(7.4)	AFN	灰色	A	25%	南比企産。
9	須恵器坏	12.7	3.5	7.9	ABFH	灰白色	A	70%	南比企産。
10	須恵器坏	(13.0)	3.3	(8.0)	AFN	灰色	A	30%	南比企産。
11	須恵器坏	(12.4)	—	—	ABFHN	灰白色	A	10%	南比企産。
12	須恵器坏	(13.8)	—	—	AFGN	灰色	A	15%	南比企産。
13	須恵器坏	(13.2)	—	—	ABFHN	灰白色	A	15%	南比企産。
14	須恵器坏	—	—	(6.9)	ABFN	灰色	A	25%	南比企産。
15	須恵器坏	—	—	(7.6)	AFN	灰色	A	25%	南比企産。
16	須恵器坏	—	—	(7.6)	ABFHN	灰色	C	15%	南比企産。
17	須恵器坏	—	—	6.5	ABHL	灰色	B	30%	未野産。
18	須恵器坏	(11.8)	3.5	(5.4)	AFN	灰色	A	40%	南比企産。
19	須恵器坏	12.2	3.4	6.1	ABFHN	灰白色	B	95%	南比企産。
20	須恵器坏	—	—	(6.5)	ABHL	灰色	B	20%	未野産。
21	須恵器椀	(18.6)	—	—	AFN	灰色	A	10%以下	南比企産。
22	須恵器椀	(16.2)	4.9	(8.4)	ABFN	灰白色	A	40%	南比企産。
23	土師器甕	(18.2)	—	—	ACHJ	橙色	C	10%以下	
24	土師器甕	—	—	(5.3)	AEHKMN	橙色	B	10%以下	
25	土師器甕	(21.3)	—	—	AGHM	黒褐色	B	10%以下	
26	須恵器甕	—	—	—	ABCGHKLN	にぶい黄橙色	C	底部	外面平行叩き目。内面あて具痕。
27	須恵器甕	—	—	—	ABHN	灰白色	A	胴部	外面平行叩き目。内面あて具痕。外面自然釉。
28	土師器高坏	—	—	(15.6)	AEHJK	橙色	B	10%以下	混入遺物。
29	土鍾	長さ4.5	幅1.2	厚さ1.2	—	にぶい赤褐色	—	ほぼ完存	重さ6.6g。
30	砥石	長さ5.5	幅2.9	厚さ2.2	—	—	—	上・下欠損	重さ60.1g。砥面4面使用。砂岩製。
31	紡錘車	広面径6.1	狭面径5.9	厚さ2.1	—	にぶい赤褐色	—	半欠損	重さ57.2g。外面に米の籾痕。土製。



第30図 第24号住居跡・出土遺物（1）



第31図 第24号住居跡出土遺物 (2)



第32図 第25号住居跡

第25号住居跡 (第32図)

17-195グリッドに位置する。住居の大部分が調査区域外となっている。

平面形は、軸長が測れる一方軸方向で長さ3.07mを測る正方形ないしは長方形のプランであると推測される。主軸は不明である。

床までの深さは浅く約13cmである。

カマド、壁溝、柱穴などは検出できなかった。カマドの位置については、最も可能性があるのは北壁に設けられていた可能性で、第21・22号住居跡と同時期の可能性を考えたい。

出土遺物は、全く検出できなかった。

第26号住居跡 (第33図、第25表)

20・21-167グリッドを中心に位置する。第21・22号溝跡、第17・18号土坑と重複関係にあり、本遺構が第22号溝跡及び第17号土坑を切り、第21号溝跡及び第18号土坑に切られている。古い順に並べると、第22号溝跡、第17号土坑、本遺構、第18号土坑、第21号溝跡という順になる。

平面形は、長軸約3.57m、短軸3.0mの変形した長方形のプランで、面積は10.7㎡を測る。主軸方向はおよそN-72°-Eを指す。

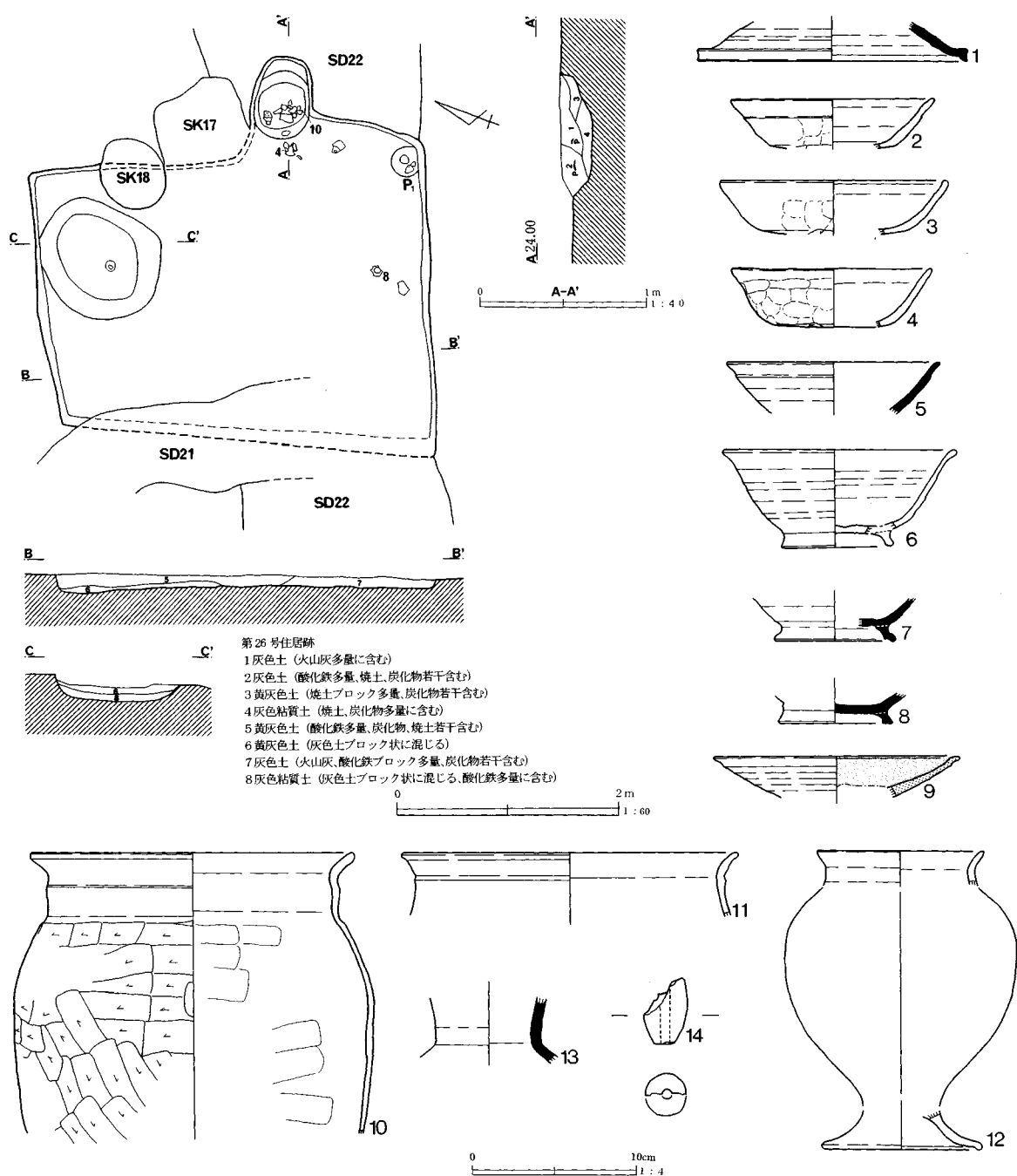
床までの深さは約10cmで、埋土は自然堆積と考えられる。

カマドは東壁の南寄りに設けられていた。ほぼ燃焼部のみの検出で煙道は不明である。燃焼部内では大量に遺物が出土した。

柱穴、壁溝は検出できなかった。

また、住居内には土坑とピットが検出された。住居内土坑は、住居北壁付近に検出され、規模は径114×100cm、深さ14cmを測った。また、ピットP1は、直径26cm、深さ11.6cmを測った。

出土遺物は、カマドを中心に検出され、土師器坏・甕・台付甕、須恵器蓋・坏・碗・長頸壺、灰釉陶器皿のほか、土錘が検出できた。



第33図 第26号住居跡・出土遺物

第25表 第26号住居跡出土遺物観察表

番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	色 調	焼成	残存率	備 考
1	須恵器蓋	(16.4)	—	—	AHN	灰色	A	10%以下	未野産？ 未野産。 未野産。 未野産。 東濃産？ 外面自然釉。 重さ12.6g。
2	土師器坏	(12.1)	—	(5.6)	DN	橙色	B	10%以下	
3	土師器坏	(13.7)	—	(5.8)	AE	橙色	C	10%以下	
4	土師器坏	(12.3)	(3.6)	(6.3)	ABDMN	にぶい黄橙色	B	70%	
5	須恵器坏	(13.0)	—	—	ABEHN	にぶい橙色	C	10%	
6	須恵器碗	(13.9)	5.9	(6.2)	ABDHLN	にぶい黄橙色	C	65%	
7	須恵器碗	—	—	(7.2)	ABHN	灰色	A	10%	
8	須恵器碗	—	—	(6.8)	ABEIJN	灰色	B	25%	
9	灰釉陶器皿	(14.7)	—	—	ABN	灰白色	A	30%	
10	土師器甕	(19.5)	—	—	ABEHJM	橙色	A	35%	
11	土師器甕	(20.4)	—	—	ABGJKM	橙色	A	10%以下	
12	土師器台付甕	(10.0)	—	(9.4)	ABEIMN	明赤褐色	A	15%	
13	須恵器長頸壺	—	—	—	ABN	灰色	A	10%以下	
14	土錘	長さ3.9	幅2.7	厚さ(2.5)	—	赤褐色	—	半欠損以上	

第27号住居跡（第34図、第26表）

20-165グリッドに位置する。第14号土坑と重複関係にあり、本遺構が切られている。また、住居の西側の一部が試掘調査時のトレンチにより攪乱を受けている。

平面形は、長軸約3.46m、短軸2.54mの長方形のプランで、面積は8.79㎡を測る。主軸方向はおおよそN-66°-Eを指す。

床までの深さは約18cmで、埋土は自然堆積と考えられる。

ピットが4つ検出できたが、柱穴にあたりと考えられるものはP1及びP4である。それぞれの規模は、P1が径52×45cm、深さ16cm、P4が径27×20cm、深さ12cmを測る。その他のピットの規模は、P2が径35×26cm、深さ9.2cm、P3が径20×22cm、深さ15.5cmを測った。

カマドは東壁の南寄りに設けられていた。ほぼ燃焼部のみの検出で、煙道は不明である。袖は、検出できなかった。

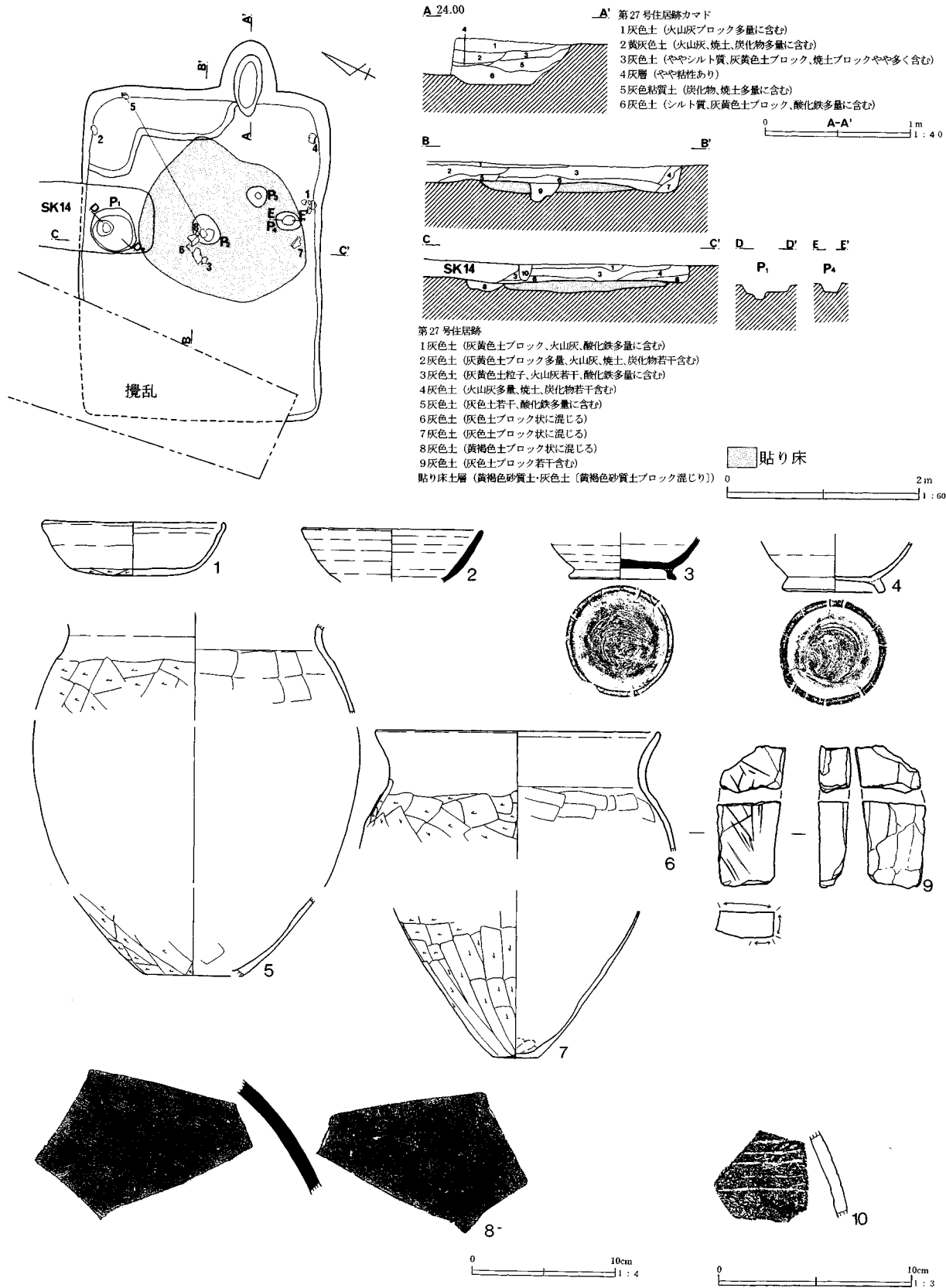
壁溝は、検出できなかった。

また、住居中央の床面では、長径1.8m、短径1.5mの楕円形状の貼り床が確認できた。埋土は2層に分かれ、黄褐色砂質土ブロック混じりの灰色土の上層に黄褐色砂質土がのせられていた。

出土遺物は、住居の中央部付近を中心に出土し、出土量は比較的少なかった。土師器坏・甕、須恵器坏・碗・甕などのほか、砥石が検出できた。また、弥生土器破片の混入が見られた。

第26表 第27号住居跡出土遺物観察表

番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	色 調	焼成	残存率	備 考
1	土師器坏	(12.6)	3.8	(9.0)	AE	にぶい橙色	C	40%	南比企産。 未野産。 外面黒色処理。 外面平行叩き目、自然釉。 重さ107.6g。砥面3面残存。一つの砥面に刃物傷。砂岩製。 平行沈線文内にL R 縄文施文。混入遺物。
2	須恵器坏	(12.6)	—	—	AFGN	灰色	A	25%	
3	須恵器碗	—	—	7.2	ABGHLN	灰色	A	40%	
4	須恵器碗	—	—	6.3	ABEGJLN	にぶい黄橙色	C	40%	
5	土師器甕	—	—	(7.0)	ABEGJKN	にぶい赤褐色	A	15%	
6	土師器甕	(20.1)	—	—	ABGJKN	橙色	A	15%	
7	土師器甕	—	—	3.2	ABEJK	橙色	C	20%	
8	須恵器甕	—	—	—	AFGIN	灰色	A	胴部	
9	砥石	長さ8.4	幅4.3	厚さ2.2	—	—	—	欠損	
10	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	胴部	



第34図 第27号住居跡・出土遺物

第28号住居跡（第20図）

20・21-164グリッドに位置する。第14号住居跡、第12号土坑、第12号掘立柱建物跡、第7号井戸跡と重複関係にあり、本遺構が第14号住居跡、第12号土坑、第12号掘立柱建物跡を切り、第7号井戸跡に切られている。古い順に並べると第14号住居跡、第12号土坑、本遺構、第7号井戸跡の順になる。そして、第12号掘立柱建物跡については本遺構以前の遺構ではあるが、その他の遺構との新旧関係は明らかにできなかった。また、住居の中央部は南北に試掘調査時のトレンチにより攪乱を受けている。

平面形は、軸長を正確に測れるものではなかったが、長軸2.8m、短軸2.4mの東西に長い長方形であると推定される。主軸は不明である。

床までの深さは約12cmで、埋土は自然堆積と考えられる。

カマド、柱穴、壁溝は検出できなかったが、カマドについては、他のほぼ同時期の住居跡の例から推測すると東壁にあった可能性がある。

ピットはP 1のみ検出され、その規模は、径54×50cm、深さ36cmを測る。

出土遺物は、ほとんど検出できなかった。土師器坏・甕、須恵器坏の小破片が検出されたが図示可能な遺物ではなかった。

2 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、総数にして18棟検出した。第1区と第2区にのみ検出され、第1区が12棟と最も多かった。第1区に6世紀末から7世紀後半と9世紀後半ないしはそれ以降の2時期にピークをもつ建物が存在する傾向が見られた。一方、第2区は、8・9世紀の建物が中心である。

また、主軸をほぼ南北にとる一群と、西に大きく傾く軸をとるものに別れた。

第1号掘立柱建物跡（第35・52図、第27表）

20-168グリッドを中心に位置する。一部がトレンチにより攪乱を受けている。東側が大部分調査区域外となっている。

2柱穴が確認されただけであり、確認された柱穴から推定すると東へ展開する建物ではあるが、東西棟か南北棟かは不明である。したがって、規模及び主軸は不明であるが、2柱穴の柱間は2.0mである。

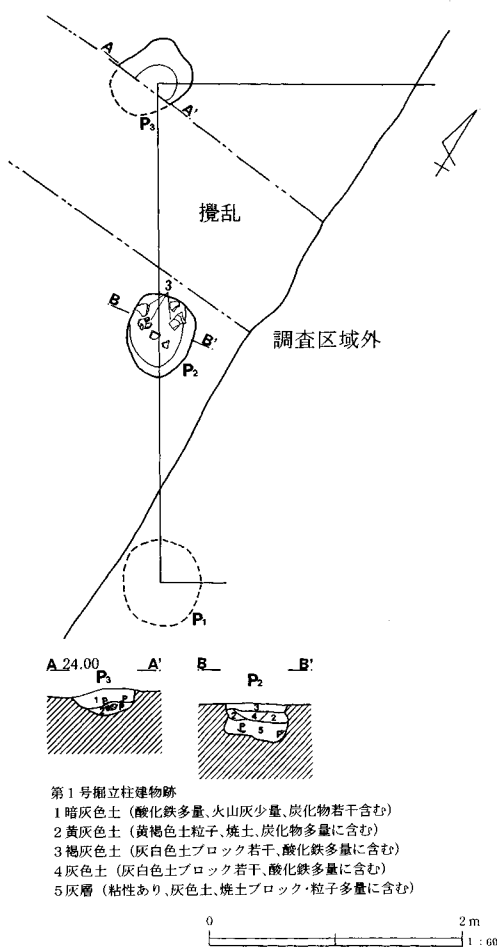
柱穴は基本的に楕円形の掘り方で、全体の規模が測れるP 2で径66×54cm、深さ30cmである。また、P 2、P 3とも柱痕は確認できなかった。

出土遺物は、P 2、P 3とも比較的多く検出でき、特にP 2において顕著であった。土師器坏・甕が出土した。

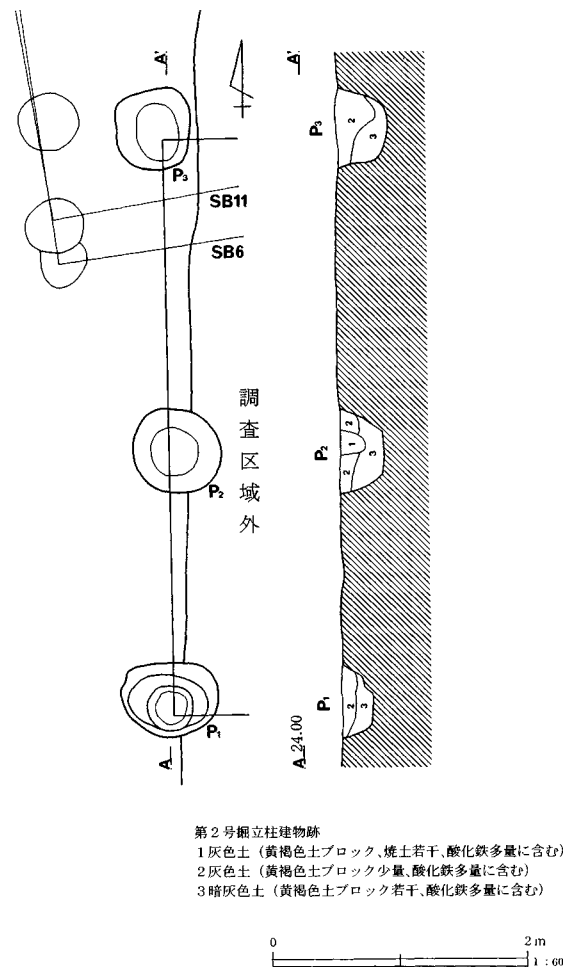
第2号掘立柱建物跡（第36・52図、第27表）

20-159グリッドを中心に位置する。第6・11号掘立柱建物跡と重複関係にあり、古い順に、本遺構、第6号掘立柱建物跡、第11号掘立柱建物跡である。また、建物の大部分である東側が調査区域外となっている。

桁行2間以上の東西棟、もしくは梁行、桁行とも2間の建物であると推定されるが、検出された部分の梁行は4.6mを測る。柱間は梁行2.1m～2.5mで、南側の柱間が北側より狭いものであった。面積は不明である。建物の方向はほぼ真北を示す。



第35図 第1号掘立柱建物跡



第36図 第2号掘立柱建物跡

柱穴は径57cm～77cmで、基本的には円形ないしは楕円形の掘り方であった。深さは、北側のP2、P3が深く35cm～40cmで、南のP1が浅く25cmであった。つまり、P2、P3が身舎の柱穴で、P1が廂の柱穴の可能性も考えられ、その場合は梁行1間南側片廂の建物である可能性がある。P2で柱痕らしき痕跡を確認した。

出土遺物は、土師器坏・甕、須恵器甕などが検出できたが、図示できたのはいずれもP3から出土した土師器坏であった。

第3号掘立柱建物跡（第37図）

23-162グリッドを中心に位置する。第1号方形周溝墓、第5号井戸跡、第18～20号溝跡のほか、3基のピットと重複関係にあり、本遺構が第1号方形周溝墓、第20号溝跡を切っている。主な遺構を古い順に並べると、第1号方形周溝墓、第20号溝跡、本遺構、第19号溝跡、第5号井戸跡の順になるが、第18号溝跡と本遺構及び他遺構との新旧関係は明らかにできなかった。建物の北側が試掘調査時のトレンチにより攪乱を受けている。また、建物の南が調査区域外となっている。

南に展開する2間×2間以上の南北棟側柱建物と推定され、梁行5.2m、桁行は不明である。柱間は梁行2.6m、桁行2.6mであった。面積は不明である。建物の方向はN-7°-Wを指す。

柱穴の掘り方は基本的に円形ないし楕円形を呈すると思われる、径55cm～77cm、深さ30cm～45cmを測る。いずれの柱穴においても柱痕は確認できなかった。

出土遺物は、土師器甕破片などが検出できたが、図示可能な遺物ではなかった。

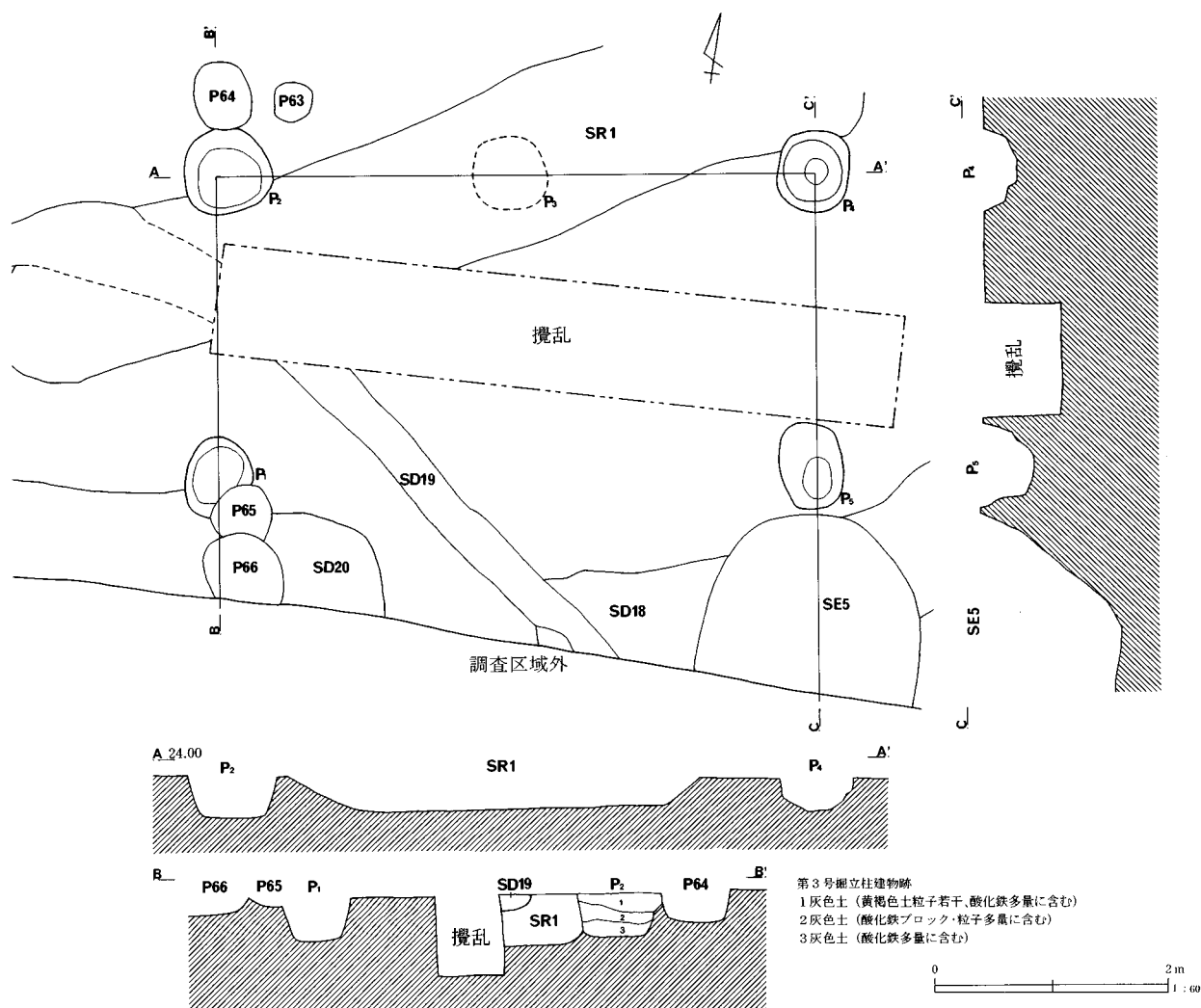
時期は、切り合いの関係から判断すると、7世紀前半と考えられる。

第4号掘立柱建物跡（第38・52図、第27表）

19・20-162・163グリッドに位置する。第1号住居跡、第10・11号土坑、第3号井戸跡、第4・11～13号溝跡のほか、いくつかのピットと重複関係にあり、本遺構が第4・12・13号溝跡などを切り、第11号溝跡、第3号井戸跡などに切られる。主な遺構の新旧関係を古い順に並べると、第1号住居跡、第12号溝跡、第13号溝跡、第4号溝跡、本遺構、第11号溝跡、第3号井戸跡となる。また、南側が調査区域外となっている。

2間×2間以上の南北棟側柱建物と推定され、梁行5.5m、桁行は不明である。柱間は梁行2.6m、桁行2.4m前後であった。面積は不明である。建物の方向はN-21°-Wを指す。

柱穴の掘り方は基本的には隅丸方形であったと考えられるが、調査時点では楕円形を呈するものもあった。大きなもので長径128cm×短径65cm（推定）×深さ40cm、小さなもので長径95cm×短径77cm×深さ25cmを測る。埋土は、浅黄色土粒子・酸化鉄を多く含む灰色土であった。いずれの柱穴においても



第37図 第3号掘立柱建物跡

痕は確認できなかったが、P 5において柱が据えられていた痕跡が確認でき、その痕跡から柱材の太さを推定すると、径20cm～30cmほどのものと考えられる。

出土遺物は、土師器坏・甕、須恵器坏・甕などが検出できた。

第5号掘立柱建物跡（第39・52図、第27表）

22-154グリッドを中心に位置する。第1号土坑、第1～4号ピットと重複関係にあり、新旧関係は本遺構が最も古い。建物の北及び東側が調査区域外となっている。

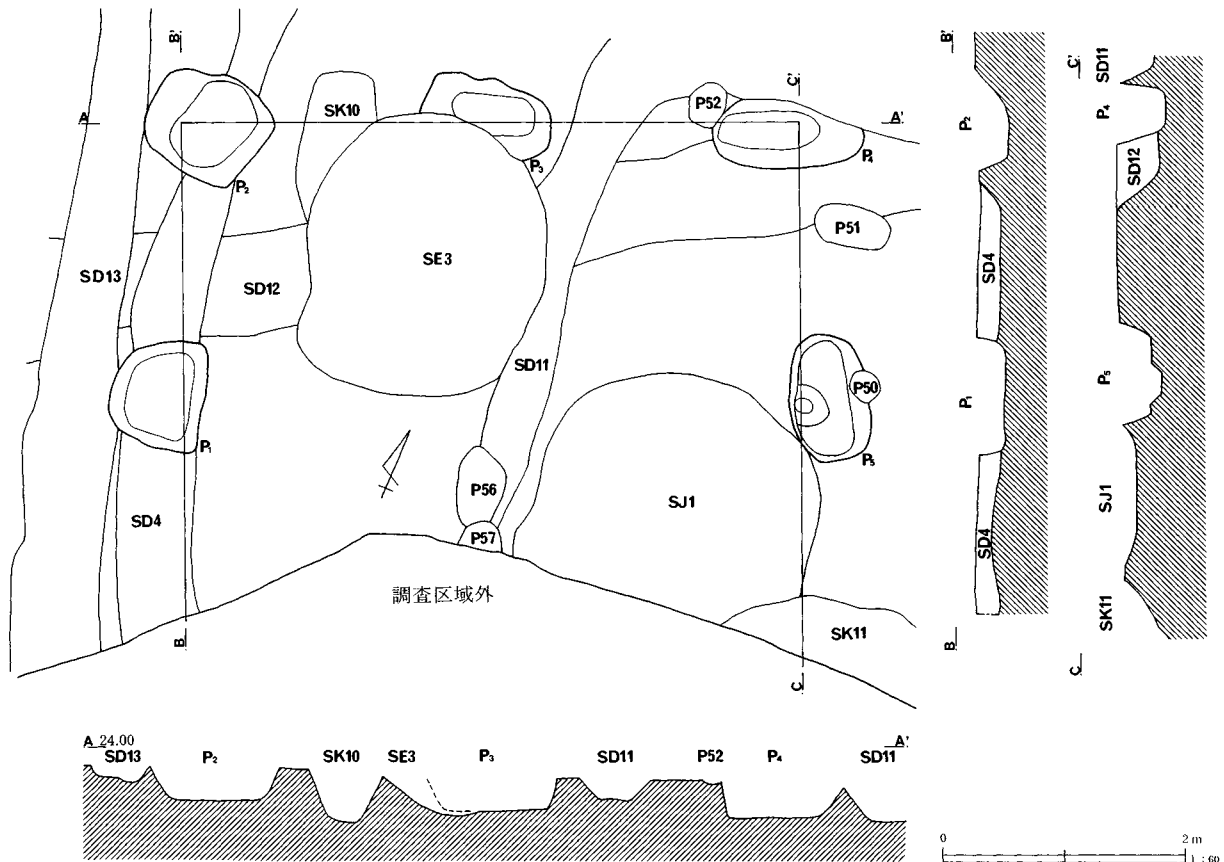
2柱穴が確認されただけであり、確認された柱穴から推定すると北と東へ展開する建物ではあるが、東西棟か南北棟かは不明である。したがって、規模及び主軸は不明であるが、2柱穴の柱間は2.5m前後である。

柱穴は基本的に楕円形の掘り方で、径80×60cm、深さ20cm～30cm前後の規模である。また、いずれの柱穴からも柱痕は確認できなかった。

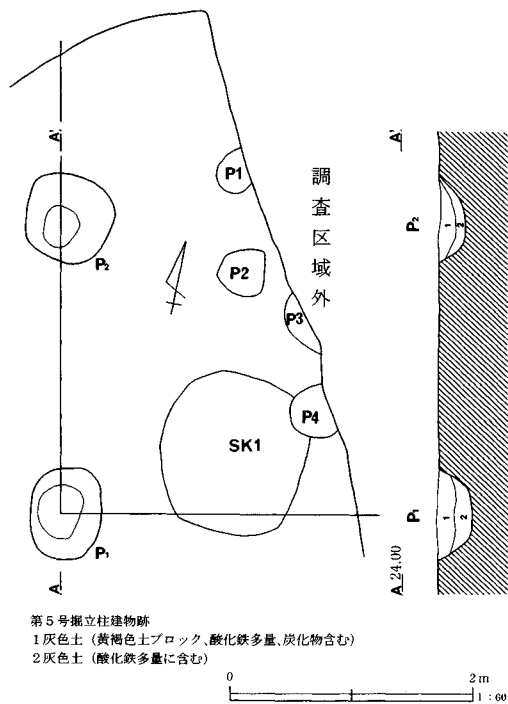
出土遺物は、土師器坏・甕、須恵器甕が検出できたが、図示できたのはいずれもP 2から出土した土師器坏2点であった。

第6号掘立柱建物跡（第40図）

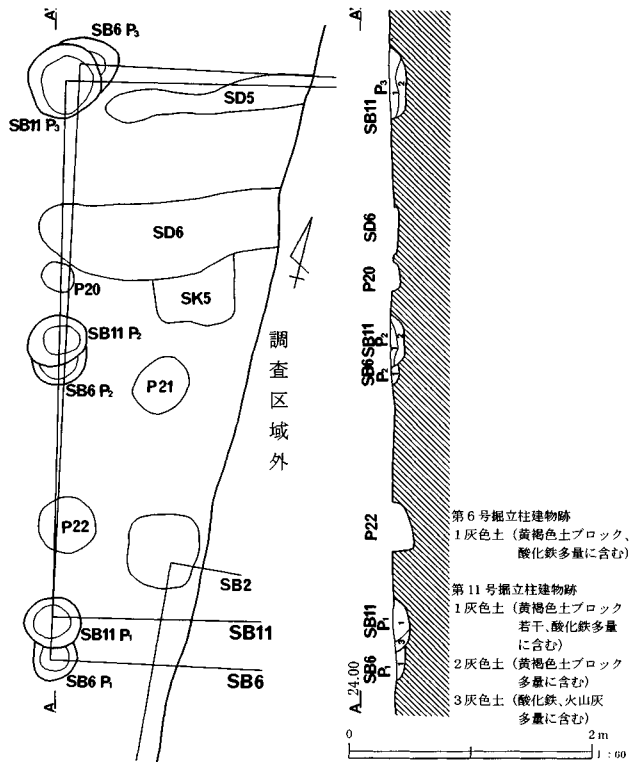
20-158・159グリッドを中心に位置する。第2・11号掘立柱建物跡、第5・6号溝跡、第5号土坑などと重複関係にあり、主な遺構の新旧関係は、古い順に第2号掘立柱建物跡、本遺構、第5号土坑、第6号溝跡、第11号掘立柱建物跡となる。第11号掘立柱建物跡とは、直接切り合いの関係にある。東側の大部分が調査区域外となっている。



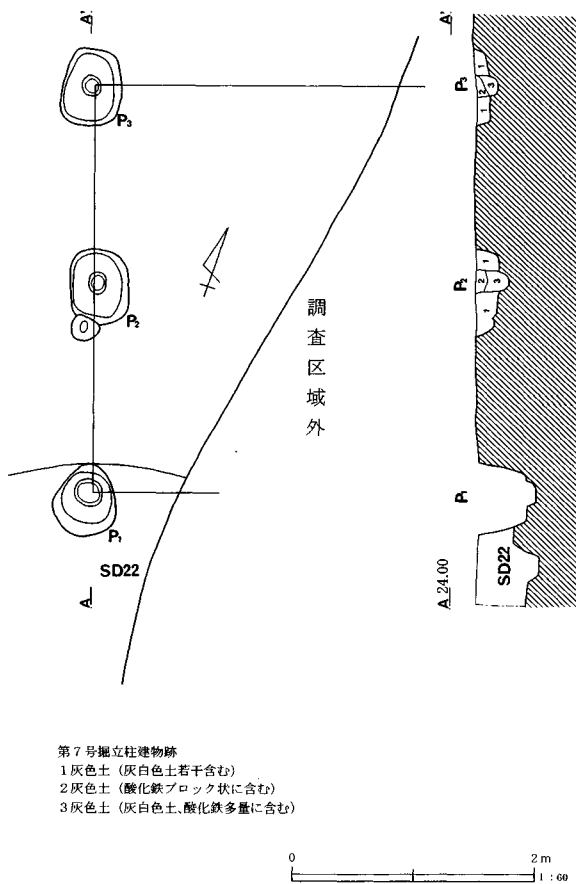
第38図 第4号掘立柱建物跡



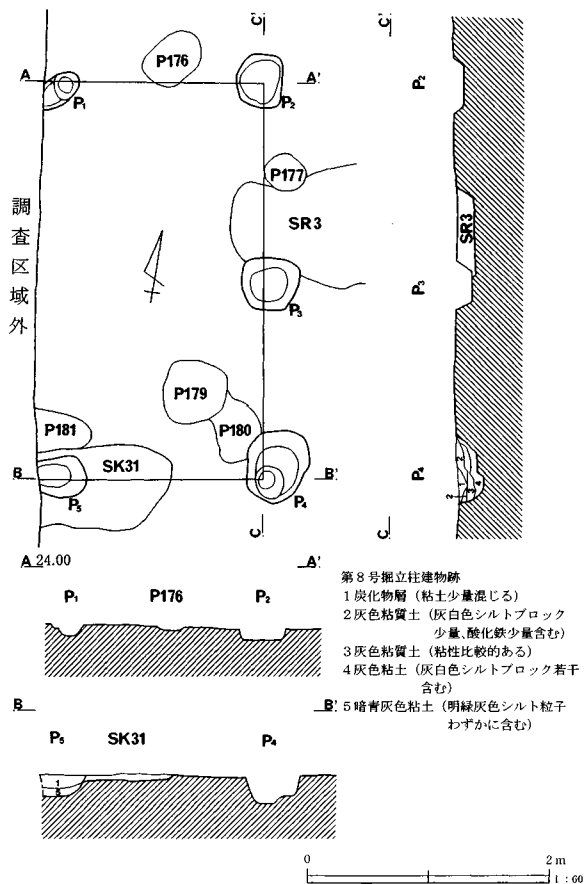
第39図 第5号掘立柱建物跡



第40図 第6・11号掘立柱建物跡



第41図 第7号掘立柱建物跡



第42図 第8号掘立柱建物跡

桁行2間以上の東西棟、もしくは梁行、桁行とも2間の建物であると推定されるが、検出された部分の梁行5.0mを測る。柱間は梁行2.5m前後である。面積は不明である。建物の方向はN-9°-Wを指す。

柱穴の掘り方は基本的には円形の掘り方で、切り合っているため規模を把握するのは困難であるが、大きなもので直径50cm前後、小さなもので直径40cm前後のいずれも深さ約8cmを測るものであった。柱痕はいずれの柱穴からも確認できなかった。

出土遺物は、土師器坏・甕などの破片が検出できたが、図示可能な遺物ではなかった。

時期は、7世紀代と考えられる。

第7号掘立柱建物跡（第41図）

20-166・167グリッドを中心に位置する。第22号溝跡と重複関係にあり、本遺構が切っている。東側の大部分が調査区域外となっている。

梁行1間×桁行2間の南北棟側柱建物と推定され、梁行不明、桁行3.4mを測る。柱間は、桁行1.65mと1.75mであった。面積は不明である。建物の方向はN-24°-Wを指す。

柱穴の掘り方は基本的には方形であったと考えられるが、調査時点では楕円形気味になっているものであった。大きなもので長径60cm×短径56cm×深さ50cm、小さなもので長径65cm×短径51cm×深さ30cmを測る。柱痕は検出された全ての柱穴で確認されたが、柱材は朽ちて存在していなかった。その痕跡から柱材を判断すると、それぞれの柱材の径は、P1が16cm~20cm、P2が17cm前後、P3が17cm前後であり、おおよそ平均17cm前後の柱材が使われていたと想定できる。

出土遺物は、土師器坏・甕、須恵器蓋・坏などの破片が検出できたが、図示可能な遺物ではなかった。

時期は、8世紀代と考えられる。

第8号掘立柱建物跡（第42・52図、第27表）

39-179グリッドを中心に位置する。第3号方形周溝墓、第31号土坑のほかいくつかのピットと重複関係にあり、第3号方形周溝墓、第31号土坑を本遺構が切っている。西側が調査区域外となっている。

2間×2間ないし2間×3間以上の東西棟側柱建物と推定され、梁行3.35mを測り、桁行は不明である。柱間は梁行1.65m~1.7m、桁行も同じく1.65m~1.7mであった。面積は不明である。建物の方向はN-3°-Wを指す。

柱穴の掘り方は基本的には方形であったと考えられるが、調査時点では楕円形を呈するものが多かった。大きなもので長径62cm×短径52cm×深さ25cm、小さなもので長径40cm×短径24cm×深さ10cmを測る。柱痕はP1、P4にのみ痕跡が確認されたが、柱材は残存していなかった。その痕跡からそれぞれの柱材の径を判断すると、P1が15cm前後、P4が15cm~20cmであったと想定できる。

出土遺物は、土師器甕破片、須恵器坏などが検出できた。

第9号掘立柱建物跡（第43図）

38-177グリッドに位置する。第49号溝跡と重複関係にあり、本遺構が切っている。また、建物の大部分が東側の調査区域外となっている。

1柱穴が確認されたのみであり、詳細は不明であるが東へ展開する建物と推定できる。東西棟か南北棟かは不明である。したがって、規模及び主軸は不明である。

柱穴は基本的に楕円形の掘り方で、その規模は径58×50cm、深さ40cmである。また、本報告の掘立柱建物跡中で唯一柱痕の柱材が確認できた。その柱材の径は、約20cmを測った。

出土遺物は、検出できなかった。

時期は、切り合いの関係から8世紀以降としか判断できなかった。

第10号掘立柱建物跡（第44図）

38・39-176・177グリッドを中心に位置する。第27・28号土坑、第22号井戸跡、第48・49号溝跡と重複関係にあるが、新旧関係は明らかにできなかった。また、建物の一部が西側の調査区域外となっている。

梁行2間、桁行2間以上の南北棟側柱建物、もしくは梁行、桁行とも2間の建物であると推定されるが詳細は不明である。検出された部分の梁行5.1mを測る。柱間は梁行2.4m前後～2.7m前後で、東側の柱間が西側より狭いものであった。面積は不明である。建物の方向はN-37°-Eを示すと推定される。

柱穴は、基本的には楕円形の掘り方で、その規模は、大きなもので長径60cm（推定）×短径45cm×深さ42cm、小さなもので長径50cm×短径42cm×深さ18cmを測る。深さについては、遺構確認面が東に傾斜していたためP3が浅いものとなったが、同じレベルで判断すると42cmとなり、P1とほぼ同じものとなる。柱痕については、P1、P2、P3の全てに痕跡が確認されたが、柱材は残存していなかった。その痕跡からそれぞれの柱材の径を判断すると、P1が16cm前後～20cm前後、P2が13cm前後、P3が20cm前後であったと想定できる。

出土遺物は、検出できなかった。

時期は、切り合いの関係から8世紀以降としか判断できなかった。

第11号掘立柱建物跡（第40・52図、第27表）

20-158・159グリッドを中心に位置する。第2・6号掘立柱建物跡、第5・6号溝跡、第5号土坑などと重複関係にあり、主な遺構の新旧関係は、古い順に第2号掘立柱建物跡、第6号掘立柱建物跡、第5号土坑、第6号溝跡、本遺構となる。第6号掘立柱建物跡とは、直接切り合いの関係にある。東側の大部分が調査区域外となっている。

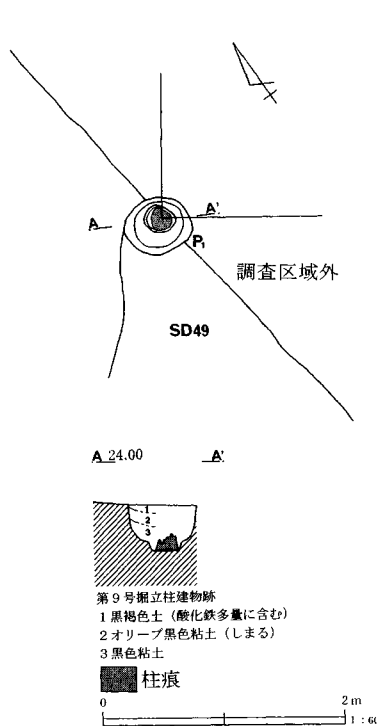
桁行2間以上の東西棟、もしくは梁行、桁行とも2間の建物であると推定されるが、検出された部分の梁行4.5mを測る。柱間は梁行2.2m～2.3mである。面積は不明である。建物の方向はN-10°-Wを指す。

柱穴の掘り方は基本的には円形の掘り方で、大きなもので直径60cm前後、小さなもので直径50cm前後のいずれも深さ約14cmを測るものであった。柱痕はいずれの柱穴からも確認できなかった。

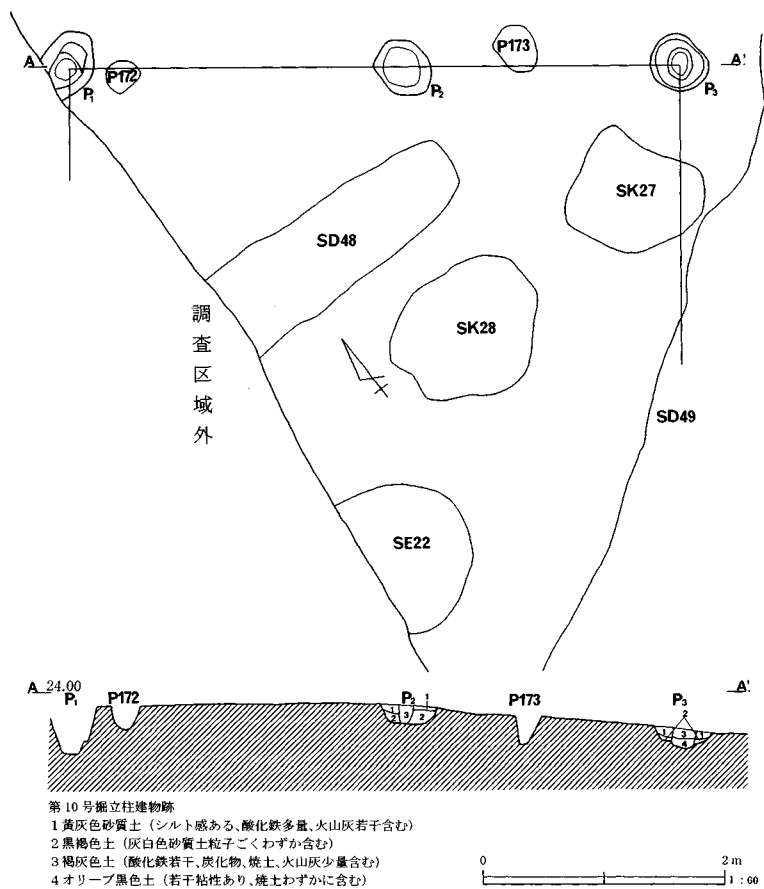
出土遺物は、土師器坏・甕、須恵器坏の破片が検出できた。

第12号掘立柱建物跡（第45図）

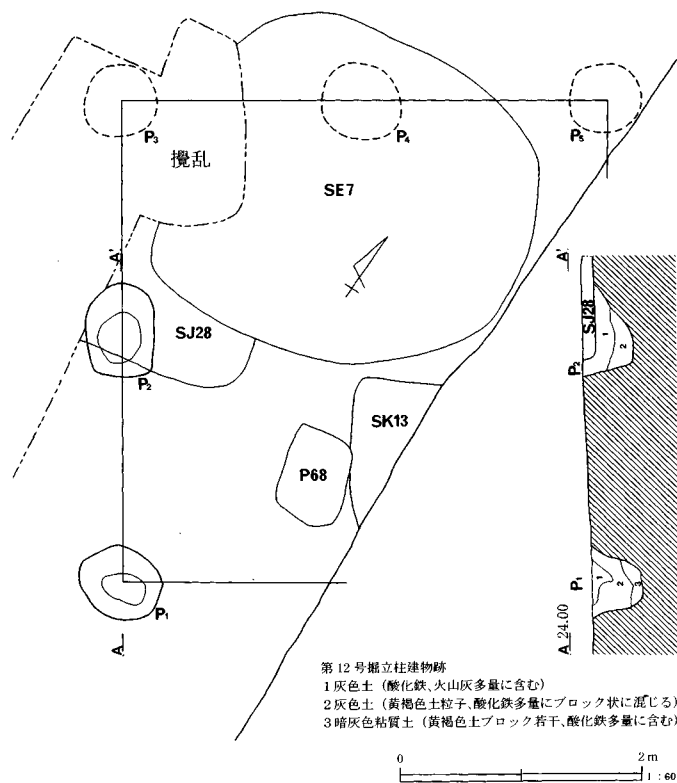
20-164グリッドを中心に位置する。第28号住居跡、第13号土坑、第68号ピット、第7号井戸跡と重複関係にあり、本遺構が第28号住居跡、第7号井戸跡に切られる。主な遺構の新旧関係を古い順に並べると、本遺構、第13号土坑、第28号住居跡、第7号井戸跡となる。建物の一部が試掘調査時のトレンチで攪乱を受けている。また、東側が調査区域外となっている。



第43図 第9号掘立柱建物跡



第44図 第10号掘立柱建物跡



2間×2間の側柱建物と推定され、梁行4.05m、桁行4.05mとなる。柱間は梁行2.0m強、桁行も2.0m強と推定される。面積は、16.40㎡となる。建物の方向はN-35°-Wを指す。

柱穴の掘り方は基本的には隅丸方形であったと思われるが、調査時点では楕円形を呈するものもあった。大きなP 2で長径80cm×短径59cm×深さ42cm、小さなP 1で長径72cm×短径60cm×深さ42cmを測る。いずれの柱穴においても柱痕は確認できなかった。

出土遺物は、土師器の細片が検出されたが、図示可能な遺物ではなかった。

時期は、切り合いの関係から9世紀末以前としか判断できなかった。

第13号掘立柱建物跡（第46図）

21-154・155グリッドを中心に位置する。第2号土坑、第6号ピット、第1号溝跡と重複関係にあり、新旧関係は古い順に、第2号土坑・第1号溝跡、本遺構となる。建物の北及び西側が調査区域外となっている。

2柱穴が確認されただけであり、確認された柱穴から推定すると北と西へ展開する建物ではあるが、東西棟か南北棟かは不明である。また、仮に第3号ピットを柱穴として考えると、梁行1間×桁行3間の南北棟側柱建物の可能性も想定できるが明らかにできなかった。したがって、規模は不明であるが、2柱穴の柱間は2.5m前後である。また、建物の方向は、N-12°-Wを指すものと考えるのが妥当である。

柱穴は基本的に楕円形の掘り方で、P 1が径66×44cm、深さ17cm、P 2が径56×44cm、深さ22cmの規模である。また、いずれの柱穴からも柱痕は確認できなかった。

出土遺物は、土師器甕破片などがわずかに検出できたが、図示可能な遺物ではなかった。

時期は、切り合いの関係から9世紀後半以降としか判断できなかった。

第14号掘立柱建物跡（第47図）

20-154・155グリッドを中心に位置する。第3号土坑、第1号溝跡、いくつかのピットと重複関係にあり、主な遺構の新旧関係は、古い順に第1号溝跡、本遺構となる。東側の大部分が調査区域外となっている。

3柱穴が確認されたが、柱穴から推定すると東へ展開する建物ではあるが、東西棟か南北棟かは不明である。したがって、規模及び主軸は不明であるが、3柱穴の柱間はP 1 P 2間が2.1m、P 2 P 3間が2.2mである。

柱穴は基本的に楕円形の掘り方で、全体の規模が測れるP 1で径46×40cm、深さ18cm、P 2で径54×42cm、深さ12cmである。また、P 1において柱痕と考えられる痕跡を確認したが、柱材は残存していなかった。その痕跡から柱材の径を判断すると、15cm～20cmであったと想定できる。

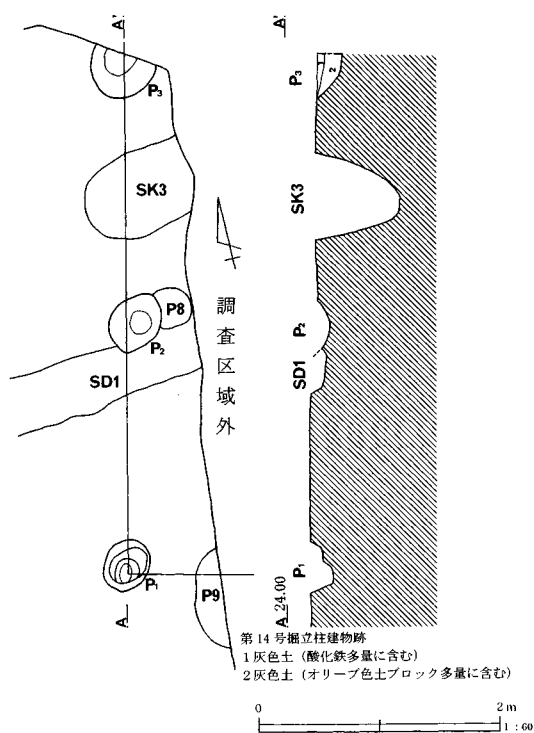
出土遺物は、土師器甕の破片が検出できたが、図示可能な遺物ではなかった。

時期は、切り合いの関係から9世紀後半以降としか判断できなかった。

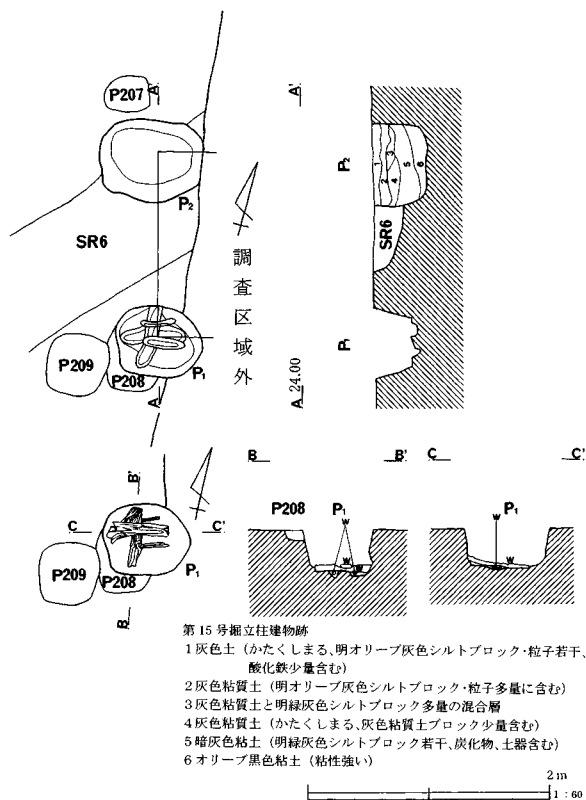
第15号掘立柱建物跡（第48図）

41-179グリッドを中心に位置する。第6号方形周溝墓、第208号ピットと重複関係にあり、本遺構が切っている。東側の大部分が調査区域外となっている。

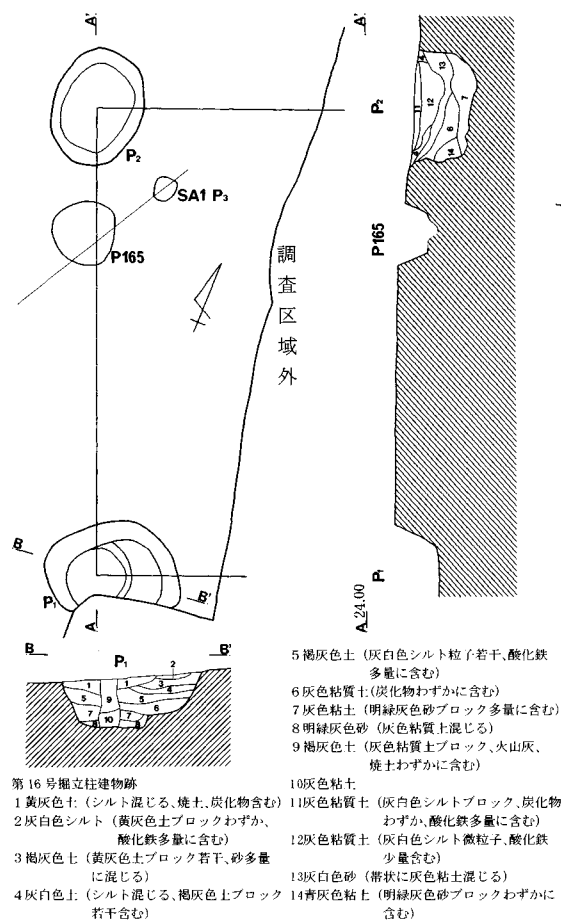
梁行1間×桁行1間ないしは梁行1間×2間以上の東西棟側柱建物と推定され、梁行1.55mを測り、桁行は不明である。面積は不明である。建物の方向はN-11°-Wを指す。



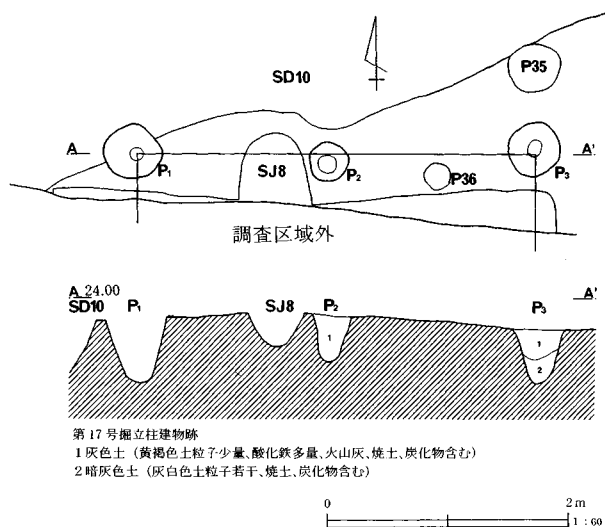
第47図 第14号掘立柱建物跡



第48図 第15号掘立柱建物跡



第49図 第16号掘立柱建物跡



第50図 第17号掘立柱建物跡

柱穴の掘り方は基本的には方形であったと思われるが、調査時点では楕円形気味になっているものであった。P 1 が長径73cm×短径60cm×深さ34cm、P 2 が長径90cm×短径66cm×深さ45cmを測る。柱痕はいずれの柱穴でも確認されなかったが、P 1 において枕木の木材が朽ちず残存していた。その状態は、まず2本の木材を平行に柱穴の底に渡し、その上にその2本と直交するように木材を渡し、さらにその上にまた直交するように木材を渡していた。これらの木材は、状態がやや良好ではなかったが、簡単な加工程度のものを使用し、直交する2番目と3番目の木材はこの2本がかみ合うように互いに切り込みをいれて組んであったようである。普通、枕木を平行において柱材の腕木を支える工法か、枕木を十字において柱材の端部を加工して枕木と組んで支える工法が一般的と思われるが、この掘立柱建物跡の工法は、両方の折衷に近い工法を採っていた。これは、低地という地盤を考えて少しでも柱の沈下を防ぐためではないかと考えられる。検出された状態を見ると、柱穴床面に木材の痕跡が明瞭に残っていたことからかなり沈下していたことが伺われた。

出土遺物は、土師器甕、須恵器坏などの破片が検出できたが、図示可能な遺物ではなかった。

時期は、9世紀代と考えられる。

第16号掘立柱建物跡（第49図）

38-175・176グリッドを中心に位置する。第1号掘立柱列、第165号ピットと重複関係にあるが、新旧関係は明らかにできなかった。東側が調査区域外となっている。

梁行1間×桁行1間ないしは梁行1間×桁行2間以上の東西棟側柱建物と推定され、梁行3.9mを測り、桁行は不明である。面積も不明である。建物の方向はN-16°-Wを指す。

柱穴の掘り方は基本的には方形であったと思われるが、調査時点では楕円形を呈するものであった。大きなP 1 が長径105cm×短径80cm×深さ40cm、小さなP 2 が長径100cm×短径76cm×深さ52cmを測る。柱痕はP 1 にのみ痕跡が確認され、柱材の一部がごくわずかではあるが残存していた。その痕跡から柱材の径を判断すると、15cm前後であったと想定できる。

出土遺物は、土師器甕破片などが検出できたが、図示可能な遺物ではなかった。

時期は、古代とまでしか判断できなかった。

第17号掘立柱建物跡（第50図）

16・17-162グリッドを中心に位置する。第8号住居跡、第10号溝跡と重複関係にあり、本遺構が切っている。新旧関係を古い順に並べると、第10号溝跡、第8号住居跡、本遺構となる。南側の大部分が調査区域外となっている。

梁行1間×桁行1間ないしは梁行1間×桁行2間以上の南北棟側柱建物と推測され、梁行3.35mを測り、桁行は不明である。柱間は、梁行1.6mと1.75mであった。面積は不明である。建物の方向はN-2°-Wでほぼ真北を指す。

柱穴の掘り方は円形であった。大きなもので長径50cm×短径47cm×深さ57cm、小さなもので長径34cm×短径32cm×深さ42cmを測る。いずれの柱穴でも柱痕は確認されなかった。

出土遺物は、土師器甕破片が検出できたが、図示可能な遺物ではなかった。また、弥生土器破片が混入していた。

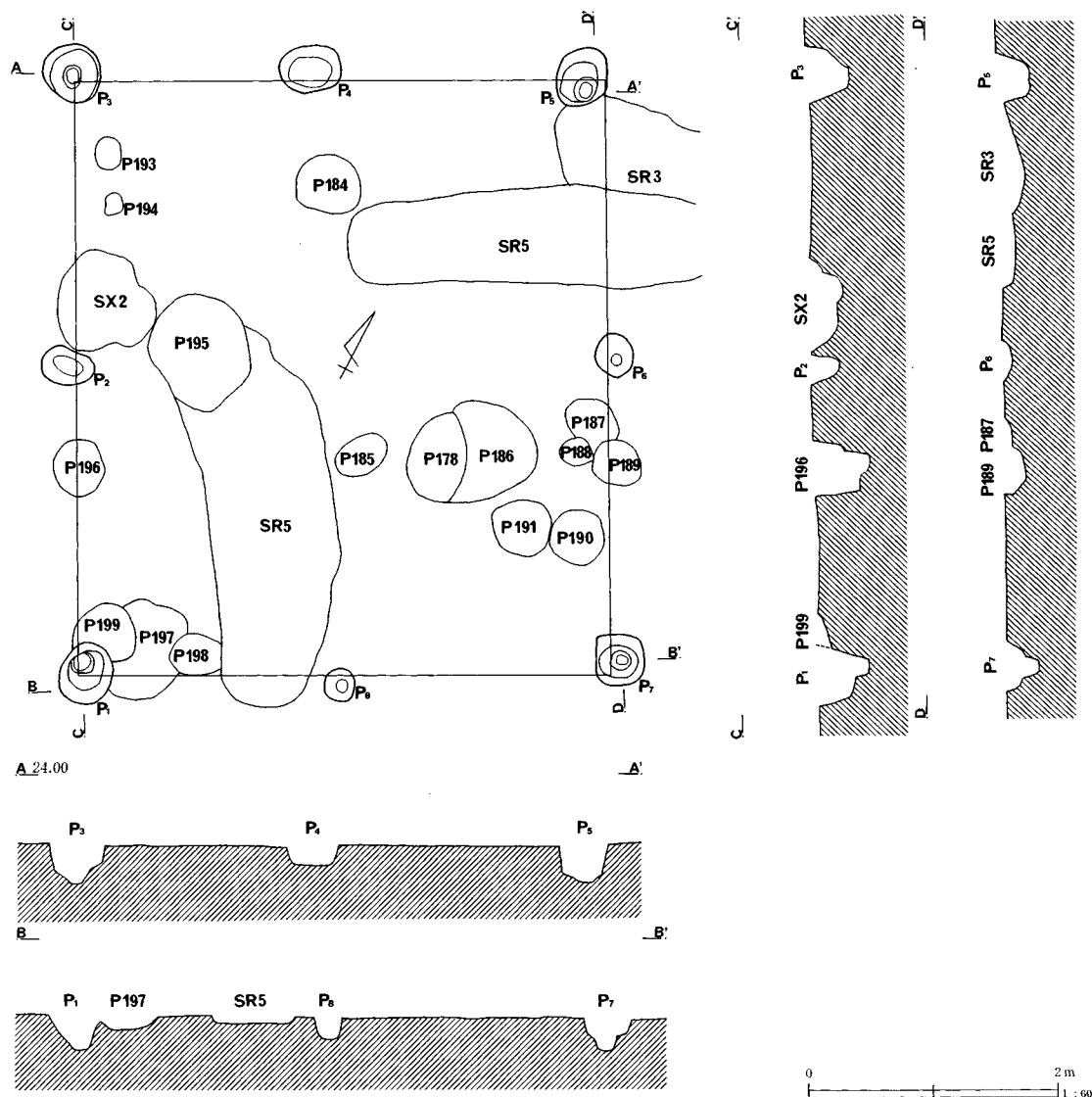
時期は、古代とまでしか判断できなかった。

第18号掘立柱建物跡（第51・52図、第27表）

38・39-180グリッドを中心に位置する。第3・5号方形周溝墓、第2号土器棺墓のほか多数のピットと重複関係にあり、第3・5号方形周溝墓、第2号土器棺墓のほかいくつかのピットを本遺構が切っている。

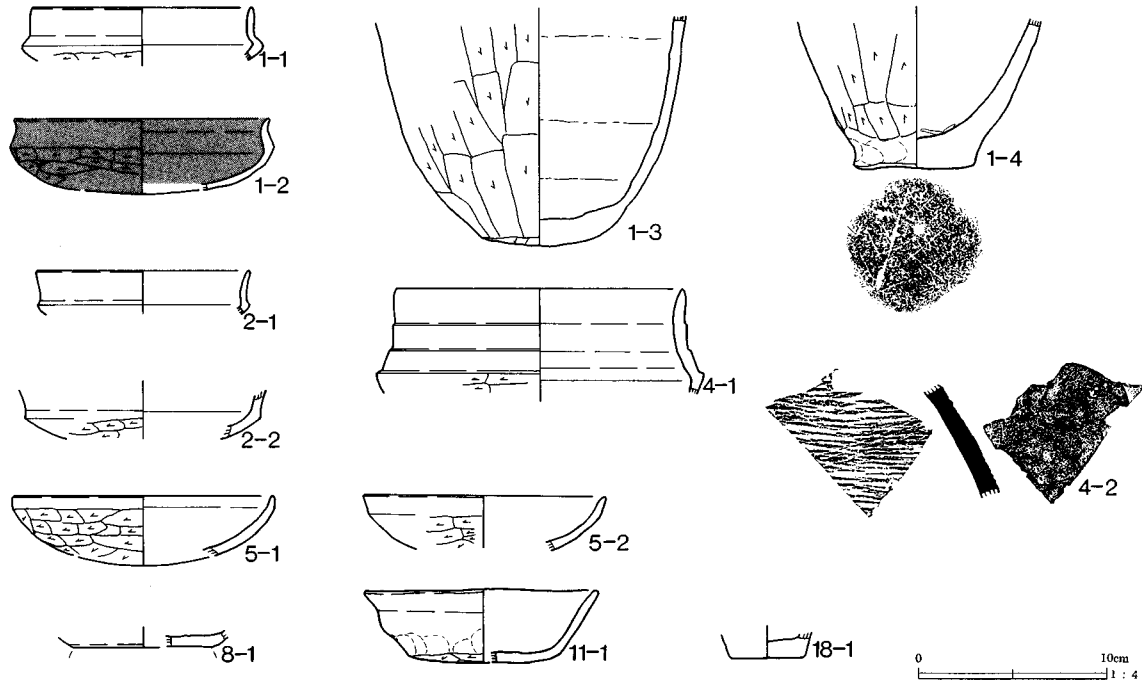
2間×2間の側柱建物であり、梁行4.3m、桁行4.75m、面積20.43㎡を測る。柱間は梁行2.0m～2.2m、桁行2.3mと2.4mであった。建物の方向はN-30°-Wを指す。本報告中唯一建物の全体像が把握できた掘立柱建物跡である。

柱穴の掘り方は基本的には方形であったと思われるが、調査時点では楕円形を呈するものが多かった。大きなもので長径50cm×短径44cm×深さ40cm、小さなもので長径28cm×短径26cm×深さ20cmを測る。柱痕は建物の四隅の柱穴P1、P3、P5、P7で痕跡が確認されたが、柱材は残存していなかった。その痕跡からそれぞれの柱材の径を判断すると、P1が15cm前後、P3が15cm～18cm、P5が16cm～20cm、P7が15cm前後であり、おおよそ15cmの柱材が使われていたと想定できる。



第51図 第18号掘立柱建物跡

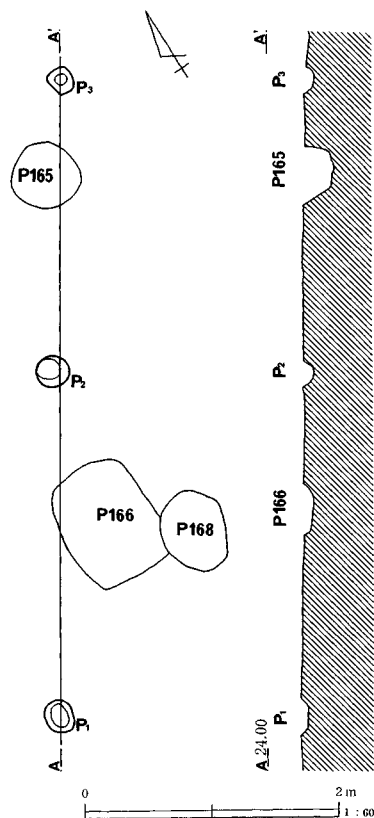
出土遺物はわずかで、土師器甕破片などが検出できたが、図示可能な遺物ではなかった。図示した弥生土器壺はP 2からの出土遺物で、重複関係にある第5号方形周溝墓からの混入遺物であると考えられる。また、P 4からも弥生土器破片の出土があった。



第52図 第1・2・4・5・8・11・18号掘立柱建物跡出土遺物

第27表 第1・2・4・5・8・11・18号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1-1	土師器坏	(11.6)	—	—	ADJKM	橙色	C	10%	P 2 出土。
1-2	土師器坏	(13.5)	—	—	ABEGJKN	にぶい橙色	A	20%	内外面赤彩。P 2 出土。
1-3	土師器甕	—	—	6.2	AEGJMN	明赤褐色	C	35%	P 2 出土。
1-4	土師器甕	—	—	6.1	AJMN	赤褐色	B	15%	木葉痕。
2-1	土師器坏	(11.2)	—	—	AJM	明赤褐色	C	10%以下	P 3 出土。
2-2	土師器坏	—	—	—	BDI	橙色	C	10%	P 3 出土。
4-1	土師器坏	(15.3)	—	—	ABEHJKM	にぶい黄橙色	A	10%	P 2 出土。
4-2	須恵器甕	—	—	—	ABN	灰色	A	胴部	外面平行叩き目。内面ナデ。P 5 出土。
5-1	土師器坏	(13.8)	—	—	AEHJK	橙色	C	25%	内外面器面荒れる。内面剥離激しい。P 2 出土。
5-2	土師器坏	—	—	—	AJM	にぶい黄橙色	B	10%	P 2 出土。
8-1	須恵器坏	—	—	(7.4)	EFHI	灰白色	B	10%	南比企産。P 4 出土。
11-1	土師器坏	12.3	3.8	(5.9)	ABD	浅黄橙色	C	70%	P 1 出土。
18-1	弥生土器壺	—	—	(3.9)	—	にぶい褐色	—	底部	P 2 出土。



第53図 第1号掘立柱列

3 掘立柱列

掘立柱列は、総数にして1列検出した。掘立柱建物跡として把握するには困難なもので柱筋のとおるものを呼称した。

第1号掘立柱列（第53図）

48-175・176グリッドを中心に位置する。第16号掘立柱建物跡と第165・166号ピットと重複関係にあるが、新旧関係は明らかにできなかった。

検出されたピットは3つで一直線上に並び、軸方向はおおよそN-35°-Eを示す。柱穴間の距離は北から2.3m、2.8mを測る。柱穴は隅丸方形ないし楕円形のプランで、最大長径28cm、最小21cmで、深さは浅く6cm~10cmである。いずれの柱穴においても柱痕は確認されなかった。

出土遺物は、検出できなかった。

4 竪穴状遺構

竪穴状遺構は、総数にして6基検出した。調査時において、性格不明の竪穴を便宜的に呼称したものである。第2区に4基、第3区に2基それぞれ検出し、互いに重複関係にあるものが多かった。

第1号竪穴状遺構（第54図）

42-171グリッドを中心に位置する。第2号竪穴状遺構と重複関係にあり、本遺構が切っている。また、一部が攪乱を受けている。

平面形は、長方形を呈し、長軸2.21m、短軸1.55m、深さ16cmを測る。埋土は自然堆積と考えられる。

出土遺物は、土師器甕破片がわずかに検出できたが、図示可能な遺物ではなかった。

第2号竪穴状遺構（第54図）

41-171グリッドを中心に位置する。第1・3号竪穴状遺構と重複関係にあり、本遺構が双方に切られている。また、一部が攪乱を受けている。

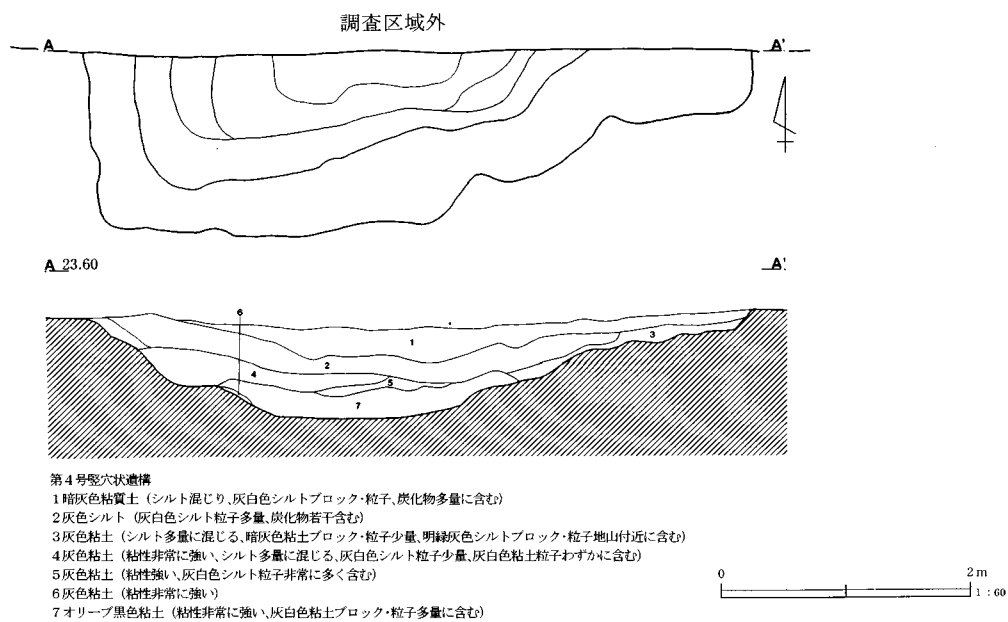
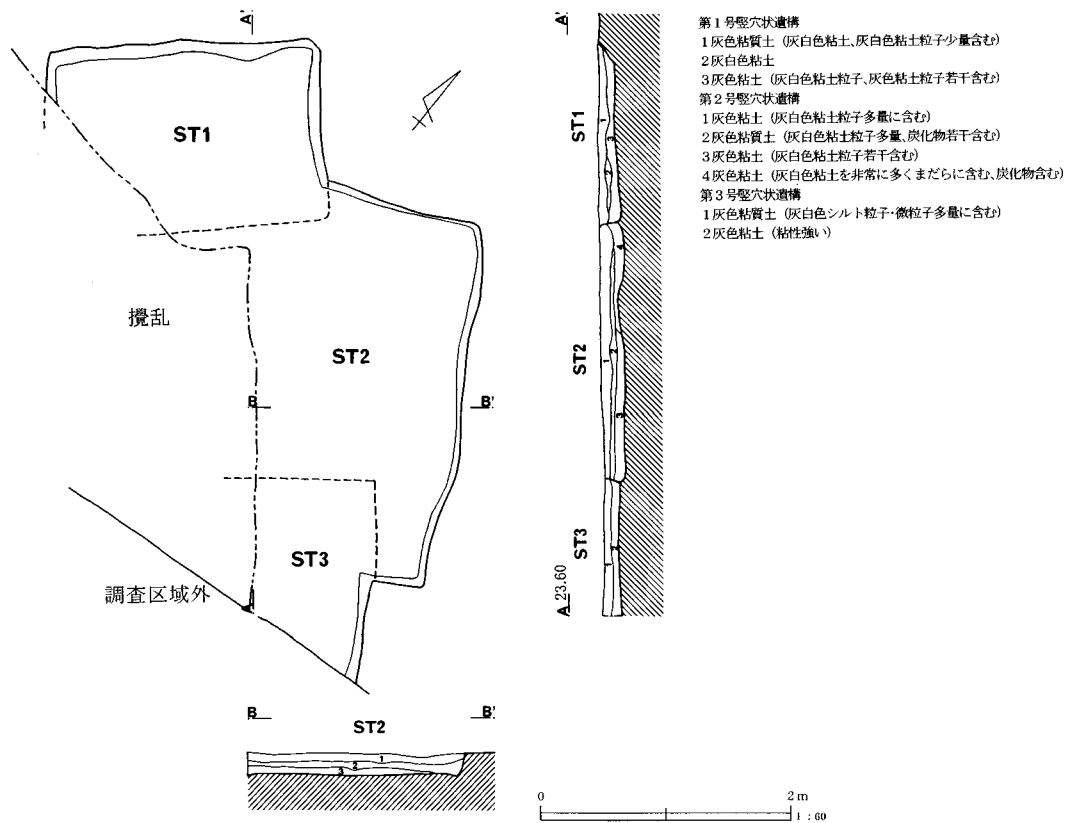
平面形は、方形を呈すると推定され、測定可能な一方軸で3.04m、深さ18cmを測る。

床面は起伏があり、埋土は自然堆積と考えられる。

出土遺物は、検出できなかった。

第3号竪穴状遺構（第54図）

42-172グリッドを中心に位置する。第2号竪穴状遺構と重複関係にあり、本遺構が切っている。また、一部が攪乱を受けている。さらに南側の大部分が調査区域外となっている。



第55図 第4号堅穴状遺構・出土遺物

平面形は、方形を呈すると推定されるが、軸長は測れなかった。深さは12cmを測る。埋土は自然堆積と考えられる。

出土遺物は、土師器甕破片などの土師器片がわずかに検出できたが、図示可能な遺物ではなかった。

第4号竖穴状遺構（第55図、第28表）

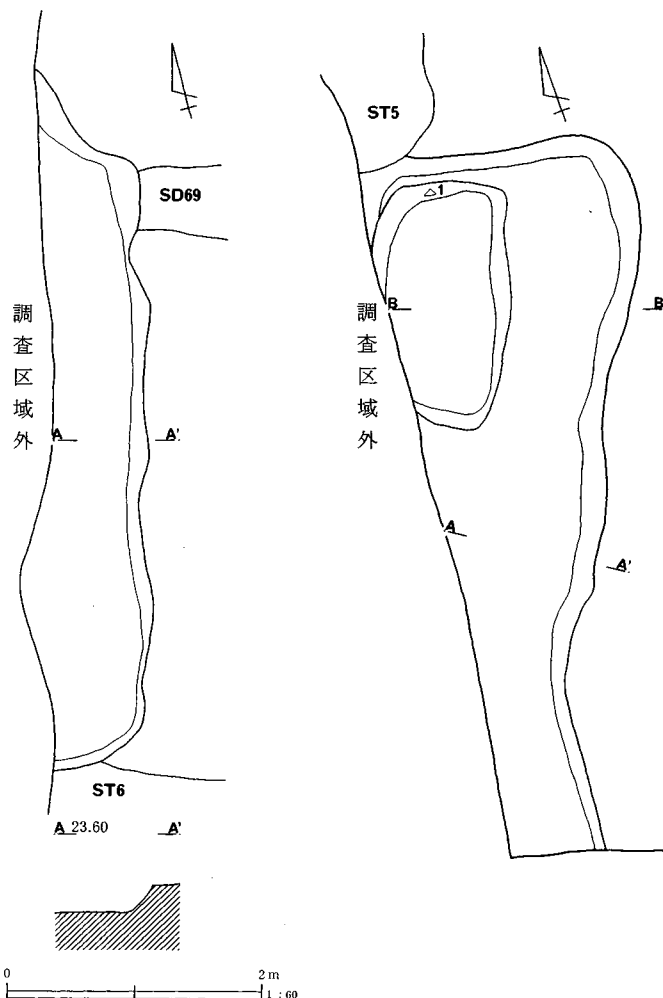
47・46-179グリッドに位置する。北側が調査区域外となっている。

平面形は、やや変形した長方形を呈し、軸長の測れる箇所では5.36mを測る。また、床面は緩い掘鉢状を呈しており、深さは最深箇所では約78cmを測る。床面への傾斜角は、東の方が緩やかであった。埋土は、灰色粘土や灰色シルトが主で自然堆積と考えられる。

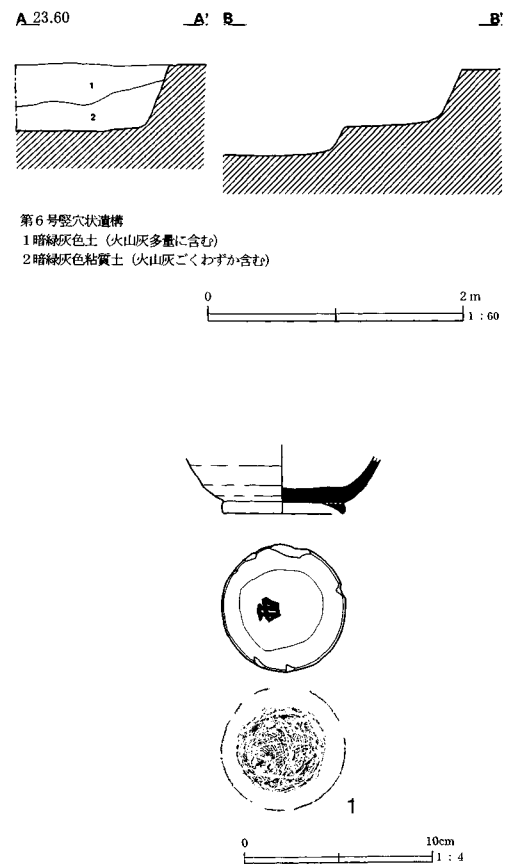
出土遺物は、弥生土器壺破片や土師器甕破片がわずかに検出できた。

第28表 第4号竖穴状遺構出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	頸部	沈線文区画内にLR縄文、刺突文。
2	弥生土器壺	—	—	—	—	黄灰色	—	胴部	沈線文。



第56図 第5号竖穴状遺構



第57図 第6号竖穴状遺構・出土遺物

第29表 第6号竖穴状遺構出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	須恵器碗	—	—	(6.6)	ABFHN	灰色	A	45%	底部外面墨書「西」。南比企産。

第5号竪穴状遺構（第56図）

39-198・199グリッドに位置する。第6号竪穴状遺構、第69号溝跡と重複関係にあり、本遺構が切っている。また、西側は調査区域外となっている。

平面形は、全体を明らかにできなかったため不明である。確認された部分からは方形状を呈すると推定される。深さは22cmを測るが、ほかの規模は不明である。

埋土は、火山灰を含む褐灰色土が主体で、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、検出できなかった。

第6号竪穴状遺構（第57図、第29表）

39-199・200グリッドに位置する。第5号竪穴状遺構と重複関係にあり、本遺構が切られている。また、西及び南側は調査区域外となっている。

平面形は、長方形を呈すると推定されるが、規模は明らかにできなかった。深さは、最深で70cmを測り、床面の一部に長さ約2m、幅約1.1mの長方形に深く掘り窪められている箇所が存在した。

埋土は、火山灰を含む暗緑灰色土で、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、わずかに須恵器碗破片が検出できた。その須恵器碗の底部外面には、「西」の墨書が認められた。

時期は、切り合いの関係から9世紀以降としか判断できなかった。

5 方形周溝墓

方形周溝墓は、総数にして13基検出した。時期は弥生時代中期後半から後期にかけてのものと考えられる。プランは、全て四隅が切れるタイプである。第1区や第2区すなわち第37号溝跡、第52号溝跡、第51号溝跡をつなぐ河川跡と思われる溝跡（現況道路と同じルート）より北の二群に分かれる方形周溝墓群は、比較的小規模のもので主軸が西に振れるもので、この溝跡を挟んで南の一群は、規模の大きな方形周溝墓群で主軸が東に振れるものであった。プランの内一本の周溝だけ検出されるなど不確定な要素がある方形周溝墓も存在し、両端が閉じる他の溝跡にも可能性があり、基数が増える可能性がある。

第1号方形周溝墓（第58図、第30表）

23・24-161・162グリッドを中心に位置する。第3号掘立柱建物跡、第19号溝跡と重複関係にあり、それぞれに切られている。新旧を古い順に並べると、本遺構、第3号掘立柱建物跡、第19号溝跡となる。また、北及び西側は調査区域外となっており、全体のプランは詳細不明である。

平面形は不明であるが、四隅が切れるものと推定できる。主軸方向は、N-30°-Wを示す。調査では南溝のほぼ全体が検出できたに止まった。

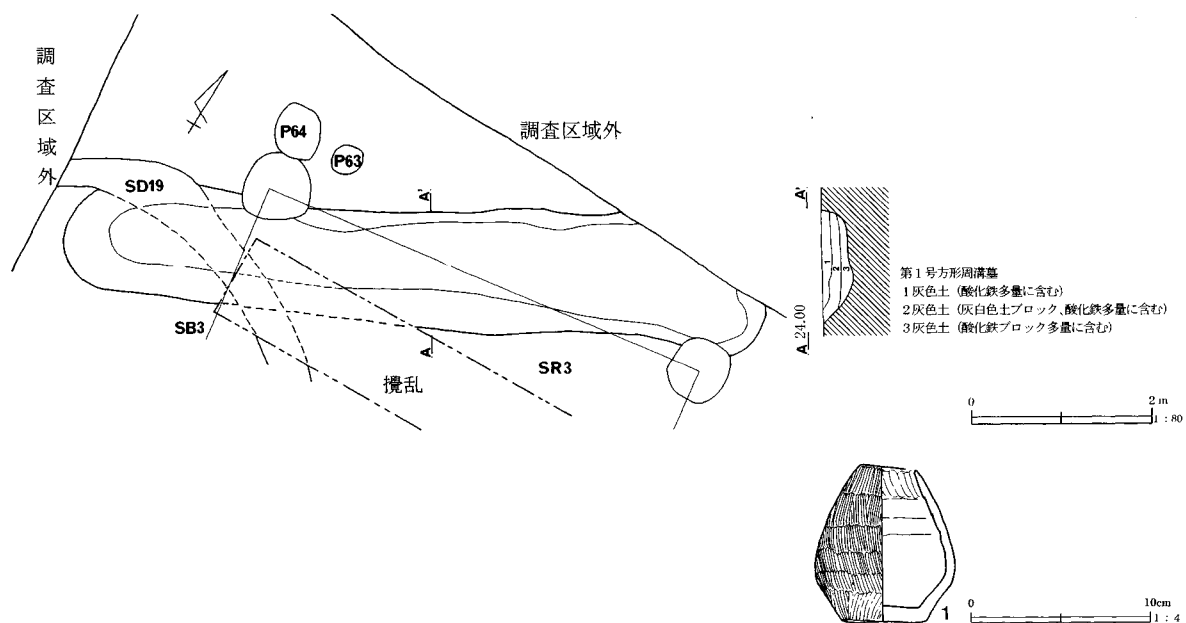
南溝の規模は、長さ7.8m、最大幅1.4m、深さ35cmで溝の底面は西に向かってやや傾斜していた。方台部側は急な立ち上がりであった。埋土は自然堆積と考えられる。

方台部は、削平されていた上に調査区域外となっており、主体部などは明らかにできなかった。

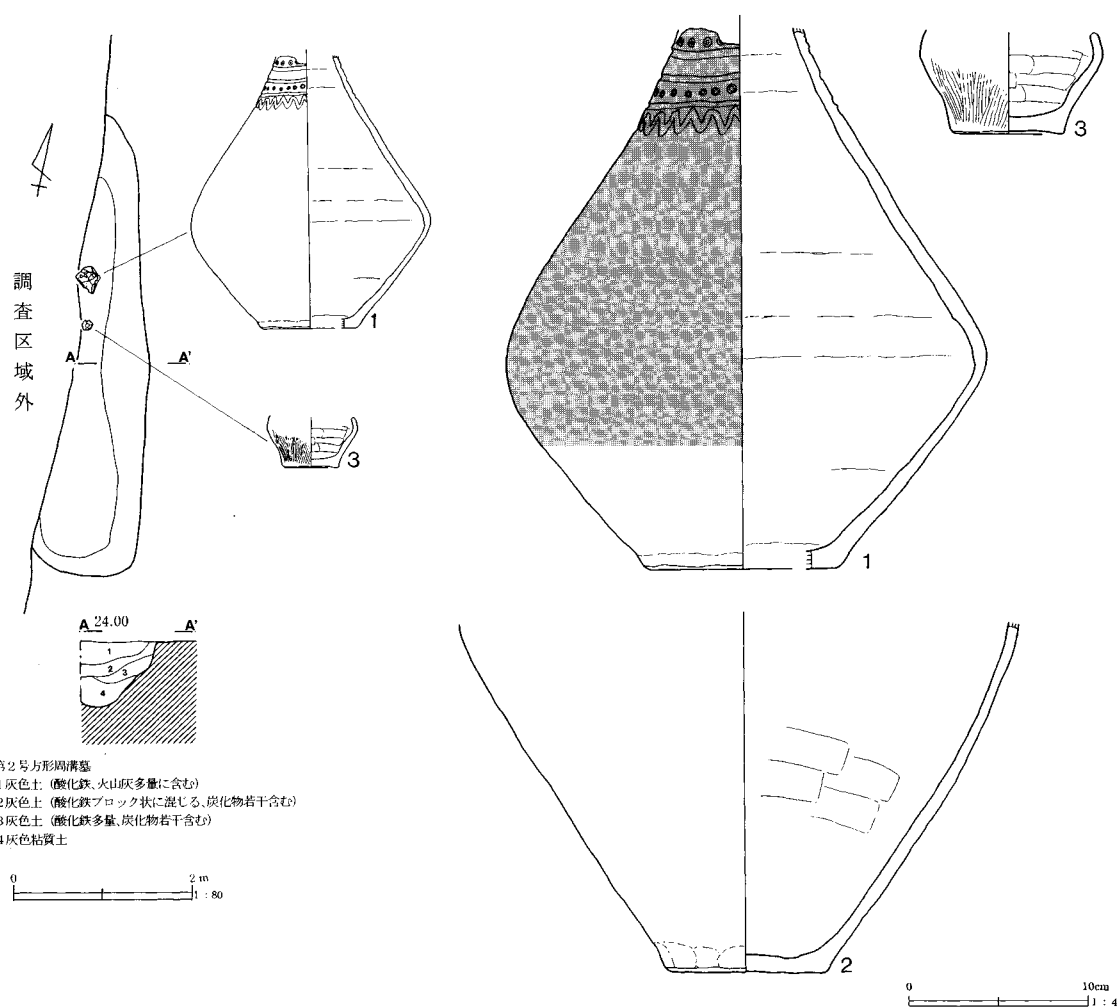
出土遺物は、弥生土器の小型壺などが検出された。

第30表 第1号方形周溝墓出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器壺	3.0	8.7	4.2	ABHJLM	にぶい黄橙色	A	100%	器面若干荒れる。



第58図 第1号方形周溝墓・出土遺物



第59図 第2号方形周溝墓・出土遺物

第31表 第2号方形周溝墓出土遺物観察表

番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	色 調	焼成	残存率	備 考
1	弥生土器壺	—	—	(10.4)	AEJM	浅黄橙色	B	50%	頸部から胴下半部の外面赤彩痕跡。 擬口縁（転用鉢の可能性）。
2	弥生土器壺	—	—	9.0	AEGJMN	にぶい明褐色	B	35%	
3	弥生土器壺	—	—	6.0	ABHJM	にぶい黄褐色	B	35%	

第2号方形周溝墓（第59図、第31表）

21-165・166グリッドを中心に位置する。西側のほとんどが調査区域外となっており、全体のプランは不明である。

平面形は不明であるが、四隅が切れるものと推定できる。主軸方向は、N-7°-Wを示す。調査では東溝の一部のみ検出できたに止まった。

東溝の規模は、推定長5.2m、推定幅1.35m、深さ72cmで溝の底面は中央部が最も深く、北でやや浅いものであった。方台部側の立ち上がりなどは不明である。埋土は自然堆積と考えられる。

方台部は、全て調査区域外となっており不明である。

出土遺物は、主に東溝の北やや中央寄りの埋土中から出土し、弥生土器壺などが比較的良好な状態で検出された。小型壺の底部のみ出土したものは、鉢に転用したものである可能性がある。

第3号方形周溝墓（第60図、第32表）

38・39-178・179グリッドを中心に位置する。第4・5号方形周溝墓、第1号土器棺墓、第8号掘立柱建物跡、第49号溝跡、第29・31号土坑などと重複関係にあり、主な遺構の新旧関係は、古い順に本遺構、第4号方形周溝墓、第5号方形周溝墓、第1号土器棺墓、第49号溝跡、第8号掘立柱建物跡となる。東及び西側の一部が調査区域外となっている。

平面形は、ほぼ正方形を呈すると推定でき四隅が切れるものである。四隅の切れ間はやや間隔が大きい。主軸方向は、N-10°-Wを示す。推定規模で、溝外法で8.0m×7.9m、内法で6.1m×6.1mであると推定される。調査では北溝及び東溝の一部と南溝の全体が検出できたに止まり、西溝は不明である。

全体が把握できる南溝の規模は、長さ4.24m、最大幅1.05m、深さ30cmで溝の底面はほぼフラットであった。東溝は一部調査区域外となり全体は不明であるが、推定長3.4m、推定幅0.85m、深さ28cmで、溝の底面の両端はフラットであるが、中央部が深く2段に窪む。方台部側の立ち上がりは、東溝は急であったが、南溝はやや緩やかな傾斜であった。埋土は自然堆積と考えられる。

方台部は、大部分削平されていたが、方台部の中央部付近に東西に長い楕円形状の主体部と思われる土壌状の掘り込みが検出できた。その規模は、長軸1.94m、短軸1.0m、深さ18cmであった。埋土は、灰色粘質土と礫の混合土の上に炭化物混じりの灰色粘質土が堆積していた。

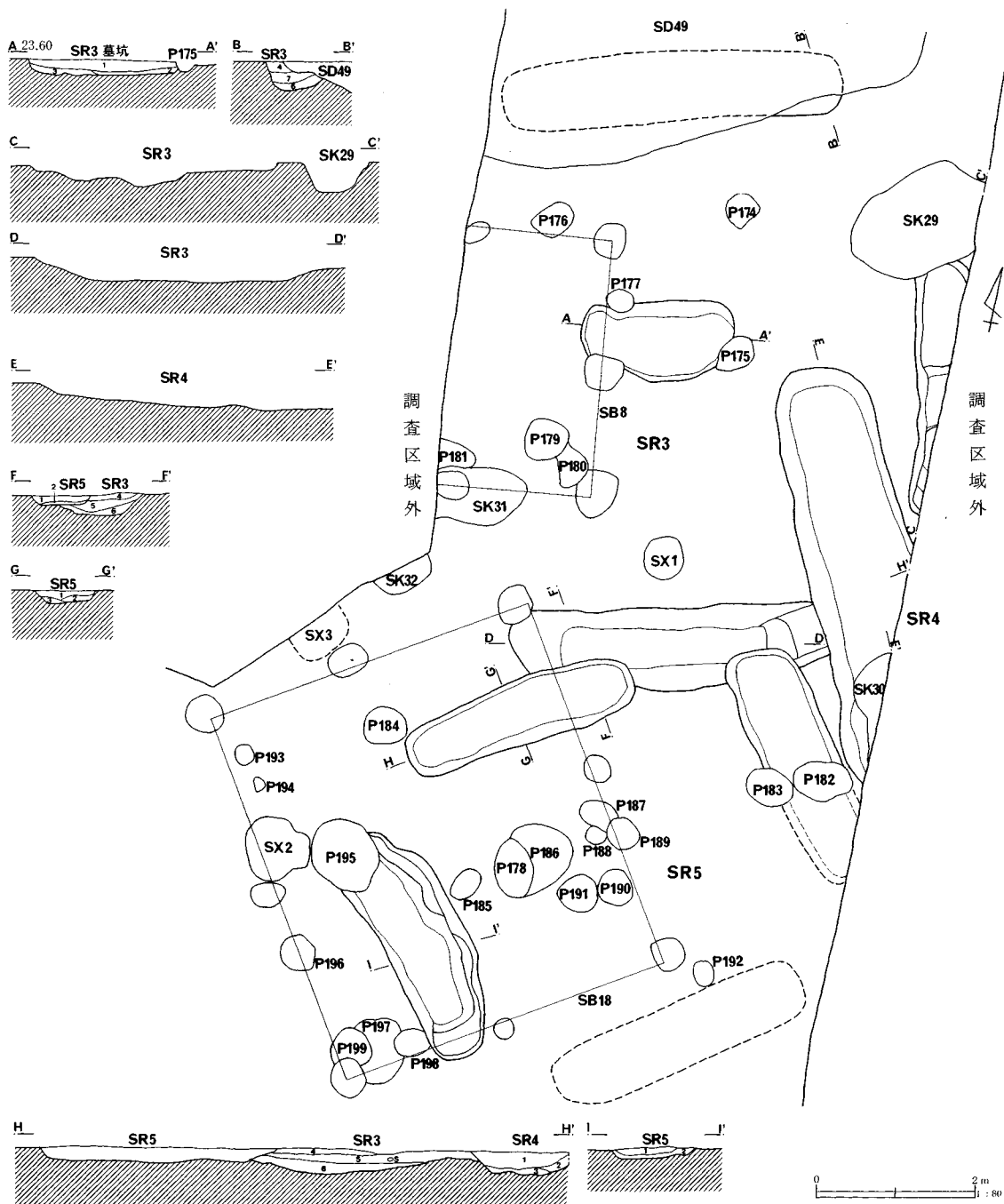
出土遺物は、主に南溝と主体部の土壌から出土し、弥生土器壺の破片をわずかに検出した。

第4号方形周溝墓（第60図、第32表）

38-179グリッドを中心に位置する。第3号方形周溝墓、第30号土坑と重複関係にあり、第3号方形周溝墓、本遺構、第30号土坑の順に新しい。また、東側のほとんどが調査区域外となっており、全体のプランは不明である。

平面形は不明であるが、四隅が切れるものと推定できる。主軸方向は、N-23°-Wを示す。調査では西溝の一部のみ検出できたに止まった。

西溝の規模は、推定長5.5m、推定最大幅1.4m、深さ34cmで溝の底面は南へ行くほど深くなると推定



第3号方形周溝墓 墓坑

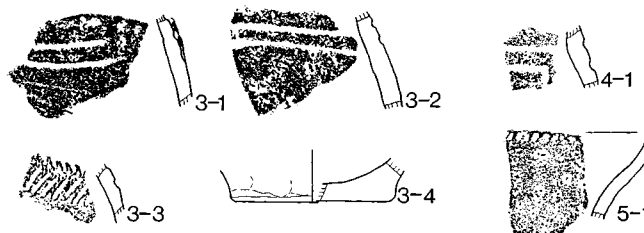
- 1 灰色粘質土 (灰白色シルト粒子、炭化物含む)
 - 2 灰白色粘質土と礫の混合層
 - 3 灰色粘質土 (灰白色シルト粒子多量に含む)
- 第3号方形周溝墓
- 4 灰色粘質土 (砂質、灰白色シルト粒子若干、炭化物含む)
 - 5 灰色粘質土 (灰白色シルト粒子若干含む)
 - 6 灰色粘土 (灰白色シルト粒子多量に含む)
 - 7 暗灰色粘質土

第4号方形周溝墓

- 1 灰色粘質土
- 2 灰色粘質土 (灰色粘土ブロック若干含む)
- 3 灰色粘質土 (明緑灰色シルト粒子少量混じる)

第5号方形周溝墓

- 1 灰色粘質土 (灰白色シルトブロック・粒子少量、炭化物含む)
- 2 灰色粘質土 (灰白色シルト粒子多量に含む)
- 3 灰白色シルト (灰色粘質土ブロック多量に含む)



0 10cm 1:3

第60図 第3～5号方形周溝墓・出土遺物

第32表 第3～5号方形周溝墓出土遺物観察表

番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	色 調	焼成	残存率	備 考
3-1	弥生土器壺	—	—	—	—	橙色	—	胴部	沈線文。竹管による刺突文。
3-2	弥生土器壺	—	—	—	—	橙色	—	口縁部	
3-3	弥生土器壺	—	—	—	—	黒色	—	胴部	
3-4	弥生土器壺	—	—	(6.4)	—	浅黄橙色	—	底部	
4-1	弥生土器壺	—	—	—	—	暗灰黄色	—	頸部	沈線文。
5-1	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい橙色	—	口縁部	キザミ口縁。

される。方台部側の立ち上がりなどは不明である。埋土は自然堆積と考えられる。

方台部は、全て調査区域外となっており不明である。

出土遺物は、わずかに弥生土器壺破片などが検出されたが、図示可能な遺物はほとんどなかった。

第5号方形周溝墓（第60図、第32表）

38・39-180グリッドを中心に位置する。第3・4号方形周溝墓、第18号掘立柱建物跡のほか、多数のピットと重複関係にあり、主な遺構の新旧関係は、古い順に、第3号方形周溝墓、第4号方形周溝墓、本遺構、第18号掘立柱建物跡となる。東側のごく一部が調査区域外となっている。

平面形は、北東-南西方向にやや長い方形を呈し四隅が切れるものである。主軸方向は、N-35°-Wを示す。推定規模で、溝外法で6.2m×5.3m、内法で4.3m×3.7mであると推定できる。調査では北溝及び東溝の一部、西溝が検出できたに止まり、南溝は遺構検出のための表土除去の際に掘削しすぎたためか不明である。

ほぼ全体が把握できる溝は、北溝と西溝であった。西溝の規模は、長さ3.1m、最大幅1.02m、深さ13cmで溝の底面はほぼフラットであった。北溝の規模は、長さ3.0m、最大幅0.82m、深さ15cmで、溝の底面はほぼフラットであった。東溝は、一部が第3号方形周溝墓の南溝と切り合い、さらに南の一部が削平のため全体は不明であるが、推定長3.1m、最大幅0.95m、深さ約4.5cmであった。方台部側の立ち上がりは、いずれの溝もやや緩やかな傾斜であった。特に西溝は、方台部側が底から立ち上がる途中にテラス状の掘り方があるものであった。埋土は自然堆積と考えられる。

方台部は、削平されて不明であった。

出土遺物は、主に北溝から出土し、弥生土器壺・甕の破片をわずかに検出したが、図示可能な遺物はほとんどなかった。

第6号方形周溝墓（第61図、第33表）

40・41-179・180グリッドに位置する。第7号方形周溝墓、第15号掘立柱建物跡のほか、いくつかのピットと重複関係にあり、第15号掘立柱建物跡に切られ、第7号方形周溝墓を切っている。主な遺構の新旧関係は、古い順に、第7号方形周溝墓、本遺構、第15号掘立柱建物跡となる。東側の一部が調査区域外となっている。

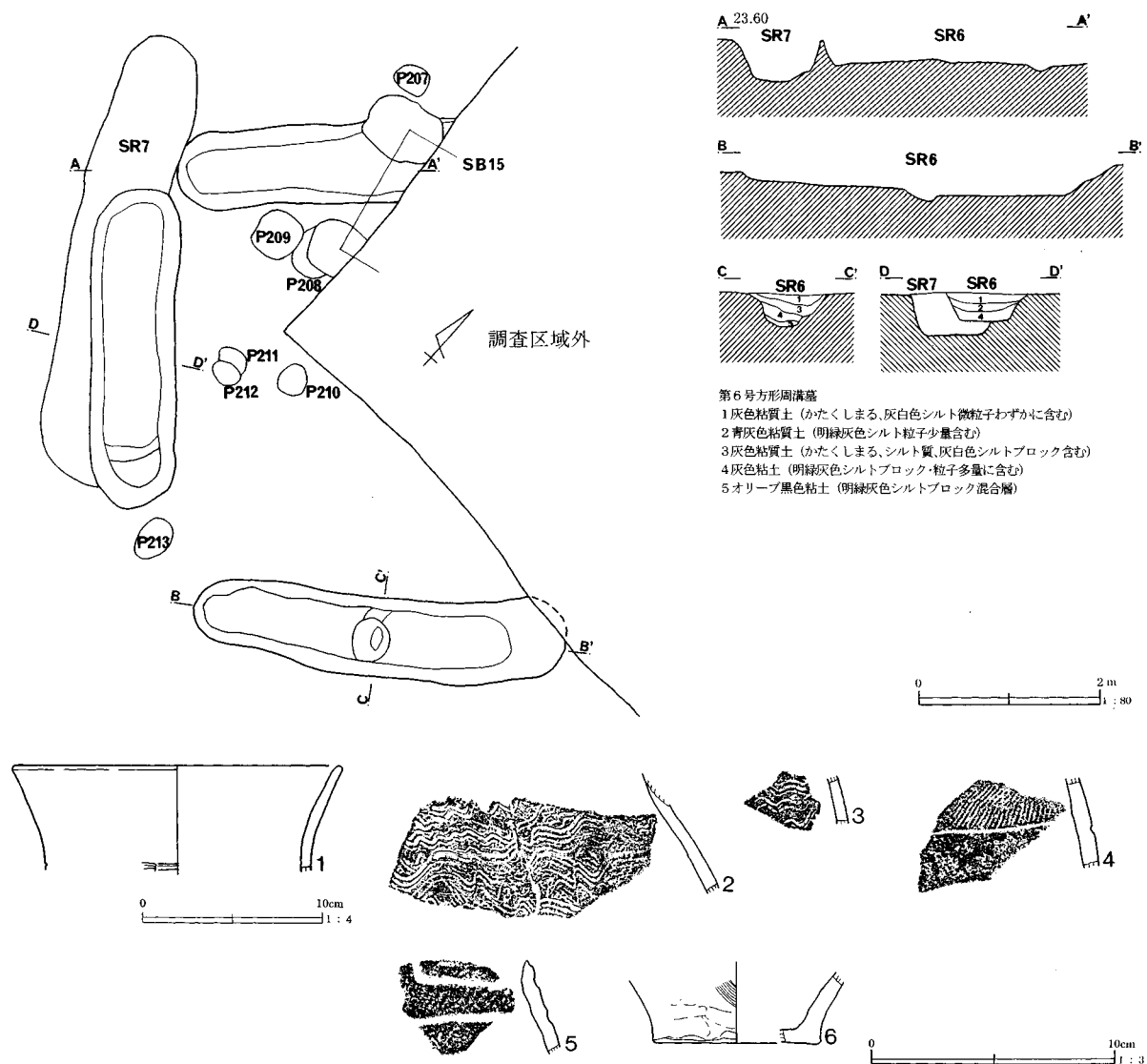
平面形は詳細不明であるが、ほぼ正方形を呈し、四隅が切れるものと推定できる。主軸方向は、N-42°-Wを示す。推定規模で、溝外法で6.6m×6.4m、内法で4.7m×4.4mであると推定される。調査では北溝、西溝及び南溝が検出できたに止まり、東溝は調査区域外のため検出できなかった。

ほぼ全体が把握できる南溝の規模は、長さ4.15m、最大幅0.92m、深さ34cmで溝の底面は西から東に緩やかに傾斜し、ほぼ中央部でピット状の落ち込みがあった。また、北溝は、長さは不明であるが、最大幅0.9m、深さ25cmで、溝の底面はやや起伏があるが概ねフラットであった。西溝の規模は、長さ3.6

m、幅0.94m、深さは30cmを測り、溝の底面は南から北へやや傾斜しており、中央部では概ねフラットであった。方台部側の立ち上がりは、いずれの溝もやや緩やかな傾斜であった。特に、南溝は傾斜が緩やかであった。埋土は自然堆積と考えられる。

方台部は、削平されて不明であった。

出土遺物は、主に北溝から出土し、南溝及び西溝からの出土量は少なかった。弥生土器壺・甕の破片をわずかに検出した。



第61図 第6号方形周溝墓・出土遺物

第33表 第6号方形周溝墓出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器甕	(18.0)	—	—	EGMN	にぶい赤褐色	B	10%	櫛描簾状文。
2	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	胴部	櫛描波状文。
3	弥生土器甕	—	—	—	—	灰黄橙色	—	胴部	櫛描波状文。
4	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい橙色	—	胴部	外面赤彩。沈線文区画内にL R縄文。
5	弥生土器壺	—	—	—	—	浅黄橙色	—	頸部	
6	弥生土器壺	—	—	—	—	灰黄橙色	—	底部	

第7号方形周溝墓（第62・63図、第34表）

40・42・43-179～181グリッドに位置する。第6号方形周溝墓、第50号溝跡のほか、2基のピットと重複関係にあり、主な遺構の新旧は、古い順に、本遺構、第6号方形周溝墓、第50号溝跡となる。一部が試掘調査時のトレンチにより攪乱を受けており、南側の一部が調査区域外となっている。

平面形は、ほぼ正方形を呈するが、東西の南側がややハの字状に広がるプランで、四隅が切れるものである。主軸方向は、N-25°-Wを示す。推定規模で、溝外法で9.6m×9.1m、内法で6.2m×6.8mである。調査ではほぼ検出できたのが西溝であり、北溝は第50号溝跡に切られ半截状態で、南溝は一部が調査区域外となっており全体は不明で、東溝は上面を第6号方形周溝墓の西溝に切られていた。

ほぼ全体が把握できる東・西溝の規模は、東溝が長さ5.1m、最大幅1.1m、深さ50cmで、溝の底面は南にやや傾斜して下がるものであった。また、西溝は長さ4.4m、最大幅1.6m、深さ52cmで、溝の底面は中央部が低くフラットで南北に向かってやや傾斜して上がるものであった。北溝は、ほぼ北半分が第50号溝跡と切り合っていたため全体は不明であるが、推定長6.75m、推定最大幅1.25m、深さ38cmで、溝の底面はほぼフラットであった。南溝は、一部が調査区域外となり全体は不明であるが、推定幅1.0m、深さ約65cmで、西に向かって傾斜していた。方台部側の立ち上がりは、北・南・西溝のいずれもやや緩やかな傾斜であり、特に西溝は顕著であった。一方、東溝はほかに比べると傾斜が急である。各々の溝の埋土は、自然堆積と考えられる。

方台部は、削平されて不明であった。

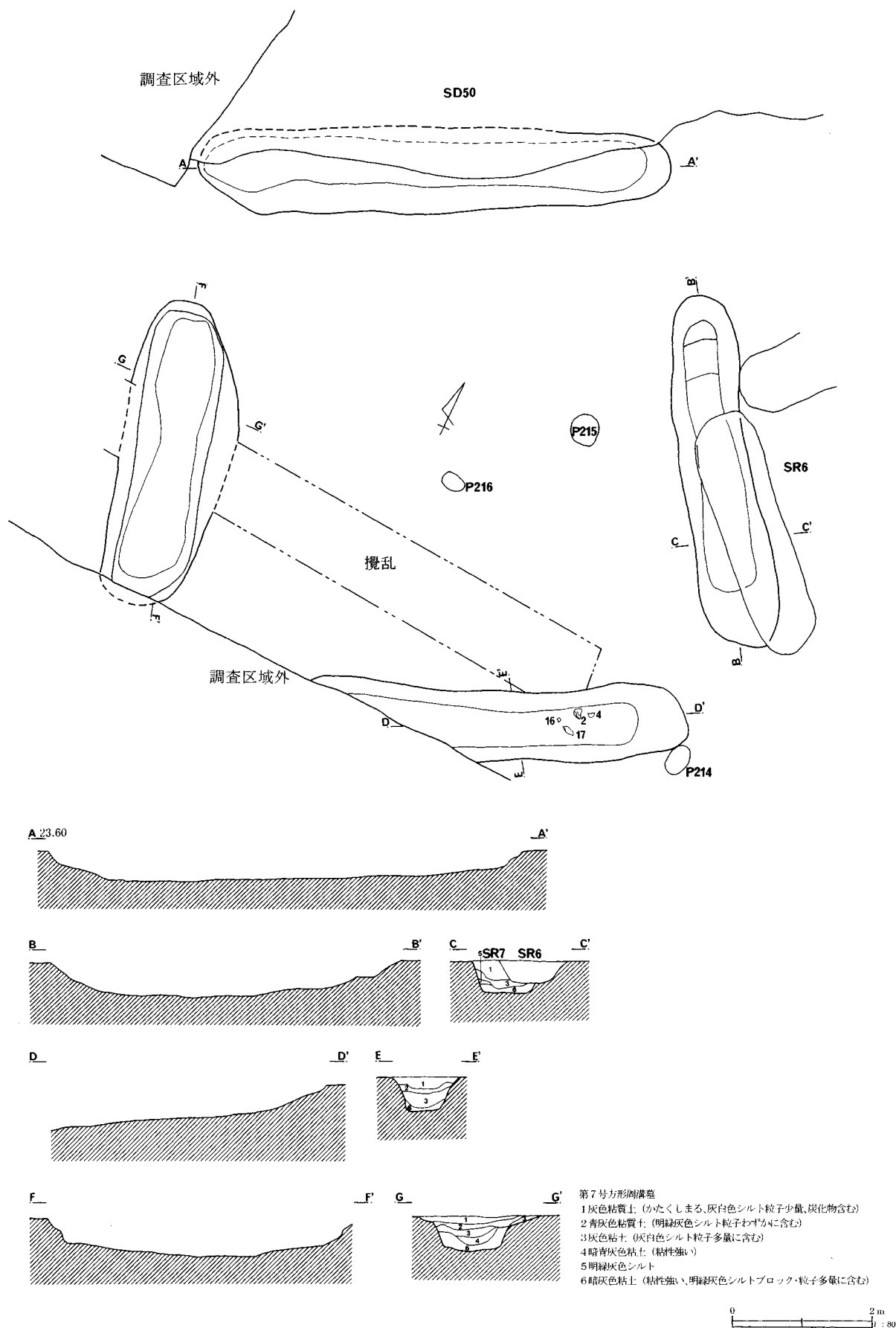
出土遺物は、北溝及び南溝からの出土が顕著で、弥生土器高坏（赤彩）・壺・甕破片を検出した。

第8号方形周溝墓（第64図、第35表）

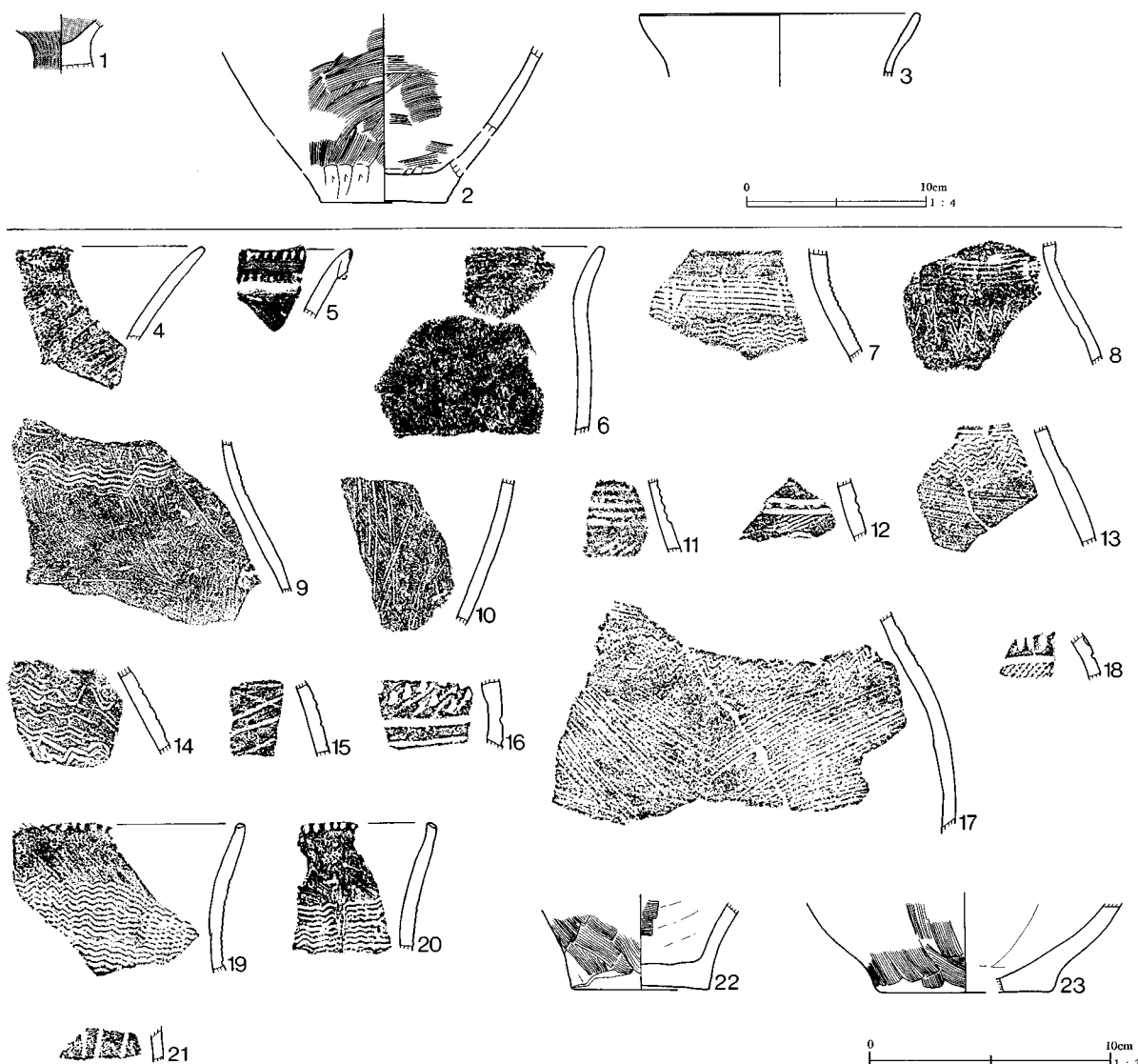
43・44-180グリッドを中心に位置する。第33・34号土坑のほか、数基のピットと重複関係にあり、

第34表 第7号方形周溝墓出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器高坏	—	—	—	AEHJ	灰黄色	A	10%	坏部内外面赤彩。
2	弥生土器甕	—	—	(7.0)	AEGKM	にぶい橙色	A	胴下半部	内外面刷毛目。
3	弥生土器甕	(15.2)	—	—	JMN	黒褐色	B	10%	
4	弥生土器高坏	—	—	—	—	橙色	—	口縁部	外面刷毛目。
5	弥生土器壺	—	—	—	—	褐色	—	口縁部	口縁部上下両端櫛歯による施文。
6	弥生土器甕	—	—	—	—	褐色、黒褐色	—	口縁部	
7	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい黄褐色	—	頸部	櫛描簾状文及び波状文。
8	弥生土器甕	—	—	—	—	黒褐色	—	頸部～胴部	櫛描簾状文及び波状文。
9	弥生土器甕	—	—	—	—	褐色	—	頸部～胴部	櫛描波状文。刷毛目。
10	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい黄褐色	—	胴部	条痕文。
11	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい褐色	—	頸部	L R 縄文。
12	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄褐色	—	頸部	刺突文。L R 縄文。
13	弥生土器甕	—	—	—	—	黒褐色	—	胴部	櫛描簾状文及び波状文。
14	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい黄褐色	—	胴部	
15	弥生土器甕	—	—	—	—	灰黄色	—	胴部	
16	弥生土器壺	—	—	—	—	橙色	—	胴部	
17	弥生土器甕	—	—	—	—	灰褐色	—	胴部	櫛描簾状文及び波状文、条痕文。
18	弥生土器壺	—	—	—	—	黒褐色	—	胴部	沈線文区画内にL R 縄文。
19	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい赤褐色	—	口縁部	キザミ口縁。櫛描波状文。
20	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい赤褐色	—	口縁部	キザミ口縁。櫛描波状文。
21	弥生土器甕	—	—	—	—	橙色	—	胴部	条痕文。
22	弥生土器壺	—	—	(5.4)	—	明赤褐色	—	底部	内外面刷毛目。
23	弥生土器甕	—	—	(7.2)	—	にぶい赤褐色	—	底部	



第62図 第7号方形周溝墓



第63図 第7号方形周溝墓出土遺物

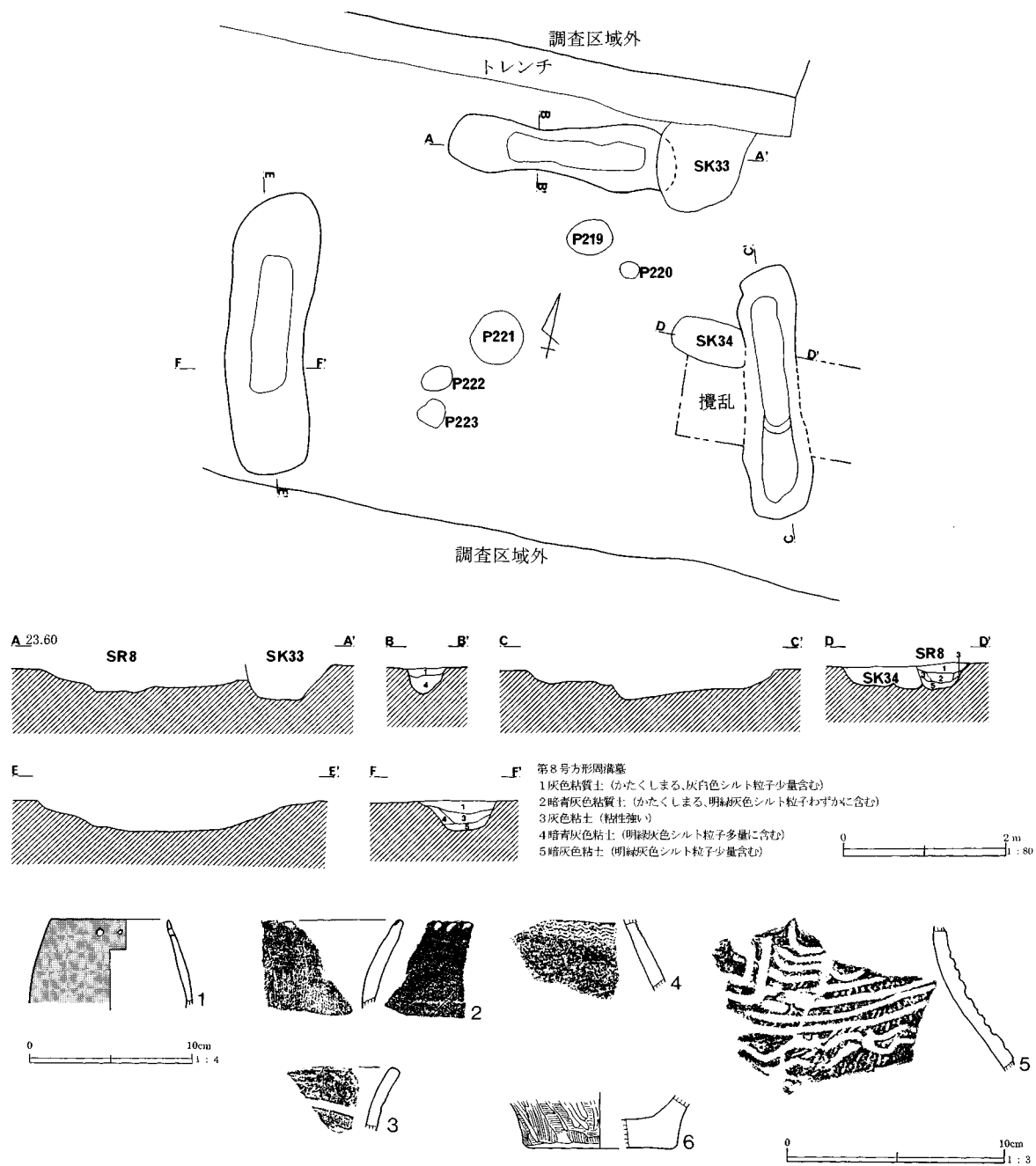
主な遺構の新旧は、古い順に第34号土坑、本遺構、第33号土坑となる。一部が試掘調査時のトレンチにより攪乱を受けている。また、南側が調査区域外となっている。

平面形は、推定ではあるが東－西方向にやや長い方形を呈し四隅が切れるものである。四隅の切れ間の間隔は比較的大きいものである。主軸方向は、 $N-15^{\circ}-W$ を示す。規模は、一方方向のみであるが溝外法で7.04m、内法で5.42mである。調査では北・西・東溝が検出できたに止まり、南溝は全く不明である。

ほぼ全体が把握できる溝の規模は、北溝が推定長2.8m、最大幅0.83m、深さ26cmで溝の底面はやや起伏があるがほぼフラットであった。東溝は長さ3.1m、最大幅0.82m、深さ35cmで、溝の底面は北側がほぼフラットで、南側は一段テラス状の掘り方になっていた。西溝は長さ3.45m、最大幅1.05m、深さ38cmで、溝の底面は中央部がほぼフラットで北と南へ緩やかな傾斜をもって立ち上がっていた。方台部側の立ち上がりは、北溝を除いて、いずれの溝もやや急な傾斜であった。埋土は自然堆積と考えられる。

方台部は、削平されて不明であった。

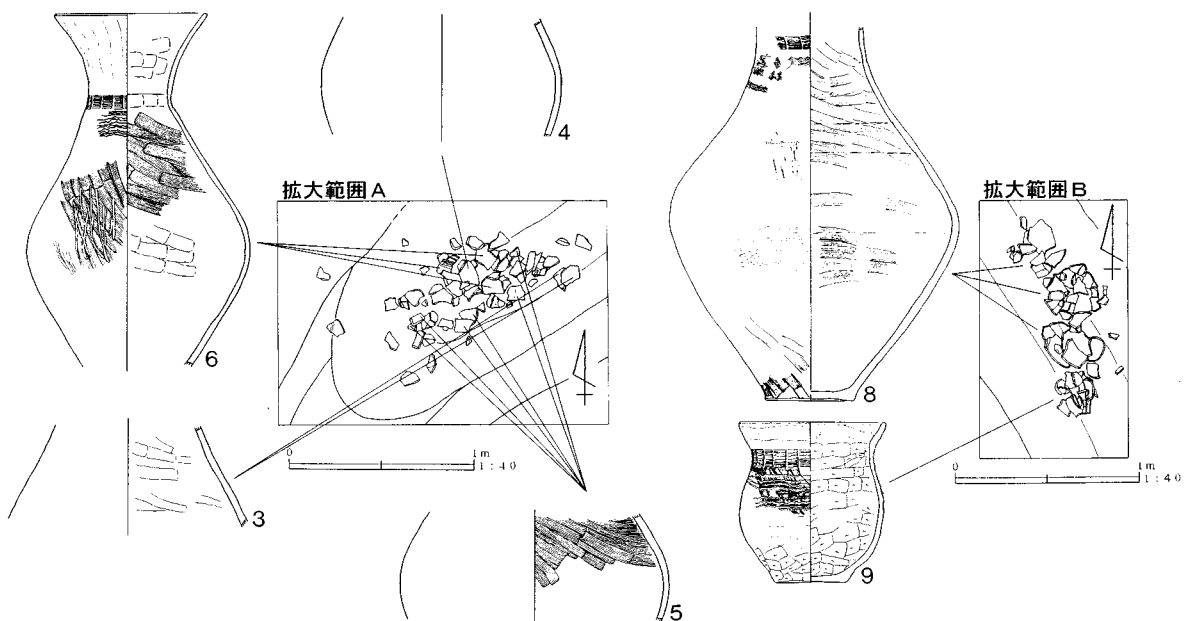
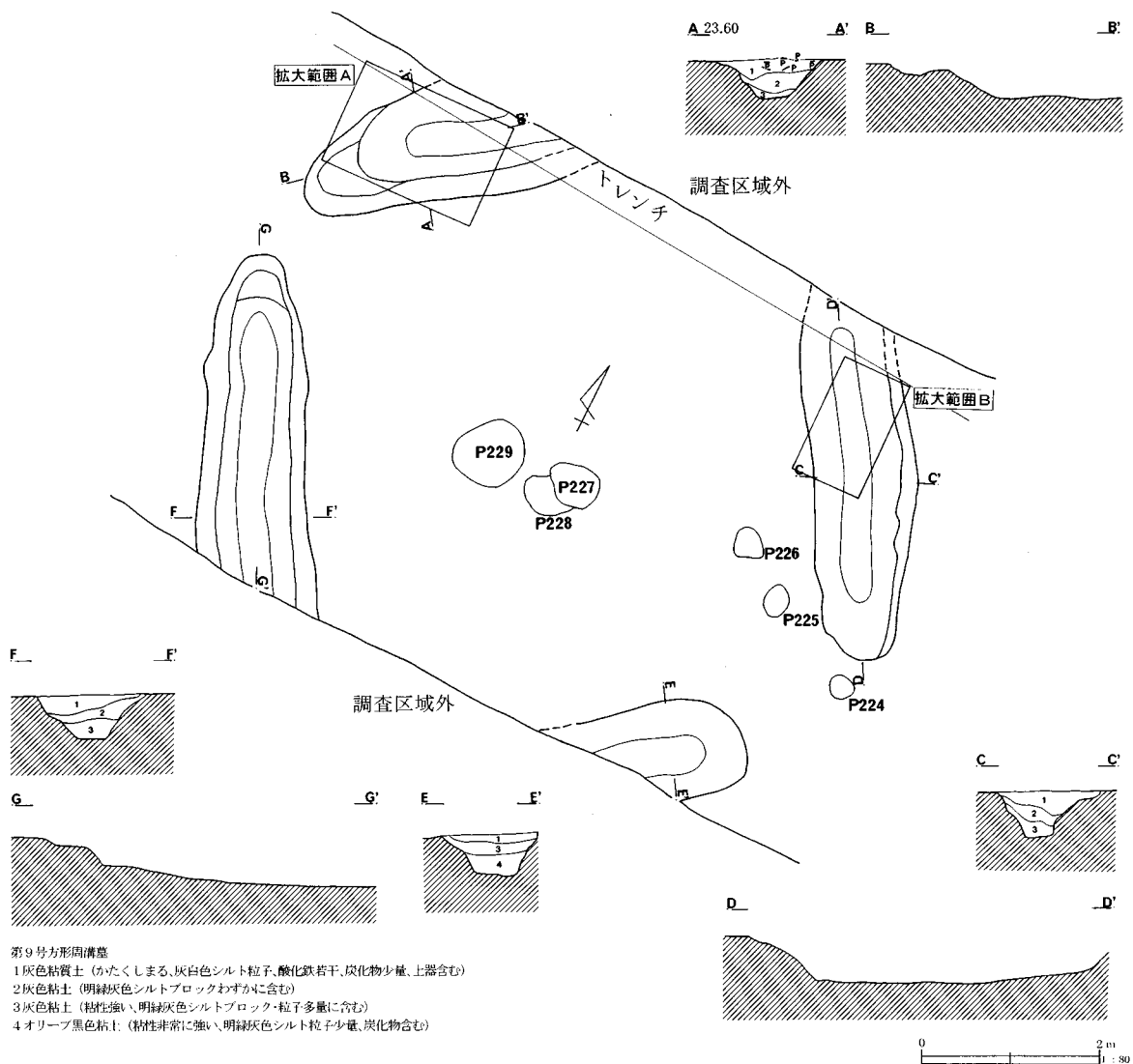
出土遺物は、主に東溝及び西溝から出土し、弥生土器壺・甕破片を検出した。小型の壺に口縁部に2つ穿孔があるものが見られた。



第64図 第8号方形周溝墓・出土遺物

第35表 第8号方形周溝墓出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器壺	—	—	—	AGM	にぶい橙色	C	15%	口縁部穿孔2つ。外面赤彩痕跡?
2	弥生土器甕	—	—	—	—	灰褐色	—	口縁部	口唇部内面櫛歯刺突文。
3	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	口縁部	
4	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい赤褐色	—	胴部	櫛描波状文。
5	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	頭部~胴部	地文LR縄文。
6	弥生土器甕	—	—	(6.4)	—	灰褐色	—	底部	



第65図 第9号方形周溝墓・遺物分布図

第9号方形周溝墓（第65～67図、第36表）

44～46-179・180グリッドを中心に位置する。数基のピットと重複関係にあるが、新旧関係は明らかにできなかった。北及び南側が調査区域外となっている。

平面形は、推定ではあるが東西-南東方向にやや長い方形を呈し四隅が切れるものと推定できる。主軸方向は、N-30°-Wを示す。規模は、溝外法で8.5m（推定）×8.0m、内法で6.0m×5.6mである。いずれの溝も一部ないしは大部分が調査区域外となっており、全体を明らかにすることはできなかった。ほぼ検出できたのが東溝で、ごく一部が調査区域外となっていた。

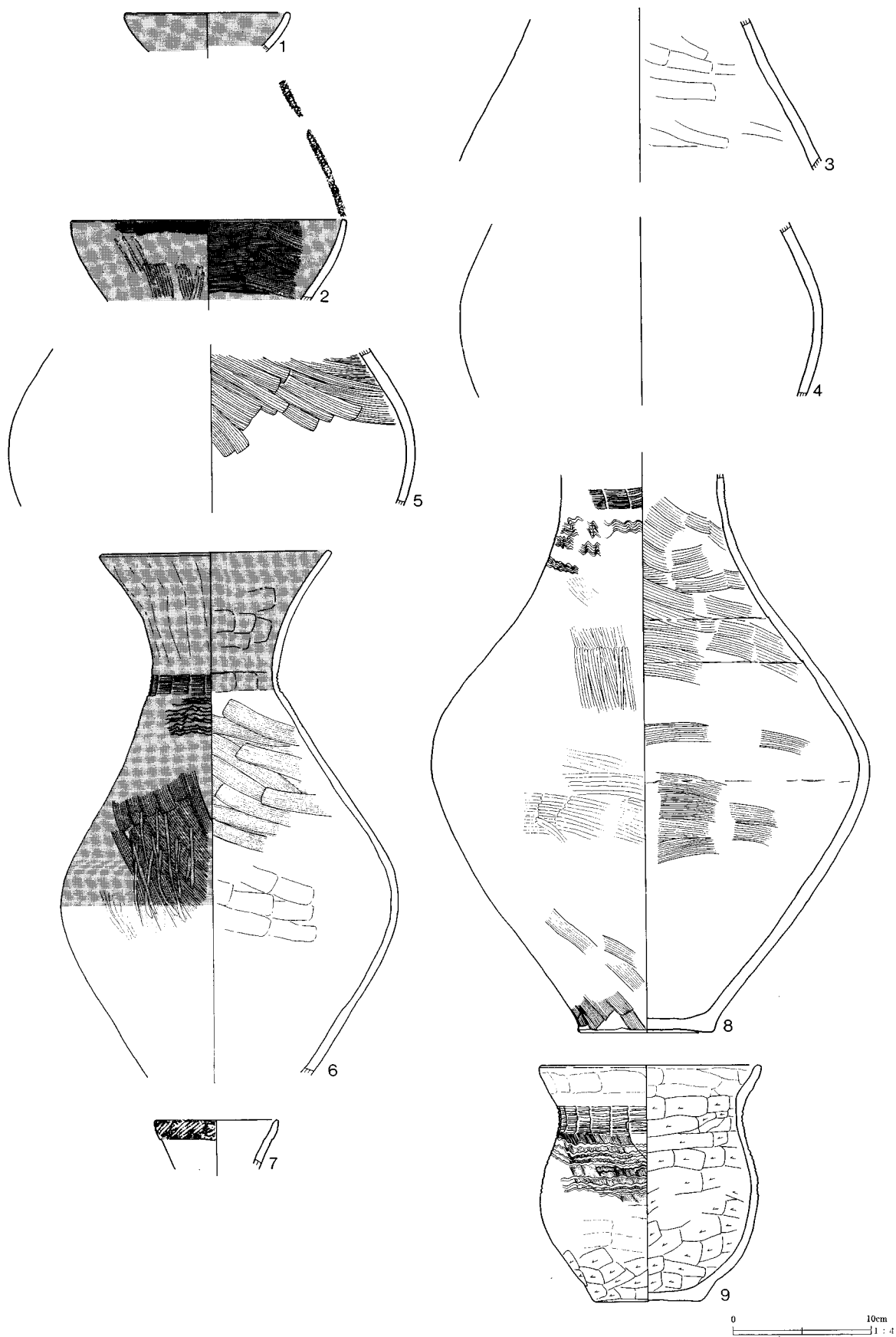
ほぼ全体が把握できる東溝の規模は、推定長4.5m、最大幅1.15m、深さ53cmで、溝の底面はほぼフラットであった。また、次に検出部分が大きな溝は西溝で、検出最大幅1.5m、深さ55cmで、溝の底面は南に向かってやや傾斜しているようであった。一方、北溝及び南溝はわずかな検出であった。北溝の検出最大幅1.35m、深さ45cmで、溝の底面は一段テラスを設けて底面に向かって落ち込んでいた。また、南溝は大部分が調査区域外であったが、検出最大幅1.13m、深さ48cmであった。方台部側の立ち上がりは、東溝がやや急な傾斜であった以外は、他の溝は緩やかな傾向にあった。各々の溝の埋土は、自然堆積と考えられる。

方台部は、削平されて不明であった。

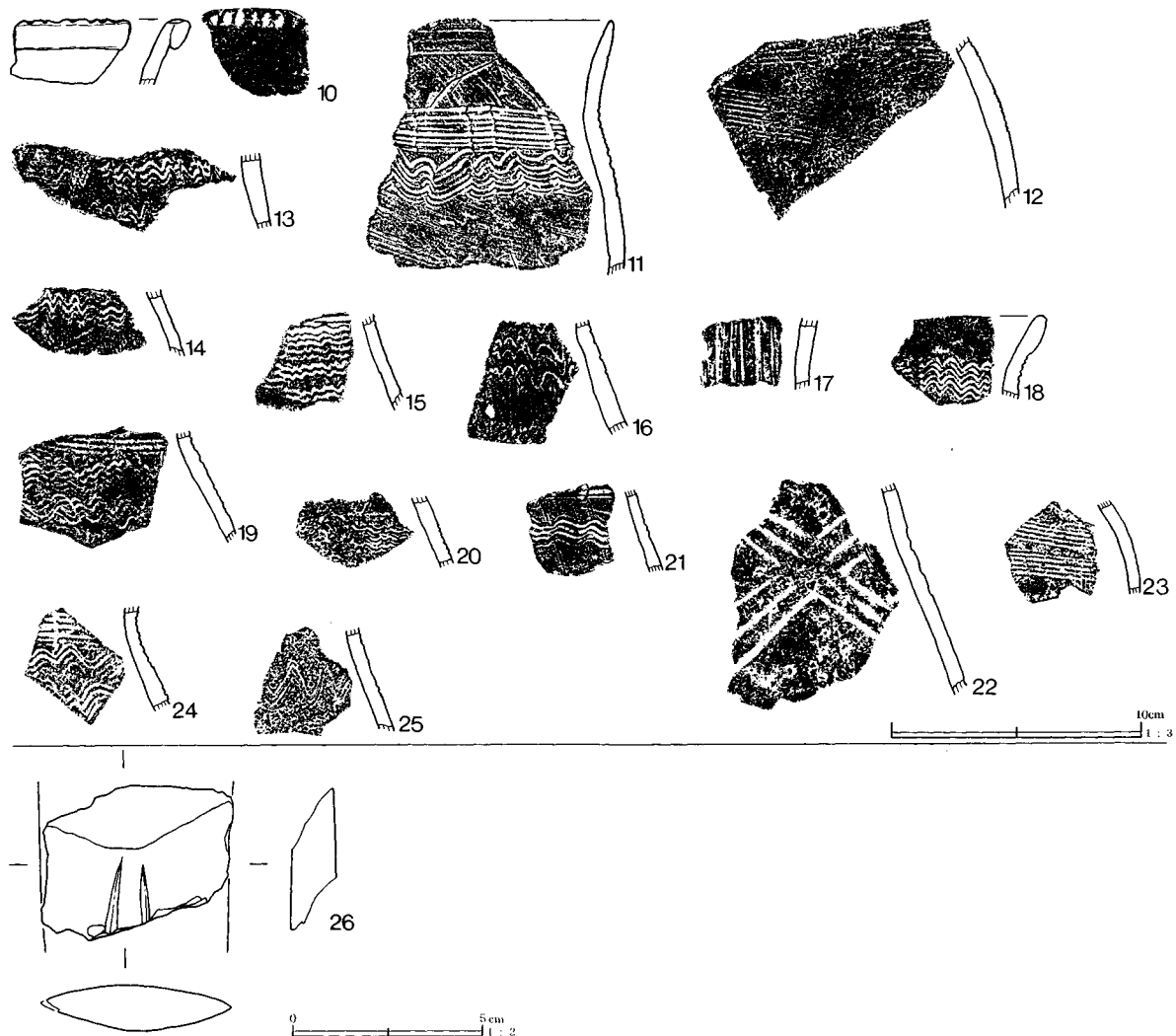
出土遺物は、北溝及び東溝からの出土が顕著で、しかも土圧で破片の状態ではあったが復元可能な良好な遺物を得た。北溝からは遺存状態の良い弥生土器壺のほか甕破片などを、南溝からもやはり遺存状

第36表 第9号方形周溝墓出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器高坏	(11.6)	—	—	AB	灰黄色	B	10%	内外面赤彩。
2	弥生土器高坏	(19.8)	—	—	ABEGM	にぶい黄橙色	A	15%	口唇部縄目圧痕。内外面赤彩。
3	弥生土器壺	—	—	—	AEJKM	にぶい赤褐色	A	15%	
4	弥生土器壺	—	—	—	AGHN	橙色	C	15%	
5	弥生土器壺	—	—	—	AEHJ	にぶい橙色	B	15%	内面刷毛目。
6	弥生土器壺	(16.1)	—	—	AGHNM	にぶい橙色	B	40%	頸部内面から胴下半部外面赤彩。櫛描簾状文及び波状文。下半刷毛目の後ミガキ。内面刷毛目。
7	弥生土器壺	(8.7)	—	—	DGHJ	灰白色	B	10%	口縁部L R縄文。
8	弥生土器壺	—	—	9.3	ABEGNM	にぶい黄橙色	B	70%	櫛描簾状文及び波状文。内面刷毛目。
9	弥生土器甕	15.6	17.0	7.6	AGHM	にぶい黄橙色	B	90%	櫛描簾状文及び波状文。地文刷毛目。胴下半外面・内面ヘラケズリ。
10	弥生土器壺	—	—	—	—	灰褐色	—	口縁部	キザミ口縁。
11	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい橙色	—	口縁部～頸部	櫛描簾状文及び波状文。
12	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	胴部	櫛描波状文。
13	弥生土器甕	—	—	—	—	浅黄橙色	—	頸部	櫛描波状文。
14	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	頸部	櫛描波状文。
15	弥生土器壺	—	—	—	—	浅黄橙色	—	頸部	櫛描簾状文及び波状文。外面赤彩。
16	弥生土器甕	—	—	—	—	灰褐色	—	頸部	櫛描波状文。
17	弥生土器甕	—	—	—	—	灰褐色	—	胴部	条痕文。
18	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい橙色	—	口縁部	櫛描波状文。
19	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい橙色	—	頸部	櫛描簾状文及び波状文。
20	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい褐色	—	胴部	櫛描波状文。
21	弥生土器甕	—	—	—	—	褐灰色	—	頸部	櫛描簾状文及び波状文。
22	弥生土器壺	—	—	—	—	橙色	—	頸部	沈線文。
23	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄褐色	—	胴部	
24	弥生土器壺	—	—	—	—	浅黄橙色	—	頸部	櫛描簾状文及び波状文。内面一部赤彩。
25	弥生土器甕	—	—	—	—	橙色	—	頸部～胴部	櫛描波状文。
26	石剣	長さ4.1	幅5.1	厚さ1.2	—	—	—	欠損	重さ24.7g。粘板岩製。砥石か？



第66图 第9号方形周溝墓出土遺物（1）



第67図 第9号方形周溝墓出土遺物（2）

態の良い弥生土器壺・甕のほか赤彩を施した高坏破片などを検出した。また、西溝からも赤彩を施した高坏破片を検出した。さらに、北溝からは、欠損が激しかったが、粘板岩製の石剣ないしは砥石と思われる石製品を検出した。

第10号方形周溝墓（第68・69図、第37表）

58・59-180~183グリッドを中心に位置する。周溝の一部が攪乱を受けている。北・東・西側が調査区域外となっている。

平面形は不明であるが、北東-南西方向に長い方形を呈し四隅が切れるものと推定できる。主軸方向は、おおよそN-26°-Eを示す。規模は、明らかにできなかった。調査では北溝及び東溝の一部を検出できたに止まり、南溝・西溝は全く不明である。

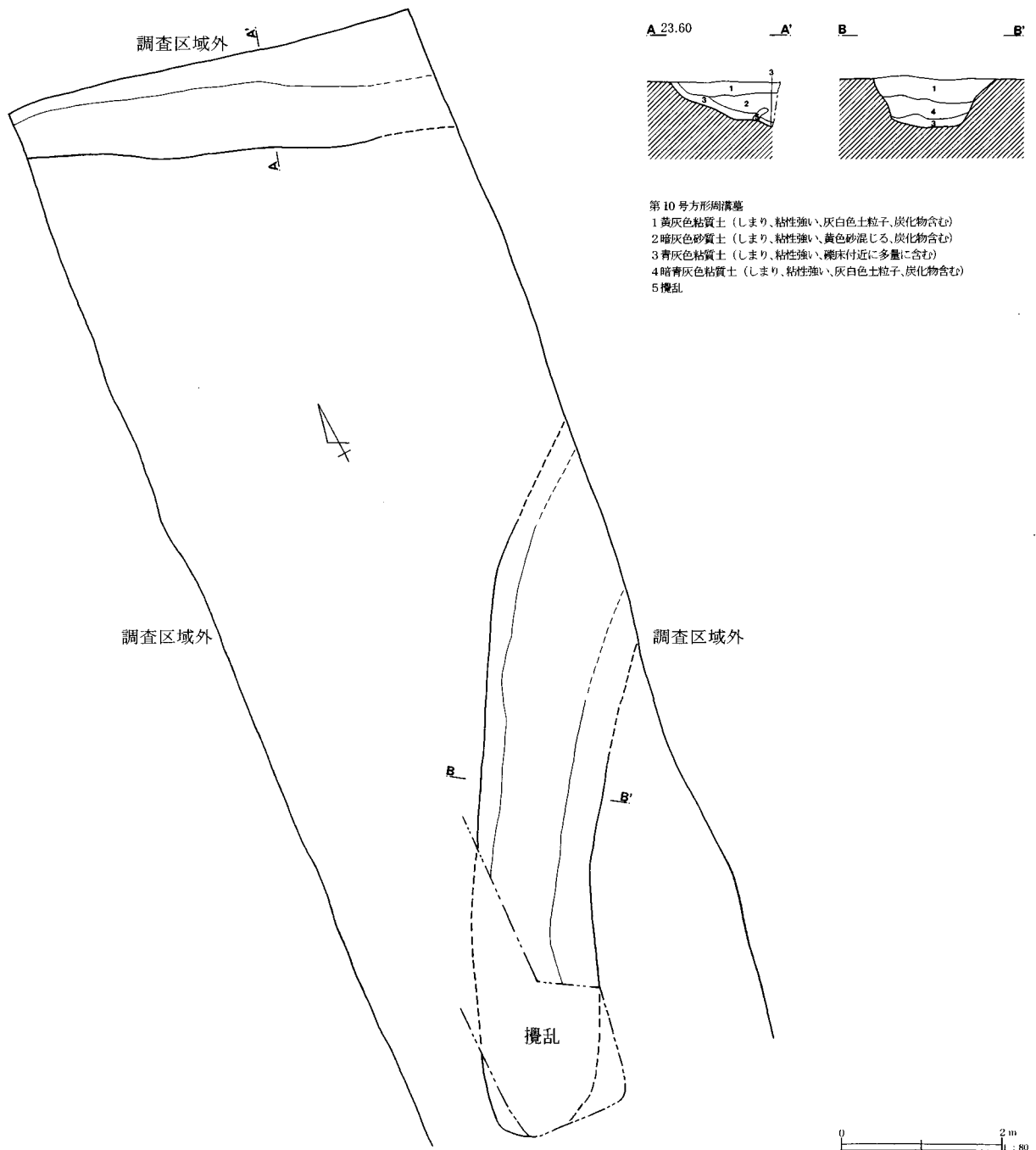
比較的検出面積があった東溝の規模は、残存長8.8m、最大幅1.8m、深さ60cmで溝の底面は南に向かって傾斜していた。北溝は、ごく一部が検出できたに止まり、検出最深54cmを測った。方台部側の立ち上がりは、北溝は非常に緩やかな傾斜であったが、東溝は急な立ち上がり方をしていて、埋土は自然堆積と考えられる。

方台部は、削平されて不明であった。

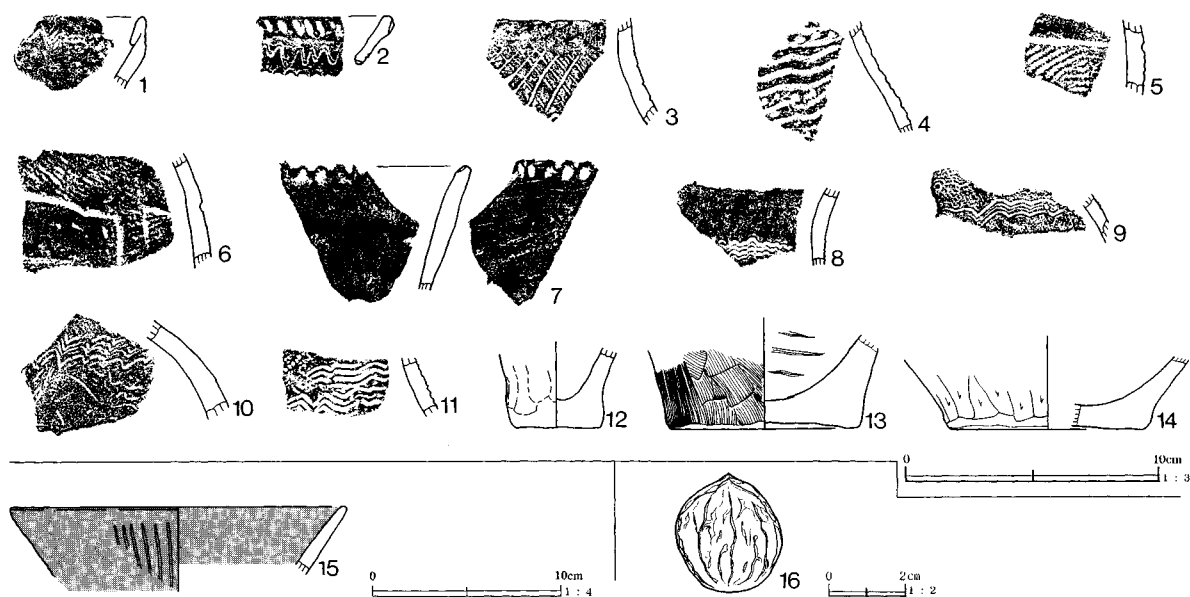
出土遺物は、検出面積が小さかった割には多く、主に北溝から出土し、弥生土器高坏（赤彩）・壺・甕の破片を検出した。また、これらのほかに桃の種子が検出された。

第11号方形周溝墓（第70図、第38表）

58・59-184~186グリッドを中心に位置する。第75号溝跡と重複関係にあり、中央部を北西から南東にかけて横切っているが新旧関係は明らかにできなかった。東及び西側が調査区域外となっている。



第68図 第10号方形周溝墓



第69図 第10号方形周溝墓出土遺物

第37表 第10号方形周溝墓出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器壺	—	—	—	—	浅黄橙色	—	口縁部	櫛描波状文。
2	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	口縁部	口唇部縄目圧痕。口縁下端にキザミ。櫛描波状文。
3	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい橙色	—	頸部	ヘラ描き交差文。
4	弥生土器壺	—	—	—	—	黒色	—	胴部	波状沈線文、刺突文。
5	弥生土器壺	—	—	—	—	褐灰色	—	胴部	沈線文区画内にR L縄文。
6	弥生土器壺	—	—	—	—	黒褐色	—	胴部	沈線文区画内磨消及びR L縄文。
7	弥生土器甕	—	—	—	—	黒色	—	口縁部	キザミ口縁。
8	弥生土器甕	—	—	—	—	黄灰色	—	頸部	櫛描波状文。
9	弥生土器甕	—	—	—	—	黒褐色	—	胴部	櫛描波状文。
10	弥生土器甕	—	—	—	—	灰黄褐色	—	胴部	櫛描波状文。
11	弥生土器甕	—	—	—	—	灰黄褐色	—	頸部	櫛描波状文。L R縄文。
12	弥生土器壺	—	—	3.3	—	灰黄褐色	—	底部	—
13	弥生土器壺	—	—	(7.5)	—	にぶい黄橙色	—	底部	外面刷毛目。
14	弥生土器甕	—	—	(7.7)	—	にぶい赤褐色	—	底部	外面ヘラケズリ。
15	弥生土器高坏	(13.2)	—	—	AEGHJ	灰黄色	A	10%	内外面赤彩。
16	種子桃	長さ3.2	幅2.9	厚さ2.5	—	—	—	完存	重さ2.3g。

平面形は、推定ではあるが北-南方向にやや長い方形を呈し、四隅が切れるものである。主軸方向は、N-27°-Eを示す。規模は、一方方向の溝外法で9.6m、内法で7.45mである。北及び南溝のみの検出で、いずれも一部が調査区域外となっており、全体を明らかにすることはできなかった。

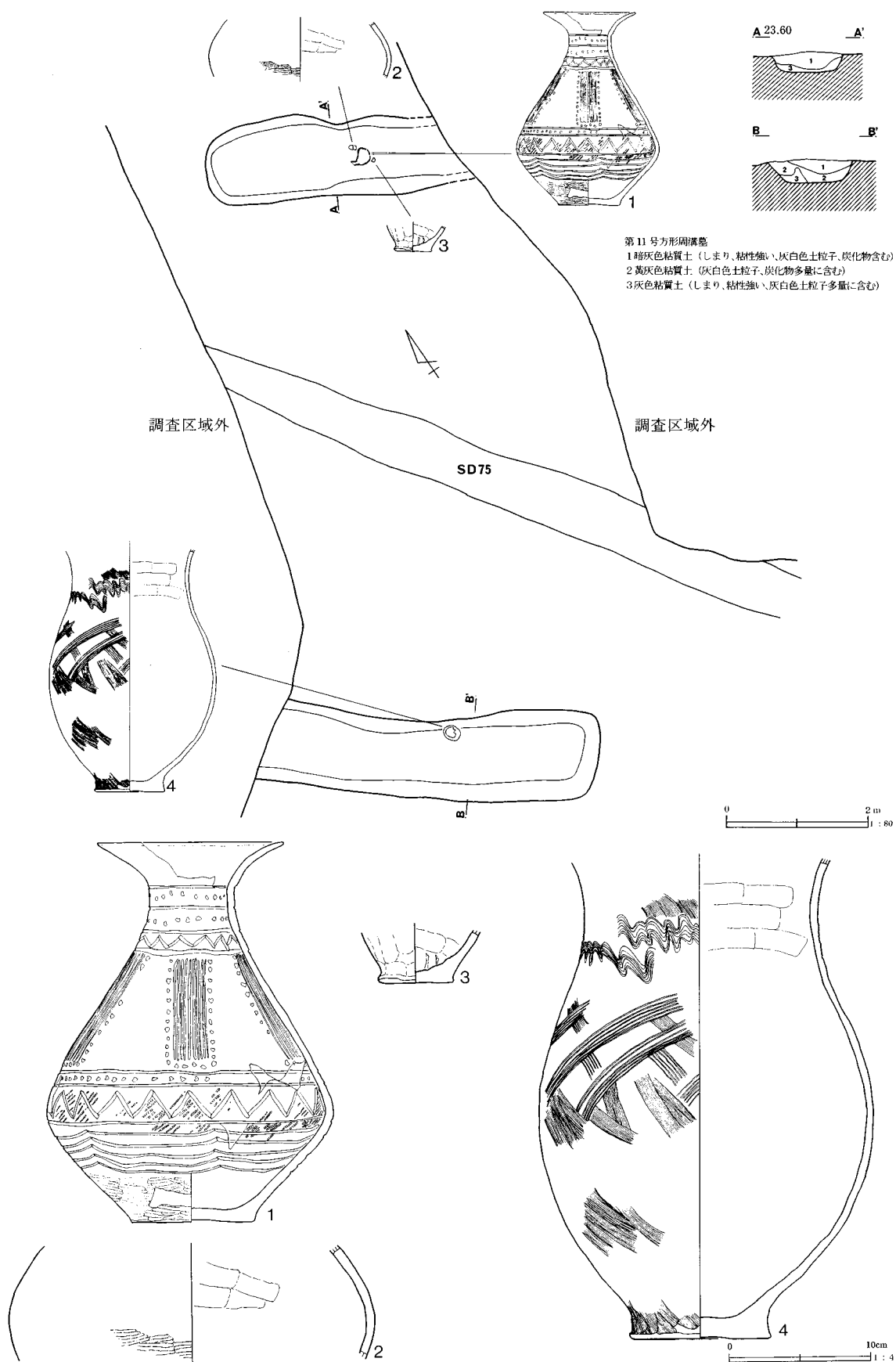
北溝の規模は、検出長3.45m、最大幅1.15m、深さ27cmで、溝の底面はほぼフラットであった。また、南溝は、検出長4.62m、最大幅1.3m、深さ32cmで、溝の底面はほぼフラットであった。方台部側の立ち上がりは、いずれの溝もやや急な傾斜であった。埋土は自然堆積と考えられる。

方台部は、削平されて不明であった。

出土遺物は非常に少なかったが、比較的良好な遺存状態で、復元によりほぼ全体を明らかにできた遺物であった。北溝からは弥生土器壺などを、南溝からは弥生土器甕を検出した。

第12号方形周溝墓 (第71図、第39表)

52~54-186グリッドを中心に位置する。北側の大部分が調査区域外となっている。



第70図 第11号方形周溝墓・出土遺物

第38表 第11号方形周溝墓出土遺物観察表

番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	色 調	焼成	残存率	備 考
1	弥生土器壺	(13.5)	27.0	8.6	ADK	にぶい黄橙色	C	75%	頸部平行沈線文に列点文、その下連続山形文。胴上部6単位の櫛描文、その左右列点文。胴中位平行沈線を挟んで列点文と連続山形文。胴下部5本1組の弧状沈線7単位。胴中位LR縄文。胴下半部横位のミガキ。
2	弥生土器壺	—	—	—	ADHJKM	にぶい黄橙色	A	10%	外面ミガキ。
3	弥生土器壺	—	—	4.0	—	明褐灰色	—	底部	
4	弥生土器甕	—	—	9.4	ABEGHMN	にぶい黄橙色	B	85%	頸部刷毛目後櫛描波状文。胴部粗目と細目の交差刷毛目。やや器面荒れる。

平面形は不明であるが、四隅が切れるものと推定できる。主軸方向は、およそN-25°-Eを示す。規模は、不明である。東溝のごく一部及び南溝のみの検出で、南溝は一部が調査区域外となっていた。

南溝の規模は、推定長9.9m、最大幅1.75m、深さ45cmで、溝の底面はほぼフラットであったが、西に床面より一段浅いテラスが存在した。また、東溝は、検出長2.5m、最大幅1.44m、深さ47cmで、溝の底面はほぼフラットであった。方台部側の立ち上がりは、南溝で緩やかな傾斜で、東溝でやや緩やかな傾斜であった。埋土は自然堆積と考えられる。

方台部は、削平されて不明であった。

出土遺物は、非常に少なかった。南溝から弥生土器甕破片などを、東溝からはホルンフェルス製の打製石斧を検出した。

第39表 第12号方形周溝墓出土遺物観察表

番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	色 調	焼成	残存率	備 考
1	弥生土器甕	(20.0)	—	—	ADGJ	にぶい橙色	B	10%	
2	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい橙色	—	口縁部	外面刷毛目。
3	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい橙色	—	胴部	外面刷毛目。
4	打製石斧	長さ(15.3)	幅8.1	厚さ3.5	—	—	—	刃部欠損	ホルンフェルス製。短冊形。

第13号方形周溝墓（第72図）

57・58-187グリッドを中心に位置する。第75号溝跡と重複関係にあり、本遺構が切っている。南側の大部分が調査区域外となっている。

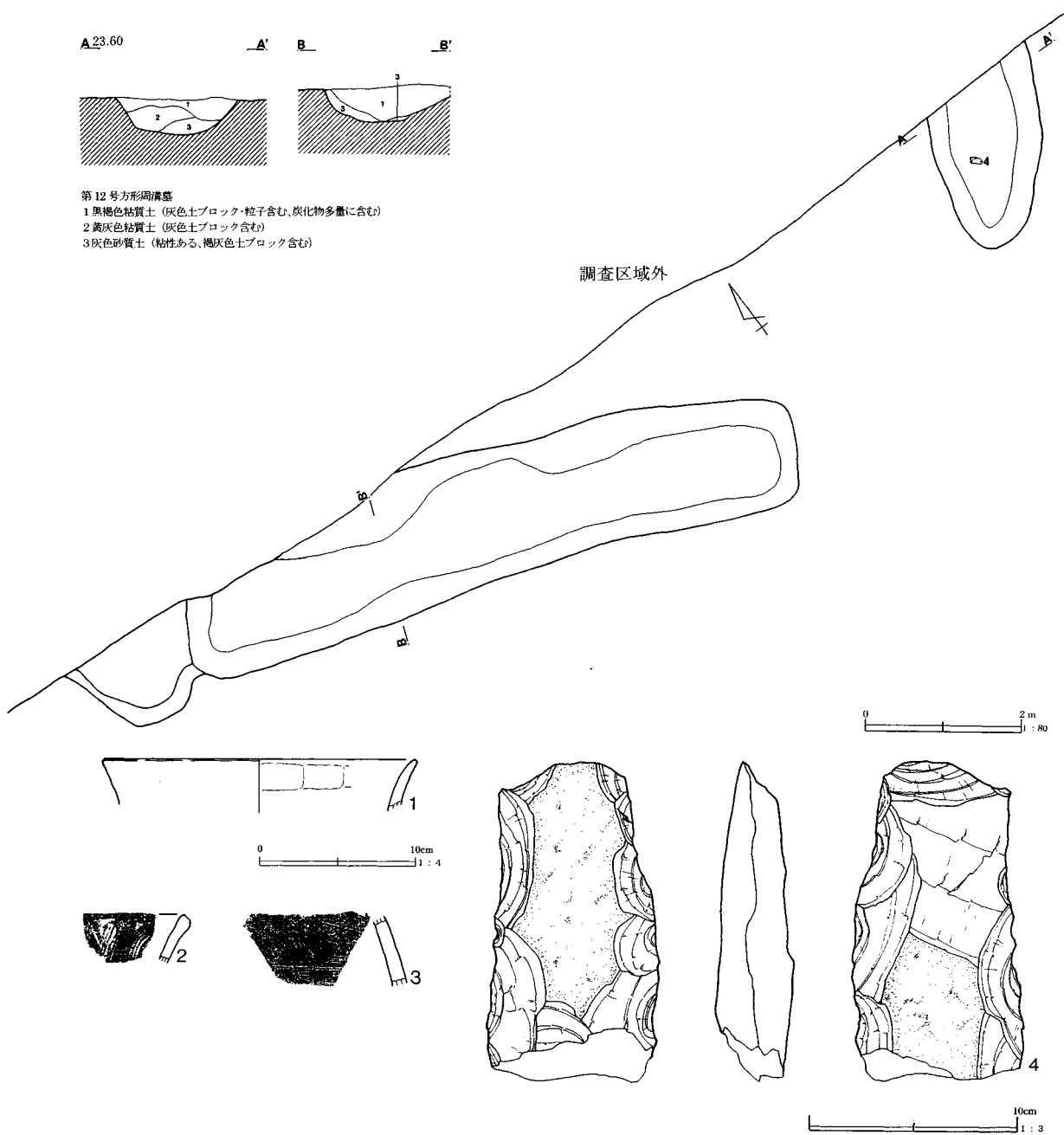
平面形は不明である。主軸方向は、およそN-31°-Eを示すと推定できる。規模も不明である。北溝と考えられる溝跡の一部が検出できただけである。

北溝の規模は、検出長3.9m、最大幅1.38m、深さ60cmを測った。方台部側の立ち上がりは、緩やかであったと推定される。埋土は自然堆積と考えられる。

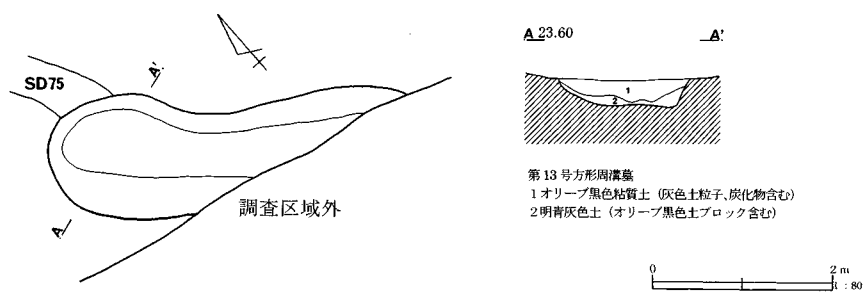
方台部は、調査区域外であり不明であった。

出土遺物は、検出できなかった。

時期は、第10～12号方形周溝墓と同時期と考えたい。



第71図 第12号方形周溝墓・出土遺物



第72図 第13号方形周溝墓

6 土器棺墓

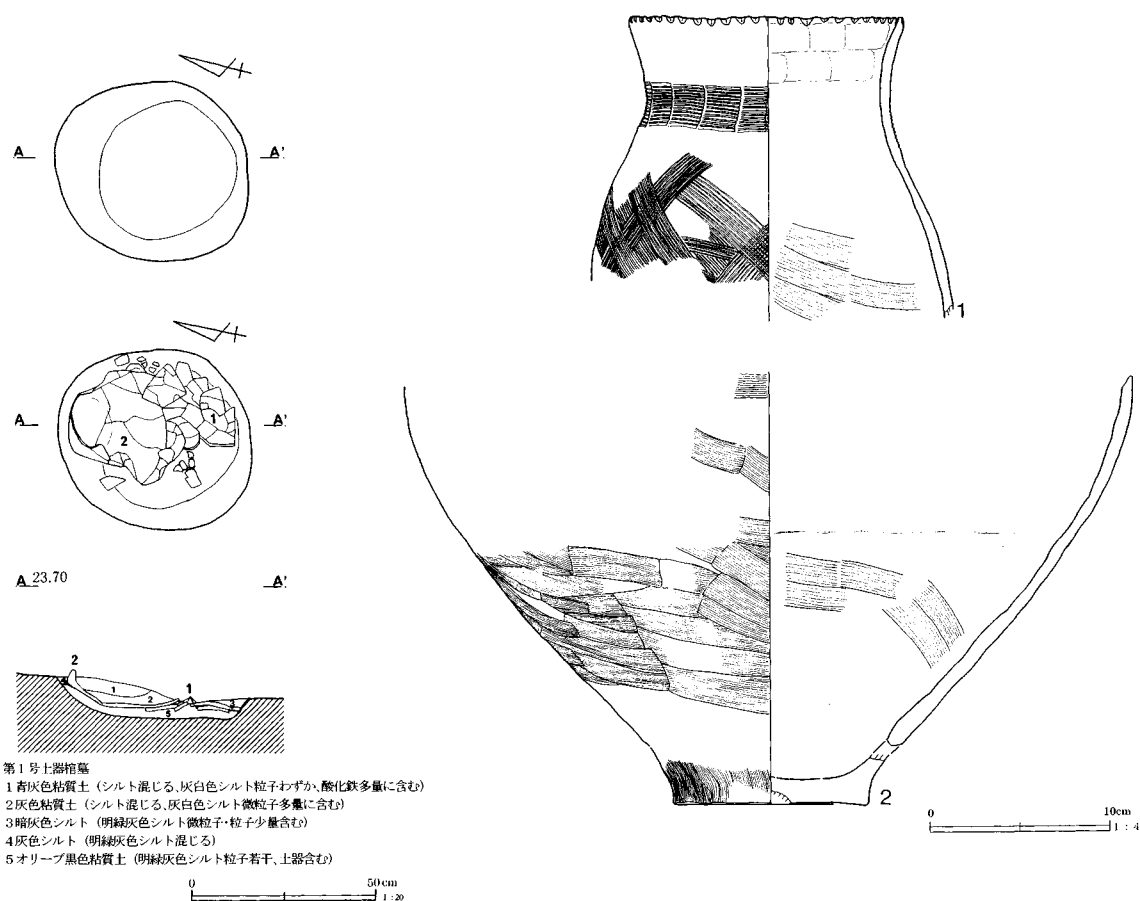
土器棺墓は、総数にして3基検出した。いずれも単棺で、時期は弥生時代中期末～後期と考えられる。第3号土器棺墓は調査区域外に接する箇所検出され、さらに重機による表土除去の際に削平してしまい詳細は不明である。また、第1号土器棺墓についても上部が大きく削平されており、唯一第2号土器棺墓が比較的良好な状態で調査できた。それぞれ近接して検出され、方形周溝墓群が所在する地区にオーバーラップして営まれていた。時期的には、方形周溝墓群と同時期かやや後出すると考えられる。

第1号土器棺墓（第73図、第40表）

38-179グリッドに位置する。第3号方形周溝墓の方台部箇所所在する。

平面形は楕円形で、規模は径56×51cm、深さ11cmを測る。

上部が大きく削平されており、床面付近のみ残存していた。墓壙内には、ほぼ床面に胴部下半を打ち欠いたキザミ口縁の弥生土器甕を倒立させて埋設しこれを棺身とし、壺の胴部を蓋として被せた状態で埋葬したと推定される状態で検出した。いずれの個体も上を向いていた半身を削平により失った状態



第73図 第1号土器棺墓・出土遺物

第40表 第1号土器棺墓出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器甕	15.2	—	—	AEKMN	にぶい橙色	B	35%	キザミ口縁。頸部櫛描簾状文。胴部交差刷毛目。内面刷毛目。やや器面荒れる。棺身用途。
2	弥生土器壺	—	—	10.6	ABGM	にぶい赤褐色	A	30%	内外面刷毛目。内面剥落著しく荒れる。棺蓋用途。

で検出されたため詳細は把握できない。

埋設土器内の埋土中及び墓壇内の埋土中には遺物及び骨片等は確認できなかった。

第2号土器棺墓（第74図、第41表）

39-180グリッドに位置する。第5号方形周溝墓と接する箇所検出された。また、第18号掘立柱建物跡と重複関係にあった。

平面形は瓢箪形で、規模は長軸83cm、短軸は大きい方の円で長さ83cm、小さい方の円で長さ49cm、深さ30cmを測った。ただし、深さについては、土器の上端確認レベルから測ると37cmを測るため、墓壇の本来の深さはこれを超える深さであったと推定できる。

表土除去の際に上部を削平してしまっているが、墓壇内には、ほぼ床面に大型の弥生土器壺が斜位に検出された。しかし、おそらく正位に埋設しこれを棺身とし、上半部を欠いた別個体の壺の胴部を蓋として覆い被せたと推定した。蓋用途の壺に関しては、底部までの個体であり、その胴部を横にして被覆したか、倒立して被覆したか不明である。

埋設土器内の埋土中及び墓壇内の埋土中には遺物及び骨片等は確認できなかった。

第41表 第2号土器棺墓出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器壺	—	—	(9.8)	ABDNM	にぶい橙色	B	45%	頸部櫛描波状文。胴上半部横位のミガキ、下半部刷毛目。内面刷毛目。器面荒れる。棺蓋用途。
2	弥生土器壺	—	—	11.5	AEGHJMN	にぶい橙色	B	70%	頸部櫛描波状文及び波状文、胴下半部縦位及び横位のミガキ。器面荒れる。棺身用途。
3	弥生土器壺	(14.7)	—	—	AEHJ	浅黄橙色	B	10%	

第3号土器棺墓（第75図、第42表）

39-179・180グリッドに位置する。調査区域外にまたがって所在する。

表土除去の際に土器が姿を表した時点で掘削を中止した。したがって、プランのほとんどを削平してしまったため平面形は不明である。図示したプランは、土器の検出状態と、偶然にも調査区域外の壁面に本遺構の土層断面が観察できたこの2点から推定したものである。壁面箇所での規模は、長さ75cm、深さ18cmを測る。遺構確認面より上部の土層堆積状態は、耕作土、灰色土、灰色粘質土でおよそ35cmの厚さをもっていた。

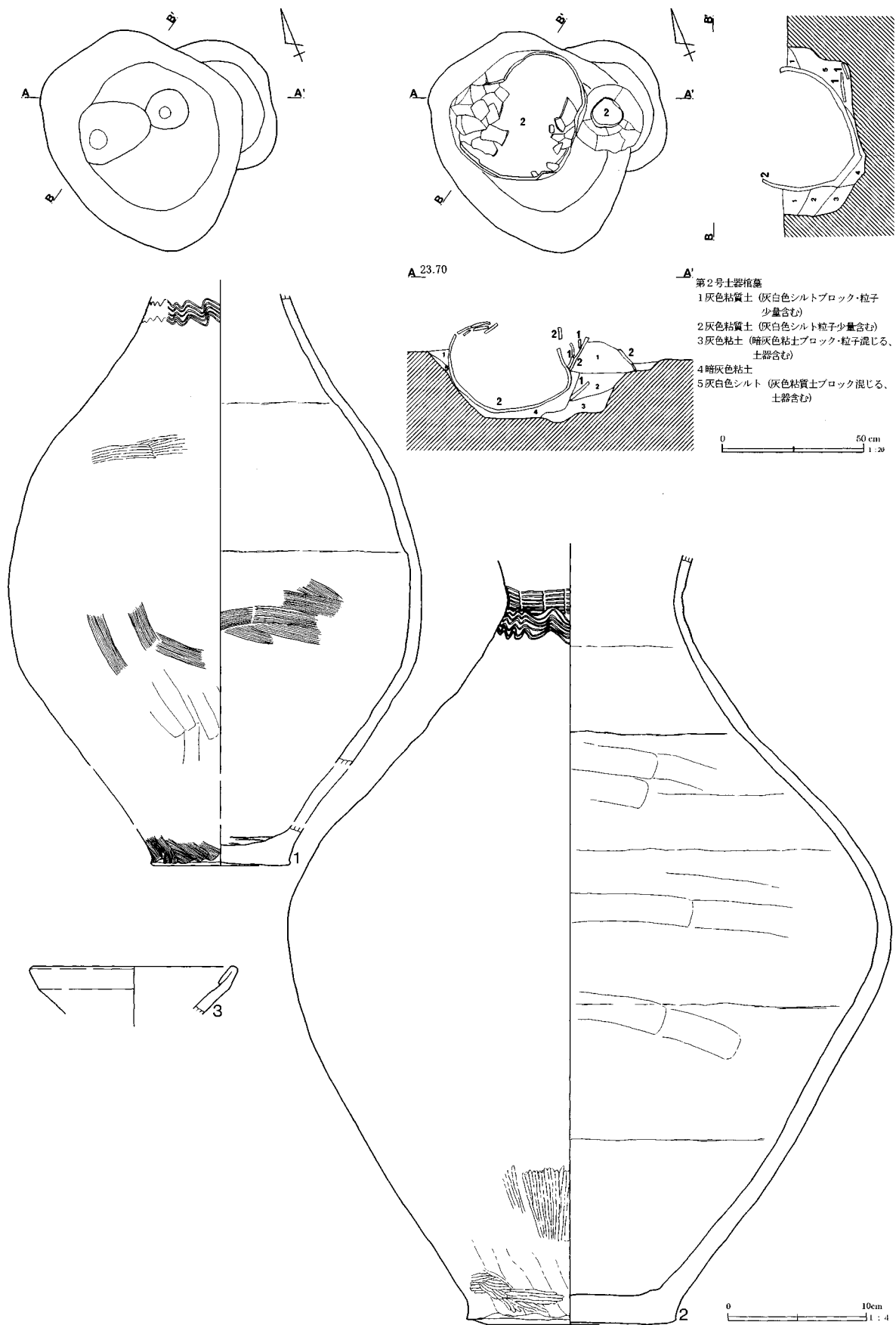
検出状態は、必ずしも明確ではないが、棺身の壺は完全に横たわった状態で検出された。一段深く掘り窪められた床面に頸部より上を打ち欠いた弥生土器壺を正位に埋設しこれを棺身とし、やはり同じく頸部より上を打ち欠いた別個体の大型の壺を蓋として被せたと推定した。この蓋用途の壺は、おそらく倒立して棺身に被せられていたと思われる。

墓壇内の埋土は自然堆積と考えられ、粘性の強い灰白色シルトを多量に含む灰色粘質土であった。

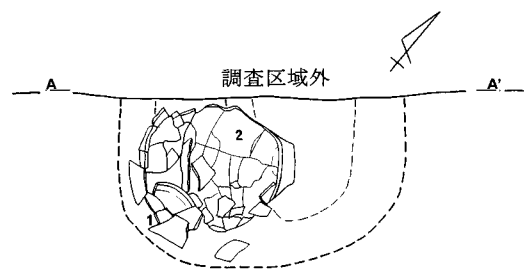
埋設土器内の埋土中及び墓壇内の埋土中には遺物及び骨片等は確認できなかった。

第42表 第3号土器棺墓出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器壺	—	—	7.8	AEGMN	にぶい橙色	A	20%	胴下半縦位のミガキ、ヘラケズリ。器面少々荒れる。棺蓋用途。
2	弥生土器壺	—	—	10.8	AEGMN	浅黄橙色	B	50%	胴中位・下半部刷毛目。内面刷毛目。棺身用途。

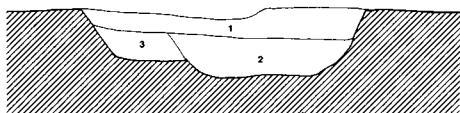


第74図 第2号土器棺墓・出土遺物



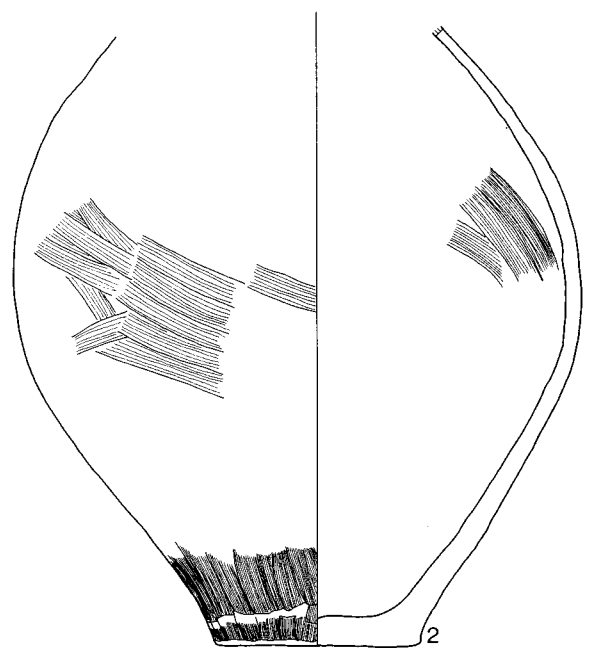
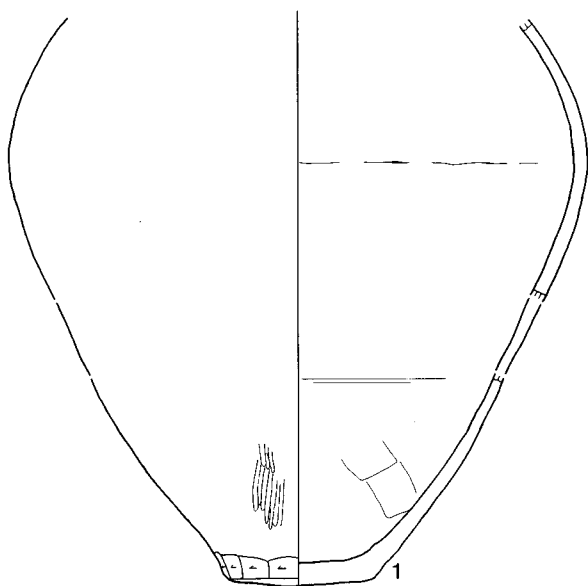
A 23.70

A' 第3号土器棺墓



- 1 灰色粘質土 (粘性強い)
- 2 灰色粘質土 (粘性強い、灰白色シルト粒子少量含む)
- 3 灰色粘質土 (灰白色シルトブロック多量を含む)

0 50cm 1:20



0 10cm 1:4

第75図 第3号土器棺墓・出土遺物

7 木棺墓

木棺墓は、総数にして1基単独で検出した。当初は、方形周溝墓の主体部ではないかと考えたが、周囲に周溝が伴わず単独の木棺墓として捉えた。この木棺墓が所在する箇所は、集中する周溝墓群から外れた位置であった。時期は弥生時代と考えられる。

第1号木棺墓（第76図、第43表）

48-180グリッドに位置する。南側の一部が調査区域外となっている。

墓壇の形状は、平面形が隅丸方形状を呈しており、規模は長軸2.2m×短軸1.5m、深さ16cm～20cmを測る。その床面は、周囲のテラス状の平坦部分から緩やかに床面に至る。主軸方向は、およそN-50°-Wを示す。

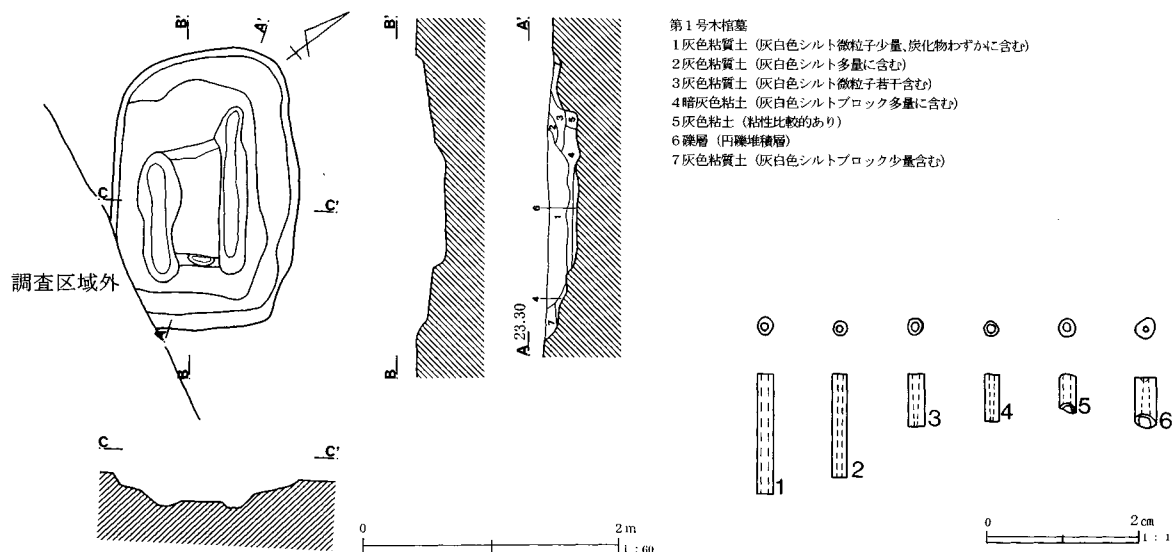
木棺は、組合せ式の箱式木棺と推定される。棺材は朽ちて検出されなかったが、底板、側板、木口板を据え付けたと思われる痕跡を墓壇の床面で検出した。木口板及び側板を立てて埋め込んだと推定される溝状の掘り込みが確認できた。また、底板の痕跡と思われる長方形の落ち込みも確認された。

この組合せ木棺については、木口板の床面据え付け部側をT字形に加工し、床板をコの字形に切り取って組み合わせたと考えられる痕跡を一方の木口箇所を確認した。もう一方には、このような痕跡が確認できなかったため、こちらの木口はただ単に木口板を立てただけのものとも考えられる。

ここで、墓壇内の木棺の痕跡を数値で示し木棺の規模を推定すると、側板の溝状掘り込みは、東側が長さ1.34m、幅20cm、西側が長さ1.03m、幅20cm～30cm、木口板の掘り込みは、長さ35cm～40cm、幅8cmであった。また、底板の痕跡は、長さ約80cm、幅35cm～40cmで小規模なものであった。したがって、木棺の内法は、長さ80cm、幅40cm～50cm、外寸は長さ1.34mの側板を使用していたと考えられる。

出土遺物は、墓壇内から長さ0.62cm～1.57cm、直径約0.23cm前後の非常に小さな碧玉製の管玉が検出された。6点の検出された内、比較的幅のある管玉は欠損していた。管玉以外の遺物は検出できなかった。

時期は、弥生時代と考えられる。



第76図 第1号木棺墓・出土遺物

第43表 第1号木棺墓出土遺物観察表

番号	器種	長さ	直径	重さ	材質	残存率	備考
1	管玉	1.57	0.245	0.2	碧玉	完形	
2	管玉	1.38	0.21	0.1	碧玉	完形	
3	管玉	0.67	0.23	0.1以下	碧玉	完形	
4	管玉	0.62	0.24	0.1以下	碧玉	完形	
5	管玉	0.49	0.23	0.1以下	碧玉	欠損	
6	管玉	0.63	0.28	0.1以下	碧玉	欠損	

8 土坑

土坑は、総数にして47基検出した。第1区で21基、第2区で14基、第3区で6基、第4区で3基、第5区で2基、第7区で1基検出し、第6区、第8区は検出できなかった。

以下、事実記載が必要と考えられるもののみを記載し、全を一覧表にして掲載する（第77～85図、第44～47表）。

第21号土坑（第78・82図、第46表）

20・21-176グリッドに位置する。一部が攪乱を受けている。

平面形はやや隅丸の二等辺三角形を呈する楕円形であり、推定長軸1.17m、短軸0.76m、深さ36cmを測る。

底面が長軸方向東から二段の掘り込みをもち緩やかに最深の底面へと落ち込む形状である。堆積土層の第2層の最上層付近を中心に弥生土器壺が検出された。埋土は自然堆積と考えられる。

出土遺物は、大型の壺と小型の壺破片が出土した。大型の壺は胴部上半を欠損していたが、復元できる良好な個体であり、外面は口縁部から胴上半部に、内面は頸部まで赤彩が施されていた。

第26号土坑（第79・83・84図、第47表）

42-171グリッドに位置する。西側は調査区域外となり、遺構はさらに延びると推定される。調査区の壁に確認され、できるだけ拡張をして調査を実施した。

平面形はやや変形した楕円形であり、検出長軸1.83m、短軸は不明、深さ35cmを測る。断面形は、箱形の掘り込みであった。埋土は自然堆積と考えられ、焼土、炭化物粒子と伴に弥生土器が検出された。また、床面直上にはマンガン層が存在した。

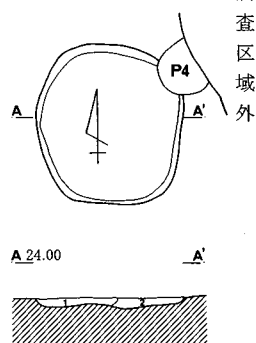
さらに、底面にいくつかのピット状の落ち込みが存在し、そのピットの中には、埋土に焼土層の上に炭化物層が堆積していたものも存在した。

出土遺物は大量に出土し、弥生土器壺破片のほか、弥生土器蓋のつまみ部破片が検出された。

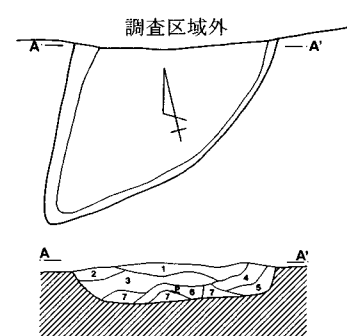
第44表 土坑一覧表

番号	位置(グリッド)	プラン	長 軸×短 軸×深 さ(cm)	出土遺物	時 期	重複関係	備 考
1	21・22-154	楕円形	134 × 120 × 8	土師器坏・甕、須恵器坏	9世紀後半	P4	
2	20・21-154	不整形	— × 156 × 32	土師器甕、須恵器坏	9世紀後半		
3	20-154・155	楕円形	(110) × 70 × 74	弥生土器甕、土師器坏・甕、須恵器坏	弥生時代か平安時代?		
4	20-156	長方形	112 × 74 × 10	なし	7世紀以降?	SJ7	
5	20-158	楕円形	112 × 66 × 20	土師器甕・須恵器坏	8世紀前半?	SD6	
6	21-159	円形	100 × 98 × 12	土師器甕、須恵器碗	9世紀後半～10世紀初?		
7	20-159・160	楕円形	145 × 78 × 18	土師器坏・甕	9世紀後半	SD4, P25	
8	20-161	長方形	118 × 100 × 40	土師器甕、須恵器甕	8世紀後半?	SD4, P27	
9	21-162	不整形	130 × 92 × 16	土師器坏・甕	7世紀後半	SD14	
10	20-162	長方形	— × 58 × 34	土師器坏・甕、須恵器蓋	8世紀前半	SE3, SD12	
11	18・19-162	楕円形	— × — × 40	なし	弥生時代以降?	SJ1	
12	21-164	長方形	— × 92 × 20	土師器甕、須恵器蓋・坏	9世紀代前半	SJ14・28	弥生土器混入。
13	20-164	不明	— × — × 22	土師器坏・甕	9世紀末?	P68	
14	20-164・165	長方形	278 × 66 × 20	なし	10世紀以降	SJ27, P70	
15	21-165	長方形	(115) × 46 × 20	なし	不明	P72	
16	20・21-166	長方形	250 × 100 × 28	弥生土器壺	弥生時代		
17	20-167	長方形	— × 84 × 20	土師器坏・甕、須恵器蓋	8世紀代?	SJ26, SD22	弥生土器混入。
18	20-167	円形	68 × 60 × 16	なし	10世紀以降	SJ26	
19	21-174・175	長方形	253 × 196 × 20	土師器坏・壺・甕	7世紀前半	SK20, SJ2	
20	20・21-174	長方形	— × (215) × 30	弥生土器壺	弥生時代	SK19	
21	20・21-176	楕円形	(117) × 76 × 36	弥生土器壺	弥生時代後期		
22	34-171・172	長方形	142 × 99 × 16	弥生土器壺・甕	8世紀以降?		遺物全て混入。
23	37・38-171	楕円形	150 × 122 × 28	なし	不明		
24	39-172	長方形	(145) × 95 × 13	なし	不明	P145	
25	39-171	長方形	152 × 116 × 84	土師器坏・甕、須恵器甕、板材	7世紀代		
26	42-171	楕円形	183 × — × 38	弥生土器蓋・壺・甕	弥生時代中期		
27	38-177	不整形	110 × 90 × 80	なし	不明		
28	38・39-177	楕円形	122 × 107 × 28	土師器甕、須恵器碗、弥生土器壺	9世紀末～10世紀初		弥生土器混入。
29	38-178	楕円形	(200) × 120 × 43	土師器甕、弥生土器壺	古墳時代?	SR3	弥生土器混入。
30	38-179・180	不整形	— × — × 35	土師器甕	古墳時代後期?	SR4	
31	39-179	楕円形	— × 74 × 20	土師器甕	古墳後期～平安時代	SB18	
32	39-179	楕円形	— × — × 10	なし	不明		
33	43-180	楕円形	(140) × 103 × 48	なし	弥生時代後期以降?	SR8	
34	43-180	楕円形	100 × 52 × 30	石核	弥生時代後期以降?	SR8	
35	47-179	円形	(175) × — × 42	なし	不明		
36	21-185・186	長方形	(360) × 175 × 40	なし	中世		
37	27-188	長方形	210 × 142 × 32	なし	中世		
38	28-188	長方形?	— × — × 30	土師器坏・甕	中世?		
39	38-189・190	楕円形	187 × 153 × 32	なし	中世		
40	38-191・192	長方形	440 × 240 × 50	なし	不明	SD62	
41	39-192・193	不整形	— × — × 48	なし	不明	SD62	
42	19-194・195	長方形	506 × 159 × 24	土師器高坏・坏・甕・台付甕、須恵器甕	6～7世紀	SJ20・21	
43	21・22-195	楕円形	100 × (90) × 24	なし	奈良・平安時代?		
44	20-195・196	楕円形	106 × 80 × 14	なし	奈良・平安時代?		
45	14-15-199・200	楕円形	167 × (100) × 20	なし	古墳時代後期?		
46	15-201	長方形	154 × — × 12	なし	古墳時代後期?		
47	67・68-191	長方形	133 × 80 × 39	なし	不明		

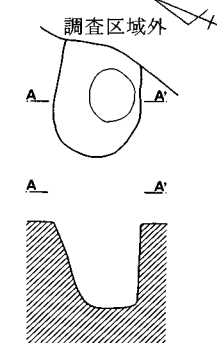
第1号土坑



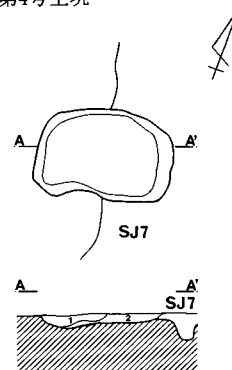
第2号土坑



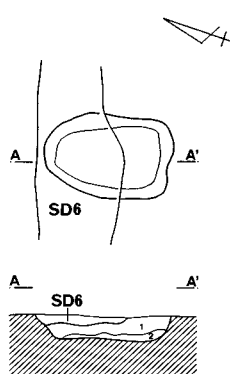
第3号土坑



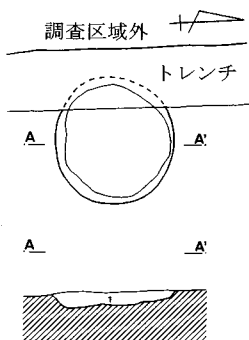
第4号土坑



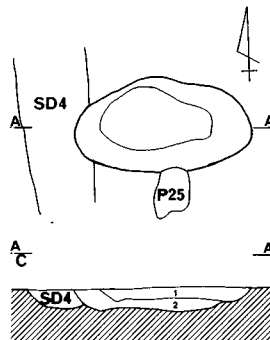
第5号土坑



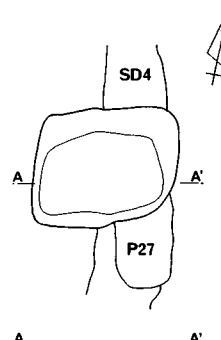
第6号土坑



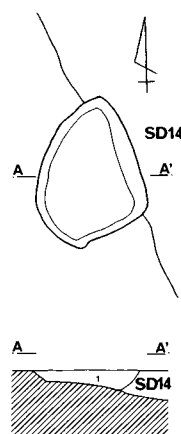
第7号土坑



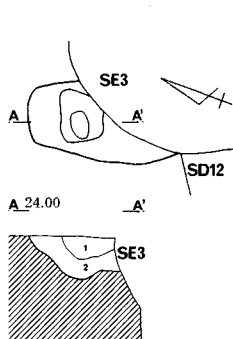
第8号土坑



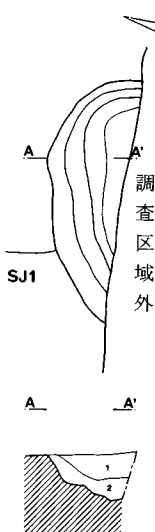
第9号土坑



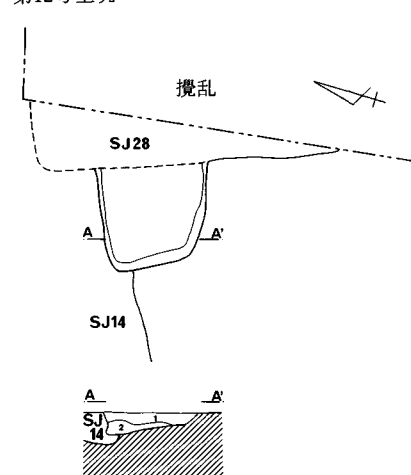
第10号土坑



第11号土坑



第12号土坑



第1号土坑

- 1 灰色土 (シルト質、暗灰色土粒子少量、酸化鉄多量に含む)
- 2 灰色土 (灰白色土ブロック、酸化鉄多量に含む)

第2号土坑

- 1 灰色土 (酸化鉄、火山灰多量、焼土、炭化物若干含む)
- 2 灰色土 (酸化鉄、火山灰多量に含む)
- 3 灰色土 (酸化鉄、火山灰多量、焼土、炭化物少量含む)
- 4 灰色土 (黄褐色土粒子、酸化鉄多量、焼土、炭化物多量に含む)
- 5 灰色土 (酸化鉄、火山灰多量、炭化物若干含む)
- 6 灰色土 (焼土、炭化物多量に含む)
- 7 黄褐色土 (灰色土粒子多量に含む)

第4号土坑

- 1 灰色土 (黄褐色土ブロック少量、酸化鉄、火山灰多量に含む)
- 2 灰色土 (酸化鉄、火山灰多量、焼土、炭化物若干含む)

第5号土坑

- 1 灰色土 (黄褐色土ブロック、酸化鉄多量に含む)
- 2 灰色土 (黄褐色土ブロック若干含む)

第6号土坑

- 1 灰色土 (灰白色土ブロック、酸化鉄多量に含む)

第7号土坑

- 1 灰色土 (灰白色土粒子若干、酸化鉄、火山灰少量含む)

第8号土坑

- 1 灰色土 (灰白色土粒子少量、酸化鉄、火山灰多量に含む)
- 2 灰色土 (酸化鉄、火山灰多量に含む)
- 3 灰色土 (黄褐色土粒子若干、酸化鉄多量に含む)
- 4 灰色粘質土
- 5 噴砂

第9号土坑

- 1 灰色土 (灰白色土ブロック、酸化鉄少量含む)

第10号土坑

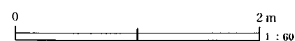
- 1 灰色土 (浅黄色土ブロック多量、焼土、炭化物含む)
- 2 灰色土 (灰白色土粒子、酸化鉄多量、焼土、炭化物若干含む)

第11号土坑

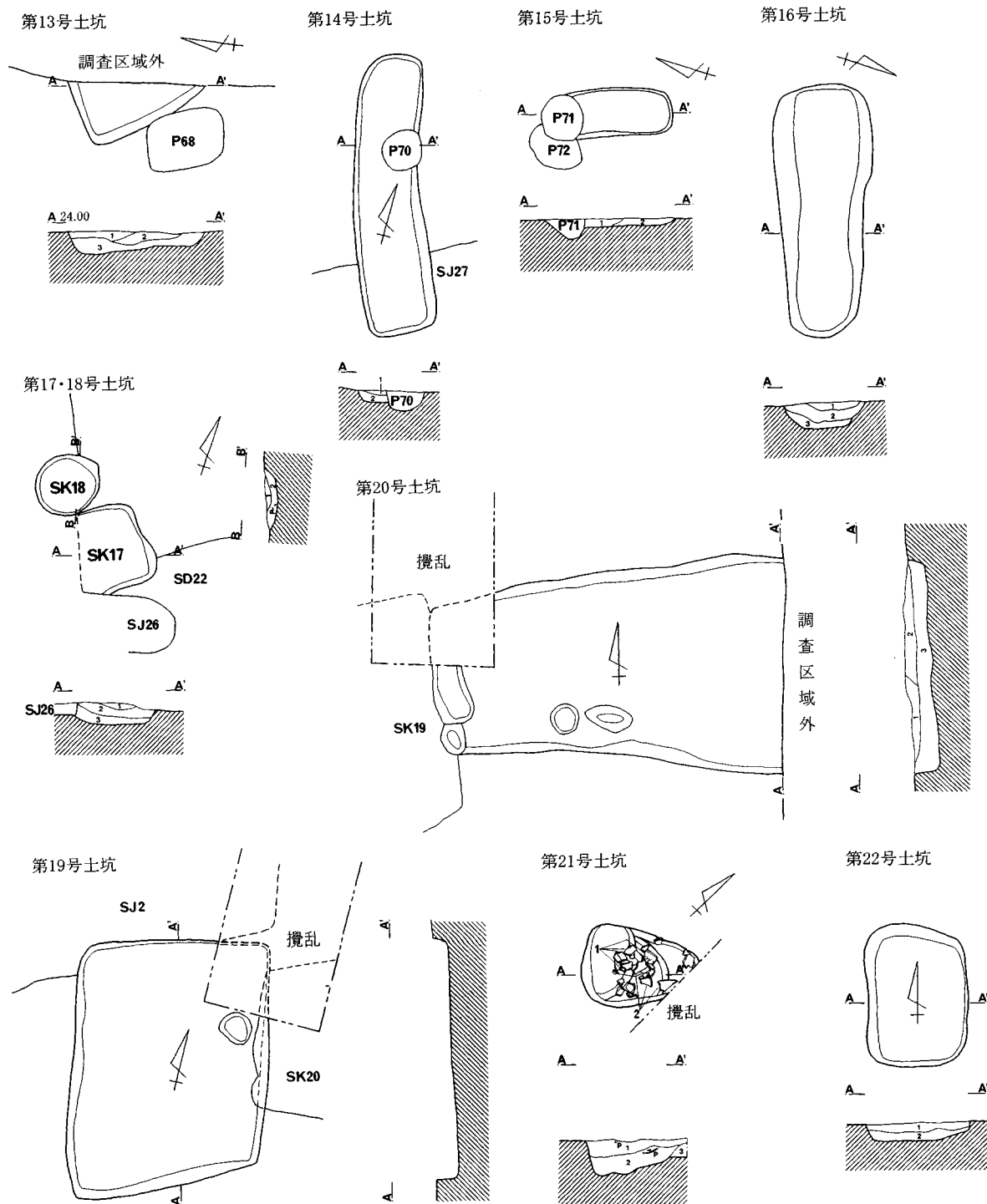
- 1 灰色土 (黄褐色土ブロック若干、酸化鉄多量に含む)

第12号土坑

- 1 灰色土 (黄褐色土粒子少量、酸化鉄多量、炭化物、焼土ブロック若干含む)
- 2 灰色土 (黄褐色土ブロック多量に含む)



第77図 第1～12号土坑



第13号土坑

- 1 灰色土 (酸化鉄、火山灰多量、焼土若干含む)
- 2 灰色土 (オリブ黄色土粒子少量、酸化鉄ブロック、火山灰多量を含む)
- 3 灰色土 (灰白色土ブロック、オリブ黄色土ブロック多量、酸化鉄ブロック若干含む)

第14号土坑

- 1 灰色土 (酸化鉄多量を含む)
- 2 灰色土 (酸化鉄、火山灰多量を含む)

第15号土坑

- 1 灰色土 (灰色土ブロック状に混じる、酸化鉄多量を含む)
- 2 灰色土 (灰色土ブロック状に混じる、酸化鉄多量を含む)

第16号土坑

- 1 灰色土 (酸化鉄、火山灰多量を含む)
- 2 灰色土 (酸化鉄多量を含む)
- 3 灰色土 (灰色土ブロック状に混じる)

第17号土坑

- 1 灰色土 (酸化鉄多量を含む)
- 2 黄灰色土 (黄褐色土ブロック状に混じる、酸化鉄多量、焼土、炭化物若干含む)
- 3 灰色土 (灰色土ブロック状に混じる、炭化物わずかに含む)

第18号土坑

- 1 灰色土 (酸化鉄多量、焼土、炭化物若干含む)
- 2 灰色土 (灰色土ブロック状に混じる、酸化鉄多量を含む)

第20号土坑

- 1 灰白色土 (灰色土ブロック状に混じる、酸化鉄多量を含む)
- 2 灰色土 (灰色土ブロック状に混じる、酸化鉄多量を含む)
- 3 灰色土 (灰色土ブロック状に混じる、酸化鉄若干含む)

第21号土坑

- 1 灰色土 (シルト質、灰白色土ブロック多量を含む)
- 2 灰色土 (シルト質、灰白色土粒子、酸化鉄多量を含む)
- 3 灰色土 (シルト質、灰色土、灰白色土粒子わずかに含む)

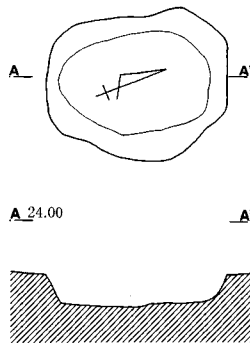
第22号土坑

- 1 褐色粘質土 (しり強い、粘性弱い、パミス少量、酸化鉄多量を含む)
- 2 暗灰色粘質土 (しり強い、粘性弱い、パミス若干、焼土、炭化物少量含む)

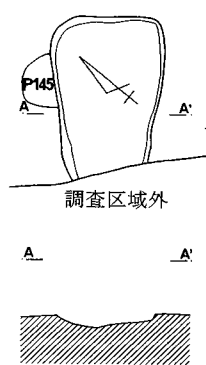
0 2m
1:60

第78図 第13~22号土坑

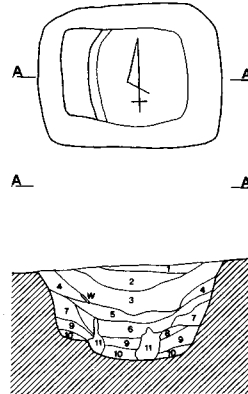
第23号土坑



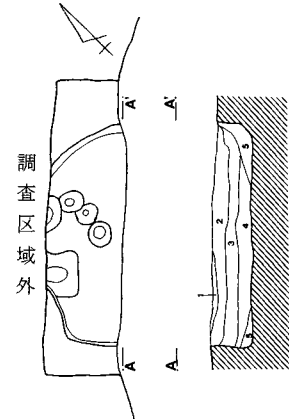
第24号土坑



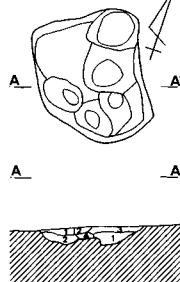
第25号土坑



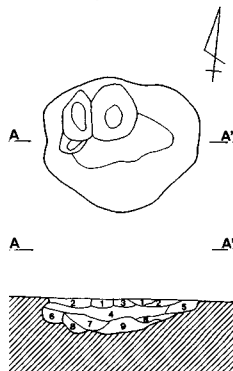
第26号土坑



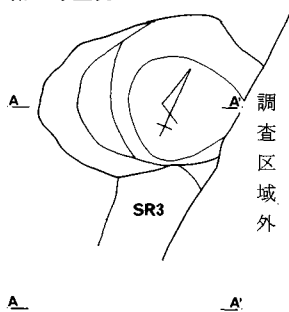
第27号土坑



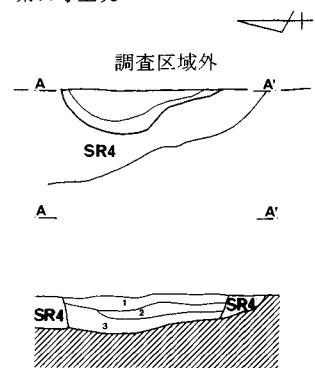
第28号土坑



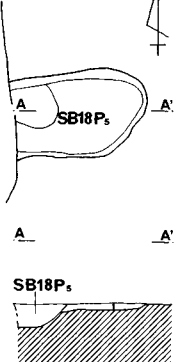
第29号土坑



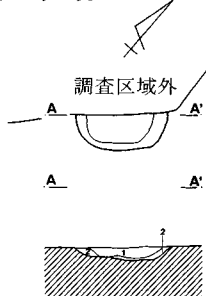
第30号土坑



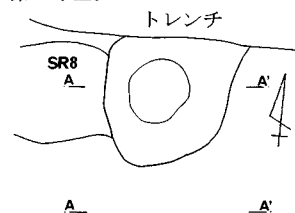
第31号土坑



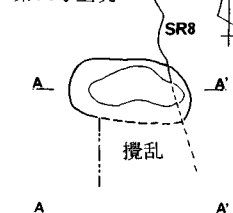
第32号土坑



第33号土坑



第34号土坑



第23号土坑

- 1 灰色粘質土 (かたくしめる、灰白色シルトブロック多量に含む)
- 2 オリーブ黒色粘質土 (腐敗植物片若干含む)
- 3 黒色粘質土 (灰白色シルトブロック若干、腐敗植物片少量含む)
- 4 灰色粘質土 (灰白色シルト非常に多く混じる)
- 5 灰色粘土 (粘性比較的あり、腐敗植物片多量に含む)
- 6 灰色粘土 (腐敗植物片若干含む)
- 7 灰色粘土 (灰白色シルト帯状に含む)
- 8 灰色粘土 (粘性強い、明緑灰色粘土粒子少量含む)
- 9 灰色粘土 (粘性比較的強い、灰白色シルト帯状に含む)
- 10 灰色粘土 (粘性非常に強い、明緑灰色粘土粒子若干含む)
- 11 攪乱

第26号土坑

- 1 オリーブ黒色土 (酸化鉄非常に多く含む)
- 2 灰色土 (淡黄色土ブロック・粒子若干、酸化鉄多量、土器含む)
- 3 暗灰色土 (暗青灰色土ブロック、酸化鉄多量、炭化物、土器含む)
- 4 青灰色シルト (淡黄色土粒子・微粒子非常に多く含む)
- 5 灰色粘質土 (淡黄色土ブロック・粒子若干、酸化鉄少量含む)
- 1 灰白色砂質土 (灰色粘土粒子少量混じる、酸化鉄多量に含む)
- 2 灰色土 (灰白色砂質土ブロック・粒子若干、酸化鉄、火山灰若干含む)
- 3 灰色土 (灰白色砂質土粒子若干、火山灰少量、酸化鉄多量に含む)
- 4 暗灰色土 (灰白色砂質土混じる)

第27号土坑

- 1 灰白色砂質土 (灰色粘土粒子若干、酸化鉄多量に含む)
- 2 灰色粘質土 (灰白色砂質土ブロック若干、酸化鉄多量に含む)
- 3 オリーブ黒色土 (酸化鉄多量に含む)
- 4 灰色粘土 (灰白色砂質土粒子若干、酸化鉄ごくわずか、炭化物含む)

第29号土坑

- 5 灰色粘土 (明緑灰色シルトブロック若干、酸化鉄ごくわずか含む)
- 6 灰色粘土 (灰色粘土ブロック少量、酸化鉄若干含む)
- 7 灰色粘土 (灰色粘土粒子若干含む)
- 8 暗灰色粘土 (若干砂質、灰色粘土粒子若干、機土含む)
- 9 灰色粘土 (酸化鉄若干含む)
- 1 灰色粘質土 (灰白色土微粒子若干、炭化物わずかに含む)
- 2 灰色粘質土 (灰白色シルト微粒子少量含む)
- 3 青灰色粘質土 (灰白色シルト多量に混じる)
- 4 暗灰色粘土 (灰白色シルトブロック・粒子少量、炭化物若干含む)
- 5 灰色粘土 (粘性強い、灰白色粘土粒子若干、炭化物粒子多量に含む)

第30号土坑

- 1 灰色粘質土
- 2 オリーブ黒色粘質土 (粘性1層より強い)
- 3 暗灰色粘質土 (床直付近に明緑灰色シルト粒子含む)
- 1 灰色粘質土 (灰白色シルト微粒子少量含む)

第32号土坑

- 1 灰色粘質土 (灰白色シルト微粒子少量、炭化物わずかに含む)
- 2 灰色粘質土 (灰白色シルト多量に含む)

第33号土坑

- 1 青灰色粘質土 (かたくしめる)
- 2 灰色粘質土 (かたくしめる、青灰色粘質土ブロック・粒子少量含む)
- 3 灰色粘質土 (灰白色シルト粒子若干、炭化物含む)
- 4 明オリーブ灰色シルト (灰色粘質土多量に混じる)
- 5 暗青灰色粘土 (明緑灰色シルトブロック・粒子多量に含む)
- 6 明緑灰色シルト
- 7 暗灰色粘土 (粘性強い、明緑灰色シルト粒子若干含む)

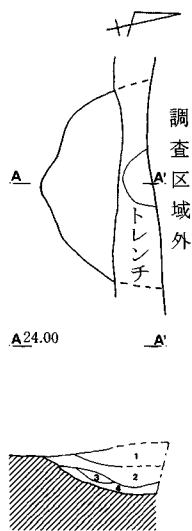
第34号土坑

- 1 灰色粘質土 (シルト感あり、灰白色シルト粒子多量に含む)
- 2 暗青灰色粘質土 (灰白色シルトブロック・粒子多量に含む)
- 3 灰色シルト (灰色粘質土ブロック、灰白色シルト粒子非常に多く含む)
- 4 明緑灰色シルト (灰色粘質土粒子若干含む)

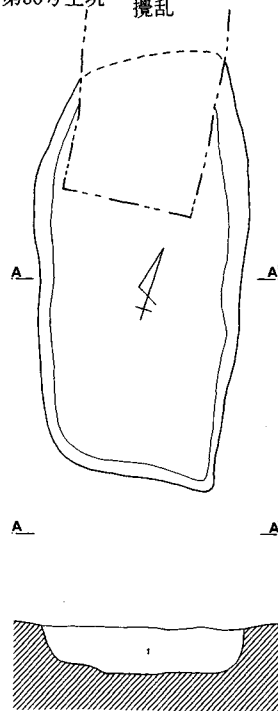


第79図 第23~34号土坑

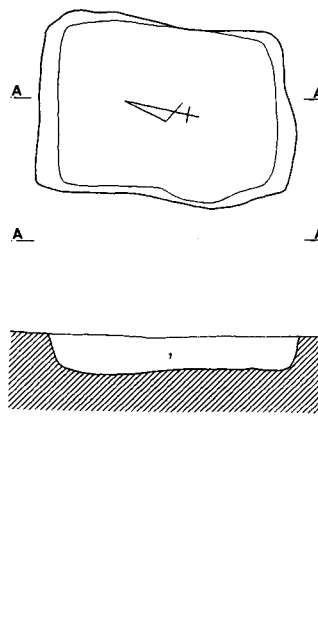
第35号土坑



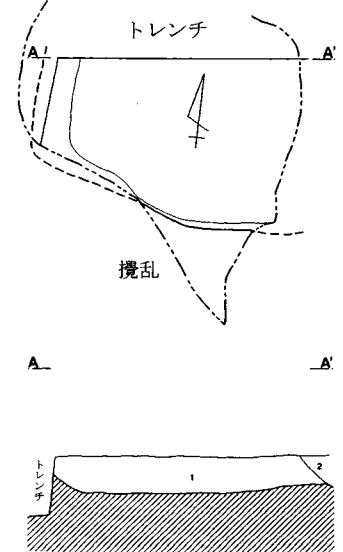
第36号土坑



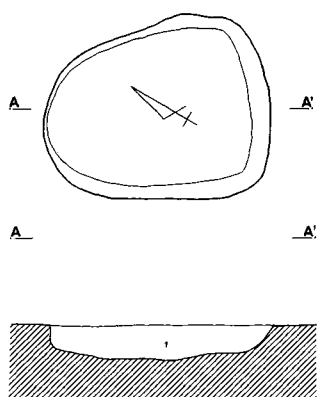
第37号土坑



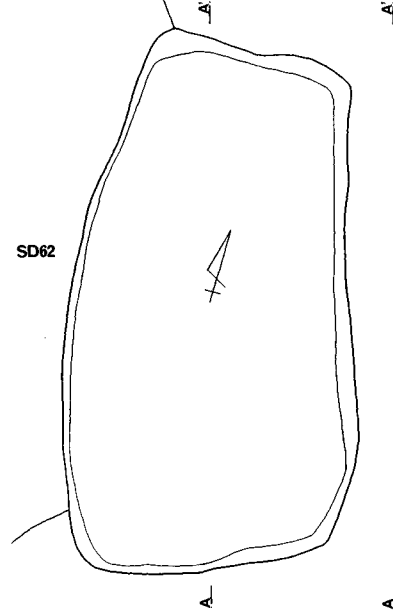
第38号土坑



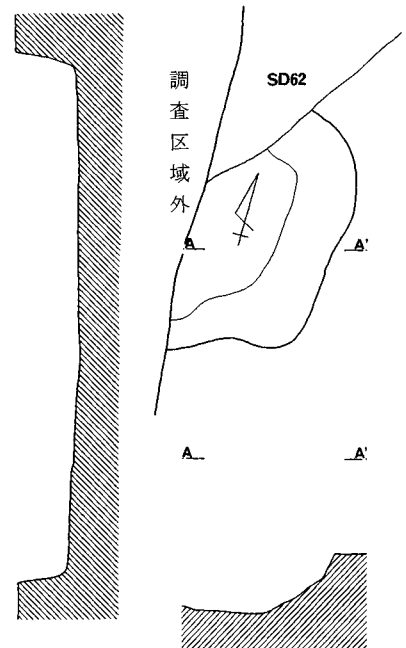
第39号土坑



第40号土坑



第41号土坑



第35号土坑

- 1 灰色粘土
- 2 灰色粘土 (灰白色シルト粒子若干含む)
- 3 灰色粘土 (灰白色シルトブロック若干含む)
- 4 暗灰色粘土 (明緑灰色シルトブロック多量に含む)

第36号土坑

- 1 黒灰色シルト (埋め戻し土、しまり強い、粘性弱い、灰色粘土ブロック、橙褐色砂ブロック、酸化鉄多量に含む)

第37号土坑

- 1 黒灰色シルト (しまり強い、粘性弱い、灰色粘土ブロック、黒色土、白色粒子、酸化鉄多量に含む)

第38号土坑

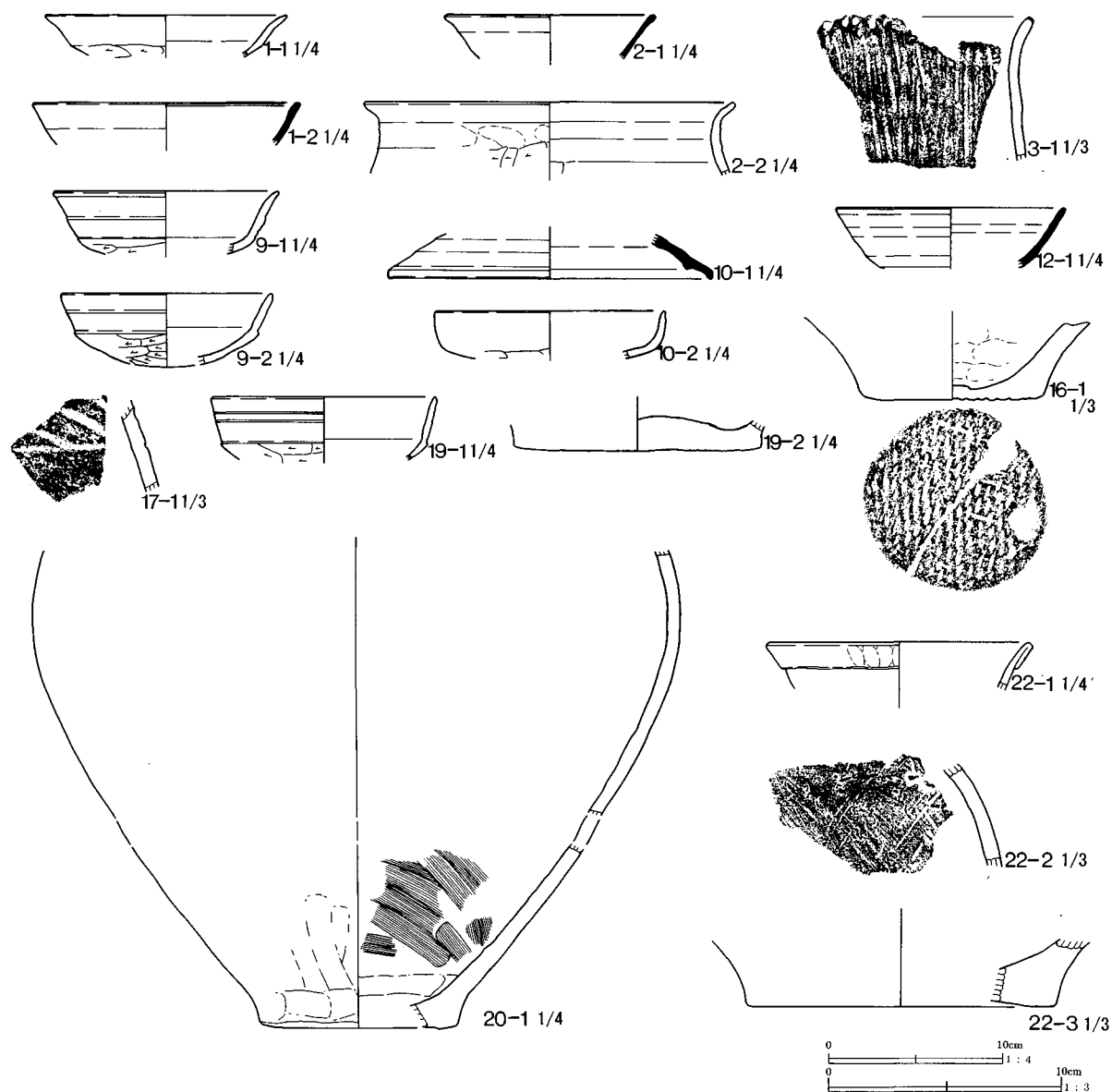
- 1 暗灰色粘質土 (しまり強い、粘性弱い、灰色粘土ブロック、火山灰多量に含む)
- 2 攪乱

第39号土坑

- 1 黒灰色粘質土 (しまり強い、粘性弱い、灰色粘土ブロック、橙褐色砂ブロック、火山灰多量、酸化鉄少量含む)

0 2 m
1 : 60

第80図 第35～41号土坑

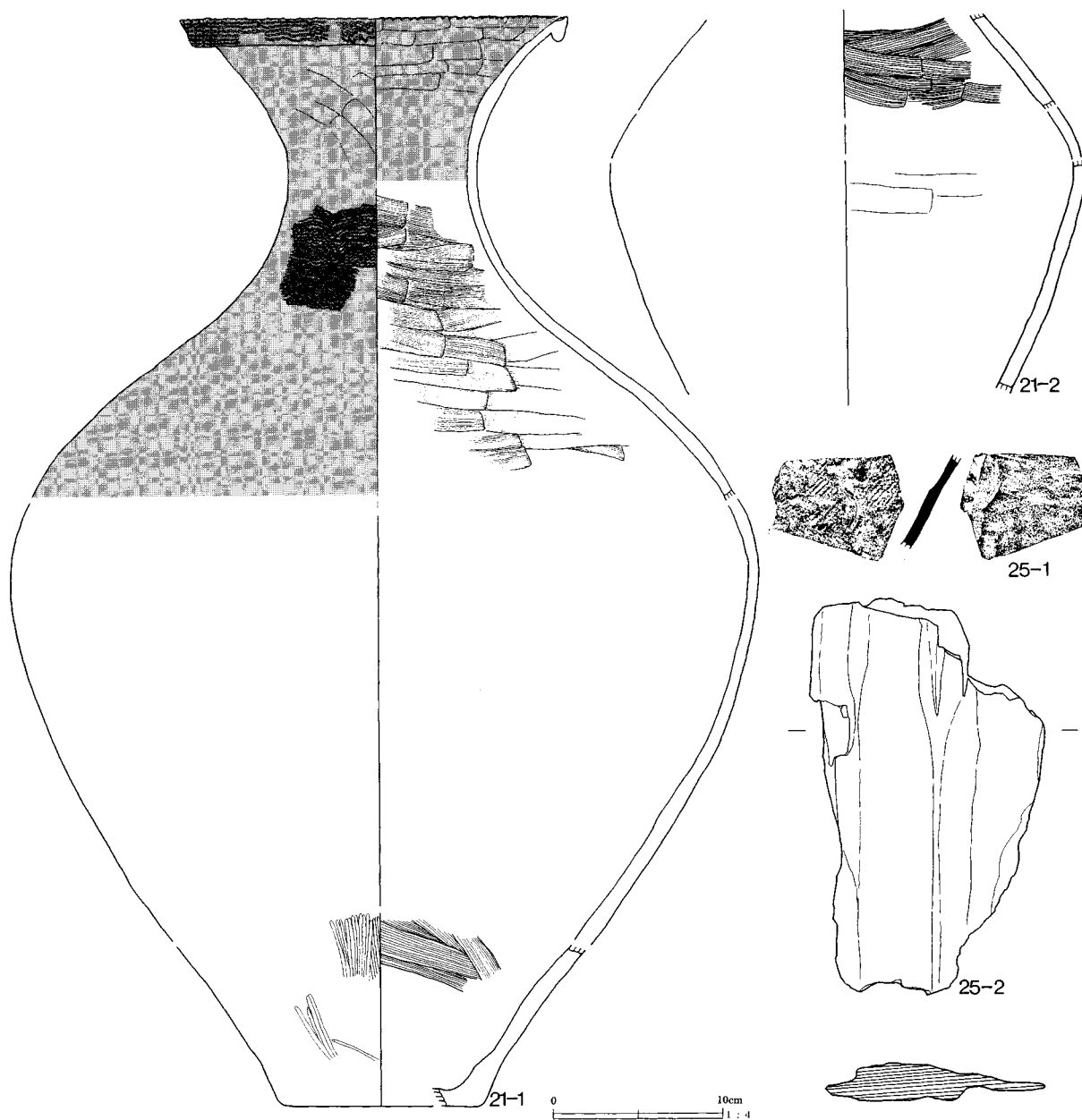


第81図 第1～3・9・10・12・16・17・19・20・22号土坑出土遺物

第45表 第1～3・9・10・12・16・17・19・20・22号土坑出土遺物観察表

番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	色 調	焼成	残存率	備 考
1-1	土師器坏	(14.0)	—	—	ADHJ	にぶい橙色	C	10%	南比企産。
1-2	須恵器坏	(15.1)	—	—	ABF	灰黄色	A	10%以下	
2-1	須恵器坏	(12.0)	—	—	ABGH	灰白色	A	10%以下	
2-2	土師器甕	(21.2)	—	—	AEJK	橙色	A	10%以下	
3-1	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい赤褐色	—	口縁部	キザミ口縁。条痕文。
9-1	土師器坏	(12.8)	—	—	AHJK	灰褐色	A	15%	末野産。
9-2	土師器坏	(12.2)	—	—	AHKM	黒褐色	A	15%	
10-1	須恵器蓋	(18.5)	—	—	ABHKL	灰色	A	10%以下	
10-2	土師器坏	(12.2)	—	—	AHJKM	にぶい橙色	B	10%	
12-1	須恵器坏	(13.0)	—	(8.3)	AF	灰色	A	15%	南比企産。
16-1	弥生土器壺	—	—	7.7	—	黒褐色	—	底部	網代痕。
17-1	弥生土器壺	—	—	—	—	橙色	—	胴部	沈線文。
19-1	土師器坏	(12.8)	—	—	AHJM	にぶい橙色	B	15%	
19-2	土師器甕	—	—	(14.2)	ABEGHJMN	橙色	A	10%以下	

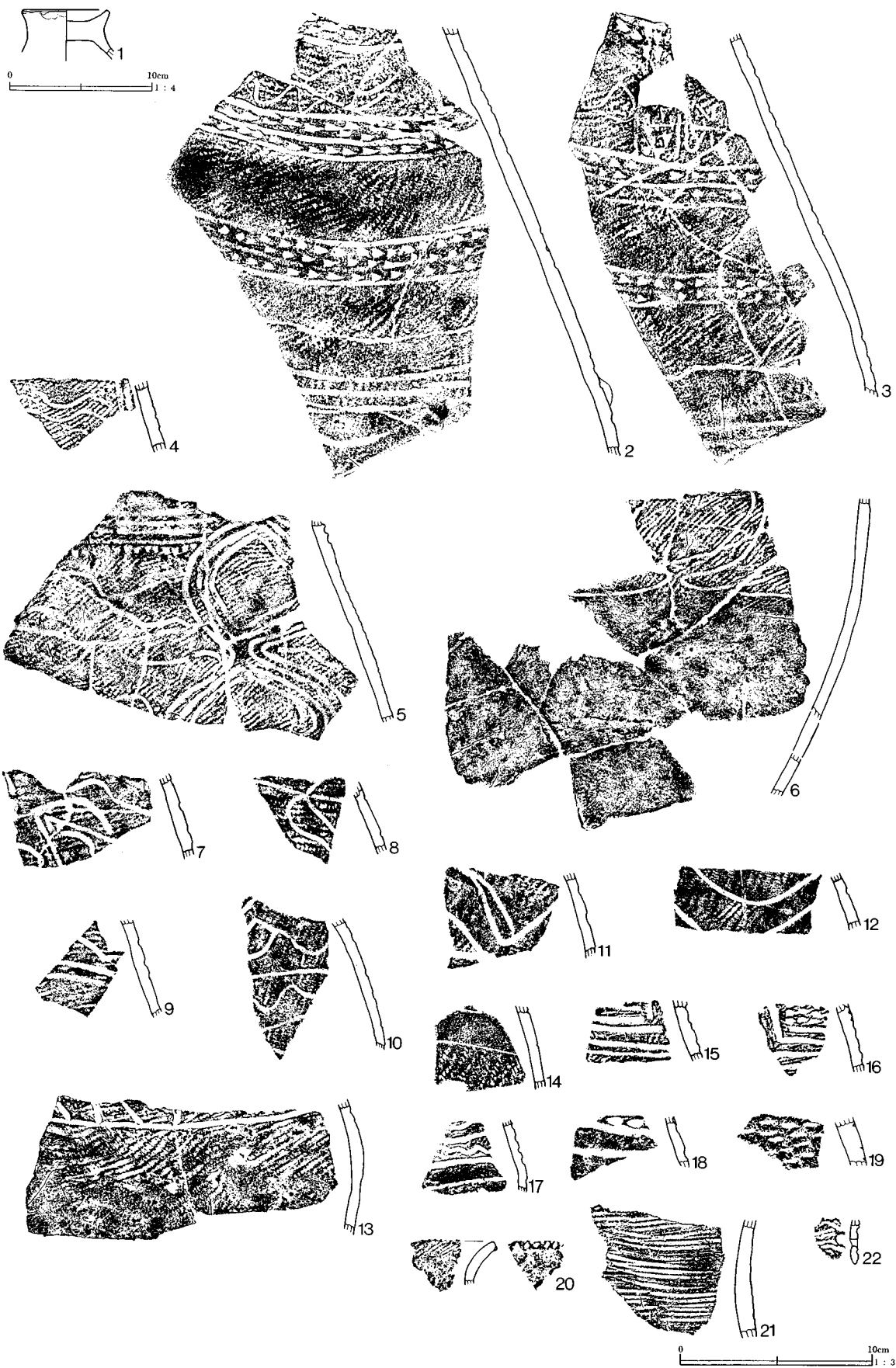
番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	色 調	焼成	残存率	備 考
20-1	弥生土器壺	—	—	(11.2)	AEGMN	にぶい橙色	A	20%	胴部内外面摩滅。 交差刷毛目。
22-1	弥生土器壺	(15.0)	—	—	AEHJM	浅黄橙色	A	10%以下	
22-2	弥生土器甕	—	—	—	—	褐灰色	—	胴部	
22-3	弥生土器壺	—	—	(13.4)	—	橙色	—	底部	



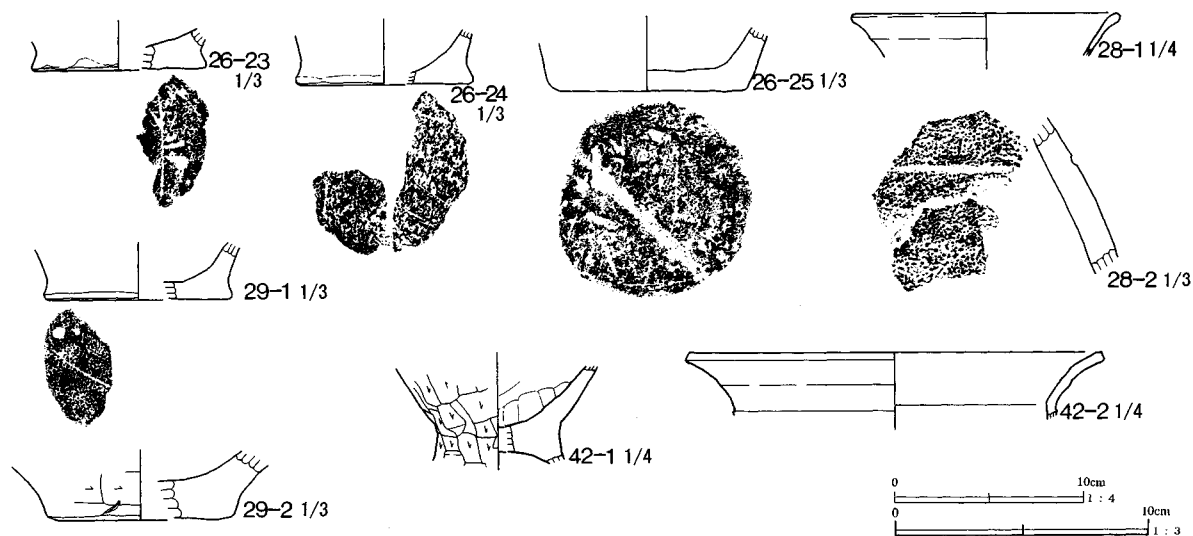
第82図 第21・25号土坑出土遺物

第46表 第21・25号土坑出土遺物観察表

番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	色 調	焼成	残存率	備 考
21-1	弥生土器壺	23.0	—	(12.0)	ABEHN	にぶい黄橙色	A	30%	キザミ口縁。口縁部及び頸部櫛波状文、胴下半部縦位のミガキ。内面刷毛目。頸部内面から胴上半部外面赤彩。
21-2	弥生土器壺	—	—	—	AEGHN	にぶい褐色	C	20%	内面刷毛目。器面荒れる。
25-1	須恵器甕	—	—	—	ABHN	灰色	A	胴部	外面平行叩き目。内面あて具痕及び指ナデ。
25-2	板材	長さ20.7	幅13.0	厚さ2.3	—	—	—	—	板目取り。用途不明。



第83图 第26号土坑出土遺物

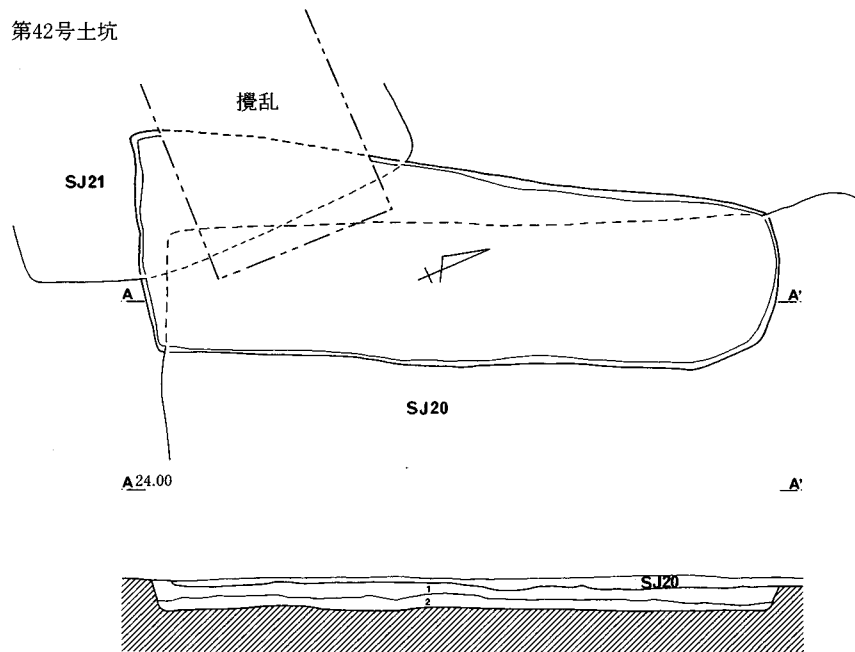


第84図 第26・28・29・42号土坑出土遺物

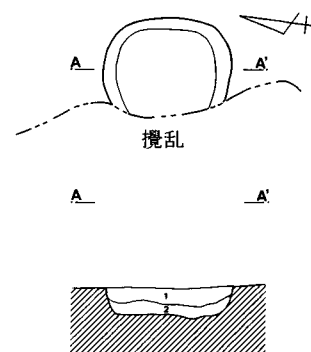
第47表 第26・28・29・42号土坑出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
26-1	弥生土器蓋	—	—	—	—	橙色	—	つまみ部	頭部沈線文間に刺突文、波状沈線文。胴上半部沈線文間に刺突文、L R縄文。胴中位沈線文間にL R縄文、結接点にこぶ状貼付文の弧状沈線文。
26-2	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄褐色	—	頸部～胴部	
26-3	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄褐色	—	胴部	2 とほぼ同じ。但し、頸部縦位の沈線文内に刺突文、これを中心にして左右に突起状沈線文。
26-4	弥生土器壺	—	—	—	—	明赤褐色	—	胴部	地文L R縄文。波状沈線文。
26-5	弥生土器壺	—	—	—	—	明赤褐色	—	頸部～胴部	地文L R縄文。8の字状沈線文。刺突文。
26-6	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい赤褐色	—	胴部	地文L R縄文。沈線文。
26-7	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい橙色	—	胴部	沈線文。
26-8	弥生土器壺	—	—	—	—	橙色	—	胴部	地文L R縄文。沈線文。
26-9	弥生土器壺	—	—	—	—	赤褐色	—	胴部	地文L R縄文。沈線文。
26-10	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい橙色	—	胴部	地文L R縄文。沈線文。
26-11	弥生土器壺	—	—	—	—	灰黄褐色	—	胴部	地文にL R縄文。波状沈線文。
26-12	弥生土器壺	—	—	—	—	灰黄褐色	—	胴部	地文L R縄文。沈線文。
26-13	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい橙色	—	胴部	地文R L縄文。沈線文。
26-14	弥生土器壺	—	—	—	—	灰黄褐色	—	胴部	沈線文区画内にL R縄文。
26-15	弥生土器壺	—	—	—	—	褐灰色	—	頸部	沈線による重ね文。
26-16	弥生土器壺	—	—	—	—	橙色	—	頸部	沈線による重ね文区画内に刺突文。
26-17	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい橙色	—	胴部	沈線文。
26-18	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい橙色	—	頸部	刺突文。沈線文。
26-19	弥生土器壺	—	—	—	—	明黄褐色	—	胴部	ヘラ状工具による刺突文。
26-20	弥生土器甕	—	—	—	—	褐色	—	口縁部	キザミ口縁。口縁端部内面L R縄文。
26-21	弥生土器甕	—	—	—	—	橙色	—	胴部	条痕文。
26-22	弥生土器壺	—	—	—	—	橙色	—	—	貼付文。
26-23	弥生土器壺	—	—	(6.5)	—	にぶい橙色	—	底部	木葉痕。
26-24	弥生土器壺	—	—	(6.2)	—	橙色	—	底部	木葉痕。
26-25	弥生土器壺	—	—	7.3	—	にぶい赤褐色	—	底部	木葉痕。
28-1	須恵器碗	(14.2)	—	—	AEHMN	橙色	C	10%以下	末野産。
28-2	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい橙色	—	胴部	沈線文。
29-1	弥生土器壺	—	—	(7.4)	—	橙色	—	底部	木葉痕。
29-2	弥生土器壺	—	—	(7.4)	—	灰黄色	—	底部	
42-1	土師器高坏	—	—	—	AEHMN	灰黄褐色	A	10%	
42-2	土師器甕	(21.9)	—	—	ABCM	灰黄色	B	10%以下	

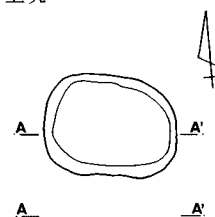
第42号土坑



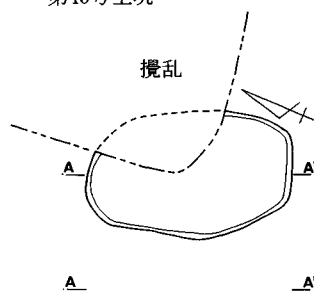
第43号土坑



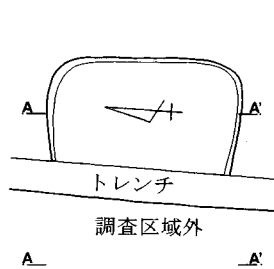
第44号土坑



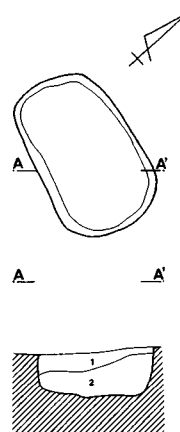
第45号土坑



第46号土坑



第47号土坑



第42号土坑

- 1 オリーブ黒色粘質土 (しまり強い、粘性弱い、白色粒子少量、酸化鉄多量を含む)
- 2 暗青灰色粘質土 (しまり強い、粘性弱い、焼土、炭化物若干、酸化鉄多量を含む)

第43号土坑

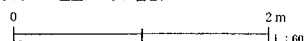
- 1 オリーブ黒色粘質土 (しまり強い、粘性弱い、白色粒子若干、酸化鉄多量を含む)
- 2 暗青灰色粘質土 (しまり強い、粘性弱い、白色粒子若干、酸化鉄多量を含む)

第44号土坑

- 1 オリーブ黒色粘質土 (しまり強い、粘性弱い、焼土、炭化物少量、酸化鉄多量を含む)

第47号土坑

- 1 黒色土 (灰オリーブ色土粒子含む)
- 2 黒色土 (灰オリーブ色土ブロック含む)



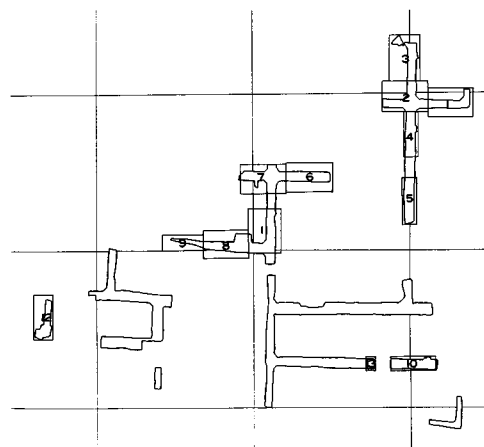
第85図 第42～47号土坑

9 ピット

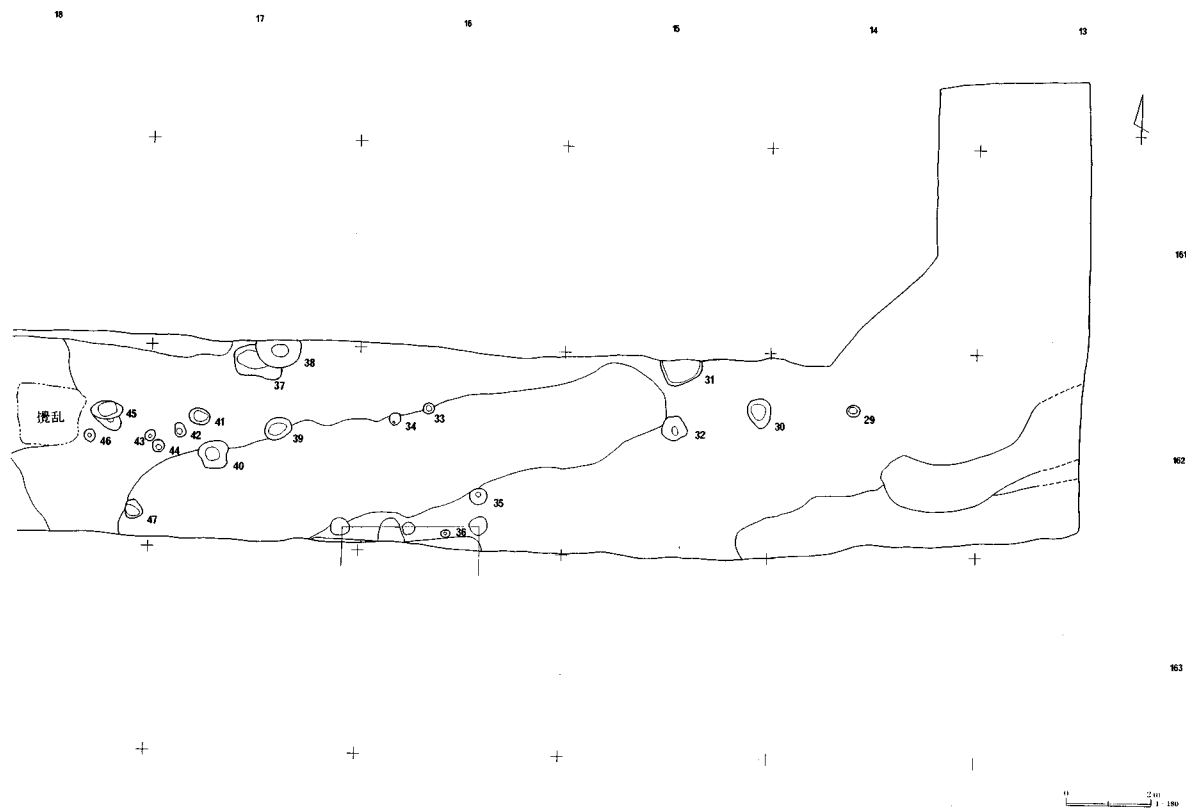
ピットは、総数にして247基検出した。遺物が検出できたピットは少なかった。

以下、全で一覧表にして掲載する(第86～100図、第48・49表)。

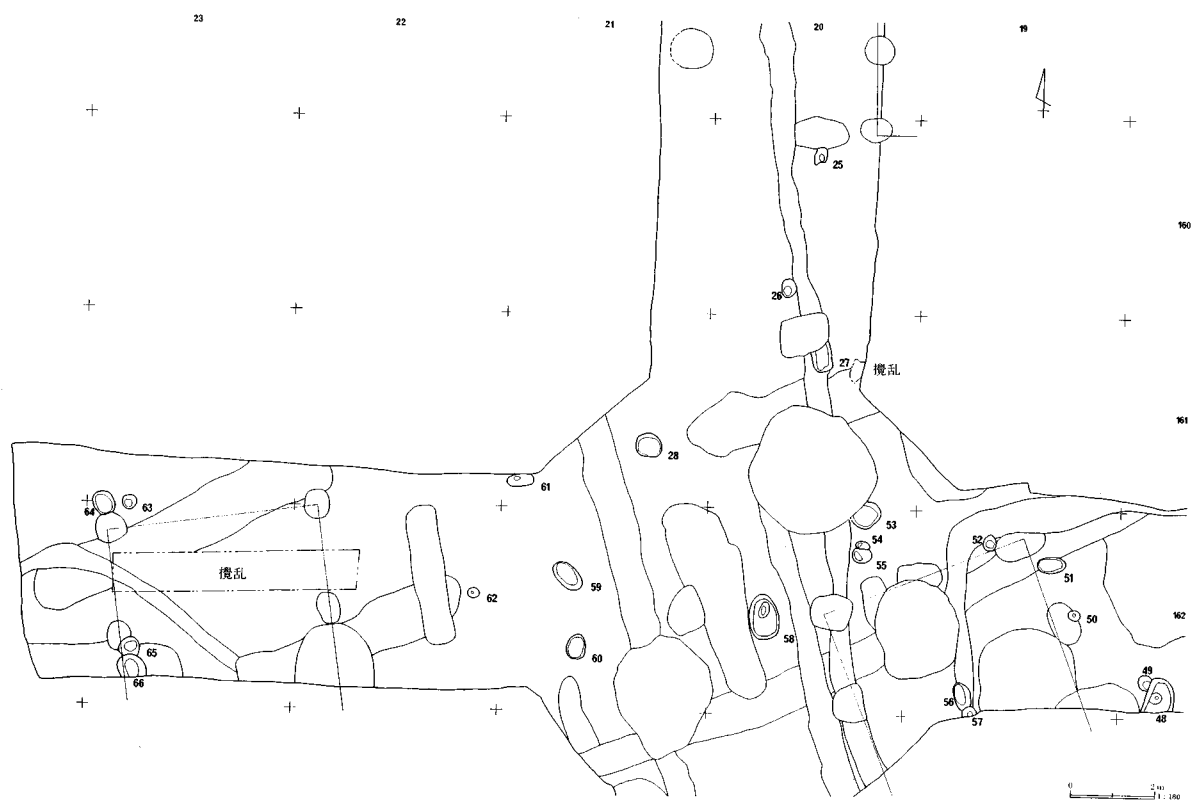
なお、図面は、ピット全体図区割図に従って掲載した。また、ピットが所在する箇所のみを図示した。



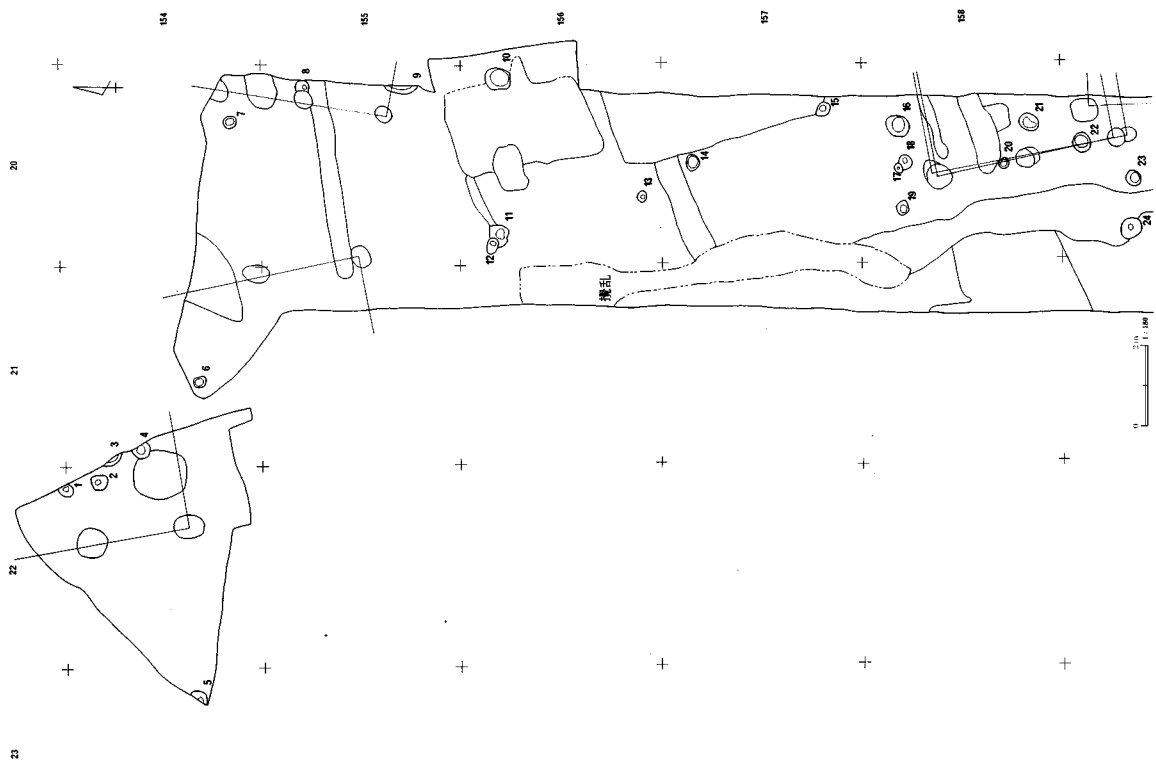
第86図 ピット全体図区割図



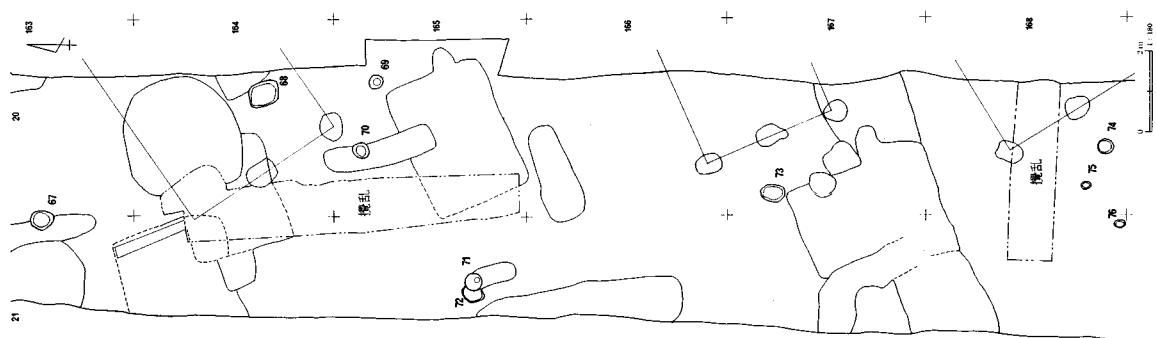
第87図 ピット全体図 (1)



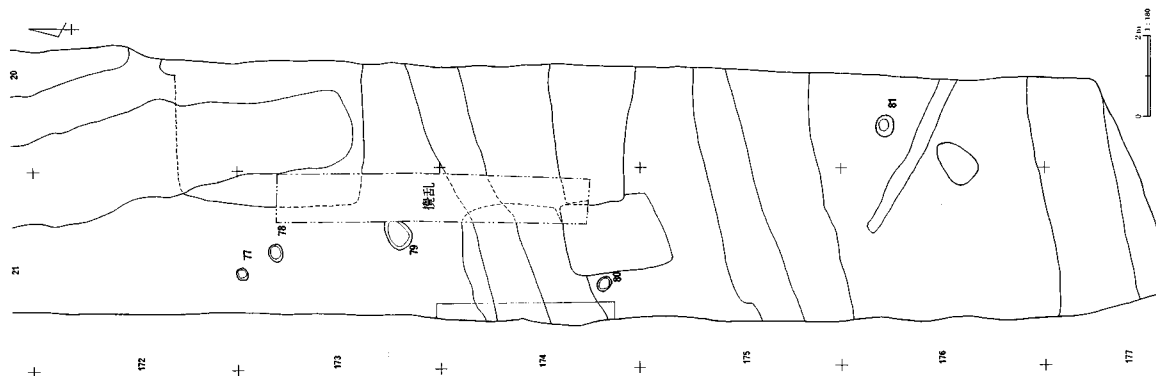
第88図 ピット全体図 (2)



第89図 ピット全体図 (3)



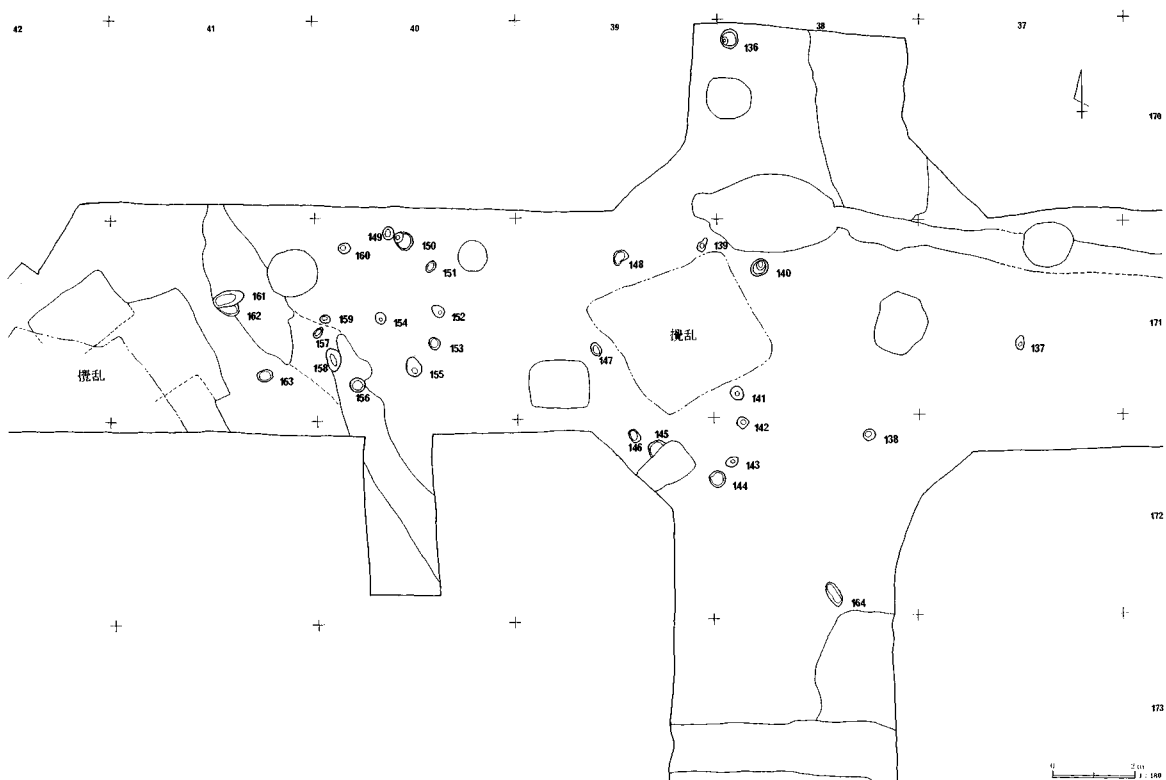
第90図 ピット全体図 (4)



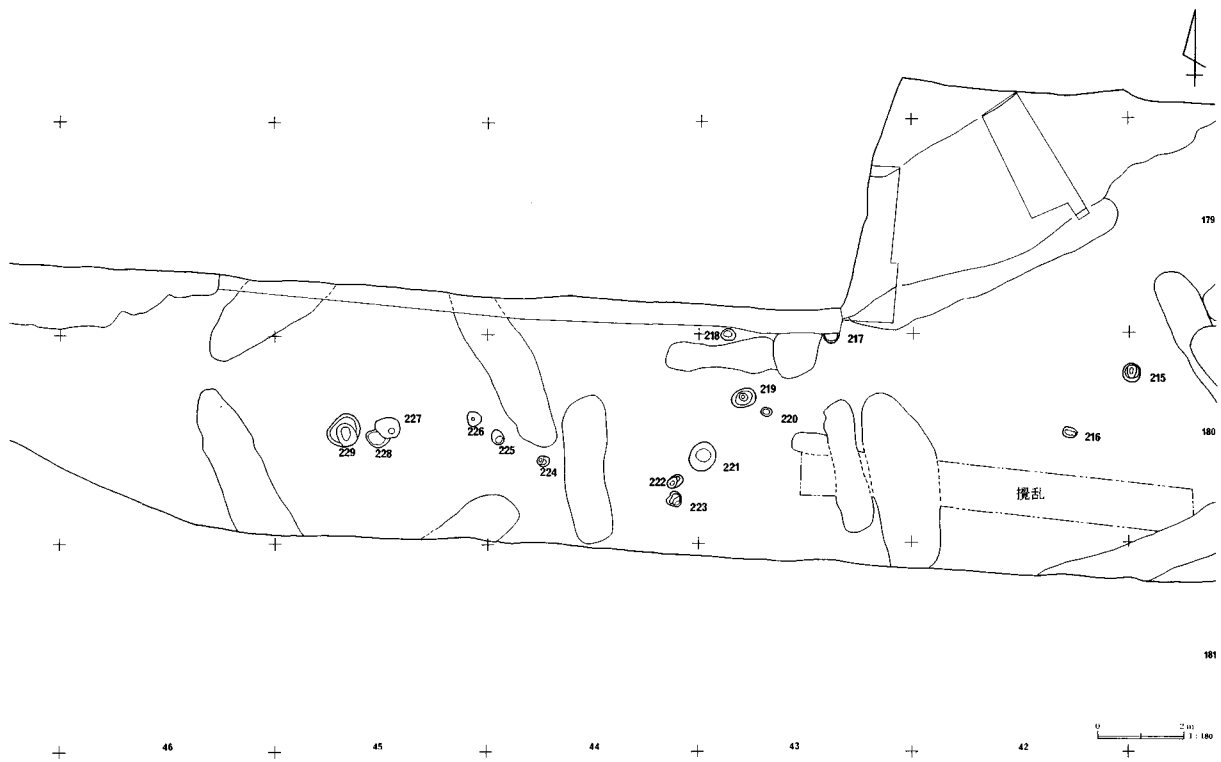
第91図 ピット全体図 (5)



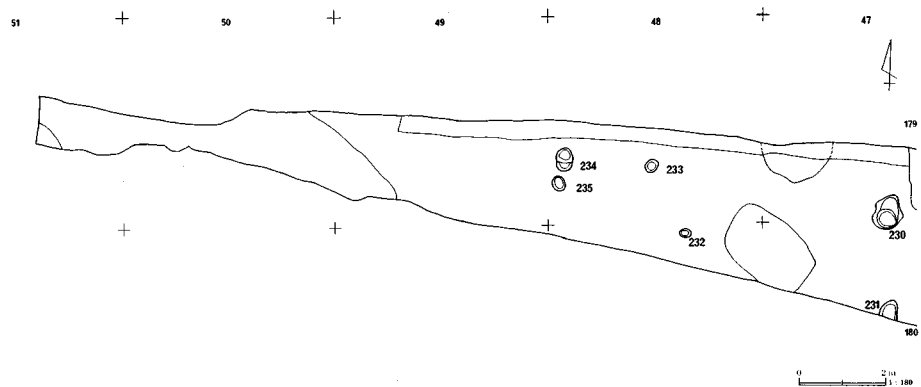
第92図 ピット全体図（6）



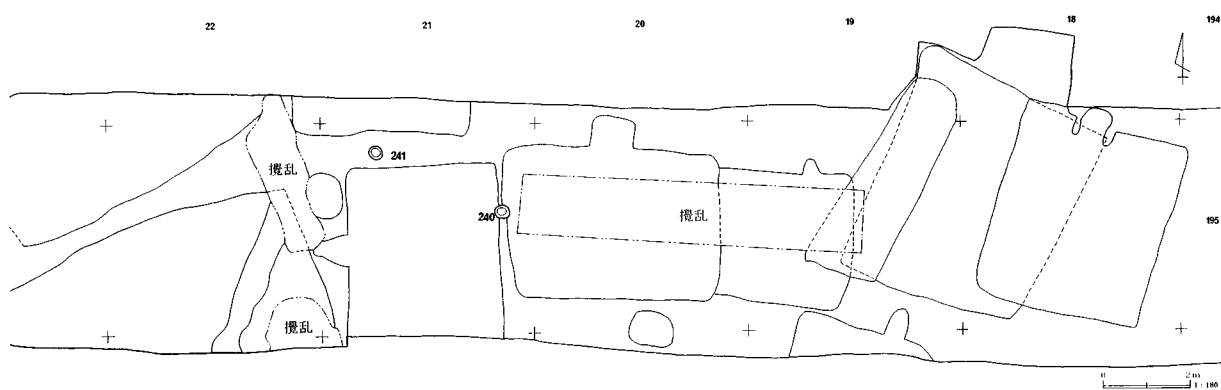
第93図 ピット全体図（7）



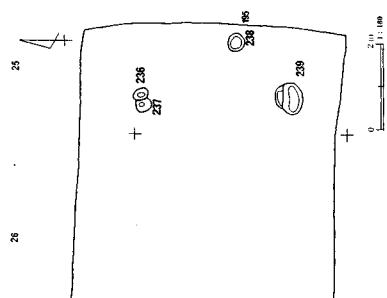
第94図 ピット全体図 (8)



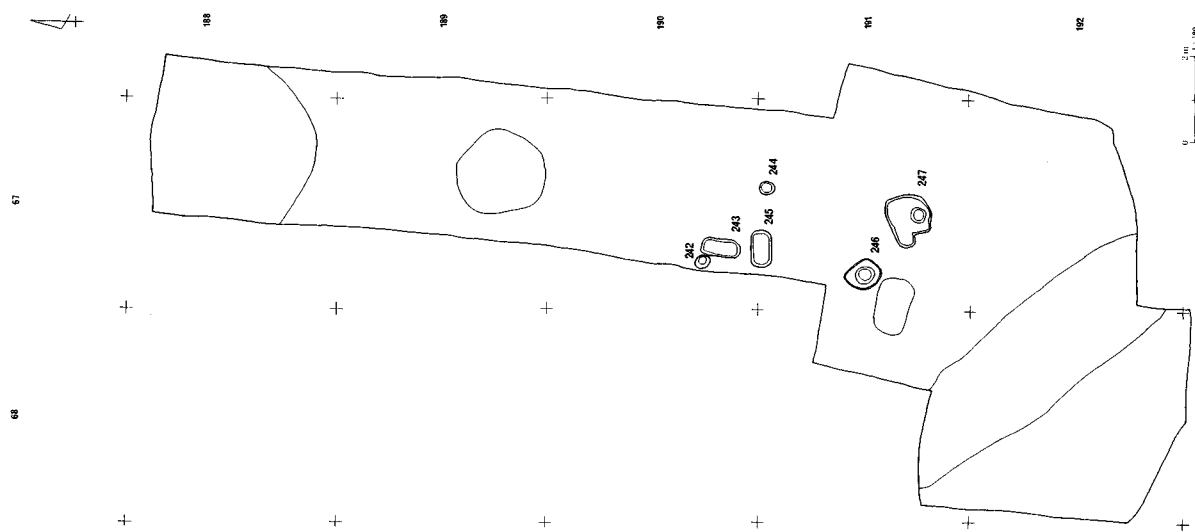
第95図 ピット全体図 (9)



第96図 ピット全体図 (10)



第99図 ビット全体図 (13)



第98図 ビット全体図 (12)



第97図 ビット全体図 (11)

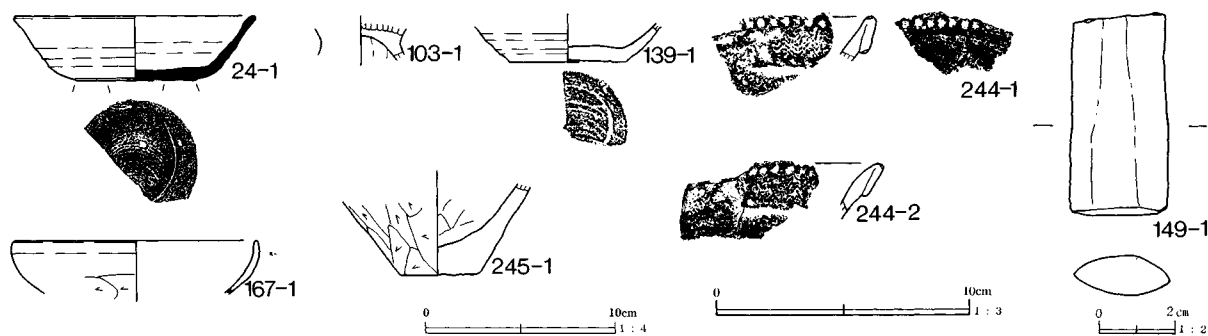
第48表 ピット一覧表

番号	位置(グリッド)	プラン	長 軸×短 軸×深 さ(cm)	出土遺物	時 期	重複関係	備 考
1	22-154	楕円形	(40)×(25)× 4	なし	不明	SB5	
2	22-154	隅丸方形	41 × 36 × 16	土師器甕	9世紀	SB5	
3	21-154	楕円形	(60)× — × 8	土師器坏、須恵器甕	8世紀末	SB5	
4	21-154	円形	(55)×(54)× 6	なし	不明	SB5, SK1	
5	23-154	楕円形	(50)× — × 17	なし	不明		
6	21-154	楕円形	56 × 54 × 24	なし	不明		
7	20-154	円形	30 × 27 × 11	土師器細片	不明		
8	20-155	円形	(35)×(34)× 25	なし	不明	SB14, SD1	
9	20-155	楕円形	(84)× — × 25	なし	不明	SB14	
10	20-156	楕円形	61 × 51 × 15	土師器甕	不明	SJ7	
11	20-156	不整形	(54)×(44)× 16	なし	不明	P12, SD2	
12	20-156	楕円形	35 × 26 × 20	なし	不明	P11	
13	20-156	楕円形	27 × 24 × 6	なし	不明	SB2	
14	20-157	楕円形	38 × 33 × 8	なし	不明		
15	20-157	楕円形	40 × 34 × 21	なし	不明	SJ13	
16	20-158	楕円形	56 × 50 × 36	土師器坏・甕	7世紀		
17	20-158	楕円形	25 × 24 × 10	なし	不明	P18	
18	20-158	楕円形	(37)×(35)× 9	なし	不明	P17	
19	20-158	楕円形	35 × 31 × 7	なし	不明		
20	20-158	楕円形	52 × 38 × 8	なし	不明	SB6・11	
21	20-158	楕円形	50 × 42 × 17	なし	不明	SB6・11	
22	20-159	円形	48 × 48 × 21	なし	不明	SB6・11	
23	20-159	円形	38 × 36 × 18	なし	不明		
24	20-159	楕円形	55 × 48 × 27	須恵器坏	9世紀後半	SD4	
25	20-160	不整形	47 × 29 × 20	なし	不明	SK7	
26	20-160	楕円形	45 × 38 × 17	なし	不明	SD4	
27	20-161	隅丸方形	(84)× 49 × 21	なし	不明	SK8, SD4	
28	21-161	楕円形	68 × 61 × 7	土師器甕、須恵器蓋	9世紀後半		
29	14-162	円形	31 × 28 × 16	なし	不明		
30	15-162	楕円形	100 × 50 × 23	土師器坏・碗・甕	9世紀後半		
31	15-162	隅丸方形	(105)×(88)× 20	土師器坏・甕、須恵器蓋・坏・甕	8世紀末～9世紀初		
32	15-162	楕円形	61 × 59 × 16	土師器坏・甕、須恵器碗・甕	9世紀末	SD10	
33	16-162	円形	32 × 29 × 18	なし	不明	SD10	
34	16-162	円形	29 × 27 × 31	なし	不明	SD10	
35	16-162	円形	20 × 19 × 23	土師器坏・甕	9世紀末		
36	16-162	楕円形	22 × 21 × 8	なし	不明	SB17	
37	17-162	楕円形	(98)× 56 × 68	土師器坏・甕	7世紀前半	P38	
38	17-162	円形	75 × (85)× 45	土師器坏・甕	7世紀前半	P37	
39	17-162	楕円形	66 × 54 × 51	土師器甕	不明	SD10	
40	17-162	不整形	70 × 61 × 55	なし	不明	SD10	
41	17-162	楕円形	48 × 39 × 19	土師器甕、須恵器蓋	8世紀		
42	17-162	楕円形	33 × 25 × 17	なし	不明		
43	17・18-162	楕円形	28 × 25 × 20	なし	不明		
44	17-162	円形	32 × 31 × 37	なし	不明		
45	18-162	不整形	82 × 60 × 53	土師器坏・甕	7世紀後半		
46	18-162	楕円形	30 × 29 × 45	なし	不明		
47	18-162	隅丸方形	48 × 46 × 27	なし	不明	SD10	
48	18-162	楕円形	— × 70 × 32	なし	不明	P49	
49	18-162	楕円形	(41)× 35 × 18	なし	不明	P48	
50	19-162	楕円形	30 × 23 × 25	なし	不明	SB4	
51	19-162	楕円形	73 × 59 × 22	なし	不明	SD12	
52	19-162	楕円形	37 × 33 × 20	なし	不明	SB4, SD11	
53	20-161・162	楕円形	74 × (67)× 32	なし	不明	SE1	
54	20-162	楕円形	32 × 20 × 7	なし	不明	P55	
55	20-162	楕円形	44 × 35 × 13	なし	不明	P54	
56	19-162	楕円形	(75)× 42 × 26	なし	不明	P57, SB4, SD11	
57	19-162	楕円形	— × 36 × 25	なし	不明	P56, SB4, SD11	
58	20-162	楕円形	100 × 71 × 64	土師器坏・甕、須恵器坏	7世紀後半		
59	21-162	楕円形	86 × 49 × 19	土師器甕	不明		
60	21-162	楕円形	57 × 44 × 12	なし	不明		
61	21-161	楕円形	64 × 30 × 7	なし	不明		
62	22-162	円形	31 × 28 × 19	なし	不明		
63	23-161・162	円形	35 × 32 × 21	なし	不明	SR1	
64	23-161・162	楕円形	60 × 49 × 30	土師器甕	不明	SB3, SR1	
65	23-162	楕円形	(59)× 52 × 6	なし	不明	P66, SB3, SD20	
66	23-162	楕円形	(70)× 67 × 20	なし	不明	P65, SB3, SD20	

番号	位置(グリッド)	プラン	長 軸×短 軸×深 さ(cm)	出土遺物	時 期	重複関係	備 考
67	20・21-163	楕円形	56 × 48 × 31	なし	不明	SD15	
68	20-164	隅丸方形	73 × 57 × 22	なし	不明	SB12, SK13	
69	20-165	円形	37 × 36 × 22	土師器坏・甕、須恵器甕	9世紀		
70	20-165	円形	43 × 40 × 19	土師器甕、須恵器甕	不明	SK14	
71	21-165	円形	49 × 37 × 10	土師器	不明	P72, SK15	
72	21-165	隅丸方形	(50) × (40) × 17	なし	不明	P71, SK15	
73	20-167	楕円形	62 × 42 × 14	土師器坏・甕	7世紀前半		
74	20-168	円形	39 × 37 × 19	なし	不明		
75	20-168	楕円形	26 × 23 × 16	なし	不明		
76	21-168	楕円形	26 × 19 × 10	なし	不明		
77	21-173	楕円形	32 × 28 × 10	なし	不明		
78	21-173	楕円形	44 × 33 × 38	なし	不明		
79	21-173	円形	(74) × 56 × 20	なし	不明		
80	21-174	楕円形	42 × 32 × 31	なし	不明		
81	20-176	楕円形	45 × 35 × 35	なし	不明		
82	31・32-171	円形	48 × 45 × 19	なし	不明	P83	
83	31・32-171	楕円形	70 × (67) × 9	なし	不明	P82	
84	32-171	円形	46 × 46 × 15	なし	不明		
85	32-171	楕円形	(38) × 33 × 8	なし	不明		
86	32-171	円形	31 × 29 × 12	なし	不明		
87	32-171	円形	— × 39 × 11	なし	不明		
88	32-171	円形	40 × 40 × 31	なし	不明		
89	32-171	円形	38 × 37 × 13	なし	不明		
90	32-171	不整形	53 × 24 × 18	なし	不明		
91	32-171	隅丸方形	24 × 22 × 26	なし	不明		
92	32-171	隅丸方形	22 × 20 × 19	なし	不明		
93	32-171	円形	20 × 19 × 9	なし	不明		
94	33-171	楕円形	31 × 21 × 14	なし	不明		
95	33-171	楕円形	28 × 23 × 26	なし	不明		
96	33-171	楕円形	68 × 58 × 14	土師器坏・甕	7世紀前半		
97	33-171	楕円形	32 × 28 × 32	なし	不明	SE10	
98	34・35-171	瓢箪形	35 × 19 × 30	土師器甕、須恵器坏	不明	SD40	
99	34-171	円形	30 × 30 × 22	土師器	不明		
100	34-171	方形	18 × 15 × 20	須恵器坏	不明		
101	34・35-171	隅丸方形	26 × 24 × 23	土師器甕	不明		
102	34-171	方形	19 × 15 × 24	土師器	不明		
103	34-171	方形	31 × 30 × 42	土師器台付甕	不明		
104	34-171・172	楕円形	43 × 25 × 23	土師器坏	不明		
105	34-171・172	隅丸方形	20 × 18 × 31	なし	不明		
106	34-172	楕円形	22 × 16 × —	なし	不明	SJ10	
107	35-172	不明	— × — × 24	土師器甕、須恵器甕	9世紀?	SD40	
108	35-171	楕円形	28 × 22 × 13	なし	不明		
109	35-171	楕円形	24 × 19 × 22	なし	不明		
110	35-171	楕円形	22 × 18 × 23	なし	不明		
111	35-171	隅丸方形	25 × 23 × 17	なし	不明		
112	35-171	円形	25 × 21 × 17	なし	不明		
113	35-171	円形	30 × 30 × 13	土師器坏・甕、須恵器坏	8世紀後半～9世紀前半	SD40	
114	35-171	楕円形	28 × 22 × 25	なし	不明		
115	35-171	円形	17 × 16 × 9	なし	不明		
116	35-171	楕円形	25 × 23 × 11	なし	不明		
117	35-171	楕円形	47 × 38 × 20	なし	不明		
118	35-171	楕円形	20 × 18 × 17	なし	不明	SD40	
119	35-171	楕円形	25 × 20 × 13	土師器	不明	SD40	
120	35-172	円形	35 × 35 × 40	なし	不明		
121	35-171	楕円形	40 × 36 × 25	なし	不明		
122	35-171	楕円形	34 × 31 × 37	なし	不明		
123	35-171	円形	21 × 19 × 22	なし	不明	SJ11	
124	35-171	楕円形	32 × 27 × 15	なし	不明	SJ11	
125	35-171	楕円形	30 × 25 × 6	なし	不明	SJ11	
126	35-171	楕円形	40 × 35 × 16	なし	不明	SJ11	
127	35-171	楕円形	20 × 17 × 10	なし	不明	SJ11	
128	35-171	楕円形	37 × 30 × 19	なし	不明	SJ11	
129	35-171	楕円形	24 × 18 × 6	なし	不明	SJ11	
130	35-171	円形	24 × 24 × 21	土師器甕	不明	SJ11	
131	35-171・172	楕円形	33 × 27 × 14	土師器	不明	SJ11	
132	35-171	円形	34 × 30 × 15	なし	不明	SJ11, SD41	
133	35-171	楕円形	28 × 27 × 18	なし	不明	SJ11, SD41	
134	35-171	円形	30 × 29 × 17	なし	不明	SD41	

番号	位置(グリッド)	プラン	長 軸×短 軸×深 さ(cm)	出土遺物	時 期	重複関係	備 考
135	35-171	楕円形	31 × 26 × 27	なし	不明	SD41	
136	38-170	楕円形	46 × 42 × 6	なし	不明		
137	37-171	楕円形	35 × 21 × ー	なし	不明		
138	38-172	円形	30 × 30 × 14	土師器甕	不明		
139	39-171	不整形	37 × 16 × 12	須恵器坏	9世紀末～10世紀初		
140	38-171	楕円形	47 × 41 × 16	なし	不明		
141	38-171	楕円形	35 × 30 × 8	なし	不明		
142	38-172	方形	26 × 23 × 19	なし	不明		
143	38-172	楕円形	34 × 24 × 19	なし	不明		
144	38・39-172	円形	40 × 38 × 10	土師器甕	7世紀代		
145	39-172	楕円形?	ー × 45 × 22	なし	不明	SK24	
146	39-172	隅丸方形	33 × 25 × 10	なし	不明		
147	39-171	楕円形	35 × 23 × 12	なし	不明		
148	39-171	不整形	38 × 28 × 15	なし	不明		
149	40-171	円形	31 × 27 × 34	砥石	弥生時代?		
150	40-171	楕円形	50 × 42 × 16	弥生土器壺or土師器甕	不明		
151	40-171	楕円形	28 × 19 × 12	なし	不明		
152	40-171	楕円形	35 × 26 × 20	なし	不明		
153	40-171	円形	29 × 28 × 6	なし	不明		
154	40-171	円形	29 × 28 × 26	なし	不明		
155	40-171	楕円形	49 × 39 × 31	土師器	不明		
156	40-171	円形	39 × 38 × 14	なし	不明	SD45	
157	40・41-171	楕円形	57 × 34 × 50	なし	不明		
158	40-171	楕円形	29 × 18 × 2	なし	不明	SD45	
159	40-171	楕円形	23 × 19 × 17	なし	不明		
160	40-171	楕円形	29 × 24 × 15	なし	不明		
161	41-171	楕円形	53 × 40 × 14	なし	不明	P162, SD46	
162	41-171	楕円形?	ー × 43 × ー	なし	不明	P161, SD46	
163	41-171	楕円形	40 × 31 × 20	土師器甕	不明		
164	38-172	楕円形	60 × 30 × ー	なし	不明		
165	38-175	円形	55 × 55 × 32	土師器坏	不明	SB16, SA1	
166	38-176	隅丸方形	102 × 54 × 40	土師器坏・甕、須恵器坏	9世紀前半	P168, SA1	
167	38-176	楕円形	51 × 40 × 30	土師器坏	7世紀後半～8世紀前半		
168	38-176	楕円形	65 × 50 × 21	土師器甕	不明	P166	
169	38-176	円形	30 × 30 × 13	なし	不明		
170	38・39-176	楕円形	53 × 50 × 15	なし	不明	P171	
171	39-176	楕円形	(50) × 35 × 31	なし	不明	P170	
172	39-176	楕円形	30 × 26 × 10	なし	不明	SB10	
173	38-177	楕円形	41 × 31 × 22	土師器甕	不明	SB10	
174	38-178	楕円形	45 × 43 × 24	なし	不明	SR3	
175	38-179	楕円形	50 × 40 × 25	土師器甕	不明	SR3	
176	39-178	楕円形	52 × 38 × 30	土師器甕	不明	SB8, SR3	
177	38・39-179	楕円形	32 × 28 × ー	土師器	不明	SB8, SR3	
178	38・39-180	楕円形	35 × 33 × 12	なし	不明	P186, SB18	
179	39-179	円形	56 × 55 × 18	土師器甕	不明	P180, SB8, SR3	
180	39-179	不整形	(60) × 41 × 14	弥生土器壺	弥生時代中期～後期	P179, SB8, SR3	
181	39-179	楕円形	ー × (40) × 21	なし	不明	SK31, SB8, SR3	
182	38-180	楕円形	65 × 49 × 9	なし	不明	SR5	
183	38-180	楕円形	58 × 47 × 10	土師器甕	不明	SR5	
184	39-180	楕円形	52 × 47 × 20	土師器	不明	SB18	
185	39-180	楕円形	45 × 31 × 13	土師器甕	古墳時代後期?	SB18, SR5	
186	38・39-180	楕円形	104 × 76 × 25	なし	不明	P178, SB18	
187	38-180	楕円形	57 × ー × 15	なし	不明	P188・189, SB18	
188	38-180	不整形	26 × 23 × 15	なし	不明	P187・189, SB18	
189	38-180	楕円形	44 × 39 × 18	土師器	不明	P187・188, SB18	
190	38-180	円形	45 × 45 × 19	なし	不明	P191, SB18	
191	38-180	円形	48 × 45 × 10	なし	不明	P190, SB18	
192	38-180	楕円形	32 × 25 × 11	なし	不明		
193	39-180	楕円形	26 × 20 × 24	なし	不明	SB18	
194	39-180	楕円形	20 × 15 × 25	弥生土器高坏	弥生時代後期	SB18	
195	39-180	楕円形	90 × 85 × 36	土師器	不明	SB18, SR5	
196	39-180	円形	45 × 42 × 44	なし	不明	SB18	
197	39-180・181	楕円形	85 × (70) × 14	土師器甕	8世紀	P198・199, SB18	
198	39-180・181	楕円形	(45) × 38 × ー	なし	不明	P197, SB18, SR5	
199	39-180・181	円形	52 × 46 × 13	なし	不明	P197, SB18	
200	39・40-180	楕円形	50 × 31 × 15	なし	不明		
201	39-180	不整形	126 × 84 × 10	土師器甕、須恵器坏・蓋	9世紀前半		
202	39-181	楕円形	60 × 57 × 22	なし	不明		

番号	位置(グリッド)	プラン	長 軸×短 軸×深 さ(cm)	出土遺物	時 期	重複関係	備 考
203	40-180	楕円形	28 × 24 × 7	なし	不明		
204	40-180	楕円形	35 × 29 × 12	なし	不明		
205	40-180	円形	27 × 26 × 8	なし	不明		
206	40-180	楕円形	30 × 23 × 6	なし	不明		
207	41-179	楕円形	37 × 31 × 36	土師器	不明		
208	41-179	楕円形	(54) × (51) × 4	なし	不明	P209, SB15, SR6	
209	41-179	隅丸方形	55 × 51 × 16	土師器甕	不明	P208, SR6	
210	41-180	楕円形	35 × 30 × 22	なし	不明	SR6	
211	41-180	楕円形	42 × (35) × 11	なし	不明	P212, SR6	
212	41-180	円形	33 × 22 × 11	なし	不明	P 211, SR6	
213	41-180	楕円形	51 × 36 × 12	土師器甕	不明		
214	41-180・181	楕円形	43 × 30 × 8	なし	不明		
215	41・42-180	楕円形	48 × 39 × 26	なし	不明	SR7	
216	42-180	楕円形	34 × 23 × 8	なし	不明	SR7	
217	43-179・180	円形	(41) × (39) × 8	なし	不明		
218	43-179・180	楕円形	35 × 29 × 8	土師器甕	不明		
219	43-180	楕円形	55 × 44 × 12	なし	不明	SR8	
220	43-180	楕円形	25 × 20 × 11	なし	不明	SR8	
221	43・44-180	楕円形	67 × 62 × 40	土師器坏・甕	8世紀後半	SR8	
222	44-180	楕円形	35 × 30 × 11	なし	不明	SR8	
223	44-180	不整形	35 × 25 × 8	なし	不明	SR8	
224	44-180	楕円形	27 × 23 × 14	なし	不明		
225	44-180	楕円形	37 × 30 × 21	なし	不明	SR9	
226	45-180	楕円形	39 × 20 × 11	なし	不明	SR9	
227	45-180	不整形	84 × 44 × 27	なし	不明	P228, SR9	
228	45-180	楕円形	(55) × (45) × 9	なし	不明	P227, SR9	
229	45-180	楕円形	80 × 76 × 22	なし	不明	SR9	
230	47-179・180	不整形	80 × 59 × 26	なし	不明		
231	47-180	楕円形	— × 40 × 11	なし	不明		
232	48-180	楕円形	25 × 19 × 6	なし	不明		
233	48-179	楕円形	28 × 25 × 6	なし	不明		
234	48-179	楕円形	54 × 35 × 13	なし	不明		
235	48-179	楕円形	34 × 29 × 12	なし	不明		
236	25-195	楕円形	36 × 27 × 9	なし	不明	P237	
237	25-195	円形	35 × (34) × 10	なし	不明	P236	
238	25-195	円形	43 × 39 × 9	なし	不明		
239	25-195	楕円形	75 × 60 × 14	土師器	不明		
240	21-195	楕円形	34 × 31 × 16	なし	不明	SJ18・22	
241	21-195	円形	33 × 30 × 13	なし	不明		
242	68-190	楕円形	35 × 30 × 15	なし	不明		
243	68-190	隅丸方形	91 × 40 × 27	なし	不明		
244	68-191	円形	35 × 31 × 19	弥生土器壺・甕	弥生時代後期		
245	68-190・191	隅丸方形	86 × 46 × 29	弥生土器甕、土師器甕	弥生時代後期？		
246	67-191	楕円形	90 × 75 × 40	なし	不明		
247	67-191	不整形	125 × 105 × 50	なし	不明		



第100図 第24・103・139・149・167・244・245号ピット出土遺物

第49表 第24・103・139・149・167・244・245号ピット出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
24-1	須恵器坏	(12.8)	3.4	(6.4)	ABFHN	灰色	A	35%	南比企産。
103-1	土師器台付甕	—	—	—	ABEJKM	にぶい橙色	A	10%以下	
139-1	須恵器坏	—	—	(6.2)	ABFHN	灰白色	C	15%	
149-1	砥石	長さ5.3	幅2.6	厚さ1.0	—	—	—	—	重さ20.1g。砂岩製。
167-1	土師器坏	(12.8)	—	—	AEKJ	橙色	B	10%以下	口縁部上下端キザミ。櫛描波状文。 キザミ口縁。口縁部櫛描波状文。
244-1	弥生土器壺	—	—	—	—	暗褐色	—	口縁部	
244-2	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい赤褐色	—	口縁部	
245-1	土師器甕	—	—	4.1	AEGMN	明赤褐色	A	10%	

10 井戸跡

井戸跡は、総数にして13基検出した。いくつかの集中分布地区が存在した。第1区の20・21-162グリッドを中心とした一群、第2区の南北軸171グリッドを中心とした一群、第2区の38-175～178グリッドを中心とした一群である。いずれの井戸跡も平安時代及び中世の時期のものが主体であった。

第1号井戸跡（第101・102図、第50表）

20-161・162グリッドに位置する。第4・7・13号溝跡、第53号ピットと重複関係にあり、それぞれを本遺構が切っている。古い順に、第13号溝跡、第4号溝跡、第7号溝跡、本遺構となる。

平面形は、径3.2×2.9mのやや楕円形を呈する円形で、確認面からの深さは0.81mを測る。断面形状は逆台形で、底面は平坦となっている。

埋土は、自然堆積と考えられ、礫を多量に含んでいた。

出土遺物は、井戸跡の中で最も多い出土量で、青磁の碗のほか、弥生土器高坏、土師器高坏・坏・碗・台付甕、須恵器高盤・坏・碗・壺・甕など多種にわたる遺物が検出されたが、青磁碗以外の時期の遺物は混入遺物と考える。

第2号井戸跡（第101・102図、第50表）

19・20-161グリッドに位置する。東側半分以上が調査区域外となっている。

平面形は不明であるが、おそらく楕円形状を呈していたと推定できる。推定径2.4×2.0mである。確認面からの深さは0.92mを測るが、最深部分が検出されていないので、さらに深くなると推定される。断面形状は、舟底状を呈する。

埋土は、並行に堆積しており、人為的に埋められた可能性が高い。

出土遺物は少なく、須恵器坏のほか土師器坏・甕破片などが出土した。

第3号井戸跡（第101・102図、第50表）

19・20-162グリッドに位置する。第4号掘立柱建物跡、第10号土坑、第11・12号溝跡と重複関係にあり、それぞれを本遺構が切っている。

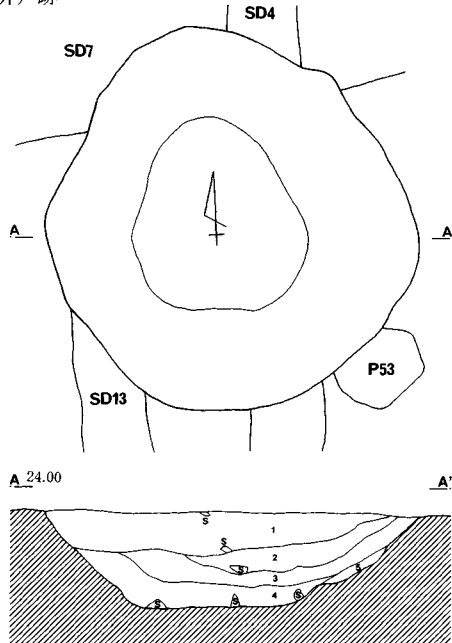
平面形は、径2.4×1.98mのやや変形した楕円形で、確認面からの深さは0.88mを測る。断面形状は、舟底状を呈する。

埋土は、自然堆積と考えられ、最下層に大きな礫を含んでいた。

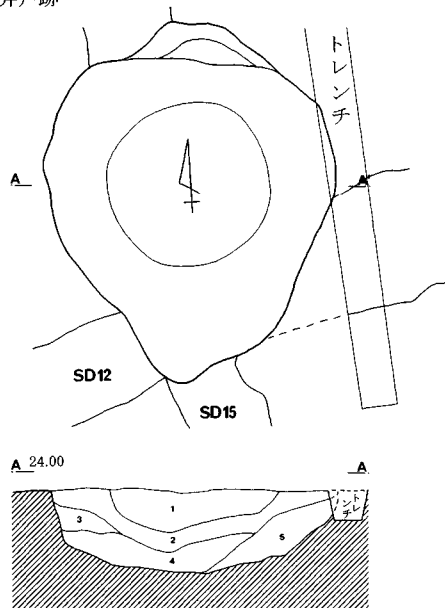
出土遺物は、瓦質土器播鉢・鉢、挽物漆碗、桃の種子のほか土師器坏・甕、須恵器蓋・坏・壺・甕などが検出された。また、獣骨と考えられる骨も検出された。

時期は、中世と考えられる。

第1号井戸跡



第4号井戸跡



第1号井戸跡

- 1 灰色土 (黄色土粒子、酸化鉄多量、礫含む)
- 2 灰色土 (しまりない、黄色土粒子若干、酸化鉄、礫多量に含む)
- 3 灰色土 (黄色土粒子若干、酸化鉄多量に含む)
- 4 灰色土 (ややしまりない、黄色土粒子、酸化鉄ブロック少量、炭化物若干含む)
- 5 灰色土 (灰白色土ブロック多量に含む)

第2号井戸跡

- 1 灰色土 (オリーブ色土粒子、火山灰、酸化鉄多量、炭化物若干含む)
- 2 青灰色土 (灰色土ブロック多量に含む)
- 3 灰色土 (しまりない)
- 4 灰色粘土

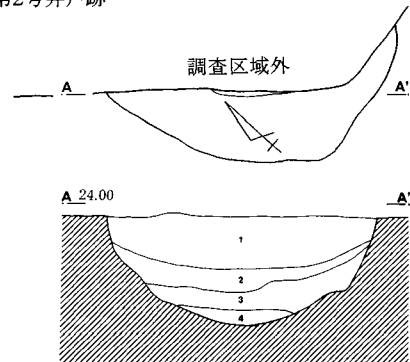
第3号井戸跡

- 1 灰色土 (黄色土粒子多量、焼土、炭化物少量、酸化鉄含む)
- 2 灰色土 (黄色土粒子、酸化鉄多量、炭化物若干含む)
- 3 灰色土 (しまりない、黄色土粒子、炭化物若干、酸化鉄多量に含む)
- 4 灰色土 (灰白色土ブロック多量に含む)
- 5 灰色土 (しまりない、炭化物若干含む)
- 6 灰色土 (灰白色土ブロック、焼土若干含む)

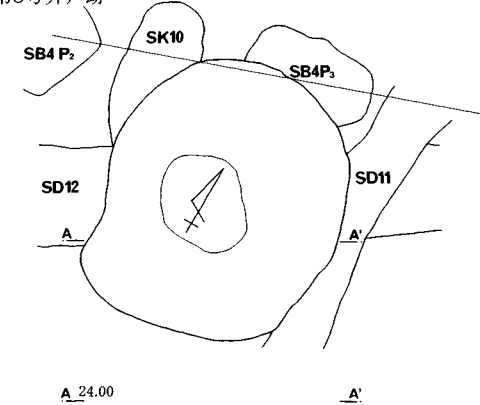
第4号井戸跡

- 1 灰色粘質土 (黄色土粒子多量、火山灰、炭化物ブロック若干含む)
- 2 灰色粘質土 (黄褐色土ブロック・粒子多量、炭化物少量、酸化鉄、火山灰多量に含む)
- 3 黄褐色土 (灰色土ブロック少量含む)
- 4 灰色粘質土 (しまりない、焼土若干、炭化物多量に含む)
- 5 灰色土 (黄色土粒子、火山灰多量、焼土、炭化物若干含む)

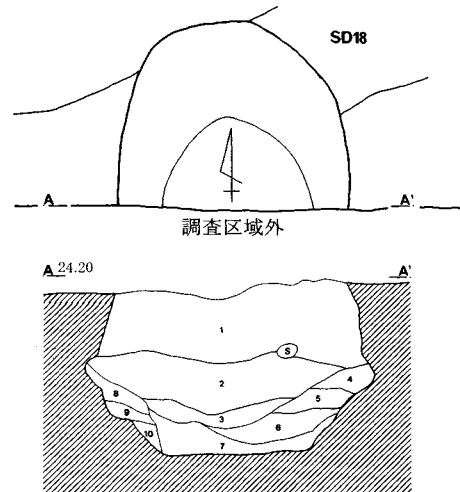
第2号井戸跡



第3号井戸跡

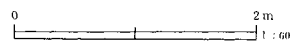


第5号井戸跡



第5号井戸跡

- 1 灰色土 (黄褐色土ブロック、火山灰、礫、酸化鉄、炭化物ブロック多量に含む)
- 2 灰色粘質土 (灰白色土ブロック・粒子、酸化鉄少量、炭化物若干含む)
- 3 暗灰色粘質土 (黄褐色土粒子、明緑灰色土ブロック若干含む)
- 4 灰色粘質土 (灰色土ブロック多量、酸化鉄若干含む)
- 5 灰白色土 (酸化鉄多量に含む)
- 6 灰色粘質土 (しまりない、礫多量に含む)
- 7 灰色粘土
- 8 灰色土 (灰色土ブロック、灰白色土ブロック多量に含む)
- 9 灰色粘質土 (酸化鉄若干含む)
- 10 明緑灰色粘質土 (黄褐色土、酸化鉄ブロック若干含む)



第101図 第1～5号井戸跡

第4号井戸跡（第101・102図、第50表）

20・21-162・163グリッドに位置する。第12・15号溝跡と重複関係にあり、それぞれを本遺構が切っている。古い順に、第12号溝跡、第15号溝跡、本遺構となる。

平面形は径3.04×2.42mの変形した楕円形で、確認面からの深さは0.7mを測る。北側にテラス状の掘り方がある。断面形状は、やや箱形に近い掘り方を呈する。底面はやや舟底状となっている。

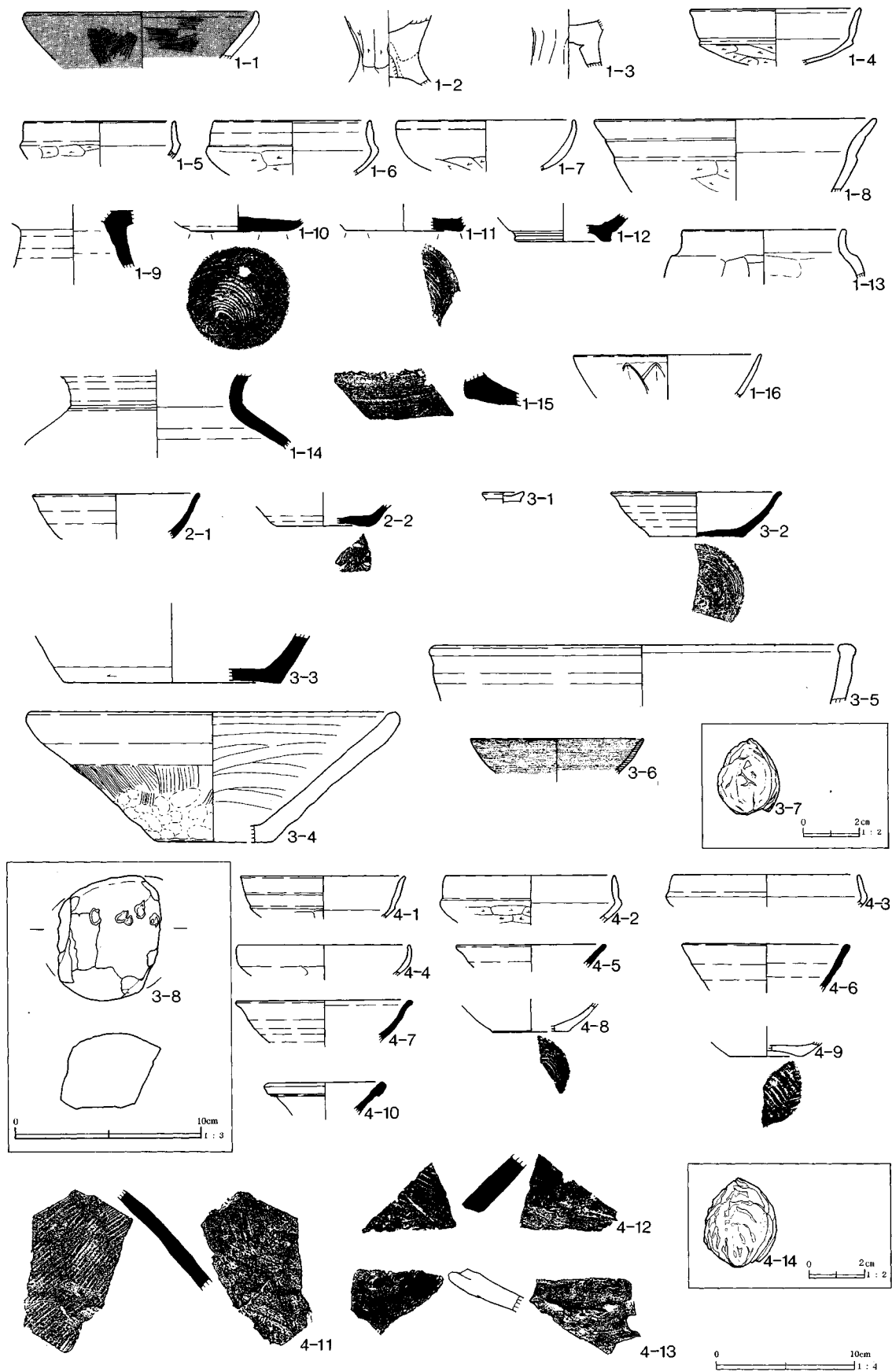
埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、常滑窯産の陶器甕、土師器坏、須恵器坏・碗・瓶・甕のほか、桃の種子などが検出された。

時期は、平安時代から中世と考えられる。

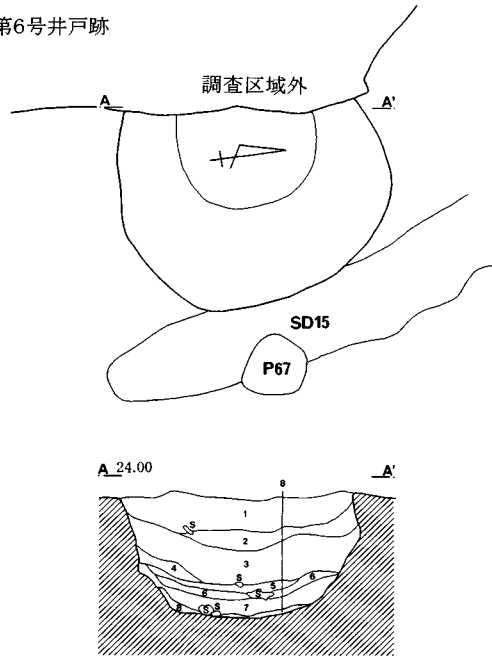
第50表 第1～4号井戸跡出土遺物観察表

番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	色 調	焼成	残存率	備 考
1-1	弥生土器高坏	(16.6)	—	—	ADGJM	にぶい橙色	A	10%以下	内外面赤彩。
1-2	土師器高坏	—	—	—	AEGKM	橙色	B	10%以下	
1-3	土師器高坏	—	—	—	ABEG	橙色	B	10%	
1-4	土師器坏	(12.2)	—	—	AEJK	にぶい橙色	A	20%	
1-5	土師器坏	(11.0)	—	—	AHJ	灰黄褐色	C	10%	
1-6	土師器坏	(11.4)	—	—	AEJK	にぶい橙色	B	15%	
1-7	土師器坏	(12.8)	—	—	ADHJ	にぶい橙色	A	15%	
1-8	土師器碗	(20.4)	—	—	AEHJKM	橙色	B	10%以下	
1-9	須恵器高盤	—	—	—	ABHLN	灰色	A	10%	
1-10	須恵器坏	—	—	7.0	AFGN	にぶい褐色	A	35%	南比企産。
1-11	須恵器坏	—	—	(8.3)	ABFN	灰色	A	10%以下	南比企産。
1-12	須恵器碗	—	—	(6.7)	AELN	灰色	B	10%	末野産。
1-13	土師器台付甕	(12.0)	—	—	AEHJKM	橙色	B	10%以下	口縁部内面から肩部外面に釉薬。末野産。
1-14	須恵器壺	—	—	—	ABLN	灰色	A	10%	
1-15	須恵器甕	—	—	—	ABLN	青灰色	A	胴上半部	末野産。
1-16	青磁碗	(13.1)	—	—	灰白色	—	—	10%	鎚蓮弁文。龍泉窯系。
2-1	須恵器坏	(12.1)	—	—	ABF	灰色	A	10%以下	南比企産。
2-2	須恵器坏	—	—	(6.8)	AGI	暗青灰色	A	10%以下	末野産。
3-1	須恵器蓋	—	—	—	ADHJ	灰白色	C	10%以下	
3-2	須恵器坏	(12.2)	3.2	(6.8)	ABHLN	灰色	A	35%	
3-3	須恵器壺	—	—	(15.8)	ABFN	青灰色	A	10%	
3-4	瓦質土器鉢鉢	(26.4)	9.4	(8.1)	灰色	—	—	20%	
3-5	瓦質土器鉢	(30.4)	—	—	にぶい黄橙色	—	—	10%以下	
3-6	挽物漆碗	(12.6)	—	—	—	—	—	—	
3-7	種子桃	長さ2.8	幅2.25	厚さ1.6	—	—	—	—	
3-8	石製品	長さ6.6	幅5.5	厚さ4.1	—	—	—	—	
4-1	土師器坏	(11.9)	—	—	ACJM	明赤褐色	B	10%	群馬産。
4-2	土師器坏	(12.3)	—	—	ACHJM	橙色	A	10%	
4-3	土師器坏	(13.5)	—	—	AEJK	にぶい黄褐色	B	10%以下	
4-4	土師器坏	(12.6)	—	—	AHJ	橙色	B	10%以下	
4-5	須恵器坏	(10.8)	—	—	ABN	灰色	A	10%	
4-6	須恵器坏	(12.0)	—	—	ABI	灰色	A	10%以下	
4-7	須恵器坏	(12.7)	—	—	ABHN	灰色	A	10%以下	
4-8	須恵器坏	—	—	(5.4)	AHM	にぶい黄橙色	C	10%	
4-9	須恵器坏	—	—	(5.2)	AEJ	にぶい橙色	C	10%	
4-10	須恵器瓶	(8.3)	—	—	AH	暗灰色	A	10%以下	
4-11	須恵器甕	—	—	—	ABNL	灰色	A	胴部	外面平行叩き目。内面あて具痕、ナデ。末野産。
4-12	須恵器甕	—	—	—	ABHL	灰色	A	底部	外面平行叩き目。内面ナデ。末野産。
4-13	陶器甕	—	—	—	灰色	—	—	胴上半部	外面灰釉。常滑窯産。
4-14	種子桃	長さ3.2	幅2.7	厚さ1.6	—	—	—	一部欠損	重さ3.5 g。

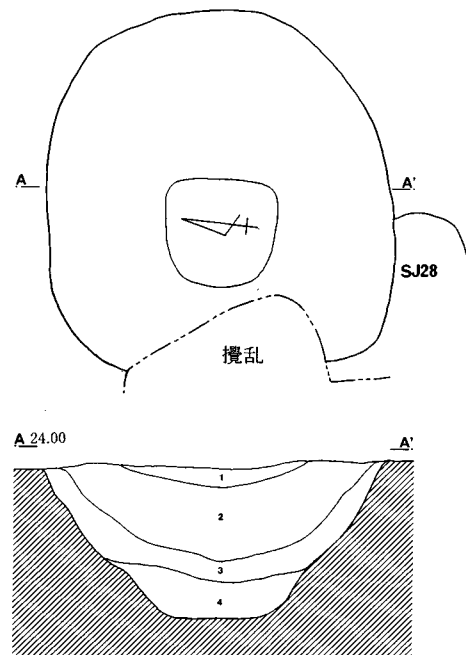


第102図 第1～4号井戸跡出土遺物

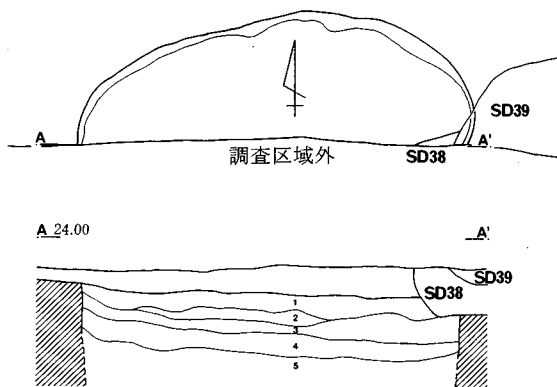
第6号井戸跡



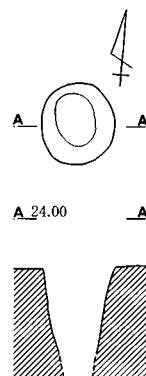
第7号井戸跡



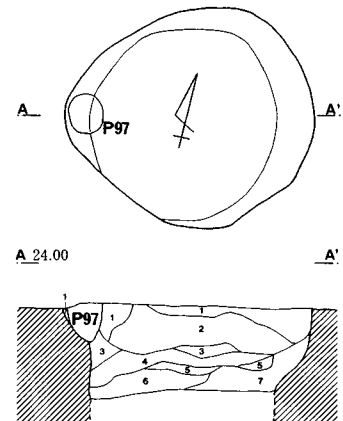
第8号井戸跡



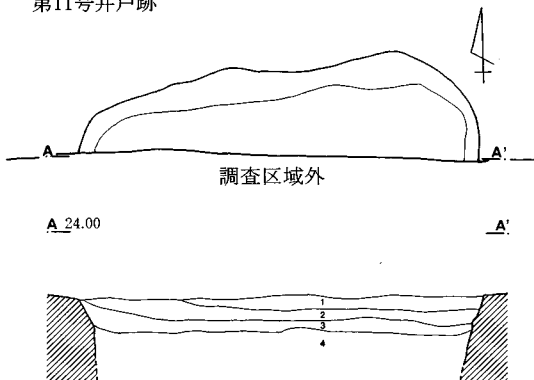
第9号井戸跡



第10号井戸跡



第11号井戸跡



第6号井戸跡

- 1 灰色土 (オリブ褐色土ブロック、火山灰、酸化鉄多量を含む)
- 2 オリブ黒色土 (黄色土粒子多量、火山灰若干、酸化鉄含む)
- 3 暗灰色土 (黄色土粒子少量、灰白色土粒子、酸化鉄多量、火山灰?、炭化物含む)
- 4 灰白色土 (粘性若干ある、暗灰色土ブロック状に混じる、酸化鉄多量を含む)
- 5 暗灰色土 (しまりない)
- 6 灰白色土 (灰色土ブロック状に混じる、酸化鉄多量を含む)
- 7 灰色粘質土 (黄色土粒子若干、砂多量を含む)
- 8 灰色粘質土 (砂、礫混じる)

第7号井戸跡

- 1 灰色土 (かたくしまる、酸化鉄多量を含む)
- 2 灰色粘質土 (礫、酸化鉄多量を含む)
- 3 灰色粘質土 (酸化鉄若干含む)
- 4 灰色粘質土 (地山砂少量混じる)

第8号井戸跡

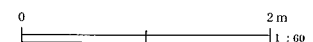
- 1 灰色粘質土 (しまり強い、粘性弱い、灰白色粘土粒子、酸化鉄多量を含む)
- 2 暗灰色粘質土 (しまり強い、粘性弱い、酸化鉄若干含む)
- 3 灰色粘質土 (炭化物少量、酸化鉄若干含む)
- 4 暗オリブ灰色粘質土 (しまり強い、粘性弱い、炭化物少量、酸化鉄若干含む、砂質)
- 5 暗青灰色土 (しまり強い、粘性強い、酸化鉄若干含む、砂質)

第10号井戸跡

- 1 オリブ褐色粘質土 (しまり強い、粘性弱い、黄褐色粘土ブロック・粒子状に少量混じる、酸化鉄、白色土粒子多量を含む)
- 2 オリブ褐色粘質土 (しまり強い、粘性弱い、黄褐色粘土ブロック、黒褐色土ブロック多量、白色土粒子少量、酸化鉄若干含む)
- 3 オリブ灰色粘質土 (しまり強い、粘性強い、酸化鉄若干含む、砂質)
- 4 黄灰色粘土 (しまり、粘性強い、暗灰色粘土斑状に混じる、酸化鉄、炭化物若干含む)
- 5 暗青灰色粘土ブロック (しまり、粘性強い、酸化鉄若干含む)
- 6 青灰色粘質土 (しまり、粘性強い、酸化鉄多量を含む、砂質)
- 7 暗青灰色粘質土 (しまり、粘性強い、緑灰色粘土ブロック多量、酸化鉄、炭化物若干含む、砂質)

第11号井戸跡

- 1 青灰色粘質土 (しまり強い、粘性弱い、白色土粒子少量、酸化鉄若干含む)
- 2 青黒色粘質土 (しまり強い、粘性弱い、緑灰色粘土粒子少量、酸化鉄若干含む)
- 3 暗灰色粘質土 (しまり強い、粘性弱い、酸化鉄若干含む)
- 4 緑黒色粘質土 (しまり強い、粘性弱い、酸化鉄若干含む、砂質)



第103図 第6～11号井戸跡

第5号井戸跡（第101図）

22・23-162グリッドに位置する。第18号溝跡と重複関係にあり、本遺構が切っている。また、南側が調査区域外となっている。

調査区の壁と平面に残った痕跡から平面形を推定した井戸であるが、一方の径が1.9mを測る楕円形と推定され、確認面からの深さは1.5mと深い井戸であった。断面形状は、壁面の崩壊が著しく、深さ約50cm辺りからオーバー・ハングし、最大幅2.44mを測った。さらにその下、底面に至るまでやや窄まり、底面は平坦であった。

埋土は、大きく4層に分けられ、並行堆積をしており、数回にわたって人為的に埋められた可能性が高い。

出土遺物は、検出できなかった。

時期は、中世と考えられる。

第6号井戸跡（第103・104図、第51表）

21-163グリッドに位置する。第15号溝跡と重複関係にあり、本遺構が切っている。また、西側が調査区域外となっている。

平面形は径約2.2mの円形と推定でき、確認面からの深さは1.0mを測る。断面形状は、壁面がやや崩壊し、深さ約35cm辺りからややオーバー・ハングしていた。さらにその下、底面に至るまでやや窄まり、舟底状となっていた。

埋土は、上層が並行堆積気味であることから、下層の埋まり始めは自然堆積であるが、その後人為的に埋められた可能性が高いと推定される。

出土遺物は、青磁碗、土師質土器皿、土師器坏・甕、須恵器坏・壺・甕が検出できた。他時期の混入遺物が多かった。

時期は、中世と考えられる。

第7号井戸跡（第103・104図、第51表）

21-163・164グリッドに位置する。第28号住居跡、第12号掘立柱建物跡と重複関係にあった。新旧関係は、本遺構がそれぞれを切っており、古い順に、第12号掘立柱建物跡、第28号住居跡、本遺構となる。また、一部攪乱を受けている。

遺構確認時に、礫の集中箇所のような状態であったため、重機による掘削により調査を実施した。そのため、平面形は土層断面観察から推定したものである。径約2.8mのやや隅丸方形の円形で、確認面からの深さは1.3mを測る。断面形状は、壁面がやや急な傾斜となっており、底面は舟底状を呈し、径80cmほどであったと推定される。

埋土は、灰色粘質土が主であったが、第2層に礫が多量に含まれており、礫中に灰色粘質土が混じるといった感じであった。自然堆積と考えられる。

出土遺物は、土師質土器皿、陶器皿・播鉢（片口鉢）、瓦質土器火鉢・内耳土鍋などに混じって、土師器坏・甕、須恵器壺・甕破片が検出できた。

時期は、中世と考えられる。

第8号井戸跡（第103図）

31・32-172グリッドに位置する。第38・39号溝跡と重複関係にあり、本遺構がそれぞれに切られて

いる。新旧関係は、古い順に、本遺構、第38号溝跡、第39号溝跡となる。南側が調査区域外となっている。

平面形は検出最大径3.2mを測る楕円形と推定され、確認面から深さ約80cmまで掘削を行ったが、調査部分が狭く、崩壊が著しかったため途中で掘削を終了した。断面形状は、壁面がほぼ垂直を呈し、太い井筒状になると考えられる。

埋土は、ほぼ並行堆積をしており、人為的に埋められた可能性が考えられる。

出土遺物は、土師器甕破片が1点検出されたが、図示可能な遺物ではなかった。

時期は、溝跡との切り合いから7世紀前半以前の可能性が考えられるが詳細は不明である。

第9号井戸跡（第103図）

32-171グリッドに位置する。

平面形は、径0.66×0.62mの楕円形で、確認面から深さ約90cmまで掘削を行ったが、調査部分が狭く、調査が困難であったため途中で掘削を終了した。断面形状は、やや漏斗状を呈していた。

土層は、平面形が小さかったため狭く、計測ができなかった。

出土遺物は、検出できなかった。

第10号井戸跡（第103図）

32・33-171グリッドに位置する。第97号ピットと重複関係にあり、本遺構が切られている。

平面形は、径2.2×1.7mの変形した楕円形で、確認面から深さ約70cmまで掘削を行ったが、崩壊が著しかったため井筒の途中で掘削を終了した。断面形状は、井筒状を呈していたと考えられるが、西壁が大きく崩壊して上部が広がったため漏斗状を呈している。また、南西壁も崩壊し、ややオーバー・ハングしていた。

埋土は、複雑な堆積をしており、人為的に埋められた可能性が考えられる。

出土遺物は、検出できなかった。

第11号井戸跡（第103・104図、第51表）

32・33-172グリッドに位置する。南側の大部分が調査区域外となっている。

平面形は検出最大径3.2mの東西に長い楕円形と推定され、確認面から深さ約60cmまで掘削を行ったが、調査部分が狭く、崩壊が著しかったため途中で掘削を終了した。断面形状は、壁面が急な傾斜でやや漏斗状を呈するが、本来は太い井筒状になると考えられる。

埋土は、ほぼ並行堆積をしており、人為的に埋められた可能性が考えられる。

出土遺物は、弥生土器壺・甕破片、土師器甕破片が検出できた。

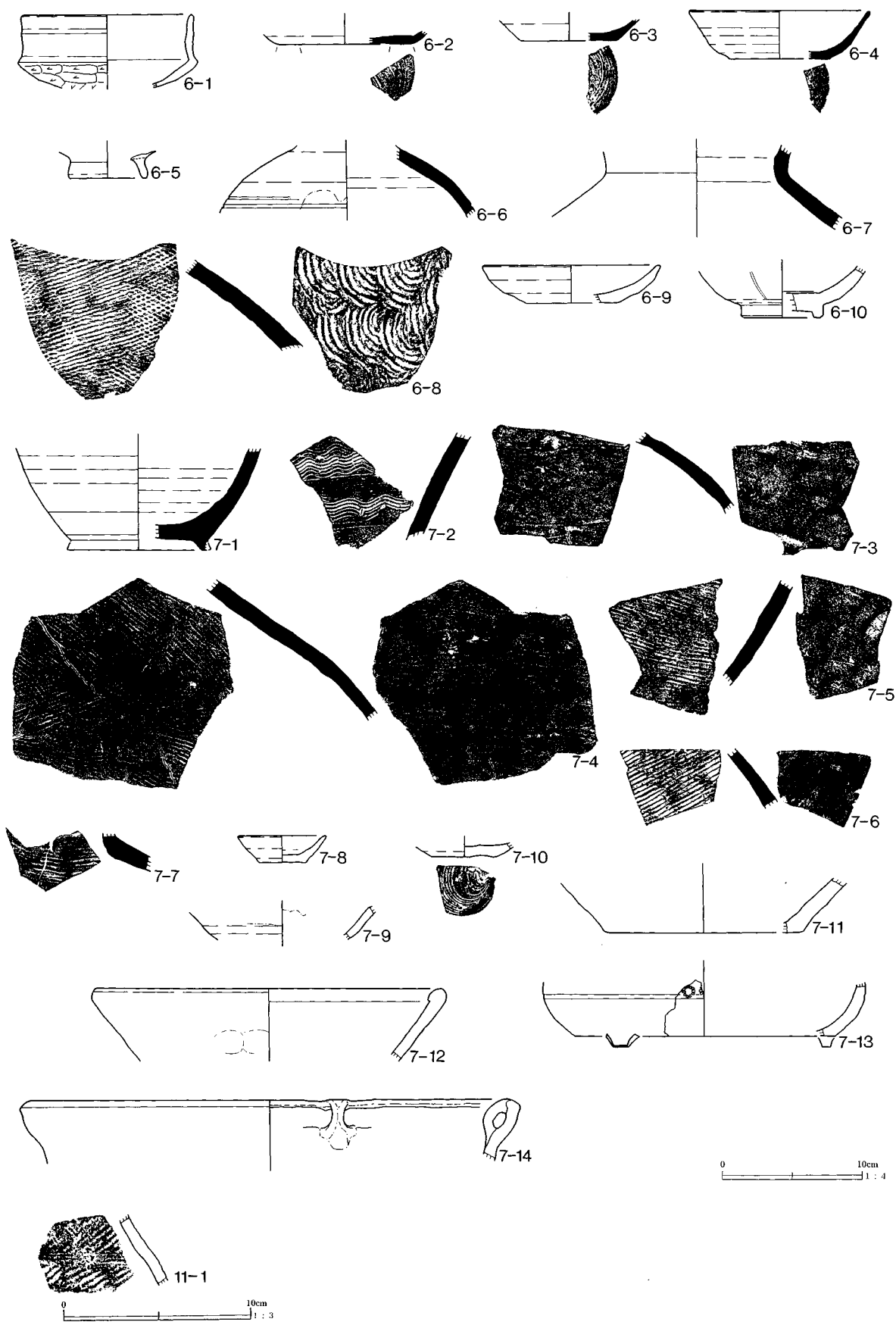
時期は、明らかにすることができなかった。しかし、すぐ東に隣接する第8号井戸跡と、規模、平面形などがほぼ同じであることから、同時期のものである可能性が考えられる。

第12号井戸跡（第105・106図、第52表）

33-171・172グリッドに位置する。後世の暗渠排水により一部攪乱を受けている。また、北側が調査区域外となっている。

平面形は径0.9mの楕円形で、確認面から深さ約80cmまで掘削を行ったが、調査部分が狭く、崩壊が著しかったため途中で掘削を終了した。断面形状は、壁面が急な傾斜でやや漏斗状を呈するが、本来は太い井筒状になると考えられる。

本遺構は、素掘りの井戸ではなく、報告井戸跡中唯一の石組みの井戸であった。大きさ約15cmから25



第104図 第6・7・11号井戸跡出土遺物

第51表 第6・7・11号井戸跡出土遺物観察表

番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	色 調	焼成	残存率	備 考
6-1	土師器坏	(12.2)	—	—	AEJKM	橙色	C	15%	
6-2	須恵器坏	—	—	(9.6)	ABFN	青灰色	A	10%以下	南比企産。
6-3	須恵器坏	—	—	(7.0)	ABLN	灰色	A	10%	末野産。
6-4	須恵器坏	(13.0)	3.4	(7.2)	ABLN	灰色	A	20%	末野産。
6-5	須恵器碗	—	—	(5.5)	AEJK	浅黄橙色	C	10%	
6-6	須恵器壺	—	—	—	AB	灰色	A	10%	外面肩部自然釉。
6-7	須恵器甕	—	—	—	ABNH	灰色	A	10%以下	内外面自然釉。
6-8	須恵器甕	—	—	—	ABL	灰色	A		末野産。
6-9	土師質土器皿	(11.6)	2.7	(6.6)	AEH	浅黄橙色	C	25%	ロクロ使用。
6-10	青磁碗	—	—	(5.4)	灰色	—	—	15%	線描き蓮弁文。龍泉窯系。
7-1	須恵器壺	—	—	(9.2)	ABN	灰色	A	15%	底部内面自然釉。
7-2	須恵器甕	—	—	—	AFN	灰色	A		口縁部 波状文。南比企産。
7-3	須恵器甕	—	—	—	ABFHN	灰色	A		胴部 南比企産。
7-4	須恵器甕	—	—	—	ABHKLN	灰黄色	A		胴部 外面平行叩き目。内面あて具痕。末野産。
7-5	須恵器甕	—	—	—	ABLN	灰色	A		胴部 外面平行叩き目。内面あて具痕。末野産。
7-6	須恵器甕	—	—	—	AB	灰白色	A		胴部 外面平行叩き目。内面あて具痕。
7-7	須恵器甕	—	—	—	ABFGHN	灰色	A		胴上半部 南比企産。
7-8	土師質土器皿	(6.3)	1.9	(3.4)	ADJK	浅黄橙色	A	25%	
7-9	陶器皿	—	—	—	灰色	—	—		体部 口縁部灰釉。
7-10	陶器皿	—	—	(4.7)	灰色	—	—	10%	灰釉。
7-11	瓦質土器播鉢	—	—	(14.4)	灰黄褐色	—	—	10%以下	在地産。
7-12	陶器播鉢	(24.8)	—	—	灰白色	—	—	10%	
7-13	瓦質土器火鉢	—	—	(18.8)	褐灰色	—	—	10%以下	体部外面に花文スタンプ押捺。
7-14	瓦質土器内耳土鍋	(36.0)	—	—	灰色	—	—	10%以下	在地産。
11-1	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい橙色	—		胴部 L R 縄文。

cm大のやや細長い川原石を木口積みにして壁面がつくられていた。壁面は、大型の川原石を組んだ隙間に小型の川原石を充填し崩壊を防ぐ構造をしていたため、良好な状態で壁面が検出できた。また、この壁面をつくる際の裏込めとしての構造も確認できた。井戸本体の外側に大きく、長軸4.3m、推定短軸2.6mの楕円形状の掘削を行い、オリーブ褐色粘質土、青灰色粘質土、暗灰色粘質土、緑灰色粘土、暗青灰色粘土、暗灰色粘土などの土を交互に突き固め版築状にし、壁面の崩壊を防ぐ工法を採っていた。

埋土は、やや並行堆積をしており、人為的に埋められた可能性が考えられる。最上層に礫を多く含んでいた。

出土遺物は、青磁碗、常滑窯産の甕破片、瓦質土器土鍋破片、土師器坏・甕、須恵器坏・甕などが検出できた。土師器や須恵器は、隣接する第10号住居跡からの混入遺物であると考えられる。

時期は、中世と考えられる。

第13号井戸跡（第105～107図、第52表）

35-171グリッドに位置する。第11号住居跡、第41号溝跡と重複関係にあり、本遺構がそれぞれを切っている。新旧関係は、古い順に、第11号住居跡、第41号溝跡、本遺構となる。

平面形は径2.3×1.7mの楕円形で、確認面から深さ約75cmまで掘削を行ったが、崩壊が著しかったため途中で掘削を終了した。断面形状は、壁面が急な傾斜を呈し、井筒状になると考えられる。

埋土は、並行堆積をしており、人為的に埋められた可能性が考えられる。

出土遺物は、大量かつ多種にわたるものであった。土師器坏・台付甕、須恵器坏・甕のほか、弥生土器高坏・壺・甕が大量かつ良好な状態で検出できた。須恵器坏には、判読不明であるが墨書の見られるものが含まれていた。一方、大量の弥生土器であるが、隣接して弥生時代の遺構は確認されていない状

況であることと、出土遺物の磨滅が少ないことから当該期の井戸跡と重複して本遺構がつくられていた可能性も考えられるが、詳細は不明である。

時期は、土師器坏や須恵器坏などが示す時期と考えられる。

第14号井戸跡（第105図）

35・36-171グリッドに位置する。第41号溝跡と重複関係にあるが、新旧関係を明らかにすることはできなかった。また、第13号井戸跡と近接する位置にある。

平面形は径約0.9mの円形で、確認面から深さ約65cmまで掘削を行ったが、調査部分が狭く、崩壊が著しかったため途中で掘削を終了した。断面形状は、やや漏斗状を呈する。壁面上部の一部が、崩壊している。

土層は、平面形が小さかったため狭く、計測ができなかった。

出土遺物は少なく、弥生土器、土師器甕、須恵器甕などの破片が検出できたが、図示可能な遺物ではなかった。

時期は、平安時代と推定される。

第15号井戸跡（第105・107図、第52表）

36-170・171グリッドに位置する。第41号溝跡と重複関係にあるが、新旧関係を明らかにすることはできなかった。また、北側が調査区域外となっている。

平面形は、検出最大径1.48mを測るやや方形を呈する楕円形であると推定される。深さは確認面から約70cm辺りまで掘削を行ったが、調査中の崩壊が著しい上に調査部分が狭く、底面まで確認することができなかった。断面形状は、やや漏斗状を呈するが、これは壁面上部が崩落により大きくなったためと考えられる。

埋土は、並行堆積をしており、人為的に埋められた可能性が考えられる。

出土遺物は少なく、須恵器坏・椀、土師器細片、弥生土器壺などが検出できた。

第16号井戸跡（第105・107図、第52表）

36-171グリッドに位置する。第41・42号溝跡と重複関係にあり、本遺構がそれぞれを切っている。

平面形は径約0.56mの円形で、確認面から約60cm辺りまで掘削を行ったが、調査部分が狭く、底面まで確認することができなかった。断面形状は、ほぼ井筒状を呈する。

土層は、平面形が小さかったため狭く、計測ができなかった。

埋土は、並行堆積をしており、人為的に埋められた可能性が考えられる。

出土遺物は少なく、弥生土器甕破片などが検出できた。

第17号井戸跡（第105・107図、第52表）

37-171グリッドに位置する。第44号溝跡と重複関係にあり、本遺構が切っている。

平面形は径約1.2mの円形で、確認面から深さ約70cmまで掘削を行ったが、調査部分が狭く、崩壊が著しかったため途中で掘削を終了した。断面形状は、ほぼ井筒状を呈する。

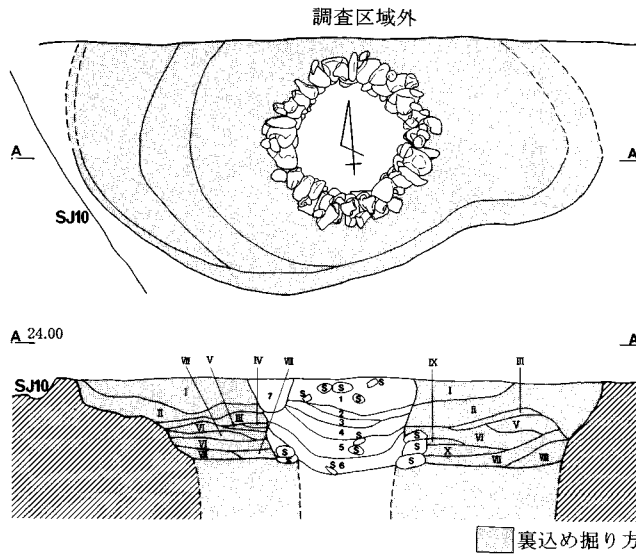
埋土は、並行堆積をしており、人為的に埋められた可能性が考えられる。

出土遺物は少なく、弥生土器壺・甕破片などが検出できた。これらは、混入遺物と考えられる。

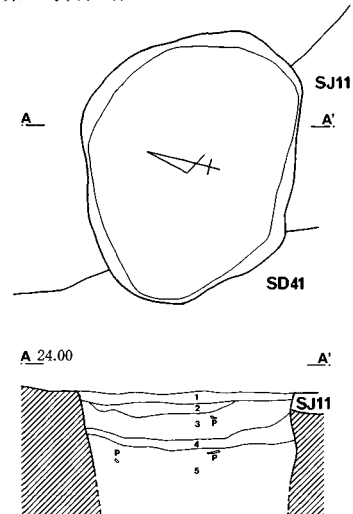
時期は、切り合いの関係から判断して中世と考えられる。

第18号井戸跡（第105・107図、第52表）

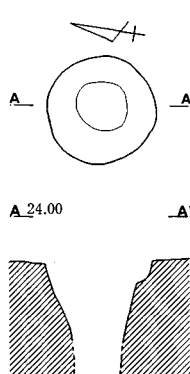
第12号井戸跡



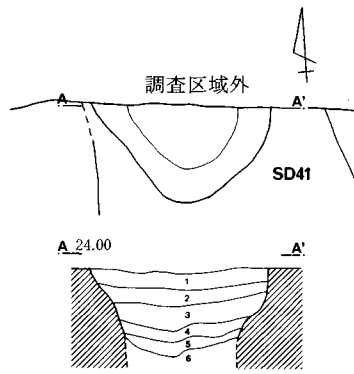
第13号井戸跡



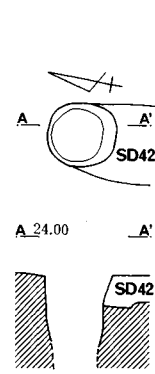
第14号井戸跡



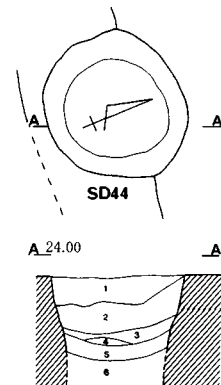
第15号井戸跡



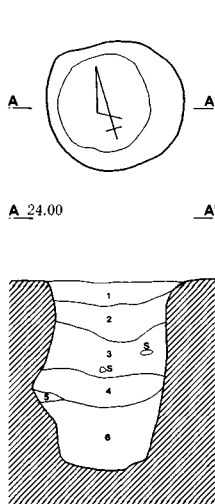
第16号井戸跡



第17号井戸跡



第18号井戸跡



第12号井戸跡

- 1 黒褐色粘質土 (しまり強い、粘性弱い、黄褐色土粒子、白色粒子少量、酸化鉄若干含む)
- 2 灰黄褐色粘質土 (しまり強い、粘性弱い、黄褐色土粒子多量、白色粒子、炭化物少量、酸化鉄若干含む)
- 3 黄灰色粘質土 (しまり強い、粘性弱い、酸化鉄若干含む)
- 4 灰オリブ色粘質土 (しまり強い、粘性弱い、オリブ色砂、灰白色粘土多量、酸化鉄若干含む)
- 5 暗灰色粘質土 (しまり強い、粘性弱い、オリブ色砂、酸化鉄若干含む)
- 6 暗灰色粘質土 (しまり強い、粘性弱い、砂質、酸化鉄若干含む)
- 7 擾乱 (裏込め)
- 1 オリブ褐色粘質土 (しまり強い、粘性弱い、黄褐色粘土粒子、黄褐色粘土ブロック、白色粒子、酸化鉄多量に含む)
- II オリブ褐色粘質土 (しまり強い、粘性弱い、黄褐色粘土粒子、黄褐色粘土ブロック少量、白色粒子、酸化鉄多量、炭化物わずかに含む)
- III 青灰色粘質土 (しまり強い、粘性弱い、黄褐色粘土ブロック・粒子多量、白色粒子少量、酸化鉄若干含む)
- IV 緑灰色粘土ブロック
- V 暗灰色粘質土 (しまり強い、粘性弱い、黄灰色粘土ブロック・粒子少量、酸化鉄若干含む)
- VI 緑灰色粘土 (しまり強い、粘性弱い、暗灰色粘土ブロック少量、酸化鉄若干含む)
- VII 暗青灰色粘土 (しまり強い、粘性強い、緑灰色粘土ブロック少量含む)
- VIII 暗灰色粘土 (しまり強い、粘性弱い、緑灰色粘土多量、酸化鉄若干含む)
- IX 暗灰色粘土ブロック
- X 灰色粘土 (しまり強い、粘性強い、緑灰色粘土ブロック・粒子少量、酸化鉄若干含む)

第13号井戸跡

- 1 オリブ褐色粘質土 (しまり強い、粘性弱い、白色粒子、酸化鉄多量に含む)
- 2 オリブ褐色粘質土 (しまり強い、粘性弱い、黄褐色土ブロック・粒子、白色粒子、酸化鉄多量に含む)
- 3 オリブ褐色粘質土 (しまり強い、粘性弱い、白色粒子多量、黄褐色土ブロック・粒子、赤色粒子、炭化物少量、酸化鉄若干含む)
- 4 暗オリブ灰色粘質土 (しまり強い、粘性弱い、赤色粒子少量、酸化鉄若干含む)
- 5 オリブ黒色粘質土 (しまり強い、粘性弱い、灰白色粘土粒子少量、炭化物、酸化鉄若干含む)

第15号井戸跡

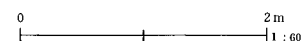
- 1 黒褐色粘質土 (しまり強い、粘性弱い、白色粒子、酸化鉄多量に含む)
- 2 オリブ褐色粘質土 (しまり強い、粘性弱い、白色粒子少量、酸化鉄多量に含む)
- 3 暗褐色粘質土 (しまり強い、粘性弱い、白色粒子少量、酸化鉄多量に含む)
- 4 暗青灰色粘質土 (しまり強い、粘性弱い、赤色粒子、炭化物少量、酸化鉄若干含む)
- 5 青灰色粘質土 (しまり強い、粘性弱い、酸化鉄若干含む)
- 6 暗青灰色粘質土 (しまり強い、粘性強い、炭化物少量、酸化鉄若干含む)

第17号井戸跡

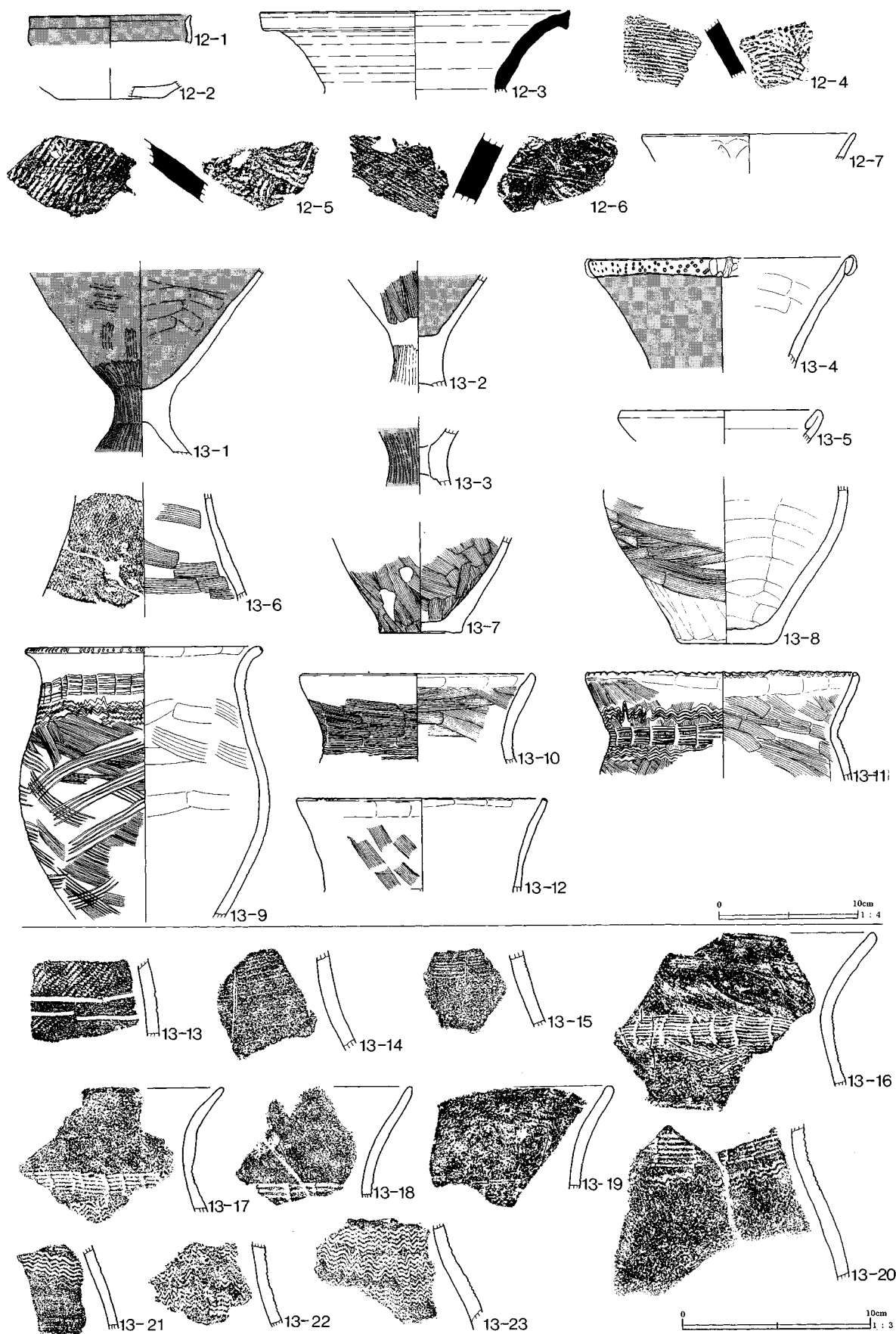
- 1 暗オリブ灰色粘質土 (しまり強い、粘性弱い、灰黄色粘土ブロック・粒子、白色粒子多量、酸化鉄多量に含む)
- 2 オリブ黒色粘質土 (しまり強い、粘性強い、灰黄色粘土ブロック多量、酸化鉄若干含む)
- 3 暗オリブ灰色粘質土 (しまり強い、粘性弱い、灰黄色粘土ブロック・粒子少量、酸化鉄若干含む)

第18号井戸跡

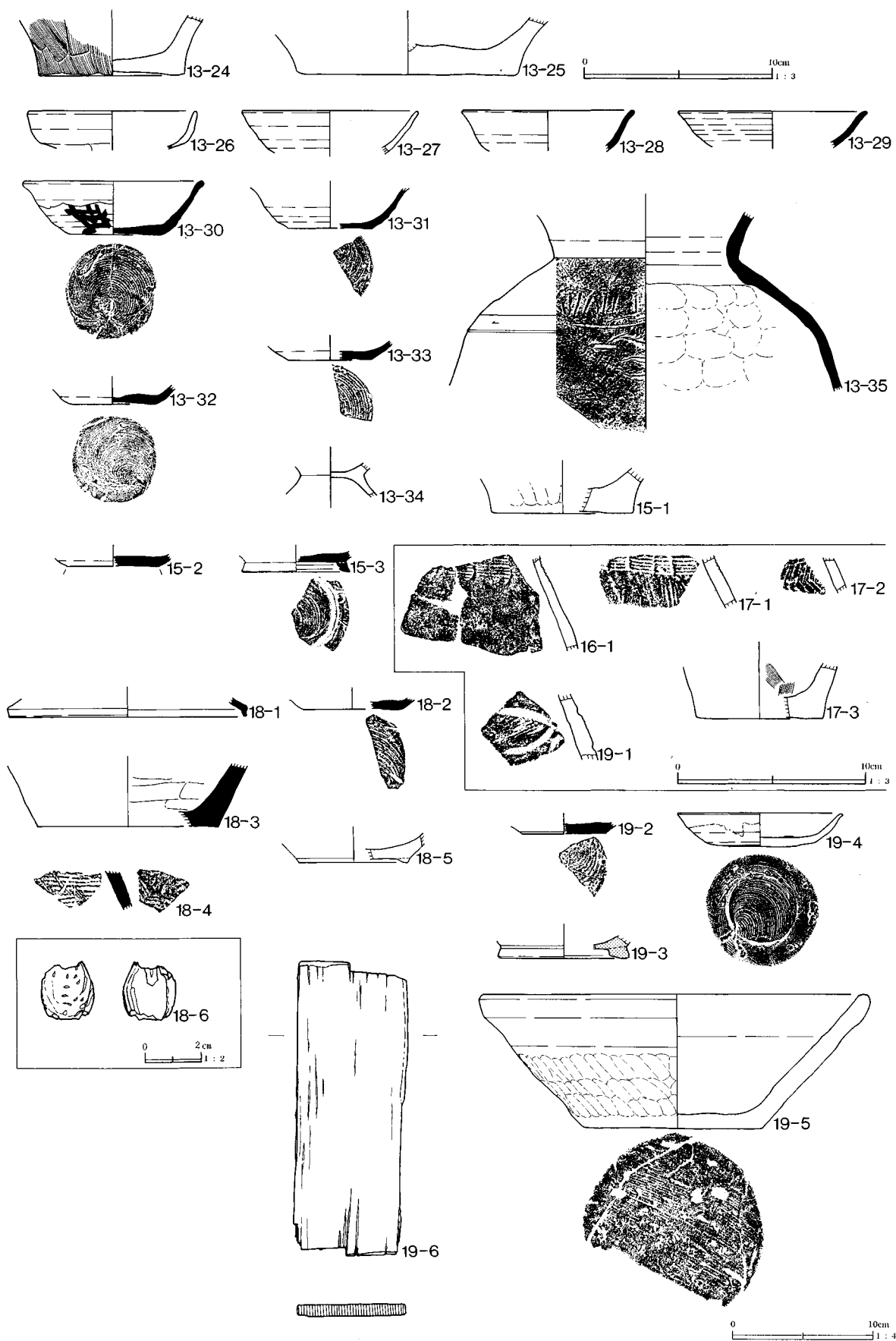
- 1 黄灰色粘質土 (灰白色粘質土、灰色粘土ブロック、炭化物、火山灰若干、酸化鉄多量に含む)
- 2 灰色粘土
- 3 オリブ黒色粘土 (粘性強い、礫含む)
- 4 黒色粘土 (粘性強い)
- 5 明青灰色粘土 (粘性強い)
- 6 黒色粘土 (粘性非常に強い、明青灰色粘土ブロック多量に含む)



第105図 第12～18号井戸跡



第106図 第12・13号井戸跡出土遺物



第107図 第13・15～19号井戸跡出土遺物

第52表 第12・13・15～19号井戸跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
12-1	土師器坏	(11.8)	—	—	ACGN	にぶい橙色	A	10%以下	内外面赤彩。
12-2	須恵器坏	—	—	(7.7)	BEJM	浅黄橙色	C	10%以下	
12-3	須恵器甕	(22.2)	—	—	AB	灰色	A	10%以下	内外面自然釉。
12-4	須恵器甕	—	—	—	ABNL	灰色	A	胴部	外面平行叩き目。内面青海波文。未野産。
12-5	須恵器甕	—	—	—	ABL	褐灰色	A	胴部	外面格子叩き目。内面青海波文。未野産。
12-6	須恵器甕	—	—	—	AN	青灰色	A	胴部	外面格子叩き目。内面青海波文。内面非常に平滑であるため、転用砥石または転用硯の可能性あり。
12-7	青磁碗	(15.4)	—	—	灰白色	—	—	10%以下	鎬蓮弁文。龍泉窯系。
13-1	弥生土器高坏	—	—	—	AGKM	灰黄褐色	A	70%	外面ミガキ。坏部内外面、脚台部外面赤彩。器面荒れる。
13-2	弥生土器高坏	—	—	—	ABEI	浅黄橙色	C	30%	坏部外面刷毛目、脚台部外面ミガキ。坏部内面赤彩。
13-3	弥生土器高坏	—	—	—	ABM	にぶい黄橙色	A	10%	外面ミガキ。脚台部外面赤彩。
13-4	弥生土器壺	(19.2)	—	—	AEHMN	橙色	B	10%	折り返し口縁部外面竹管文、2条1組の棒状浮文貼付け。外面赤彩。
13-5	弥生土器壺	(14.0)	—	—	AEGJ	にぶい橙色	A	10%以下	
13-6	弥生土器壺	—	—	—	ACHJN	黒褐色	A	10%	外面LR縄文。内面刷毛目。
13-7	弥生土器壺	—	—	(4.9)	AEG	橙色	A	15%	内外面刷毛目。
13-8	弥生土器壺	—	—	(7.0)	AEGHJ	にぶい黄橙色	B	30%	
13-9	弥生土器甕	16.7	—	—	AEGJ	橙色	A	60%	櫛描簾状文及び波状文。斜位、縦位細目刷毛目後交差櫛描文。
13-10	弥生土器甕	(16.7)	—	—	AGKM	黒褐色	A	15%	櫛描波状文。内外面刷毛目。
13-11	弥生土器甕	(19.4)	—	—	AHN	黒褐色	A	10%	キザミ口縁。外面刷毛目の後櫛描波状文及び簾状文。内面刷毛目。口縁部内面炭化物付着。
13-12	弥生土器甕	(18.0)	—	—	AGHKM	にぶい橙色	A	10%	刷毛目の後櫛描簾状文。
13-13	弥生土器壺	—	—	—	—	黒褐色	—	胴部	地文RL縄文。
13-14	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい橙色	—	頸部	櫛描T字文。
13-15	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい橙色	—	頸部	櫛描T字文。内面赤彩。
13-16	弥生土器甕	—	—	—	—	黒褐色	—	口縁部	刷毛目の後櫛描簾状文及び波状文。
13-17	弥生土器甕	—	—	—	—	浅黄橙色	—	口縁部	櫛描簾状文及び波状文。
13-18	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい橙色	—	口縁部	刷毛目の後櫛描簾状文。
13-19	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	口縁部	刷毛目の後櫛描簾状文。
13-20	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	胴部	刷毛目の後櫛描簾状文及び波状文。
13-21	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい褐色	—	頸部	櫛描簾状文及び波状文。
13-22	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい褐色	—	頸部	櫛描波状文。
13-23	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	頸部	櫛描波状文。
13-24	弥生土器壺	—	—	(7.8)	—	橙色	—	底部	
13-25	弥生土器甕	—	—	—	—	浅黄橙色	—	底部	
13-26	土師器坏	(13.1)	—	—	AEHJKM	橙色	B	10%	
13-27	須恵器坏	(12.4)	—	—	ABH	にぶい黄橙色	C	10%	
13-28	須恵器坏	(12.2)	—	—	ABF	灰色	A	10%	南比企産。
13-29	須恵器坏	(13.4)	—	—	ABN	灰色	A	10%	未野産。
13-30	須恵器坏	(12.7)	3.9	6.5	ABCGHN	にぶい橙色	A	60%	体部外面墨書「?」。未野産。
13-31	須恵器坏	—	—	(6.0)	ABGLN	灰色	A	15%	未野産。
13-32	須恵器坏	—	—	6.2	ABFN	灰色	A	40%	南比企産。
13-33	須恵器坏	—	—	(6.0)	ABEN	灰色	A	10%	未野産。
13-34	土師器台付甕	—	—	—	AHJK	橙色	A	10%	
13-35	須恵器甕	—	—	—	AFGHIN	灰色	A	15%	南比企産。
15-1	弥生土器壺	—	—	(7.6)	—	にぶい褐色	—	底部	
15-2	須恵器坏	—	—	(6.6)	AFH	灰白色	A	10%	
15-3	須恵器碗	—	—	(7.7)	ABFH	灰色	A	10%	南比企産。
16-1	弥生土器甕	—	—	—	—	灰褐色	—	胴部	櫛描簾状文。
17-1	弥生土器甕	—	—	—	—	橙色	—	頸部	刷毛目の後櫛描簾状文。
17-2	弥生土器壺	—	—	—	—	明赤褐色	—	胴部	羽状ヘラ描文。
17-3	弥生土器壺	—	—	(6.8)	—	橙色	—	底部	
18-1	須恵器蓋	—	—	—	ABF	灰色	A	10%以下	南比企産。
18-2	須恵器坏	—	—	(7.0)	ABFGH	灰色	A	10%	
18-3	須恵器壺	—	—	(13.0)	ABHIN	灰色	A	10%以下	外面自然釉。
18-4	須恵器甕	—	—	—	ABEHJ	灰色	A	胴部	
18-5	陶器碗	—	—	(7.8)	褐灰色	—	—	15%	
18-6	種子桃	長さ2.1	幅1.8	厚さ(3.5)	—	—	—	欠損	重さ0.7g。

番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	色 調	焼成	残存率	備 考
19-1	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	胴部	沈線文区画内にLR縄文。
19-2	須恵器坏	—	—	(6.0)	ABFHK	灰白色	A	10%	南比企産。
19-3	灰釉陶器瓶	—	—	(8.7)	ABI	灰白色	A	10%以下	外面に若干釉薬。東濃産？
19-4	陶器小皿	11.7	2.4	4.9	灰白色	—	—	85%	見込みにトチン跡3箇所。内面及び外面口縁部に灰釉ツケガケ。
19-5	瓦質土器播鉢	27.3	9.5	12.8	褐灰色	—	—	60%	在地産。
19-6	板材	長さ21.2	幅7.8	厚さ0.8	—	—	—	—	柁目取り。釘穴2箇所残存。曲物の蓋板か？

38・39-170グリッドに位置する。

平面形は径1.15mほどの円形で、確認面からの深さは1.54mを測る。断面形状は、壁がほぼ垂直に立ち上がり井筒状となっているが、北及び西の壁面の崩壊が著しく、深さ約70cm辺りからオーバー・ハングし、最大幅1.08mを測った。さらにその下、底面に至るまではほぼ垂直の壁面を呈している。底面はやや整いの悪い舟底状となっている。

埋土は、並行堆積をしており、人為的に埋められた可能性が考えられる。また、底面は、砂層まで至っていた。

出土遺物は、須恵器蓋・坏・壺・甕、土師器坏・甕、陶器碗、瓦質土器土鍋などのほか、桃の種子が検出できた。

時期は、平安時代から中世と考えられる。

第19号井戸跡（第107・108図、第52表）

40-171グリッドに位置する。

平面形は径約0.76m～0.72mの円形で、確認面から深さ約80cmまで掘削を行ったが、調査部分が狭かったため途中で掘削を終了した。断面形状は、ほぼ井筒状を呈する。

埋土は、自然堆積と考えられる。また、中間から下の層には、腐蝕した木片を含んでいた。

出土遺物は、陶器皿、瓦質土器播鉢、須恵器坏、灰釉陶器瓶、弥生土器壺破片のほか、曲物の蓋板と考えられる板材が検出できた。陶器皿と瓦質土器播鉢は、上層の同一層からほぼ上下に重なって出土した。

第20号井戸跡（第108・109図、第53表）

41-171グリッドに位置する。第46号溝跡と重複関係にあり、本遺構が切っている。

平面形は径1.2mの円形で、確認面からの深さは1.0mを測る。断面形状は、変形した漏斗状を呈し、最下面では、幅わずか35cmと狭くなる。また、壁面は崩壊も加わったため、確認面から約40cmの辺りからオーバー・ハングしており、最大幅1.14mを測った。その下は、急に窄まり井筒状を呈して底面に至る。

埋土は、複雑に堆積をしており、人為的に埋められた可能性が考えられる。また、中間層に大きな礫が含まれていた。さらに、上層から中間層まで第19号井戸跡と同様に腐蝕木片が含まれており、堆積途中でいったん湿地のような状態があったのではないかと考えられる。

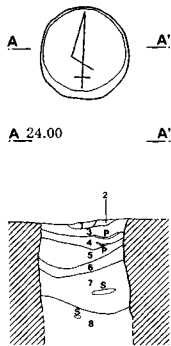
出土遺物は、土師質土器坏、瓦質土器播鉢・内耳土鍋、須恵器長頸壺・甕、土師器甕破片などが検出できた。

時期は、中世と考えられる。

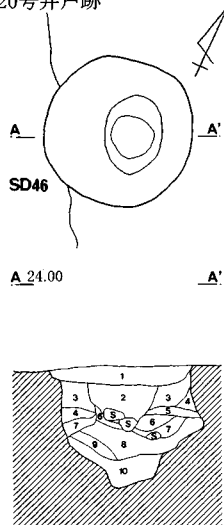
第21号井戸跡（第108・109図、第53表）

39-175グリッドに位置する。西側半分が調査区域外となっている。

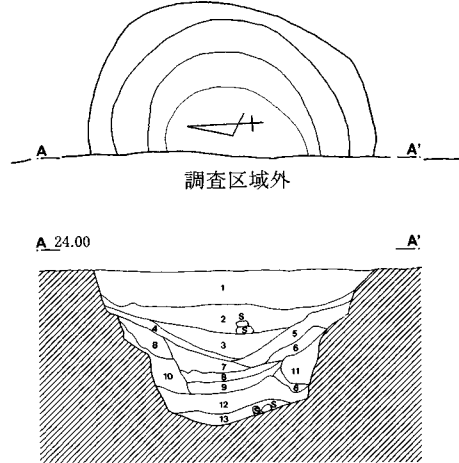
第19号井戸跡



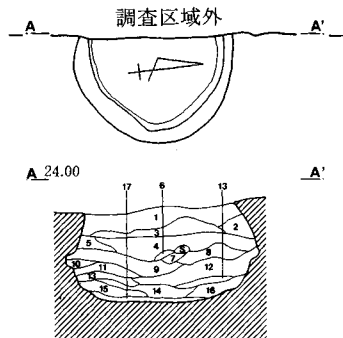
第20号井戸跡



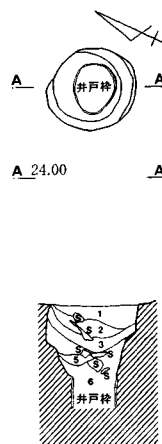
第21号井戸跡



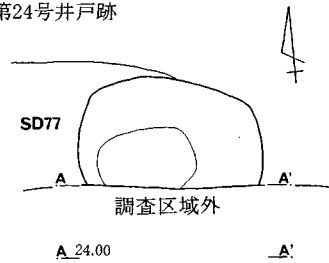
第22号井戸跡



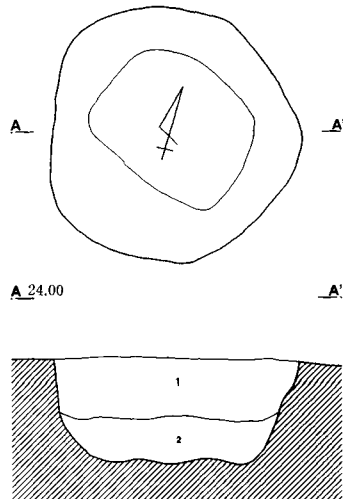
第23号井戸跡



第24号井戸跡



第25号井戸跡



第20号井戸跡

- 1 灰白色粘質土 (灰白色シルトブロック若干、酸化鉄少量、腐蝕木片少量含む)
- 2 灰色粘質土 (腐蝕木片少量、大礫含む)
- 3 灰色粘質土 (灰白色シルトブロック・粒子、腐蝕木片若干含む)
- 4 暗青灰色粘土
- 5 黄灰色粘土 (腐蝕木片多量に含む)
- 6 灰色粘土 (腐蝕木片少量含む)
- 7 灰色粘土 (明緑灰色粘土ブロック少量含む)
- 8 暗灰色粘土 (明緑灰色粘土ブロック少量含む)
- 9 オリーブ黒色粘土 (明緑灰色粘土ブロック少量含む)
- 10 黒色粘土 (明緑灰色粘土ブロック少量含む)

第21号井戸跡

- 1 灰色土 (酸化鉄多量に含む褐色帯びる、礫少量含む)
- 2 灰色粘質土 (灰白色土微粒子若干、火山灰、炭化物若干、礫含む)
- 3 青灰色粘質土 (明緑灰色シルト粒子わずかに、礫含む)
- 4 灰色粘土 (シルト混じる、灰白色シルトブロック若干含む)
- 5 暗青灰色粘土 (炭化物含む)
- 6 黄灰色粘土 (シルト混じる、暗青灰色粘土ブロック、酸化鉄少量含む)
- 7 灰色粘土 (青灰色粘土ブロック若干含む)
- 8 明青灰色シルト (酸化鉄少量含む)
- 9 灰色粘土 (粘性強い、砂混じる)
- 10 青灰色粘土 (軟弱、明青灰色粘土ブロック含む)
- 11 明青灰色シルトブロック・暗青灰色粘土ブロック・黄灰色粘土ブロック混合層
- 12 暗青灰色粘土 (粘性強い、明青灰色シルトブロック多量に含む)
- 13 暗灰色粘土 (粘性強い、礫含む)

第22号井戸跡

- 1 灰色土 (酸化鉄少量、炭化物多量に含む)
- 2 灰色土 (酸化鉄少量含む)
- 3 灰色土 (灰白色砂質土粒子、酸化鉄若干、炭化物含む)
- 4 灰色土 (灰白色砂質土ブロック・粒子少量、酸化鉄若干、炭化物含む)
- 5 灰色砂質土 (酸化鉄ごくわずかに含む)
- 6 灰色粘質土
- 7 黄灰色粘質土 (かたくなる、酸化鉄少量含む)
- 8 灰色粘質土 (酸化鉄少量、土器含む)
- 9 灰色粘砂土 (灰白色粘土混じる、明緑灰色シルト粒子、酸化鉄ごくわずかに含む)
- 10 灰色粘土 (酸化鉄ごくわずかに含む)
- 11 灰色粘質土・灰色粘土混合層
- 12 灰色粘土 (粘性強い、灰色粘土粒子若干含む)
- 13 灰色粘土 (灰色粘質土粒子多量に混じる)
- 14 暗灰色粘土 (軟弱、シルト混じる)
- 15 灰色粘土 (若干砂混じる)
- 16 灰色粘土 (明緑灰色シルトブロック含む)
- 17 暗灰色粘土 (粘性強い、明緑灰色シルト粒子少量含む)

第23号井戸跡

- 1 オリーブ黒色粘土 (粘性強い、シルト感あり)
- 2 黒褐色粘土 (粘性強い、軟弱、マンガン粒子若干、片岩含む)
- 3 オリーブ黒色粘土
- 4 オリーブ黒色粘土 (灰オリーブ色土微粒子少量、マンガン粒子、木破片含む)
- 5 黒褐色粘土 (軟弱)
- 6 オリーブ黒色粘土 (粘性強い)

第24号井戸跡

- 1 砂層
- 2 灰色粘質土 (砂含む)
- 3 灰色粘質土 (砂含む)
- 4 黄灰色粘質土 (砂含む)
- 5 灰色粘土 (黄灰色土ブロック含む)

第25号井戸跡

- 1 黒褐色土 (灰オリーブ色土ブロック多量に含む)
- 2 砂層 (灰オリーブ色土ブロック少量含む)

第108図 第19～25号井戸跡

平面形は検出最大径2.3mのやや楕円形で、確認面からの深さは1.26mを測る。断面形状は、擂鉢状を呈する。底面は、整いの悪い舟底状となっている。

埋土は、大きく数回にわたって堆積しており、その堆積状態も並行堆積であることから、人為的に埋められた可能性が考えられる。

出土遺物は、陶器擂鉢、須恵器甕、土師器坏破片などが検出できた。

時期は、中世と考えられる。

第22号井戸跡（第108・109図、第53表）

39-177グリッドに位置する。西側半分が調査区域外となっている。

平面形は検出最大径1.3mの円形で、確認面からの深さは0.77mを測る。断面形状は、壁面の崩壊が著しく、深さ約40cm辺りからオーバー・ハングし、最大幅1.57mを測った。さらにその下、底面に至るまでやや窄まり、底面は舟底状であった。

埋土は、複雑に堆積をしており、人為的に埋められた可能性が考えられる。

出土遺物は、土師器高坏、須恵器蓋破片などが検出できた。

時期は、須恵器の示す平安時代と考えられる。

第23号井戸跡（第108・109図、第53表）

38・39-178グリッドに位置する。第49号溝跡と重複関係にあり、本遺構は溝が完全に埋まりきった後につくられたと考えられる。

平面形は径0.58mの円形で、確認面からの深さは0.72mを測る。断面形状は、壁面上部の崩落によりやや漏斗状を呈する。最下部は、径約37cm、高さ25.5cmの曲物を井戸枠に転用して、底面は砂層まで達していたようである。

埋土は、自然堆積と考えられる。また、埋土中には、下層から上層にかけて川原石や片岩が含まれていた。

出土遺物は少なく、須恵器坏、土師器などの破片のほか、桃の種子が検出できた。

第24号井戸跡（第108図）

58・59-187グリッドに位置する。第77号溝跡と重複関係にあり、本遺構が切っている。南側は調査区域外となっている。

平面形は一方の径1.5mの楕円形で、確認面からの深さは0.96mを測る。断面形状は、壁面上部の崩落により変形した漏斗状を呈する。底面は、舟底状であった。

埋土は、やや複雑な堆積が観察されたので、人為的に埋められた可能性が考えられる。また、埋土の第1層には、礫が縦に刺さった状態で検出された。

出土遺物は、検出できなかった。

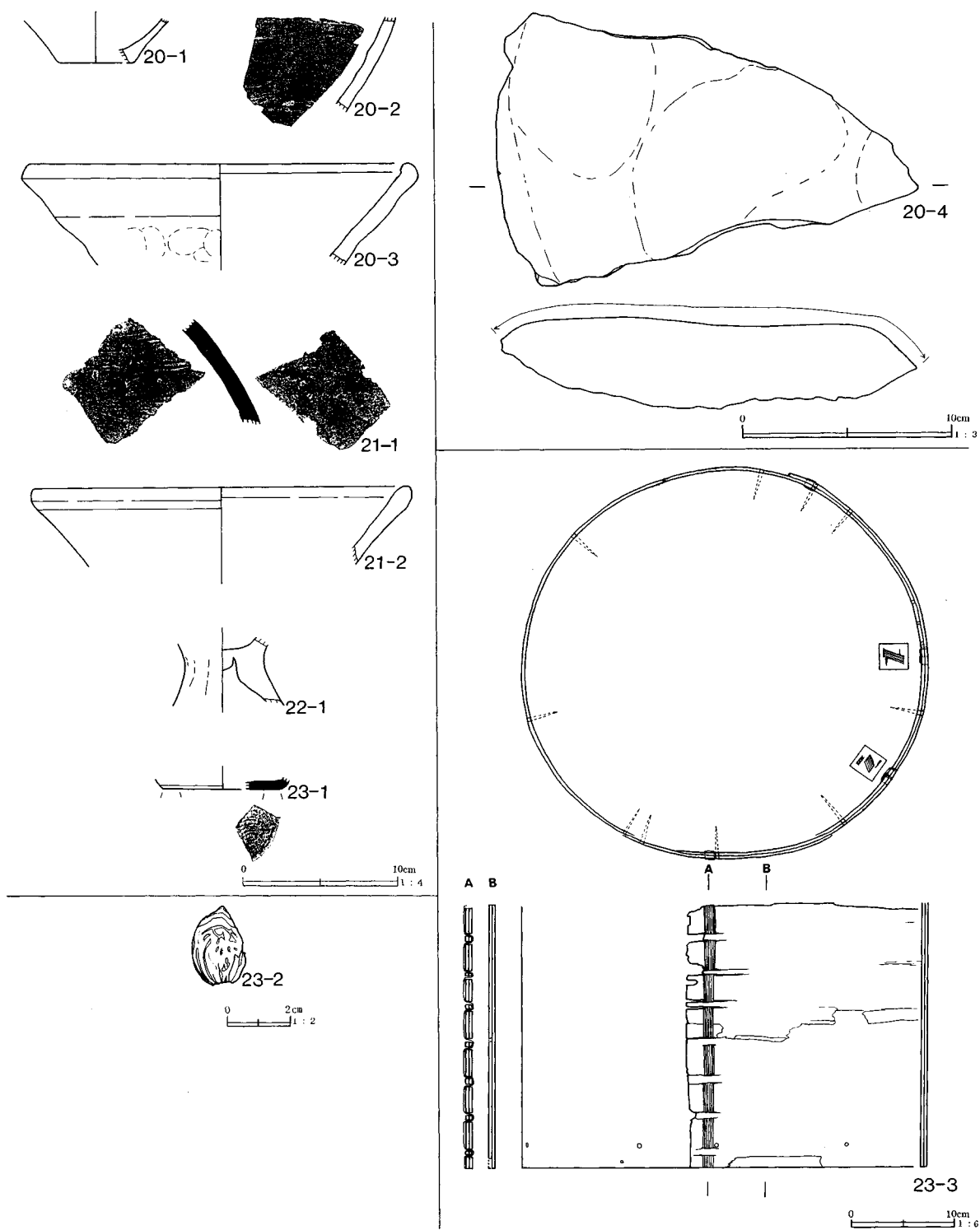
第25号井戸跡（第108図）

67-189グリッドに位置する。

平面形は径2.1×2.06mを測るほぼ円形で、確認面からの深さは0.88mを測る。断面形状は、やや箱形に近い舟底状を呈し、底面は少々起伏がある。底面は長軸1.78m×短軸1.0mの隅丸方形を呈する。

埋土は2層からなり、並行堆積をしており、人為的に埋められた可能性が考えられる。

出土遺物は、土師器甕破片がわずかに検出されたが、図示可能な遺物ではなかった。



第109図 第20～23号井戸跡出土遺物

第53表 第20～23号井戸跡出土遺物観察表

番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	色 調	焼成	残存率	備 考
20-1	土師質土器杯	—	—	(5.0)	ADH	明赤褐色	B	20%	外面自然釉。 在地産。 重さ1,086g。安山岩製。砥石用途か？
20-2	須恵器長頸壺	—	—	—	ABH	灰色	A	胴下半部	
20-3	瓦質土器播鉢	(24.4)	—	—	灰色	—	—	15%	
20-4	石製品	長さ13.1	幅20.0	厚さ4.2	—	—	—	—	重さ1,086g。安山岩製。砥石用途か？
21-1	須恵器甕	—	—	—	ALN	灰色	A	胴部	外面平行叩き目。内面あて具痕。
21-2	陶器播鉢	(24.4)	—	—	灰色	—	—	10%以下	
22-1	土師器高坏	—	—	—	AEGHJKN	浅黄橙色	A	10%	
23-1	須恵器杯	—	—	(7.5)	ABFH	灰色	A	10%以下	南比企産。
23-2	種子桃	長さ2.5	幅1.75	厚さ1.4	—	—	—	欠損	重さ1.5g。
23-3	曲物	38.5	(25.5)	厚さ0.25～0.3	—	—	—	—	ヒノキ。井戸枠に転用。

11 溝跡

溝跡は、総数にして80条検出した。その内訳は、第1区に37条、第2区に15条、第3区に17条、第4区に1条、第5区に3条、第6区に6条、第7区に1条所在する。

第1号溝跡（第110図）

20・21-155グリッドに位置する。第13・14号掘立柱建物跡、第8号ピットと重複関係にある。本遺構が、それぞれの遺構に切られる。

平面形状は、20-155グリッドから西へ延びる溝である。

検出長5.0m、最大幅0.5m、底面は少々起伏があり深さ15cmを測る。断面形状は、箱形状を呈する。

埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、土師器杯・甕破片などが検出されたが、図示可能な遺物ではなかった。

第2号溝跡（第110図）

20-156グリッドに位置する。第7号住居跡、第11号ピットと重複関係にあり、本遺構の両端がそれぞれに切られている。

残存長1.4m、最大幅0.25m、断面形状は箱形状で、深さ8cmを測る小規模な溝である。

出土遺物は、検出できなかった。

第3号溝跡（第110図）

20-156・157グリッドに位置する。第13号住居跡と重複関係にあり、本遺構の東側を切られている。また、西側は攪乱を受けている。

残存長2.6m、最大幅0.67m、深さ18cmを測る。断面形状は、箱形状である。

埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、検出できなかった。

第4号溝跡（第111・114図、第54表）

20-158グリッドから20-163グリッドにかけて位置する。北は攪乱を受けており、南は調査区域外となっている。途中、第7号溝跡、第15号住居跡、第4号掘立柱建物跡、第7・8号土坑、第1号井戸跡などと重複関係にあり、第7号溝跡を切り、その他の遺構に切られている。

残存長は26.7m、幅は0.3m～1.45m、深さは北で浅く16cm、南でやや深く25cmを測る。北側の20-

158・159グリッド付近で最も幅をもち、それより南は幅を狭めほぼ一定の幅で南下する。断面形状は、浅い箱形状の箇所と箱葉研状の箇所がある。

埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、縄文土器深鉢、土師器坏・台付甕・甕などが検出できた。

時期は、土師器や須恵器が示す7世紀後半から8世紀代の時期と考えられる。

第5号溝跡（第114図）

20-158グリッドに位置する。第6・11号掘立柱建物跡と重複関係にあるが、新旧関係は明らかにできなかった。東側は調査区域外となっている。

第6号溝跡とほぼ並行し、検出長1.8m、最大幅0.3m、深さはわずかに6cmを測る。断面形状は、丸味を帯び崩れた箱葉研状を呈する。

出土遺物は、弥生土器と考えられる破片が検出できたが、図示可能な遺物ではなかった。

時期は、不明である。

第6号溝跡（第114図）

20-158グリッドに位置する。第6・11号掘立柱建物跡、第5号土坑と重複関係にあり、第5号土坑を切っているが、掘立柱建物跡との新旧関係は明らかにできなかった。東側は調査区域外となっている。

第5号溝跡とほぼ並行し、検出長は2.05m、幅は0.4m～0.75m、深さは21cmを測る。底面は幅広の平底で、断面形状は箱形状を呈する。

埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、検出できなかった。

時期は、不明である。

第7号溝跡（第114図）

20・21-161グリッドに位置する。第4号溝跡、第1号井戸跡と重複関係にあり、それぞれに切られている。新旧関係は、古い順に、本遺構、第4号溝跡、第1号井戸跡となる。東側は調査区域外となっている。

検出長は4.7m、幅は1.2m～1.4m、深さ13cmを測る浅い溝である。断面形状は、底面が幅広の箱形状を呈する。

埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、土師器坏・甕破片などが検出できたが、いずれも細片で図示可能な遺物ではなかった。

時期は、他遺構との切り合いを加味して古墳時代後期と考えられる。

第8号溝跡（第110・111図、第54表）

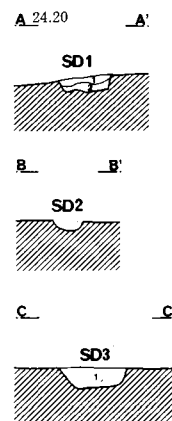
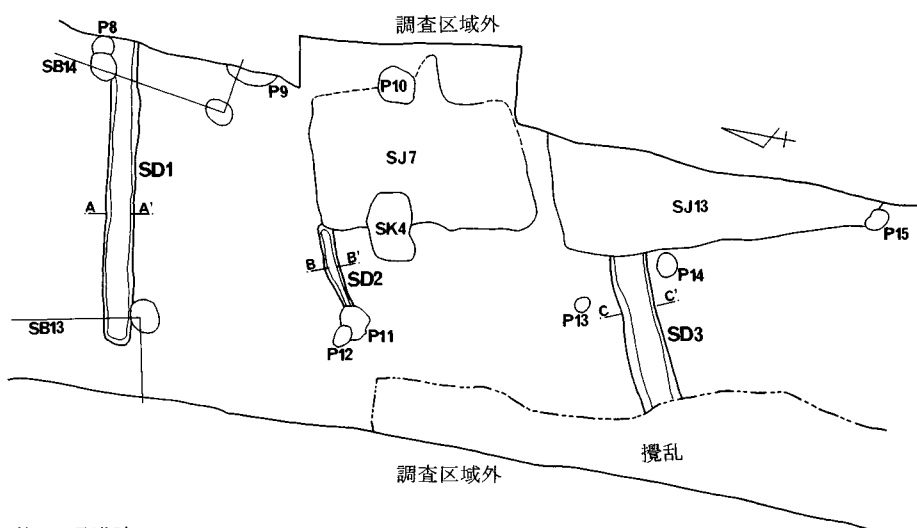
13・14-162グリッドに位置する。第9号溝跡と重複関係にあり、本遺構が切っている。また、東側は調査区域外となっている。

検出長は5.5m、幅は不規則で0.85m～1.3mと変化がある。深さも26cm～37cmを測る。断面形状は、幅広のところで舟底状、幅の狭いところで箱形状を呈する。

埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、土師器高坏・坏・甕、須恵器甕などが検出できた。

第1～3号溝跡



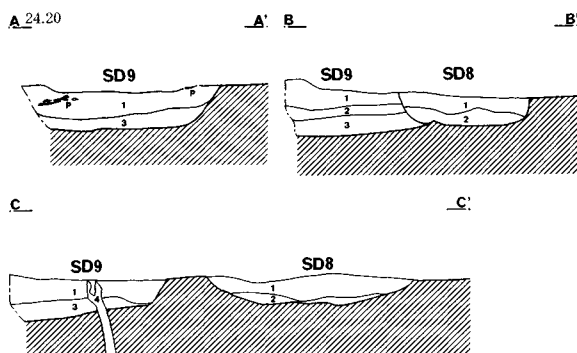
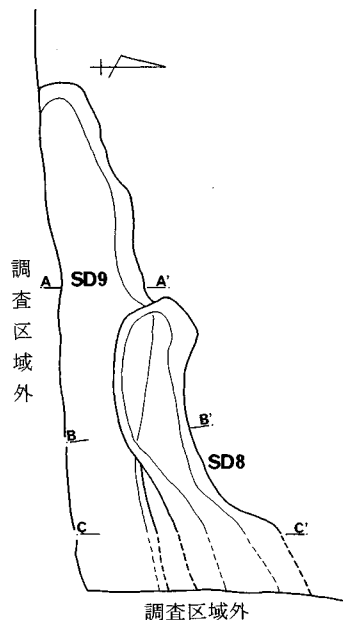
第1号溝跡

- 1 オリーブ黒色土 (酸化鉄、火山灰多量、焼土、炭化物若干含む)
- 2 灰色土 (黄褐色土多量に含む)

第3号溝跡

- 1 灰色土 (酸化鉄多量に含む)

第8・9号溝跡



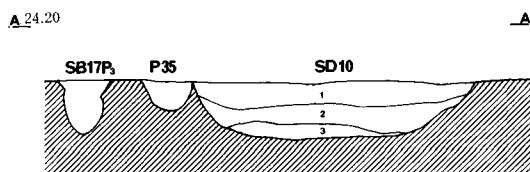
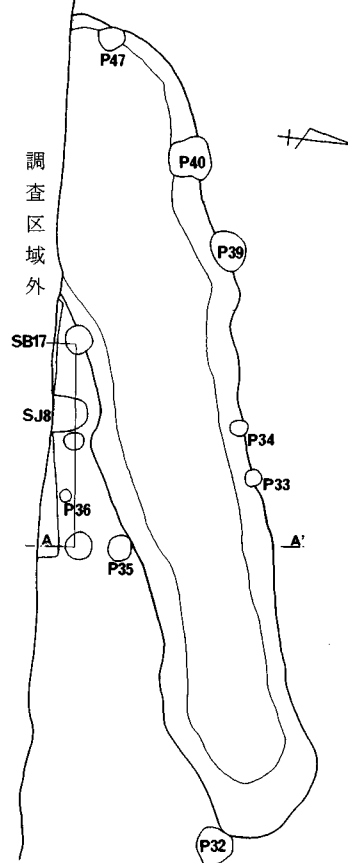
第8号溝跡

- 1 灰色土 (酸化鉄、火山灰多量に含む)
- 2 灰色土 (浅黄色土ブロック多量、酸化鉄、火山灰少量含む)

第9号溝跡

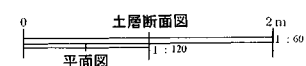
- 1 灰色土 (酸化鉄、火山灰多量に含む)
- 2 灰色土 (酸化鉄ブロック、火山灰多量に含む)
- 3 灰色土 (酸化鉄ブロック、火山灰多量に含む)
- 4 填砂

第10号溝跡



第10号溝跡

- 1 灰色土 (酸化鉄多量に含む)
- 2 灰色土 (灰白色土粒子、酸化鉄多量に含む)
- 3 灰色土 (灰白色土ブロック少量、酸化鉄多量、砂若干含む)



第110図 第1～3・8～10号溝跡

第9号溝跡 (第110～112図、第54表)

13-162グリッドから15-162グリッドにわたって位置する。第8号溝跡と重複関係にあり、本遺構が切られている。南側及び東側の大部分が調査区域外となっている。

検出長は9.4m、幅は不明で残存最大幅2.7m、深さは38cm～47cmを測る。断面形状は、やや舟底状の箱形を呈する。

埋土は、自然堆積と考えられる。また、埋土を噴砂が貫いている。

出土遺物は、弥生土器壺・甕が比較的良好な状態で、多数個体検出できた。

また、遺構の状態及び出土遺物から方形周溝墓の溝の可能性も考えられる。

第10号溝跡 (第110・113図、第55表)

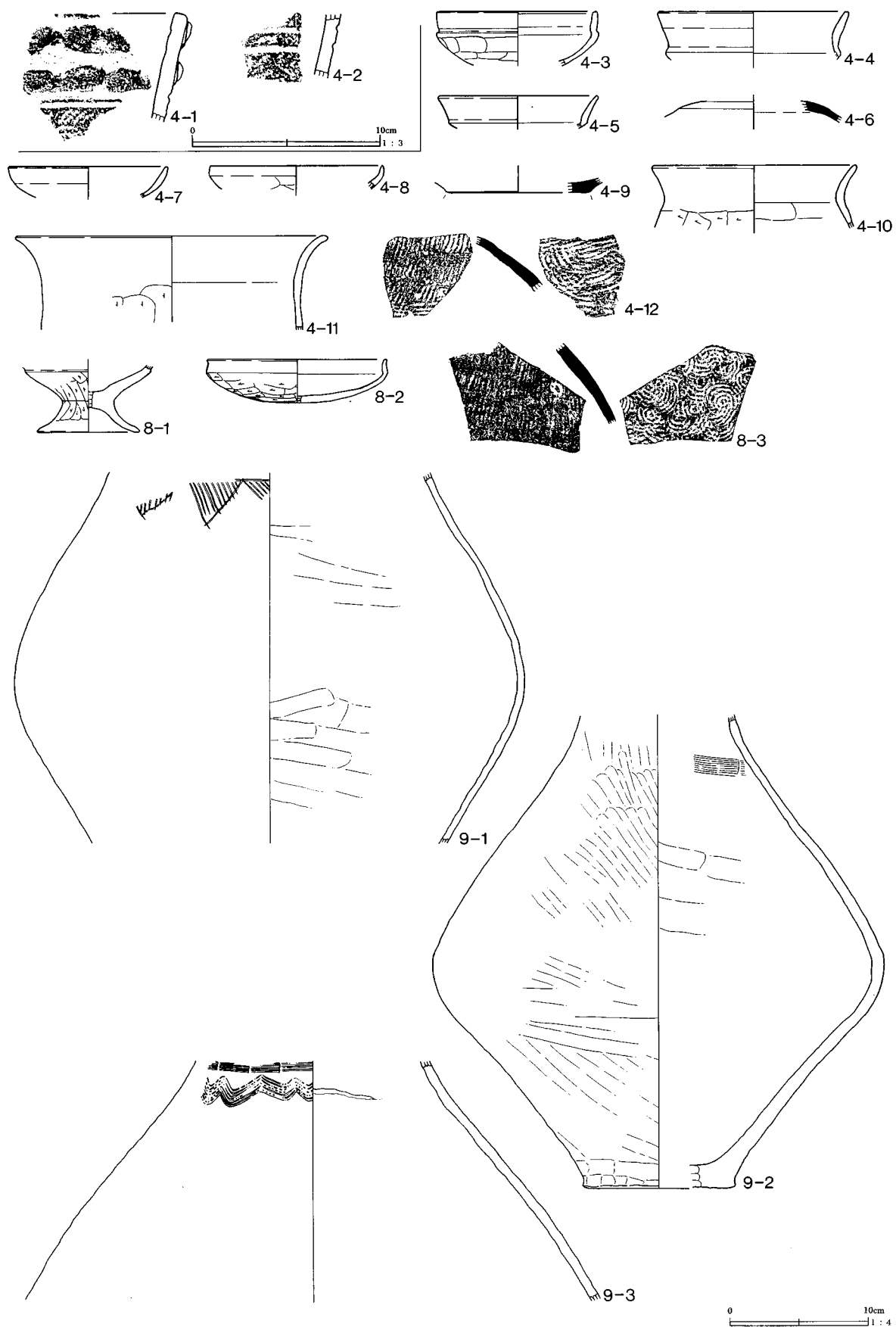
14-162グリッドから18-162グリッドにかけて位置する。第17号掘立柱建物跡及び数基のピットと重複関係にあり、本遺構がそれぞれに切られている。南西部の一部が調査区域外となっている。

検出長13.9m、幅は1.88m～2.75mである。深さは48cmを測り比較的深い。断面形状は、舟底状を呈する。

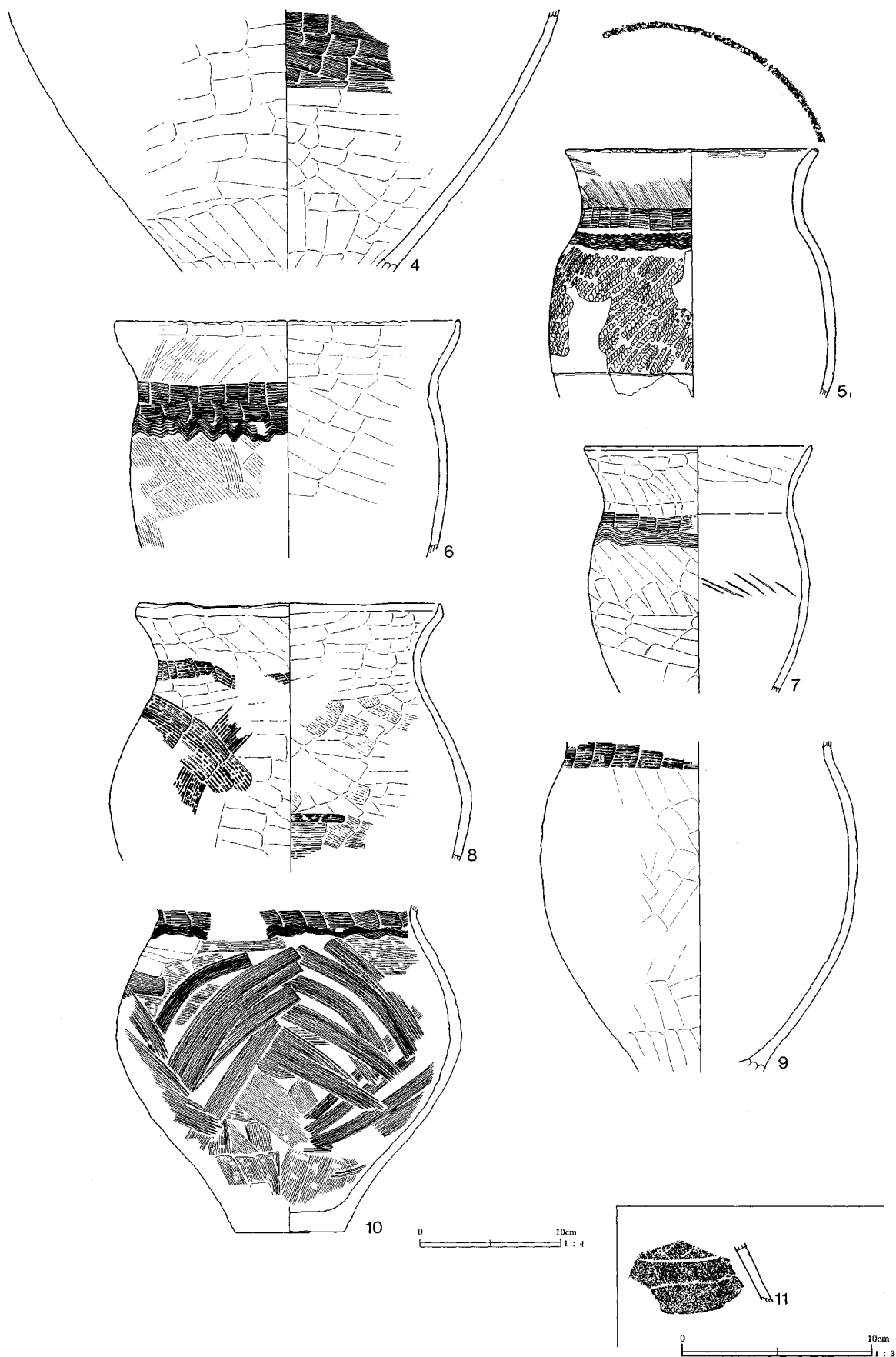
埋土は、自然堆積と考えられる。

第54表 第4・8・9号溝跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
4-1	縄文土器深鉢	—	—	—	—	橙色	—	口縁部	紐線文土器。口縁部外面に2条の紐線文。紐線文下沈線を挟んでRL縄文。
4-2	縄文土器深鉢	—	—	—	—	橙色	—	胴部	紐線文土器。地文RL縄文。2条の沈線文。
4-3	土師器杯	(11.4)	—	—	ABEHJMN	橙色	C	25%	南比企産。
4-4	土師器杯	(13.8)	—	—	AJ	橙色	C	10%以下	
4-5	土師器杯	(11.4)	—	—	BH	橙色	C	10%以下	
4-6	須恵器蓋	—	—	—	ABF	灰色	A	10%以下	
4-7	土師器杯	(11.4)	—	—	ADK	にぶい赤褐色	B	10%	南比企産。
4-8	土師器杯	(12.4)	—	—	AJ	橙色	A	10%以下	
4-9	須恵器杯	—	—	(10.4)	ABFN	灰色	A	10%以下	
4-10	土師器台付甕	(14.6)	—	—	AEHIJK	にぶい橙色	A	10%以下	
4-11	土師器甕	(22.6)	—	—	AGHJM	浅黄橙色	A	10%以下	外面平行叩き目。内面青海波文。
4-12	須恵器甕	—	—	—	ABH	灰白色	A	胴部	
8-1	土師器高杯	—	—	—	AEHJK	橙色	C	15%	
8-2	土師器杯	(12.8)	3.1	—	AEHJKM	橙色	C	30%	
8-3	須恵器甕	—	—	—	ABFM	灰色	A	胴部	頸部ヘラ描逆三角形文(斜線充填)。 胴上半部斜位ミガキ。摩滅著しい。 櫛描簾状文及び波状文。 胴中位内面刷毛目。
9-1	弥生土器壺	—	—	—	ADN	橙色	C	20%	
9-2	弥生土器壺	—	—	(11.0)	ABEK	灰褐色	C	20%	
9-3	弥生土器壺	—	—	—	ADN	橙色	C	20%	
9-4	弥生土器壺	—	—	—	ABN	にぶい黄橙色	B	20%	口唇部縄文圧痕。口縁部横位、斜位刷毛目。 頸部櫛描簾状文及び波状文。胴部L R縄文。 胴下半1条の沈線横走。口縁部内面横位刷毛目。 胴部内面ヘラナデ。
9-5	弥生土器甕	(18.0)	—	—	ADHIJN	にぶい褐色	C	30%	
9-6	弥生土器甕	(24.4)	—	—	ABCGHN	褐灰色	A	20%	
9-7	弥生土器甕	(16.2)	—	—	ABN	にぶい赤褐色	B	25%	
9-8	弥生土器甕	(21.8)	—	—	AGHMN	にぶい褐色	C	20%	口縁部ヘラナデ。頸部櫛描簾状文。胴部刷毛目。 頸部櫛描波状文。胴部ヘラナデ。 頸部櫛描簾状文及び波状文。胴部交差粗目及び細目刷毛目。
9-9	弥生土器甕	—	—	—	ABKN	にぶい赤褐色	B	20%	
9-10	弥生土器甕	—	—	7.6	ABN	にぶい褐色	B	40%	
9-11	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	頸部	



第111図 第4・8・9号溝跡出土遺物



第112図 第9号溝跡出土遺物(2)

出土遺物は、弥生土器壺破片が主体で、須恵器短頸壺などが検出できた。

時期は、弥生時代中期から後期と考えられる。

第11号溝跡（第113・114図、第55表）

17-161グリッドから西へ向かい19-162グリッドで南へ直角に曲がり19-163グリッドに至る位置に所在する。第12号溝跡、第3号住居跡、第4号掘立柱建物跡、第3号井戸跡などと重複関係にあり、第3号井戸跡やピットに切られ、他の遺構を切っている。古い順に、第3号住居跡、第12号溝跡、第4号掘立柱建物跡、本遺構、第3号井戸跡という順になる。北及び南が調査区域外となっている。

検出長は15.5m、幅は0.45m～0.95m、深さは全体を通じて41cm～46cmを測る。断面形状は、底面が幅広の箱葉研状となっている。また、溝の形状から南東側の内側を意識した区画溝のような形態である。

埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、須恵器蓋・椀・甕、土師器坏、土師質土器坏、瓦質土器壺、永楽通寶1枚などが検出できた。また、用途不明の滑石製の石製品を検出した。これは、一方端付近に径2cmほどの穿孔が施され、表面は刃物で付けられたと思われる傷が無数にあった。

時期は、他遺構との切り合いや出土した土師質土器や瓦質土器から中世と考えられる。

第12号溝跡（第113・114図、第55表）

18-161グリッドから21-163グリッドにかけて位置する。第4・11・13～16号溝跡、第3号住居跡、第4号掘立柱建物跡、第3・4号井戸跡などと重複関係にあり、唯一第16号溝跡を本遺構が切り、その他の遺構に本遺構が切られている。東西は調査区域外となっている。

検出長は15.3m、幅は0.67m～1.05m、溝は東に傾斜しており、深さは西で38cmと浅く、中央部で49cmといったん深くなり、また東で40cmとやや浅くなり西とほぼ同じ深さとなる。断面形状は、東でやや舟底状を呈し、西で箱葉研状を呈する。

埋土は、自然堆積と考えられる。また、西で第2層まで貫く噴砂を確認した。

出土遺物は、土師器坏・甕・台付甕、須恵器蓋・長頸壺・甕などが検出できた。また、頭部の一部を欠損していたが、骨角製の勾玉が検出された。

第13号溝跡（第114・116図、第56表）

20-162・163グリッドに位置する。第12号溝跡、第4号掘立柱建物跡、第1号井戸跡と重複関係にあり、本遺構が第12号溝跡を切り、他の遺構に切られている。古い順に、第12号溝跡、本遺構、第4号掘立柱建物跡、第1号井戸跡となる。南側は調査区域外となっている。

第4号溝跡の南部とほぼ並行し、近接した箇所では約50cm、最も離れた箇所では83cmの距離にある。残存長は8.4m、幅0.43m～0.75m、深さは北でやや浅く15cm、南で20cmを測り南へ傾斜している。底部の形状は平坦で、幅の広い箱形状ないしは箱葉研状の断面形状である。

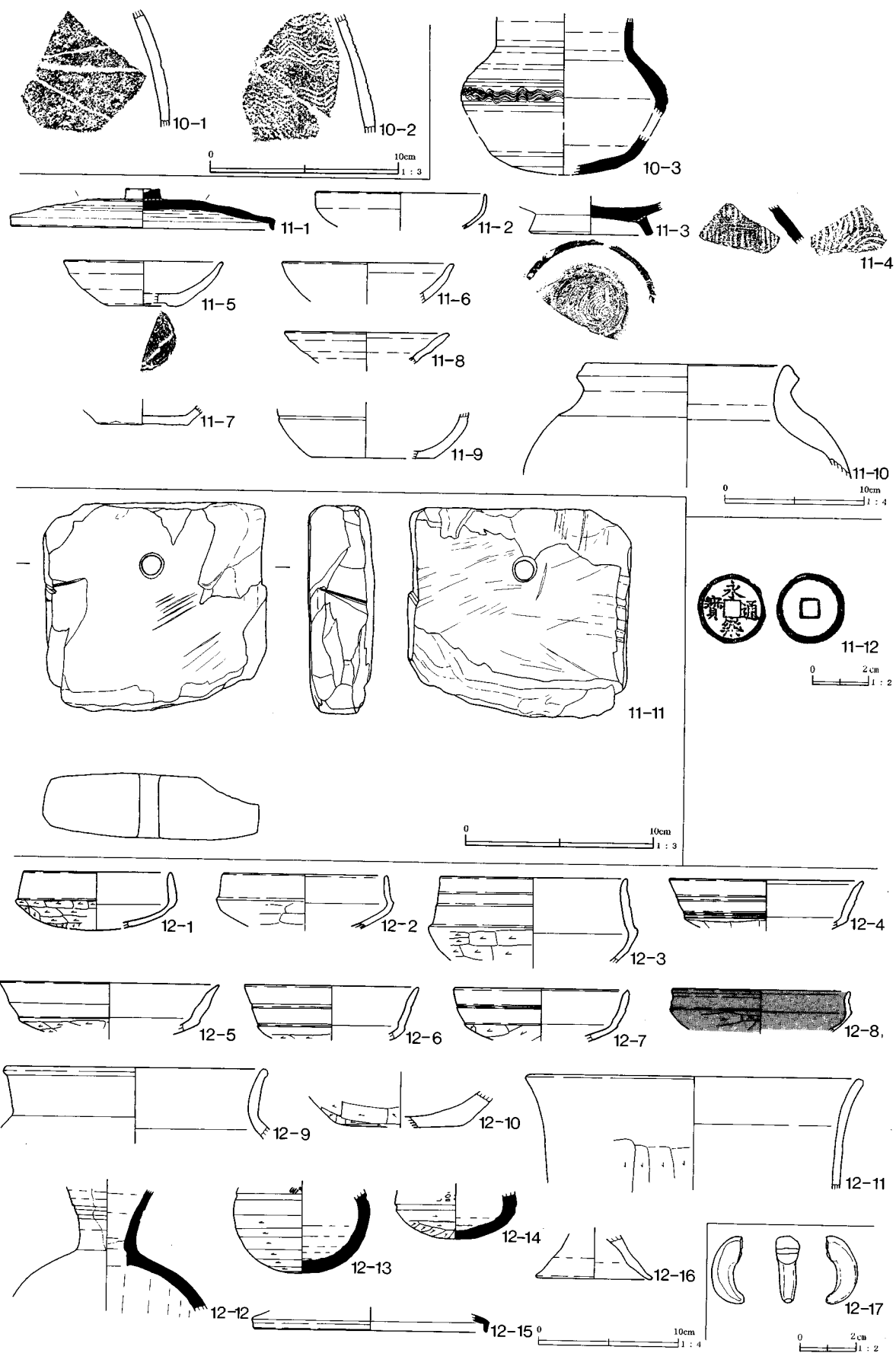
埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、土師器坏・甕、須恵器坏・甕などが検出できた。

時期は、出土遺物の時期が幅広いが、切り合い関係から判断すると7世紀前半と考えられる。

第14号溝跡（第114・116図、第56表）

20・21-161・162グリッドに位置する。第12号溝跡、第9号土坑と重複関係にあり、本遺構が第12号溝跡を切り、第9号土坑に切られている。



第113図 第10~12号溝跡出土遺物

第55表 第10～12号溝跡出土遺物観察表

番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	色 調	焼成	残存率	備 考
10-1	弥生土器壺	—	—	—	—	浅黄橙色	—	胴部	沈線文。
10-2	弥生土器壺	—	—	—	—	浅黄橙色	—	胴部	細目刷毛目の後櫛描波状文。
10-3	須恵器短頸壺	—	—	—	ADGH	青灰色	A	20%	底部内面青海波文。
11-1	須恵器蓋	(18.9)	2.8	—	ABEFN	灰色	A	20%	
11-2	土師器坏	(12.2)	—	—	AJKM	橙色	B	10%以下	
11-3	須恵器椀	—	—	(9.0)	ABGHN	青灰色	A	15%	
11-4	須恵器甕	—	—	—	AMN	青灰色	A	胴部	外面平行叩き目。内面青海波文。
11-5	土師質土器坏	(11.5)	3.2	(4.8)	AHJM	灰白色	A	20%	ロクロ成形。
11-6	土師質土器坏	(12.2)	—	—	AJK	灰白色	A	10%以下	ロクロ成形。
11-7	土師質土器坏	—	—	(6.5)	BEG	にぶい黄橙色	C	10%	ロクロ成形。
11-8	土師質土器皿	(11.8)	—	—	BHM	灰黄色	A	10%以下	ロクロ成形。
11-9	瓦質土器鉢	—	—	(9.8)	灰白色	—	—	10%以下	
11-10	瓦質土器壺	(14.5)	—	—	灰色	—	—	30%	
11-11	石製品	長さ11.0	幅11.85	厚さ3.4	—	—	—	一部欠損	重さ845g。6面とも平滑。刃物キズ無数。滑石製。用途不明。
11-12	古銭	直径2.5	—	—	—	—	—	完形	永樂通寶。真書体。初鑄年明1408年。
12-1	土師器坏	10.6	(4.2)	—	AHJ	にぶい黄褐色	A	40%	
12-2	土師器坏	(11.7)	—	—	AEJ	橙色	C	10%	
12-3	土師器坏	(13.3)	—	—	AEHJ	浅黄橙色	A	20%	
12-4	土師器坏	(13.8)	—	—	AEJKM	にぶい褐色	A	15%	
12-5	土師器坏	(15.7)	—	—	ADHJ	にぶい黄褐色	B	20%	
12-6	土師器坏	(12.4)	—	—	AGHJKM	にぶい褐色	A	15%	
12-7	土師器坏	(12.4)	—	—	AEGJ	灰黄色	A	20%	
12-8	土師器坏	(12.6)	—	—	AJKM	赤褐色	A	10%	内外面赤彩。
12-9	土師器甕	(18.4)	—	—	AEIJ	にぶい橙色	A	10%以下	
12-10	土師器甕	—	—	(9.2)	ACGHJM	明赤褐色	B	10%以下	
12-11	土師器甕	(24.0)	—	—	AEGHM	にぶい黄橙色	C	10%以下	
12-12	須恵器長頸壺	—	—	—	ABHMN	灰色	A	30%	外面自然釉。ロクロ回転と直交方向に穿孔、頸部とりつける。
12-13	須恵器礎	—	—	—	AMN	青灰色	A	30%	沈線区画内に櫛歯刺突文。
12-14	須恵器礎	—	—	—	AHMN	灰色	A	15%	沈線区画内に櫛歯刺突文。下半静止ヘラケズリ。
12-15	須恵器蓋	(16.6)	—	—	ABF	灰色	A	10%以下	南比企産。
12-16	土師器台付甕	—	—	(8.2)	AEJKM	にぶい黄橙色	B	10%以下	
12-17	勾玉	長さ2.4	幅0.8	重さ0.7	—	—	—	頭部欠損	骨角製。

長さは5.2m、幅はやや不規則で0.9m～1.57m、深さは25cmを測る。断面形状は、やや舟形状を呈するが、基本的には箱形状であると考えられる。

埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、土師器坏・甕、須恵器甕などが検出できた。

第15号溝跡（第114・116図、第56表）

21-161グリッドから21-163グリッドにかけて位置する。第12号溝跡、第4・6号井戸跡、第67号ピットと重複関係にあり、本遺構が第12号溝跡を切り、他の遺構に切られている。北側が調査区域外となっている。

第4・13号溝跡と並行しており、検出長は11.75m、幅は南で先細りし0.4mを測り、北で平均約0.9mを測る。深さは北で深く47cm前後、南で浅く約9cmを測り、先端部は約7cmと浅い。断面形状は、南部を除いて基本的に葉研状を呈している。

埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、須恵器坏・甕、土師器坏・甕などのほか、土製の支脚の一部と考えられる土製品が検出

できた。

時期は、須恵器坏が示す時期である9世紀代と考えられる。

第16号溝跡 (第114・116図、第56表)

21-162・163グリッドに位置する。第12号溝跡と重複関係にあり、本遺構が切られている。わずかに一部が調査区域外となっている。

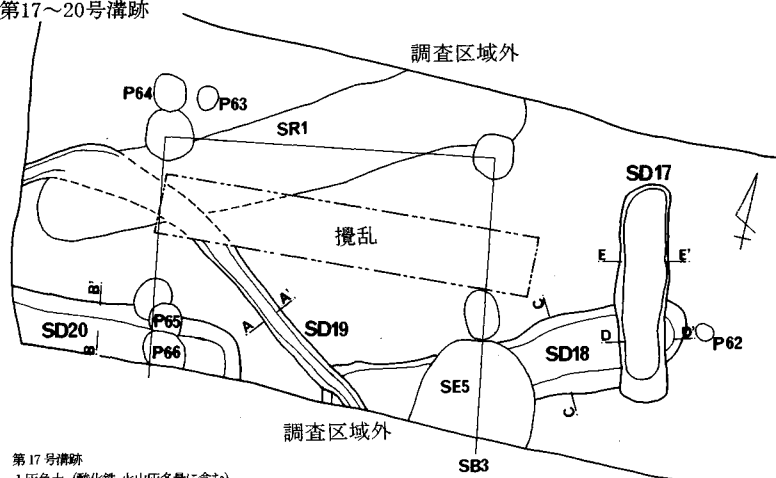
残存長1.95m、幅0.65m、深さは浅く13cmを測る。断面形状は、底面が幅広で箱形状を呈する。

埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、土師器坏・甕などがわずかに検出された。

時期は、第12号溝跡とほぼ同時期であるが、本遺構がわずかに古いと考えられる。

第17～20号溝跡



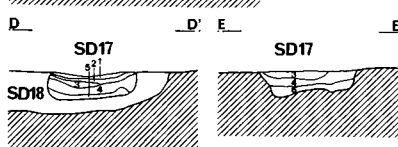
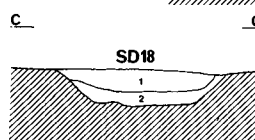
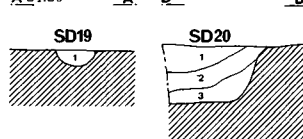
第17号溝跡

- 1 灰色土 (酸化鉄、火山灰多量に含む)
- 2 炭化物層
- 3 灰色土 (黄褐色土ブロック、酸化鉄多量に含む)
- 4 灰色土 (酸化鉄、火山灰多量、焼土若干含む)
- 5 灰色土 (黄褐色土ブロック少量、酸化鉄多量に含む)
- 6 灰色土 (黄褐色土ブロック、酸化鉄多量に含む)

第18号溝跡

- 1 灰色土 (酸化鉄多量に含む)
- 2 灰色土 (黄褐色土ブロック少量、酸化鉄多量に含む)

A 24.20



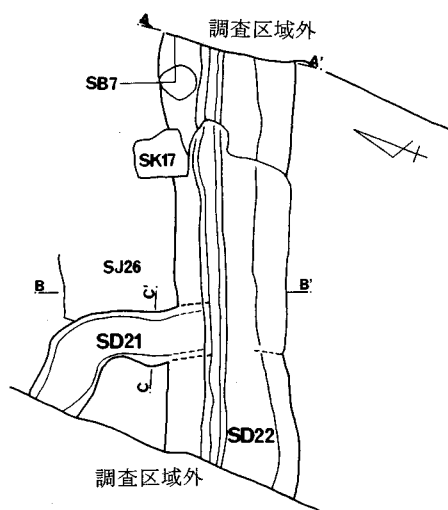
第19号溝跡

- 1 灰色土 (酸化鉄、マンガン粒子少量含む)

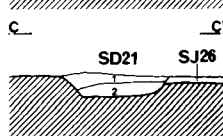
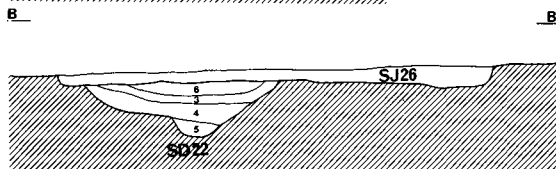
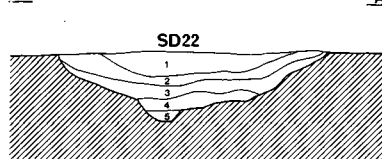
第20号溝跡

- 1 灰色土 (酸化鉄ブロック若干、火山灰多量に含む)
- 2 灰色土 (灰白色土粒子少量、酸化鉄ブロック若干含む)
- 3 灰色土 (灰白色土粒子、酸化鉄多量に含む)

第21・22号溝跡



A 24.20

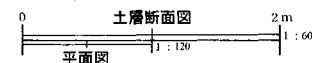


第21号溝跡

- 1 灰色土 (酸化鉄、火山灰多量、炭化物若干含む)
- 2 灰色土 (酸化鉄、火山灰多量に含む)
- 3 灰色土 (灰白色土・酸化鉄ブロック状に混じる、火山灰多量に含む)
- 4 灰色土 (火山灰多量、炭化物、酸化鉄ブロック若干含む)
- 5 灰色土 (灰白色土ブロック状に多量に混じる)
- 6 黄灰色土 (酸化鉄ブロック状に混じる、火山灰やや多量に含む)

第22号溝跡

- 1 黄灰色土 (灰白色土ブロック状に混じる、火山灰多量に含む)
- 2 灰色土 (灰白色土ブロック状に混じる)



第115図 第17～22号溝跡

第17号溝跡 (第115・116図、第56表)

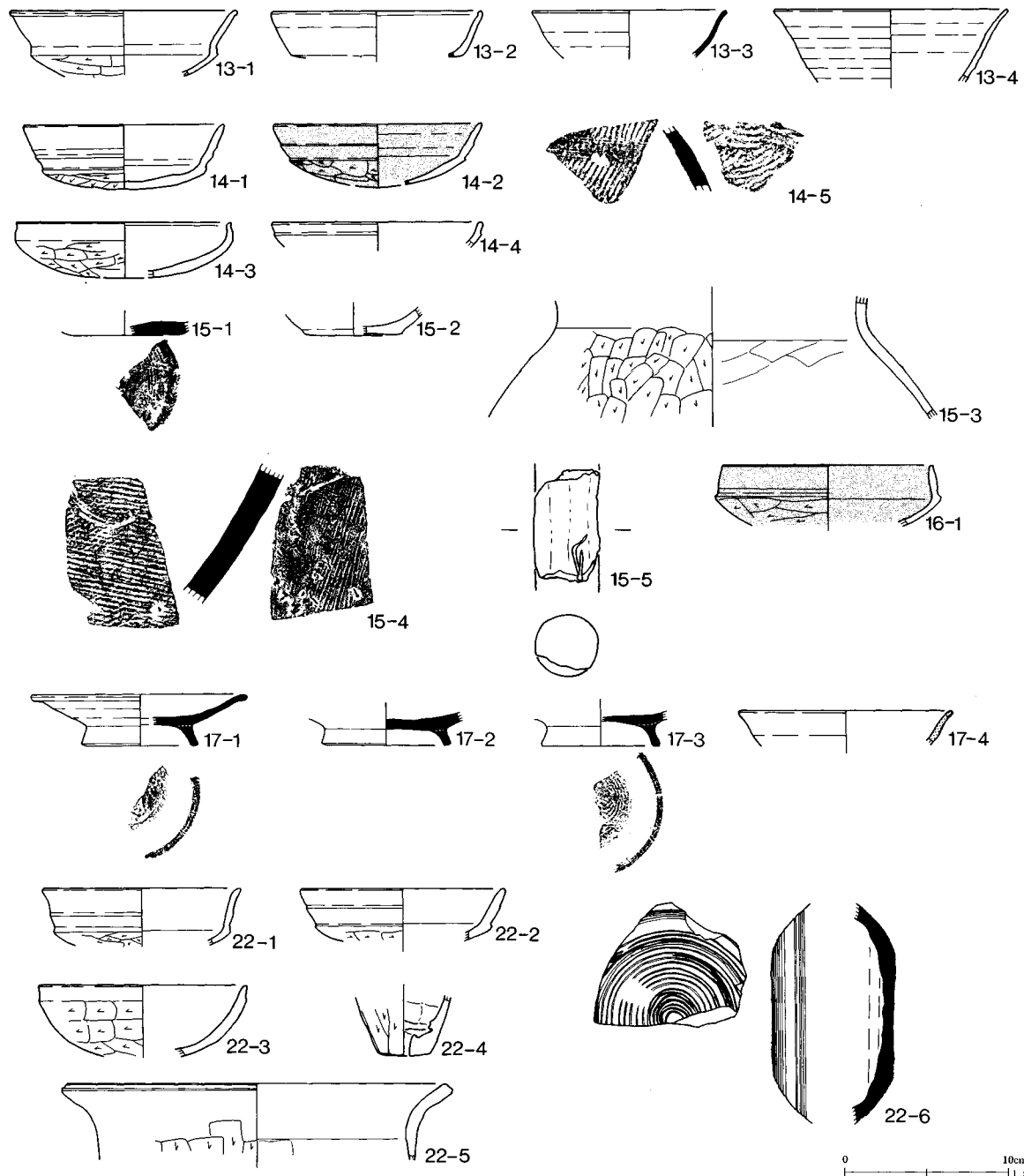
20-162グリッドに大部分が位置する。第18号溝跡と重複関係にあり、本遺構が切っており、第18号溝跡が完全に埋まった後につくられたと考えられる。

長さは3.5m、幅は平均0.75m、深さは20cm前後を測る。底は平底で、断面形状は箱形状となっている。埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、土師器坏・甕、須恵器皿・甕、灰釉陶器碗などが検出できた。

第18号溝跡 (第115図)

22・23-162グリッドに位置する。第17・19号溝跡、第3号掘立柱建物跡、第5号井戸跡と重複関



第116図 第13～17・22号溝跡出土遺物

第56表 第13～17・22号溝跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
13-1	土師器坏	(14.0)	—	—	AJK	橙色	B	10%	南比企産。 末野産。
13-2	土師器坏	(12.8)	—	—	ABHK	橙色	B	10%以下	
13-3	須恵器坏	(11.8)	—	—	AFN	灰色	A	10%以下	
13-4	須恵器碗	(14.4)	—	—	ABHM	灰白色	C	10%以下	
14-1	土師器坏	12.3	3.9	—	AEJK	灰白色	A	60%	内外面黒色処理。
14-2	土師器坏	(12.8)	—	(3.8)	AEHJK	にぶい赤褐色	A	25%	
14-3	土師器坏	(13.1)	(3.4)	—	AHKMN	暗明褐色	A	20%	
14-4	土師器坏	(12.8)	—	—	AJM	にぶい黄橙色	A	10%以下	
14-5	須恵器甕	—	—	—	AB	灰白色	B	胴部	外面平行叩き目。内面青海波文。
15-1	須恵器坏	—	—	(6.6)	ABF	灰色	A	10%	末野産。
15-2	須恵器坏	—	—	(5.2)	ABL	灰白色	C	15%	
15-3	土師器甕	—	—	—	ABEGHN	にぶい黄橙色	B	15%	
15-4	須恵器甕	—	—	—	ABGN	にぶい赤褐色	A	胴部	
15-5	土製支脚	残存長6.7	幅4.0	厚さ(3.8)	—	浅黄橙色	—	欠損	
16-1	土師器坏	(12.8)	—	—	AHJ	黒褐色	A	15%	内外面黒色処理。
17-1	須恵器皿	(13.0)	(3.1)	(7.2)	ABGHM	灰色	B	20%	末野産。
17-2	須恵器皿	—	—	(8.0)	A EGLN	暗灰色	A	35%	末野産。
17-3	須恵器皿	—	—	(7.2)	ABG	灰色	A	10%	
17-4	灰釉陶器碗	(13.0)	—	—	AB	灰白色	A	10%以下	灰釉ツケガケ。東濃産？
22-1	土師器坏	(12.0)	—	—	ACHJM	にぶい橙色	A	10%	
22-2	土師器坏	(12.5)	—	—	BEHJM	橙色	B	15%	
22-3	土師器坏	(12.7)	—	—	ACJK	橙色	C	20%	
22-4	土師器甕	—	—	(3.2)	ABEGHL	にぶい黄橙色	A	10%以下	
22-5	土師器甕	(23.2)	—	—	AEGJ	にぶい黄橙色	A	10%以下	
22-6	須恵器横瓶	—	—	—	AGN	灰色	A	10%	

係にあり、第3号掘立柱建物跡との新旧関係は明らかにできなかったが、その他の遺構に本遺構が切られている。西側は調査区域外となっている。

検出長5.9m、幅1.03m～1.3m、深さは30cm前後を測る。断面形状は、底面が幅広の箱葉研状を呈する。

埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、検出できなかった。

また、本遺構は両側が閉じる溝であり、遺物は検出できなかったが、方形周溝墓集中区に所在することや他の方形周溝墓と軸方向がほぼ同じであることから、方形周溝墓の周溝の可能性が考えられる。

第19号溝跡（第115図）

23・24-162グリッドに位置する。24-162グリッドの調査区域外の壁から東へ延び、すぐに南東方向に向きを変えて南の調査区域外に至る。第18号溝跡、第1号方形周溝墓、第3号掘立柱建物跡と重複関係にあり、本遺構がそれぞれの遺構を切っている。

検出長は7.4m、幅は0.24m～0.5mを測るが、平均0.4m前後である。深さは14cmを測る。断面形状は、舟底状を呈する。

埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、土師器坏・甕破片が検出できたが、図示可能な遺物ではなかった。

時期は、7世紀後半と考えられる。

第20号溝跡（第115図）

23・24-162グリッドに位置する。第3号掘立柱建物跡、第65・66号ピットと重複関係にあり、そ

れぞれに切られている。大部分が西及び南の調査区域外となっている。

検出長は3.86m、幅は不明である。深さは47cmを測る。断面形状については、詳細は不明であるが、底面が幅広の箱葉研状を呈すると考えられる。

埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、土師器甕破片などがわずかに検出できたが図示可能な遺物ではなかった。

時期は、古墳時代後期と考えられるが、第3号掘立柱建物跡との切り合いから6世紀代の可能性が考えられる。

第21号溝跡（第115図）

21-167グリッドに位置する。第22号溝跡、第26号住居跡と重複関係にあり、本遺構がそれぞれを切っている。新旧関係は、古い順に、第22号溝跡、第26号住居跡、本遺構となる。西側は調査区域外となっている。

西の調査区域外の壁から東へわずかに延び、すぐにほぼ直角に南下するが、南側は不明である。残存長は2.65m、幅は屈曲部でやや狭く0.7mを測るが、平均0.9mである。深さは19cmを測る。底面は幅広の平底で、断面形状はやや箱葉研状となっている。

埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物はわずかで、土師器甕などの破片が検出できたが、図示可能な遺物ではなかった。

時期は、出土遺物と他遺構との切り合い関係から9世紀末から10世紀初頭と考えられる。

第22号溝跡（第115・116図、第56表）

20・21-167・168グリッドに位置する。第21号溝跡、第26号住居跡、第7号掘立柱建物跡、第17号土坑と重複関係にあり、それぞれの遺構に本遺構が切られている。それぞれの新旧関係は、本遺構、第7号掘立柱建物跡、第17号土坑、第26号住居跡、第21号溝跡の順に新しい。東西側は調査区域外となっている。

検出長は7.5m、幅は2.0m前後、深さは最深で55cmを測る。底面が非常に狭く、断面形状は、大きく2段の掘り方で、舟底状の掘り方の下にさらに箱葉研状の狭い溝を掘り込んだ形状を呈し、いわば漏斗状の形状を呈している。よって、底面の幅は15cm前後と非常に狭い。

埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、土師器壺・甕、須恵器横瓶などが検出できた。

第23号溝跡（第117・118図、第57表）

21-169・170グリッドに位置する。西側は調査区域外となっている。

検出長は2.85m、幅は0.55m～0.77m、深さは20cm前後を測る。底はやや舟底気味で、断面形状は、箱形状を呈する。

埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、土師器壺・甕、須恵器甕などがわずかに検出できた。

時期は、出土遺物を図示できなかったが幅広い時期のものが見られ、時期の特定に足る確証が得られなかった。

第24号溝跡（第117・118図、第57表）

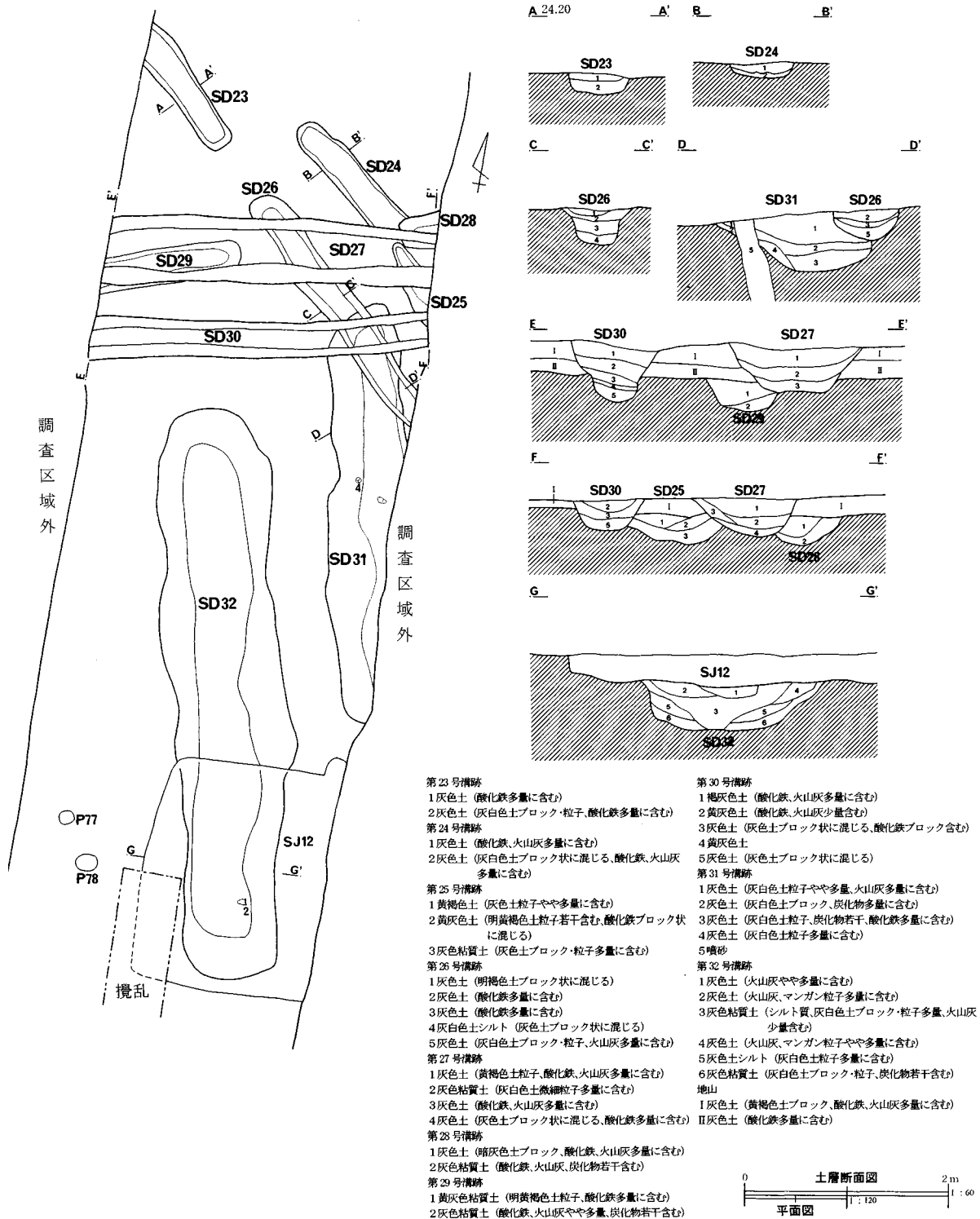
20-171グリッドに主に位置する。第27・28号溝跡と重複関係にあり、本遺構がそれぞれに切られて

いる。新旧関係は、本遺構、第28号溝跡、第27号溝跡という順に新しい。

第23号溝跡及び第26号溝跡と並行し、残存長は2.84m、幅は0.65m前後、深さは16cmを測る。断面形状は、底面が幅広で箱形状を呈する。

埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は非常に少なく、土師器甕、須恵器坏・甕が検出できた。



第117図 第23～32号溝跡

第25号溝跡（第117図）

20-170グリッドに位置する。第27・30号溝跡と重複関係にあり本遺構が切られているが、上下の関係にあり遺構確認面が異なるため、時期の相違が認められる。東側は調査区域外となっている。

検出長はわずかに1.76m、幅は最大幅0.63m、深さは28cmを測る。断面形状は、舟底状を呈する。

埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、検出できなかった。

また、第24号溝跡と本遺構は同一遺構の可能性も考えられる。

第26号溝跡（第117・118図、第57表）

21-170グリッドから21-171グリッドにかけて位置する。第27・30・31号溝跡と重複関係にあり、本遺構が第31号溝跡を切り、第27・30号溝跡に切られる。東側は調査区域外となっている。

第23号溝跡の延長上、かつ、第24号溝跡と並行し、検出長は5.65m、幅は0.7m前後、深さは30cm前後を測る。断面形状は、舟底状を呈する。

埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、弥生土器壺、土師器坏・甕、須恵器坏・甕が検出できた。

時期は、出土遺物が図示できなかったが幅広い時期のものが見られた。しかし、第24号溝跡と並行しており、同じ確認面で検出されていることから須恵器坏の示す時期と考えられる。

また、第23号溝跡と同一線上、同一レベルに所在することから両者は同一溝跡ないしは同時期の溝跡と推定できる。したがって、第23・24・26号溝跡は、同時期の溝跡と判断したい。

第27号溝跡（第117・118図、第57表）

20・21-170グリッドに位置する。第24～26・28・29号溝跡の5条の溝跡と重複関係にあり、本遺構が他の遺構の全てを切っている。また、他の全ての遺構とは上下の関係にあり、遺構確認面を異にする。すなわち、下層の同一確認面に所在する第24～26・28・29号溝跡の5条が埋没した後に本遺構が形成されたことになる。東西が調査区域外となっている。

溝跡は、第30号溝跡と並行しており、約50cm～80cmの距離をもつ。検出長は6.55m、幅は1.12m～1.38m、深さは40cm～46cmを測る。断面形状は、やや崩れた箇所もあるが、箱葉研状を呈する。

埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、須恵器坏・長頸壺・甕、土師器坏・甕のほか、土錘が検出できた。須恵器甕の中に、四隅が整えられており外面の叩き目が磨滅しているのが見られた。これは、この面が砥石に転用して使われたのではないかと考えられる。

第28号溝跡（第117図）

20-170グリッドに位置する。第24・27号溝跡と重複関係にあり、本遺構が第24号溝跡を切り、第27号溝跡に切られている。東側は調査区域外となっている。

検出長はわずかに0.45m、幅は0.75m、深さは30cmを測る。断面形状は、やや崩れた箱葉研状を呈する。

埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、検出できなかった。

第29号溝跡（第117図）

21-170グリッドに位置する。第27号溝跡と重複関係にあり、本遺構が切られている。ただし、第27

号溝跡とは上下の関係で、本遺構が完全に埋没した後に第27号溝跡が形成されたと考えられる。

検出長は2.93m、幅は0.7m前後、深さは30cmを測る。断面形状は、舟底状を呈する。

埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、検出できなかった。

第28号溝跡とは同一延長上にあり、同一遺構の可能性も考えられる。また、切り合いが見られるが、第23～26・28・29号溝跡は同一遺構確認面の遺構であり、同時期の遺構と考えられ、出土遺物が少ないため明確にはできないが、おおよそ9世紀中頃から後半と推定できる。

第30号溝跡（第117・118図、第57表）

20・21-170・171グリッドに位置する。第25・26・31号溝跡と重複関係にあり、本遺構がそれぞれの遺構を切っている。また、他の遺構とは上下の関係で、少なくとも第25・26号溝跡は同一時期の遺構であり、新旧関係は、第31号溝跡、第25・26号溝跡、本遺構の順に新しい。東西が調査区域外となっている。

第27号溝跡と並行し、溝幅が第27号溝跡の半分強の規模である。検出長は6.8m、幅は0.7m～0.87m、深さは31cm～51cmを測り、東にやや傾斜している。断面形状は、箱葉研状ないしはやや舟底状を呈する。

埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、土師器坏・甕などの破片がわずかに検出できた。

時期は、第27号溝跡と同時期で同時に存在していたと考えられる。

第31号溝跡（第117・118図、第57表）

20-170グリッドから20-172グリッドにかけて位置する。第26・30号溝跡と重複関係にあり、本遺構がそれぞれに切られている。第26号溝跡は、上層確認面の遺構である。新旧関係は、本遺構、第26号溝跡、第30号溝跡の順に新しい。東側が調査区域外となっている。

検出最大長は8.25m、幅は最大幅1.5m、深さは最深で60cmを測る。断面形状は、東側が急な傾斜をもつ舟底状を呈する。

埋土は、自然堆積と考えられる。また、噴砂が堆積土層の全てを貫いていた。

出土遺物は、弥生土器壺、土師器甕、須恵器高坏破片などが検出できた。

時期は、弥生土器が示す弥生時代中期ないしは土師器・須恵器が示す古墳時代後期と考えられ、明らかにできなかった。また、弥生時代とすると方形周溝墓の周溝の可能性も考えられ、東側の調査区域外に展開するものとなる。

第32号溝跡（第117・118図、第57表）

21-171グリッドから20-173グリッドにかけて位置する。第12号住居跡と重複関係にあり、本遺構が切られている。

長さは11.6m、幅は南部が最大1.8m、北部が最大2.5mであったが、南部は上面を第12号住居跡により削平され、およそ30cm確認面が低くなっているため幅が狭い。深さは70cm～80cmを測る。断面形状は、西側が急な傾斜をもつ舟底状を呈する。

埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、弥生土器甕・壺破片に混じって土師器甕破片が検出できた。弥生土器の内、ほぼ完形の甕は、床面で口縁を東に向けて横たわって検出された。一方、土師器甕破片は、第12号住居跡からの混

入遺物であると考えられる。

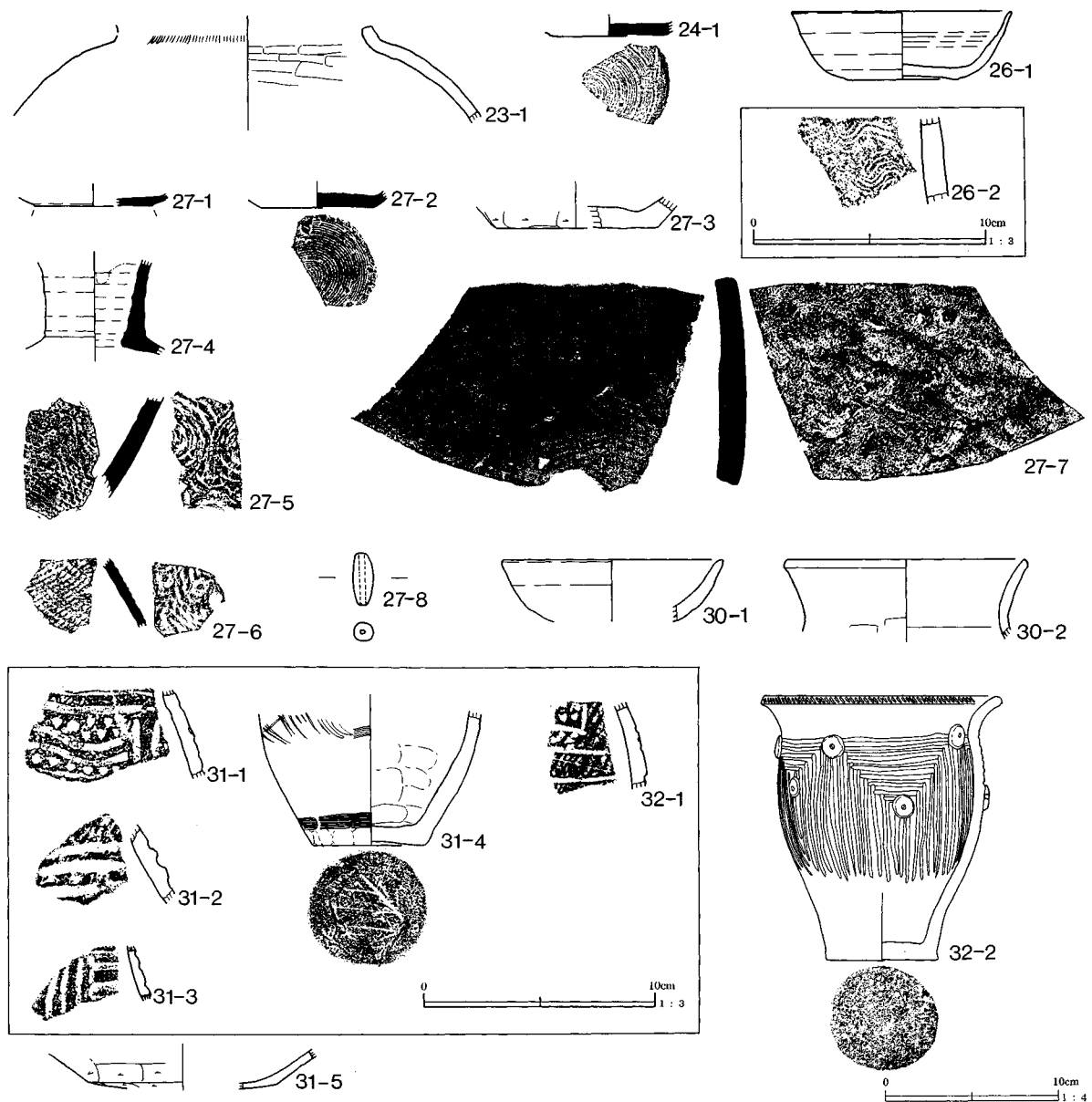
第33号溝跡（第119・120図、第58表）

20・21-173・174グリッドに位置する。第2号住居跡と重複関係にあり、本遺構が切っている。東西が調査区域外となっている。また、遺構のちょうど中間が試掘調査時のトレンチで攪乱を受けている。

検出長は6.7m、幅は1.2m前後、深さは65cm～70cmを測り、西にやや傾斜している。断面形状は、やや変形するが、基本的に箱葉研状を呈する。

埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、弥生土器甕・赤彩が施された壺などの破片がわずかに検出できた。



第118図 第23・24・26・27・30～32号溝跡出土遺物

第57表 第23・24・26・27・30～32号溝跡出土遺物観察表

番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	色 調	焼成	残存率	備 考
23-1	土師器壺	—	—	—	ABEHLMN	明赤褐色	B	10%	南比企産。 櫛描波状文。 南比企産。 内外面火だすき痕。南比企産。 内外面自然釉。 外面平行叩き目。内面青海波文。 外面格子叩き目。内面青海波文。 転用砥石(叩き目側を砥石として転用)。外面平行叩き目、摩滅。内面あて具痕。末野産。 重さ3.6g。
24-1	須恵器坏	—	—	(6.9)	AF	灰色	A	20%	
26-1	須恵器坏	(12.7)	(4.0)	(6.2)	AHJN	橙色	C	40%	
26-2	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	頸部	
27-1	須恵器坏	—	—	(6.8)	ABFGH	黄灰色	A	10%以下	
27-2	須恵器坏	—	—	(6.0)	ABFGHM	灰色	A	10%	
27-3	土師器甕	—	—	(9.3)	ABEJMN	橙色	A	10%以下	
27-4	須恵器長頸壺	—	—	—	ABJ	灰白色	A	10%	
27-5	須恵器甕	—	—	—	AG	灰色	A	胴部	
27-6	須恵器甕	—	—	—	AB	灰白色	A	胴部	
27-7	須恵器甕	—	—	—	ABGL	灰色	A	胴部	
27-8	土 錘	長さ3.0	幅1.2	厚さ1.0	—	褐灰色	—	完存	
30-1	土師器坏	(12.8)	—	—	ABHLM	灰白色	C	10%	
30-2	土師器甕	(13.6)	—	—	ABEGHJKM	にぶい橙色	C	10%以下	
31-1	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい橙色	—	胴部	沈線文。刺突文。
31-2	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	胴部	沈線文。
31-3	弥生土器壺	—	—	—	—	灰黄色	—	頸部	沈線文。
31-4	弥生土器壺	—	—	5.0	—	灰黄褐色	—	底部	木葉痕。
31-5	土師器甕	—	—	(10.2)	AEGK	にぶい黄橙色	B	10%以下	沈線文方形区画内に刺突文。地文縄文。 口縁端部L R 縄文。コの字重ね文5単位。ボタン状貼付文コの字重ね文1単位につき逆三角形の位置に3つ。底部布目痕。
32-1	弥生土器壺	—	—	—	—	橙色	—	胴部	
32-2	弥生土器甕	13.6	15.5	6.4	AEHJ	黒褐色	A	95%	

第34号溝跡 (第119・120図、第58表)

20・21-175グリッドに位置する。第35号溝跡と重複関係にあり、本遺構が切られている。第35号溝跡とは、ほぼ並行し、平面プランの南側が約1/3程重なる位置関係にある。東西が調査区域外となっている。

検出長は6.65m、幅は不明であるが推定で東側が1.7m、西側が1.5mである。深さは東西ともほぼ変わらず約70cmを測る。断面形状は、丸味を帯びた葉研状ないしは2段に掘り込まれた漏斗状の断面形状を呈する。また、北側にやや大きく広がりをもつ平面プランである。

埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、弥生土器壺、土師器坏・甕、須恵器甕などが検出できた。

時期は、古墳時代後期(6世紀末から7世紀初頭)と考えられる。

第35号溝跡 (第119・120図、第58表)

20・21-175グリッドを中心に位置する。第34号溝跡と重複関係にあり、本遺構が切っている。第34号溝跡とは、ほぼ並行し重なる位置関係にある。東西が調査区域外となっている。

検出長は7.0m、幅は1.25m～2.05mである。深さは東がやや深く80cm、西は75cmを測る。断面形状は、やや不整形な葉研状を呈する。

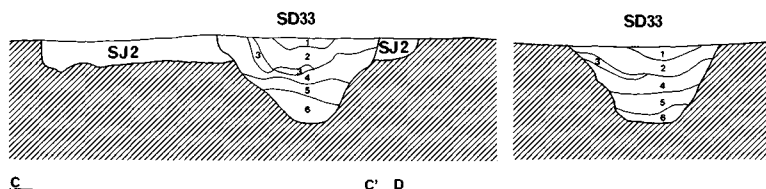
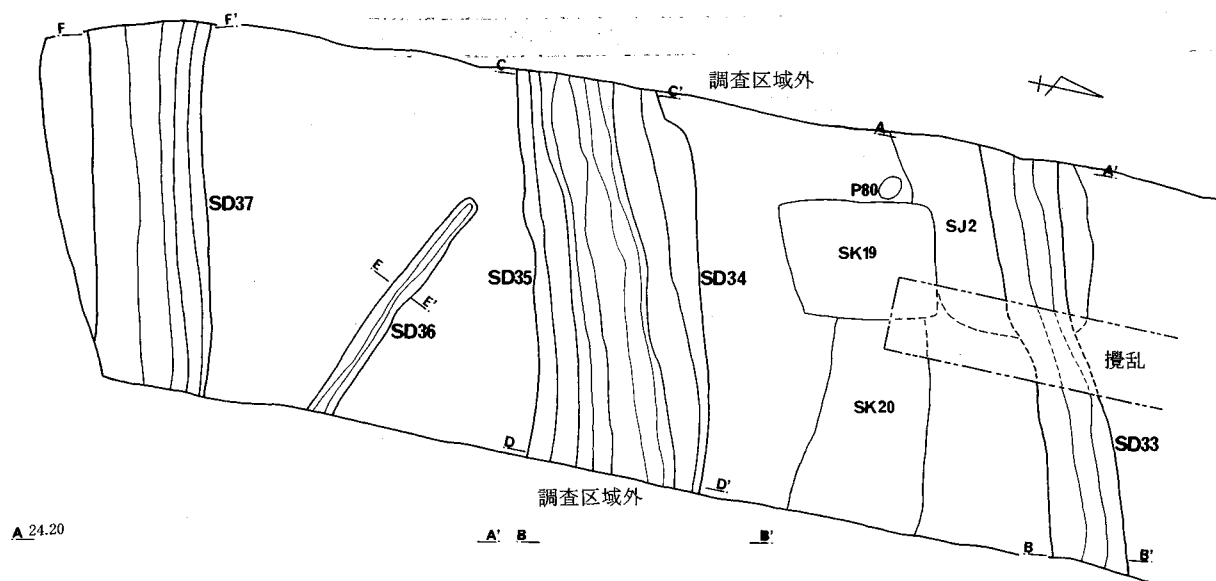
埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、土師器坏・甕、須恵器坏・長頸壺・甕などが検出できた。

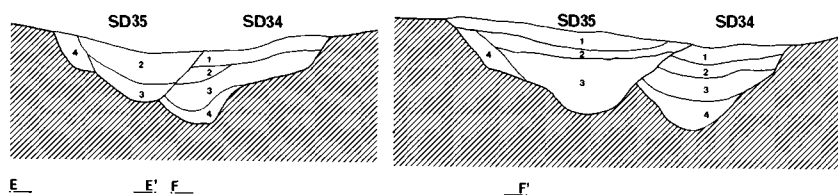
第36号溝跡 (第119・120図、第58表)

20・21-176グリッドに位置する。東側が調査区域外となっている。

第33～37号溝跡

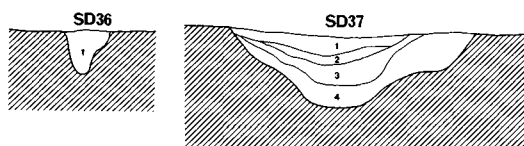


- 第33号溝跡
- 1 灰色土 (灰白色土ブロック、酸化鉄、火山灰多量に含む)
 - 2 灰色土 (にぶい黄褐色土ブロック、酸化鉄、火山灰多量に含む)
 - 3 にぶい黄褐色土
 - 4 灰色粘質土 (にぶい黄褐色土粒子、灰色土粒子、酸化鉄、火山灰多量に含む)
 - 5 灰色土 (酸化鉄、礫含む)
 - 6 灰色粘質土



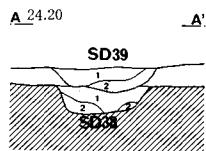
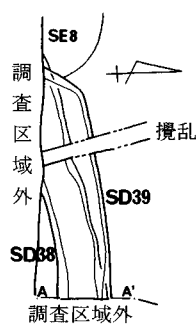
- 第34号溝跡
- 1 灰色粘質土 (黄灰色土微細粒子多量に含む)
 - 2 灰色粘質土 (炭化物多量に含む)
 - 3 灰色粘質土 (灰白色土粒子、炭化物多量に含む)
 - 4 灰色粘質土 (灰白色土粒子多量に含む)

- 第35号溝跡
- 1 暗灰色粘質土 (灰色土ブロック状に混じる、火山灰、酸化鉄や多量に含む)
 - 2 灰色粘質土 (火山灰、酸化鉄、炭化物多量に含む)
 - 3 黄灰色土 (シルト質、灰白色土ブロック・粒子多量に含む)
 - 4 灰色土 (灰白色土ブロック状に混じる、火山灰多量に含む)



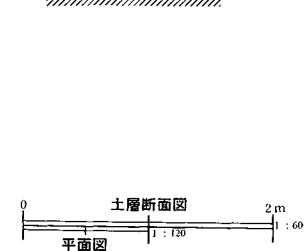
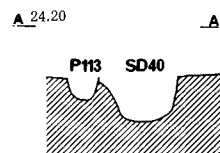
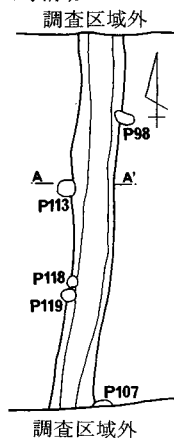
- 第36号溝跡
- 1 灰色粘質土 (酸化鉄ブロック状に混じる)
- 第37号溝跡
- 1 灰色粘質土
 - 2 灰色粘質土 (酸化鉄多量に含む)
 - 3 灰色土 (シルト質)
 - 4 暗灰色土 (シルト質、酸化鉄多量に含む)

第38・39号溝跡



- 第38号溝跡
- 1 暗灰色粘質土 (しまり強い、粘性弱い、酸化鉄若干、バミス、焼土少量含む)
 - 2 黄褐色粘質土 (しまり強い、粘性弱い、全体的に酸化)
- 第39号溝跡
- 1 青灰色粘質土 (しまり強い、粘性弱い、酸化鉄、バミス、炭化物、焼土若干含む)
 - 2 褐灰色粘質土 (しまり強い、粘性弱い、酸化鉄多量、バミス、炭化物、焼土わずかに含む)

第40号溝跡



第119図 第33～40号溝跡

検出長は4.3m、幅は平均0.35mを測る。深さは東が深く44cm、西が浅く19cmを測る。断面形状は、不整形な葉研状を呈する。

埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、弥生土器壺、土師器甕、須恵器高盤・甕などが検出できた。

第37号溝跡（第119図）

20・21-176・177グリッドに位置する。東西が調査区域外となっている。

検出長は5.95m、幅は1.8m前後を測る。深さは東がやや深く67cm、西は60cmを測る。断面形状は、整いの悪い舟底状を呈する。

埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、土師器坏・甕、須恵器壺などが検出できたが、図示可能な遺物ではなかった。

時期は、おそらく古墳時代後期と考えられる。

第38号溝跡（第119・120図、第58表）

31-172グリッドに位置する。第39号溝跡と上下の重複関係にあり、本遺構の上面が切られている。また、第8号井戸跡とも重複しており、本遺構が切っている。東及び南側が調査区域外となっている。

検出長4.15m、幅0.76m、深さ23cmを測る。断面形状は、箱形状を呈する。

埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、土師器坏・甕破片などが検出できた。

第39号溝跡（第119・120図、第58表）

31-172グリッドに位置する。第38号溝跡と上下の重複関係にあり、本遺構が下面の第38号溝跡を切っている。また、第8号井戸跡とも重複しており、本遺構が切っている。東及び南側が調査区域外となっている。

溝は、第8号井戸跡手前で南へ曲がっていく形状を採ると考えられる。検出長3.35m、幅0.9m、深さ21cmを測る。断面形状は、舟底状を呈する。

埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、須恵器坏破片などがわずかに検出できた。

第40号溝跡（第119・120図、第58表）

34・35-171・172グリッドを中心に位置する。数基のピットと重複関係にあり、本遺構が切られている。南北が調査区域外となっている。

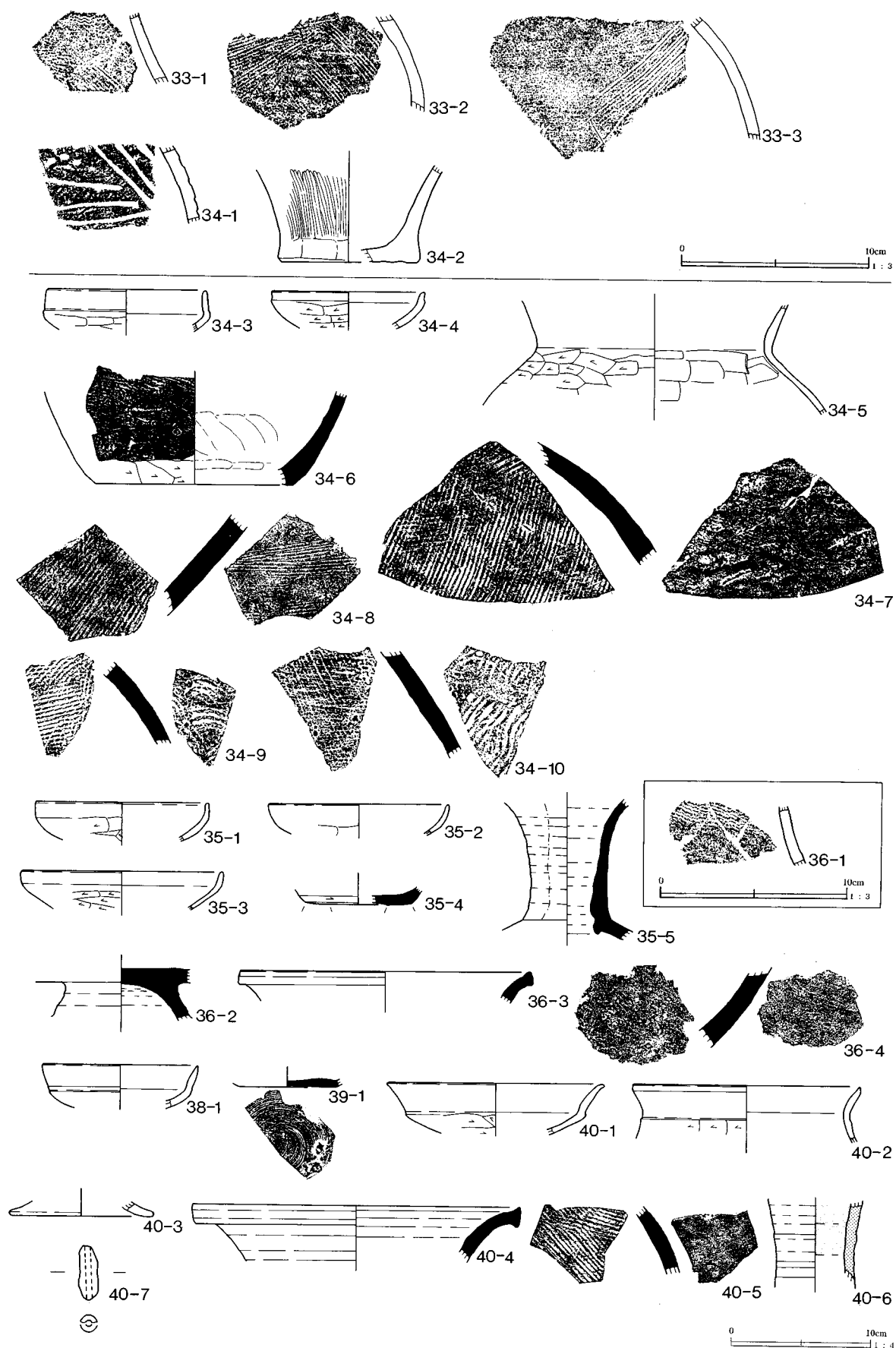
検出長5.2m、幅0.64m～0.75mを測る。深さは北が深く36cm、南が浅く26cmを測り北に傾斜をもつ。断面形状は、やや立ち上がりがあるが基本的には箱形状を呈する。

埋土は、並行に堆積しており、人為的に埋められた可能性が考えられる。

出土遺物は、土師器坏・甕・台付甕、須恵器甕、灰釉陶器長頸瓶などのほか、土錘が検出できた。

第41号溝跡（第121図）

35・36-171グリッドを中心に位置する。第42・44号溝跡、第11号住居跡、第13～16号井戸跡のほか数基のピットと重複関係にあり、本遺構が第11号住居跡を切り、その他の遺構に切られている。主な遺構の新旧関係は、第11号住居跡、本遺構、第42号溝跡、第13～16号井戸跡という順に新しい。また、本遺構と第44号溝跡、第42号溝跡と第44号溝跡との新旧関係は明らかにできなかった。南北が調査区



第120図 第33~36・38~40号溝跡出土遺物

第58表 第33～36・38～40号溝跡出土遺物観察表

番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	色 調	焼成	残存率	備 考
33-1	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	胴部	櫛描波状文。交差粗目刷毛目。
33-2	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい赤褐色	—	胴部	交差粗目刷毛目。
33-3	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい褐色	—	胴部	細目刷毛目の後、斜位の粗目刷毛目。
34-1	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい橙色	—	胴部	沈線文区画内に刺突文。
34-2	弥生土器壺	—	—	(7.4)	—	にぶい黄橙色	—	底部	
34-3	土師器坏	(11.4)	—	—	AEHJK	にぶい黄橙色	C	10%	
34-4	土師器坏	(11.0)	—	—	AIJ	橙色	B	10%	
34-5	土師器甕	—	—	—	AEJM	橙色	C	20%	
34-6	須恵器甕	—	—	(14.4)	ABFN	灰色	A	10%以下	外面平行叩き目。南比企産。
34-7	須恵器甕	—	—	—	ABGLN	褐灰色	A	胴部	外面平行叩き目。内面青海波文。末野産。
34-8	須恵器甕	—	—	—	ABGLN	褐灰色	A	胴部	外面平行叩き目。内面刷毛状のナデ。末野産。
34-9	須恵器甕	—	—	—	ALN	青灰色	A	胴部	外面格子叩き目。内面青海波文。
34-10	須恵器甕	—	—	—	ABN	灰色	A	胴部	外面平行叩き目。内面青海波文。
35-1	土師器坏	(12.4)	—	—	AGI	にぶい黄橙色	B	10%以下	
35-2	土師器坏	(12.9)	—	—	ADHJKM	橙色	A	10%以下	
35-3	土師器坏	(14.6)	—	—	ADJKM	橙色	A	10%以下	
35-4	須恵器坏	—	—	(7.7)	ABFN	灰色	A	10%	南比企産。
35-5	須恵器長頸壺	—	—	—	ABHN	灰白色	A	15%	外面自然釉。
36-1	弥生土器壺	—	—	—	—	黒褐色	—	胴部	櫛描波状文。
36-2	須恵器高盤	—	—	—	ABFG	灰色	A	15%	
36-3	須恵器甕	(20.8)	—	—	BFGKN	灰褐色	A	10%以下	
36-4	須恵器甕	—	—	—	ABFGN	灰色	A	胴部	外面平行叩き目、摩滅。内面ナデ。南比企産。
38-1	土師器坏	(11.1)	—	—	ABHI	橙色	C	10%以下	
39-1	須恵器坏	—	—	(7.1)	AFN	暗赤褐色	A	15%	南比企産。
40-1	土師器坏	(15.6)	—	—	AEHJKM	にぶい橙色	A	10%	
40-2	土師器台付甕	(16.4)	—	—	AEHJM	にぶい褐色	A	10%以下	
40-3	土師器台付甕	—	—	(10.2)	ABHN	橙色	A	10%以下	
40-4	須恵器甕	(23.6)	—	—	AB	灰色	A	10%以下	内外面自然釉。
40-5	須恵器甕	—	—	—	ABI	灰白色	A	胴部	
40-6	灰釉陶器長頸瓶	—	—	—	AB	灰白色	A	10%以下	内面灰釉。
40-7	土錘	長さ3.8	幅1.4	厚さ(1.2)	—	灰白色	—	半欠損	重さ3.9g。

域外となっている。

検出長7.3m、幅2.15m前後を測る。深さは、南西部の床面が一段溝状に落ち込んでいる箇所が最深で31cmを測るが、他は平底で約18cmを測る。断面形状は、基本的に底面が幅広の箱形状を呈する。

埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、検出できなかった。

第42号溝跡（第121図）

36-171・172グリッドに位置する。第41号溝跡、第16号井戸跡と重複関係にあり、本遺構が第41号溝跡を切り、第16号井戸跡に切られている。新旧関係は、第41号溝跡、本遺構、第16号井戸跡という順に新しい。南側が調査区域外となっている。また、北側にさらに延びるかは不明である。

検出残存長4.5m、幅は最大幅1.08mを測る。深さは、最深で27cmを測る。断面形状は、基本的に底面が2段に掘り込まれており逆凸形状を呈する。最も低い底面の幅は、50cm前後を測る。

埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、ほとんど検出できなかったが、骨片を検出した。

第43号溝跡（第121・122図、第59表）

38-170グリッドを中心に位置する。第44号溝跡と重複関係にあり、本遺構が切られている。東及び

南側が調査区域外となっている。

検出長5.05m、幅は最大幅2.53mを測る。深さは、最深で105cmを測る。断面形状は、底面に起伏があり整いが悪いが、舟底状を呈する。また、底面は北に向かって傾斜している。

埋土は、比較的複雑に堆積しており、人為的に埋められた可能性が考えられる。

出土遺物は大量に検出され、弥生土器高坏・甕・壺のほか、打製石斧、円盤状打製石器が検出できた。

第44号溝跡（第121・123図、第60表）

36-171グリッドから36・37-170・171グリッドにかけて位置する。第41・43号溝跡、第17号井戸跡と重複関係にあり、本遺構が第17号井戸跡に切られ、第43号溝跡を切っている。第41号溝跡との新旧関係は明らかにはできなかった。

本遺構は、平成11年度と平成12年度に亘る調査で検出され、溝と先端に付属する水溜状遺構から構成される。残存全長14.1m、幅は溝部分が0.52m～0.84mを測り、水溜状遺構部分は長軸幅3.6m、短軸幅1.95mを測る。深さは、溝部分が最深25cmを測り、水溜状遺構部分は110cmを測る。断面形状は、溝部分は箱形状を呈し、水溜状遺構部分は挿鉢状を呈する。また、水溜状遺構部分は西側の上面付近に突出するテラス状の箇所があり、さらに、水溜状遺構部分に向かって傾斜していた。底面は北に向かって傾斜している。

埋土は、溝、水溜状遺構部分とも自然堆積と考えられる。

出土遺物は比較的多く検出され、弥生土器甕・壺、須恵器坏・甕、土師器細片、陶器挿鉢、常滑窯産の甕破片などが検出できた。

第45号溝跡（第121・123図、第60表）

40-171・172グリッドに位置する。数基のピットと重複関係にあり、本遺構が切られている。南側が調査区域外となっている。本遺構は調査区域外に跨って検出され、ちょうど調査によって排出される土の運搬路部分で検出され、その部分も調査を実施した。

検出長6.67m、幅は一定していないが1.0m前後を測り、深さは最深で28cmを測る。断面形状は、やや不整形で舟底状を呈するが、基本的には箱形状を呈すると考えられる。北に向かって平面プランが明瞭ではなくなり消滅する。これは、表土掘削の際に失われてしまったと考えられる。

埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、弥生土器壺・甕破片、土師器甕破片などが検出できた。壺の内、ほぼ完全に復元できた個体は、溝のほぼ底面で口縁部を南に向けて検出された。残念ながら胴部の一部は排出土運搬路の掘削の際に失われてしまったようである。

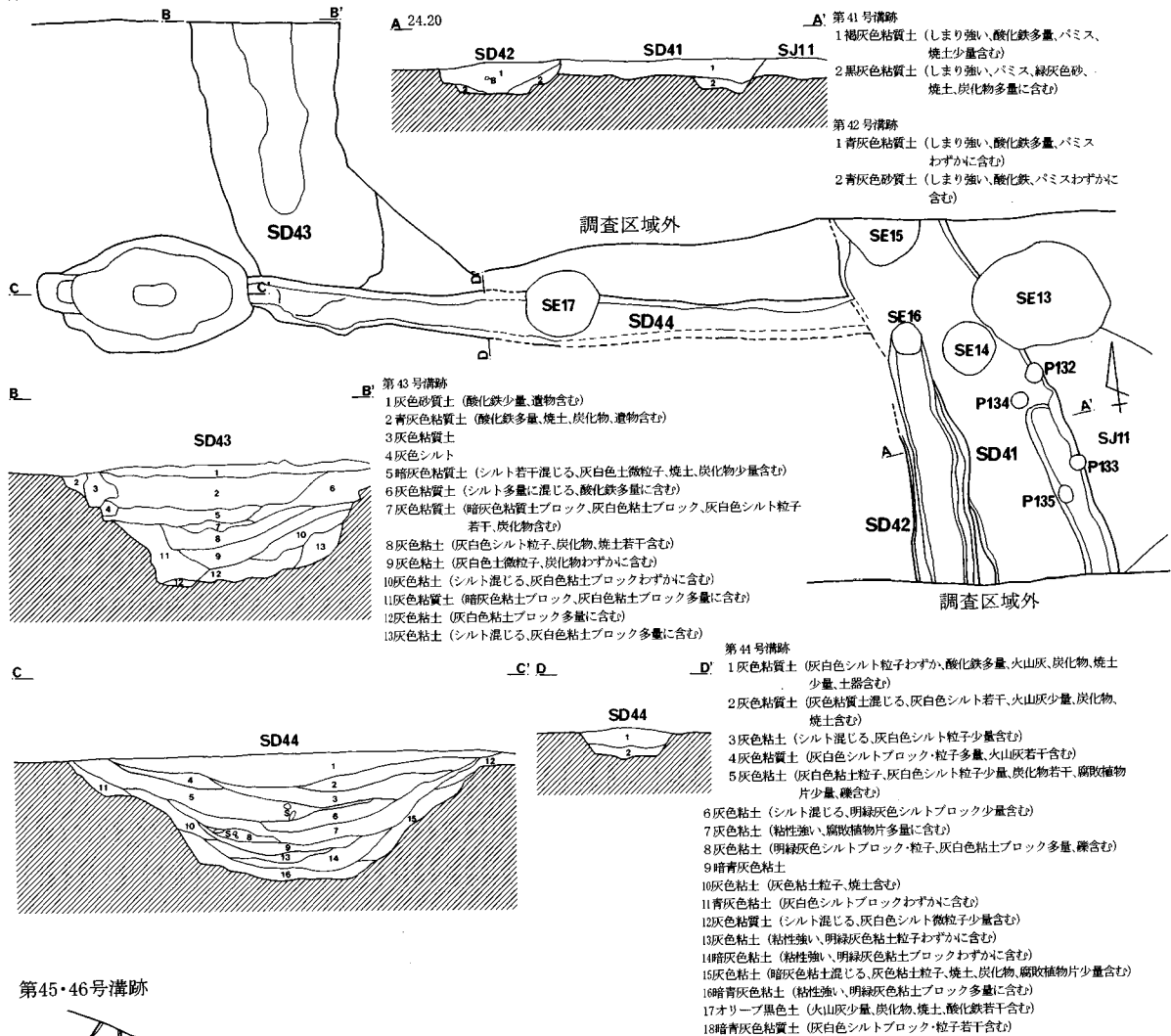
時期は、弥生土器が示す時期と考えられる。

第46号溝跡（第121図）

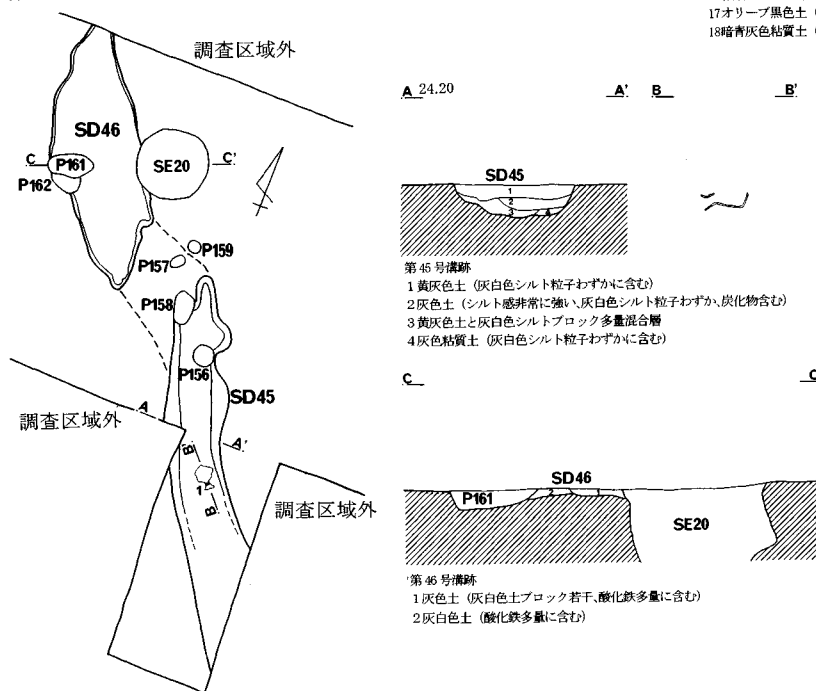
40-171グリッドを中心に位置する。第20号井戸跡、2基のピットと重複関係にあり、本遺構が切られている。北側が調査区域外となっている。

検出長4.5m、幅は一定しておらず最大幅1.55m、深さは浅く10cmを測る。断面形状は、底面が幅広の箱形状を呈する。北及び南に向かって平面プランが明瞭ではなくなり消滅する。これは、表土掘削の際に失われてしまったものと考えられる。また、本遺構の南延長上に第45号溝跡が所在し、同一の溝跡であった可能性も考えられる。

第41～44号溝跡



第45・46号溝跡

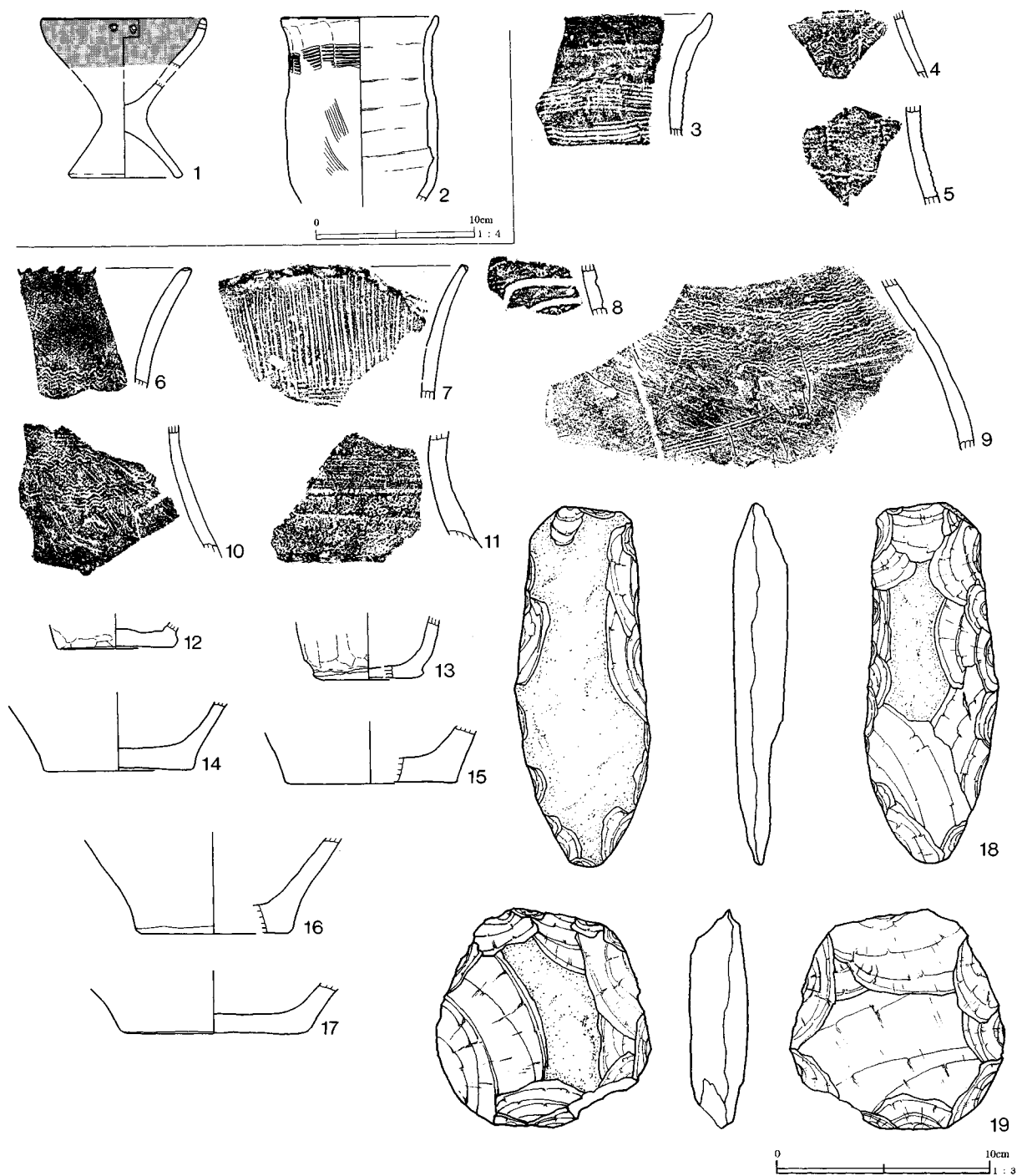


第121図 第41～46号溝跡

埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、検出できなかった。

時期は、第45号溝跡と同一遺構ならば同時期の可能性が考えられる。



第122図 第43号溝跡出土遺物

第59表 第43号溝跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器高坏	(10.3)	(10.1)	(6.8)	AEHJKN	浅黄橙色	A	35%	キザミ口縁。坏部内外面赤彩。
2	弥生土器甕	(9.8)	—	—	AEGMN	灰黄褐色	C	30%	頸部櫛描簾状文。胴部刷毛目。
3	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい赤褐色	—	口縁部	櫛描簾状文。
4	弥生土器甕	—	—	—	—	黒色	—	頸部	櫛描簾状文及び波状文。
5	弥生土器甕	—	—	—	—	浅黄橙色	—	頸部	櫛描簾状文及び波状文。
6	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい褐色	—	口縁部	キザミ口縁(縄押圧)。刷毛目の後櫛描簾状文。
7	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい褐色	—	口縁部	キザミ口縁。条痕文。
8	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい橙色	—	胴部	外面赤彩。
9	弥生土器壺	—	—	—	—	灰褐色	—	胴部	細目刷毛目の後櫛描簾状文。胴下半部に同工具による刷毛目。
10	弥生土器壺	—	—	—	—	灰黄褐色	—	頸部	刷毛目の後櫛描簾状文及び波状文。
11	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	頸部	外面赤彩。
12	弥生土器壺	—	—	(5.5)	—	灰黄褐色	—	底部	
13	弥生土器壺	—	—	(5.3)	—	黒褐色	—	底部	
14	弥生土器壺	—	—	(7.1)	—	黒褐色	—	底部	
15	弥生土器壺	—	—	(8.2)	—	灰黄褐色	—	底部	
16	弥生土器壺	—	—	(7.0)	—	橙色	—	底部	
17	弥生土器甕	—	—	(8.8)	—	橙色	—	底部	
18	打製石斧	長さ17.2	幅6.4	厚さ2.6	—	—	—	完形	重さ356g。酸性凝灰岩製。
19	円盤状打製石器	長さ10.4	幅10.1	厚さ2.8	—	—	—	一部欠損	重さ335g。中粒砂岩製。

第47号溝跡 (第123・124図、第60表)

38・39-173グリッドに位置する。第5号住居跡と重複関係にあり、本遺構が切っている。東西が調査区域外となっている。

検出長は5.7m、幅は1.16m～1.7mを測る。深さは西が深く90cm、東はやや浅く72cmを測る。断面形状はやや漏斗状を呈しているが、基本的には葉研状を呈する。

埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、弥生土器壺・甕、土師器坏・甕・甗などが検出できた。弥生土器については、第5号住居跡との重複から混入したと考えられる。

時期は、土師器坏・甕が示す時期と考えられる。

第48号溝跡 (第124・125図、第61表)

38・39-177グリッドに位置する。第10号掘立柱建物跡と重複関係にあるが、新旧関係を明確にすることはできなかった。西側が調査区域外となっている。

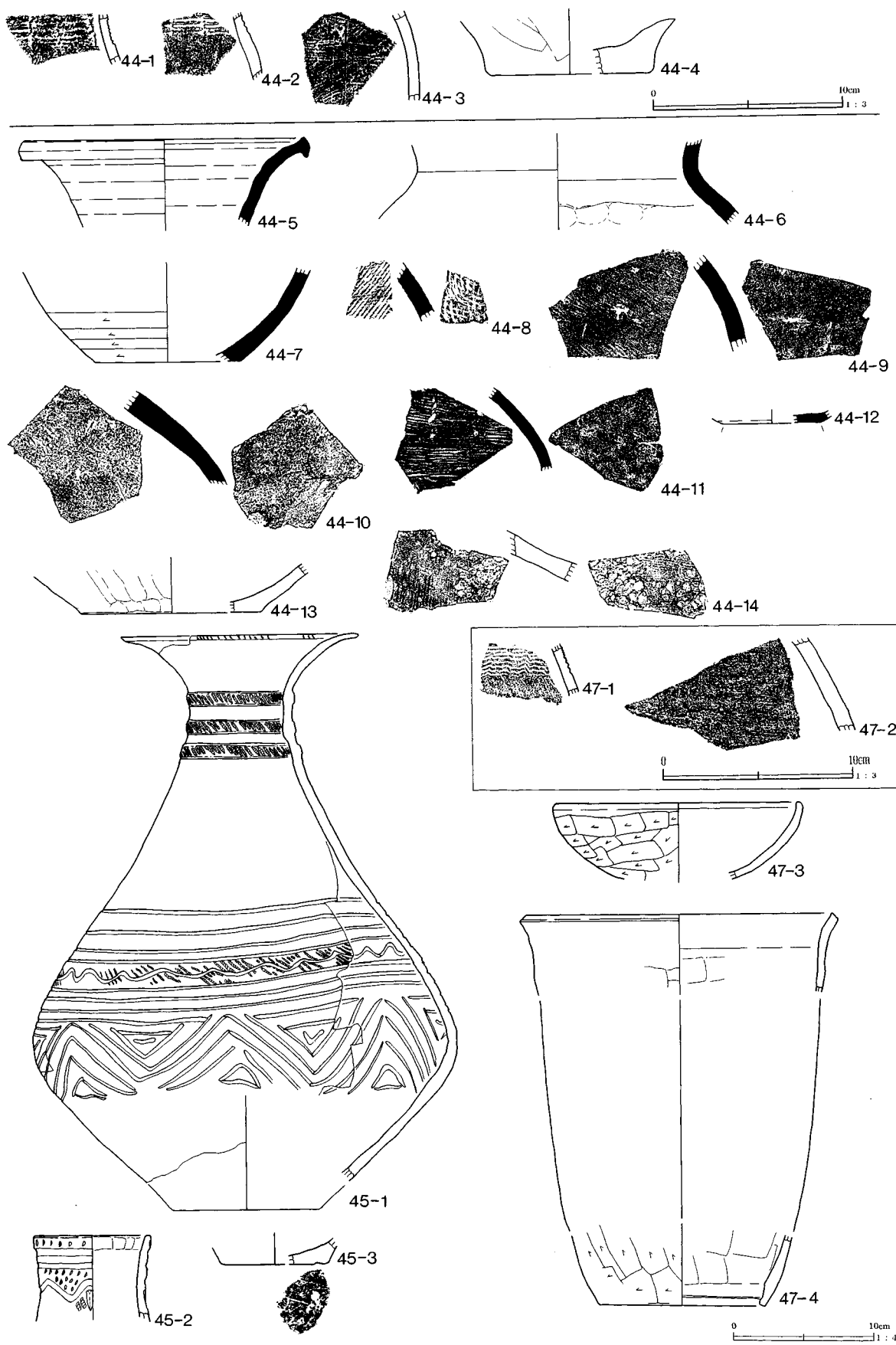
検出長は2.22m、幅は0.7m～0.8mを測る。深さは49cmを測る。断面形状は、舟底状を呈しているが、基本的には箱形状を呈すると考えられる。

埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、須恵器坏・甕のほか、馬の歯、桃の種子などが検出できた。馬の歯は、歯の先端を上に向けて検出された。

第49号溝跡 (第124・125図、第61表)

38・39-177・178グリッドに位置する。第9・10号掘立柱建物跡、第3号方形周溝墓、第23号井戸跡と重複関係にあり、第3号方形周溝墓を本遺構が切っている。また、第23号井戸跡に切られている。一方、第9・10号掘立柱建物跡との新旧関係は明確にすることはできなかった。東西が調査区域外となっている。



第123図 第44・45・47号溝跡出土遺物

第60表 第44・45・47号溝跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
44-1	弥生土器甕	—	—	—	—	橙色	—	頸部	櫛描簾状文。
44-2	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい橙色	—	胴部	櫛描簾状文。
44-3	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい黄褐色	—	胴部	刷毛目。
44-4	弥生土器壺	—	—	(8.5)	—	にぶい黄橙色	—	底部	
44-5	須恵器壺	(20.0)	—	—	ABHN	黄灰色	A	10%以下	内面自然釉。
44-6	須恵器甕	—	—	—	ABGH	灰褐色	A	10%	外面自然釉。肩部内面タール状物質付着。
44-7	須恵器甕	—	—	(10.4)	AGN	灰色	A	10%	
44-8	須恵器甕	—	—	—	AN	黄灰色	A	胴部	外面格子叩き目。内面青海波文。
44-9	須恵器甕	—	—	—	ABLN	黄灰色	A	胴部	外面平行叩き目。内面あて具痕。
44-10	須恵器甕	—	—	—	AB	灰色	A	胴肩部	外面ナデ。内面あて具痕。外面自然釉。
44-11	須恵器甕	—	—	—	AFG	灰赤色	A	胴部	外面平行叩き目。内面ナデ。
44-12	須恵器坏	—	—	(6.9)	ABF	灰白色	A	10%以下	
44-13	陶器播鉢	—	—	(12.9)	灰色	—	—	10%	内面平滑。
44-14	陶器甕	—	—	—	灰色	暗赤褐色	—	胴部	外面縦位の刷毛目。内面横位の刷毛目。
45-1	弥生土器壺	(17.0)	(41.2)	(10.8)	ABCH	にぶい黄橙色	C	60%	口唇部RL縄文。頸部横帯にRL縄文。胴上半部から中位平行沈線文、中間に波状文、地文RL縄文。胴下半部へう描連続山形文、ナデ。
45-2	弥生土器壺	(8.4)	—	—	AEIJ	浅黄橙色	B	10%以下	口縁部刺突文、平行沈線文。頸部波状文、刺突文、波状文下LR縄文。
45-3	土師器甕	—	—	(7.8)	AGJLMN	にぶい黄橙色	B	10%以下	木葉痕。
47-1	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい赤褐色	—	胴部	刷毛目後櫛引簾状文及び波状文。
47-2	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	胴部	櫛描波状文。外面赤彩。
47-3	土師器坏	(17.5)	—	—	AHJKM	橙色	A	20%	
47-4	土師器甕	(22.0)	—	(11.7)	ABCGHMN	にぶい橙色	B	10%	

検出長は9.1m、幅は最大幅4.2mを測る。深さは93cmを測る。断面形状は、やや不整形な舟底状を呈する。

埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は多く、幅広い時期に亘っていた。縄文土器深鉢、弥生土器壺・甕、須恵器坏、土師器坏などのほか、打製石斧が検出された。

第50号溝跡（第124・126図、第62表）

40～42-178・179グリッドに位置する。第7号方形周溝墓と重複関係にあり、第7号方形周溝墓を本遺構が切っている。北及び西側が調査区域外となっている。本遺構は、本来の調査区域から拡張した箇所のため2本のトレンチ及び平面の遺構確認により調査を実施した。

検出長は10.4m、幅は2.65m～3.35mを測る。深さは0.9m～1.1mを測る。断面形状は、やや不整形な箱葉研状を呈する。

埋土は、自然堆積と考えられるが、上層は複雑に堆積していることから、ある程度埋まった後人為的に埋められた可能性が考えられる。

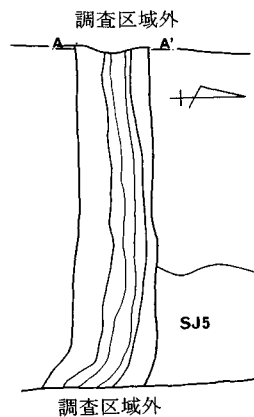
出土遺物はトレンチ調査にも関わらず比較的多く、弥生時代の良好な資料が得られた。弥生土器注口土器・壺・甕、土師器甕破片のほか、磨石、打製石斧が検出できた。

時期は、弥生土器が示す弥生時代後期と考えられるが、第7号方形周溝墓の北溝が切られていることから、少なくとも第7号方形周溝墓形成期以降であると考えられる。

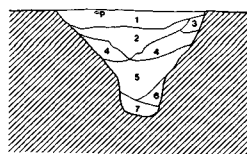
また、第49号溝跡とは、少々出土遺物の傾向を異にしているが、双方とも同一延長上に所在し、同一遺構の可能性も考えられる。

第51号溝跡（第127～129図、第63表）

第47号溝跡



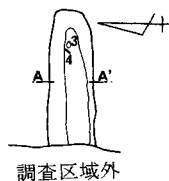
A 24.20



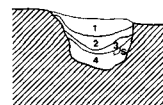
第47号溝跡

- 1 灰色土 (酸化鉄多量に含み褐色帯びる、土器含む)
- 2 暗灰色土 (火山灰わずかに含む)
- 3 灰白色土 (酸化鉄多量に含む)
- 4 灰色粘質土
- 5 灰色粘土 (灰白色粘土粒子多量、炭化物若干含む)
- 6 灰色粘土 (粘性強い、灰色粘土ブロック含む)
- 7 オリーブ黒色粘土 (粘性強い、灰白色粘土粒子少量含む)

第48号溝跡



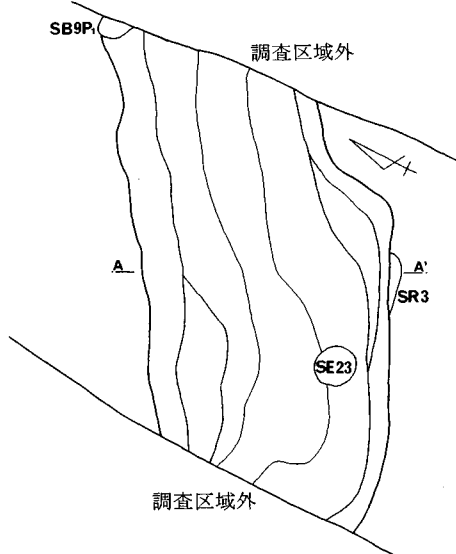
A 24.20



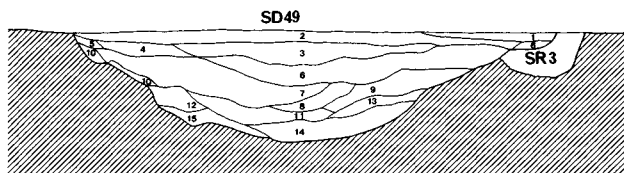
第48号溝跡

- 1 灰色粘質土 (かたくしめる、火山灰若干、酸化鉄非常に多く含む)
- 2 灰色粘土 (灰白色シルト若干混じる、酸化鉄若干、馬歯出土)
- 3 暗灰色粘土 (灰白色粘土粒子ごくわずかに含む)
- 4 灰色粘土 (灰白色粘土粒子ごくわずかに含む)

第49号溝跡



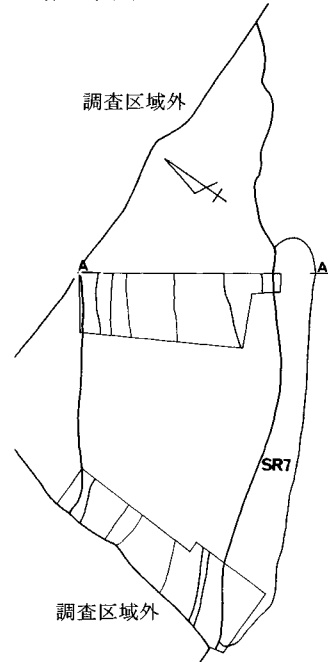
A 24.20



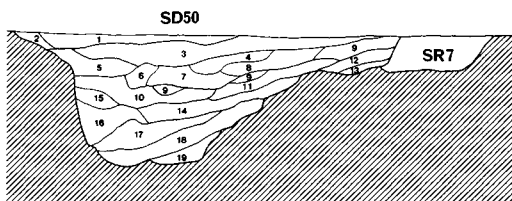
第49号溝跡

- 1 灰色土 (灰白色シルト粒子、マンガン粒子、酸化鉄若干含む)
- 2 灰色土 (かたくしめる、酸化鉄少量、火山灰、小礫多量に含む)
- 3 灰色粘質土 (酸化鉄少量、小礫多量に含む)
- 4 暗青灰色土 (酸化鉄少量、炭化物若干含む)
- 5 灰白色砂 (暗青灰色土ブロック混じる)
- 6 青灰色粘質土 (かたくしめる、灰白色粘土粒子多量、灰白色シルト粒子、酸化鉄少量、炭化物、小礫若干含む)
- 7 灰色粘砂土 (ざくざくした感じ、下層ほど粘性もつ、小礫若干含む)
- 8 灰色粘土 (青灰色粘土ブロック若干、明緑灰色砂ブロック含む)
- 9 灰色粘砂土 (ざくざくした感じ、明緑灰色シルトブロック若干含む)
- 10 青灰色砂 (灰色粘土ブロック含む)
- 11 灰色粘土 (粘性強い)
- 12 オリーブ黒色粘土 (粘性強い、明緑灰色砂多量に含む)
- 13 青灰色粘土 (粘性強い)
- 14 灰色粘砂土 (明緑灰色砂混じる)
- 15 灰色粘土 (粘性強い、明緑灰色砂混じる)

第50号溝跡

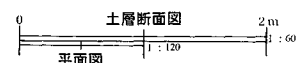


A 24.20



第50号溝跡

- 1 灰色粘質土 (酸化鉄少量、マンガン粒子含む)
- 2 黄灰色粘質土 (明緑灰色粘質土粒子若干、酸化鉄少量含む)
- 3 灰色粘質土 (灰色粘質土混じる)
- 4 灰色粘土 (酸化鉄若干、カーボン微粒子少量含む)
- 5 灰色粘質土 (シルト感強い)
- 6 灰色粘土 (暗灰色粘土ブロック多量に含む)
- 7 黒色粘土 (灰白色粘土微粒子少量含む、カーボンまたは泥炭層)
- 8 灰色粘土 (灰白色粘土微粒子少量含む)
- 9 灰色粘質土 (かたくしめる、マンガン粒子少量、酸化鉄若干含む)
- 10 灰色粘土 (シルト感あり、灰白色粘土ブロック若干、カーボン含む)
- 11 灰色粘土 (灰色粘土混じる、灰白色粘土粒子若干含む)
- 12 暗灰色粘質土 (明緑灰色粘質土粒子多量に含む)
- 13 灰色粘土 (明緑灰色粘質土粒子非常に多く含む)
- 14 オリーブ黒色粘土 (カーボン微粒子少量含む)
- 15 灰色粘土 (シルト感強い、灰白色粘土粒子少量含む)
- 16 黄灰色粘土 (シルト感あり、灰白色粘土ブロック少量含む)
- 17 灰色粘土 (シルト感あり、暗灰色粘土ブロック、灰白色粘土粒子、カーボン微粒子少量含む)
- 18 黒色粘土 (灰白色粘土ブロック少量帯状に混じる、明緑灰色粘土ブロック、カーボン微粒子若干含む)
- 19 オリーブ灰色粘土 (黒色粘土ブロック少量含む)

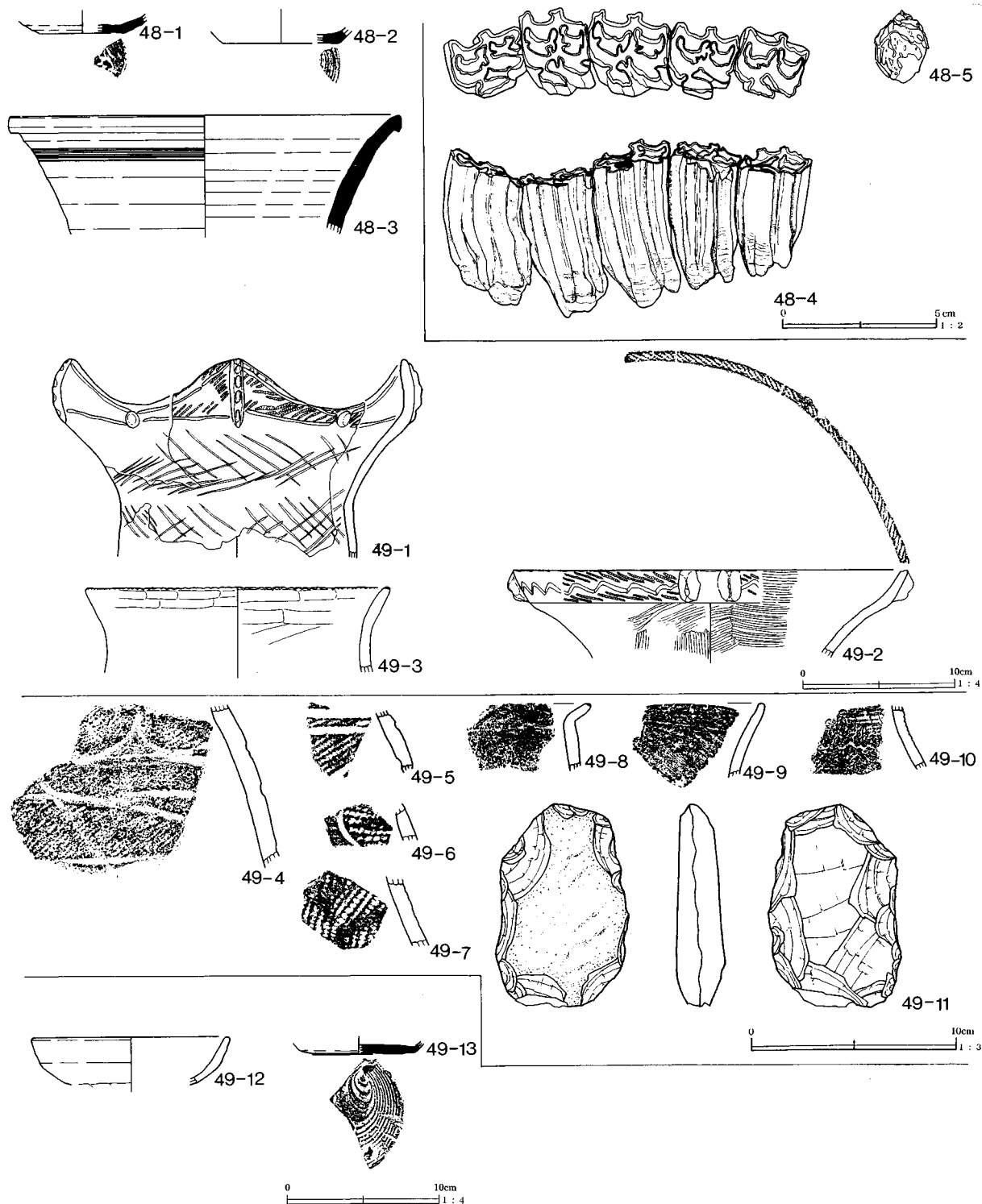


第124図 第47～50号溝跡

49～51-179グリッドに位置する。北及び南側が調査区域外となっている。

調査範囲が非常に狭く詳細は不明であるが、推定検出長は7.75m、推定幅は5.1mを測る。深さは1.08mを測る。断面形状は、やや起伏はあるが舟底状を呈する。西側の上面付近に木材を板目取りし、幅広で短冊状の杭が打たれていた。この杭は先端を炭化させ、腐蝕防止の対策が施してあった。

埋土は、自然堆積と考えられる。



第125図 第48・49号溝跡出土遺物

第61表 第48・49号溝跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
48-1	須恵器坏	—	—	(5.1)	ABH	灰白色	A	10%以下	未野産。 内外面自然釉。 左下顎臼歯？右2つを除きやや湾曲している。 重さ1.0g。下半左側故意による欠損。 4単位の波状口縁。波頂部より棒状工具による押圧を加えた隆帯を縦位に貼付。口縁部無節L縄文施文後沈線区画と円形貼付文。頸部から胴部格子目状沈線文。内面ナデ後にヘラミガキ。口縁部外面及び内面煤及びコゲ状物質付着。 2条1組の棒状浮文。口縁部RL縄文施文後波状沈線文。口唇部RL縄文。胴下半部斜位及び縦位ミガキ。内面横位ミガキ。 キザミ口縁。 沈線文。縄文。 縄文。 沈線文区画内にLR縄文。 LR縄文。 キザミ口縁。内外面赤彩。 内外面刷毛目。 櫛描簾状文及び波状文。 重さ200g。ホルンフェルス製。短冊形。
48-2	須恵器坏	—	—	(7.6)	AGN	暗灰色	A	10%以下	
48-3	須恵器甕	(25.8)	—	—	ABGN	灰色	A	10%以下	
48-4	馬歯	歯冠高左から5.09、4.81、5.07、4.55、3.93					—	—	
48-5	種子桃	長さ2.31	幅1.81	厚さ1.30	—	—	—	—	
49-1	縄文土器深鉢	(22.0)	—	—	—	にぶい黄橙色	B	20%	
49-2	弥生土器壺	(25.4)	—	—	—	にぶい黄橙色	A	10%	
49-3	弥生土器甕	(19.8)	—	—	ADGHM	にぶい橙色	A	10%	
49-4	弥生土器壺	—	—	—	—	灰白色	—	胴部	
49-5	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい橙色	—	胴部	
49-6	弥生土器壺	—	—	—	—	橙色	—	胴部	
49-7	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	胴部	
49-8	弥生土器甕	—	—	—	—	灰褐色	—	口縁部	
49-9	弥生土器甕	—	—	—	—	灰褐色	—	口縁部	
49-10	弥生土器甕	—	—	—	—	灰褐色	—	頸部	
49-11	打製石斧	長さ(9.9)	幅6.5	厚さ2.8	—	—	—	—	
49-12	土師器坏	(12.6)	—	(8.6)	ABEGJ	浅黄橙色	B	10%	
49-13	須恵器坏	—	—	(6.0)	ABFH	灰色	A	15%	

出土遺物は狭い調査にも関わらず非常に多く、今回報告の溝跡中一番の出土量を誇った。また、時期も幅広く器種も多種で、弥生時代中期から8世紀末ないしは9世紀初頭の遺物が見られた。弥生土器高坏・壺・甕、土師器高坏・坏・壺・甕、須恵器蓋・坏・椀・長頸壺・甕・鉄鉢形土器などのほか、木製の四脚盤・棒状製品、桃や胡桃の種子など低湿地ならではの遺物も検出できた。

第52号溝跡（第127・130図、第64表）

38・39-182グリッドに位置する。北側以外は調査区域外となっている。

調査範囲が狭く溝の約半分の調査であった。検出長6.1m、残存最大幅2.6mを測る。深さは最深で1.28mを測る。断面形状は、不明であるが、壁面傾斜の緩急の違いはあるものの葉研状を呈すると考えられる。

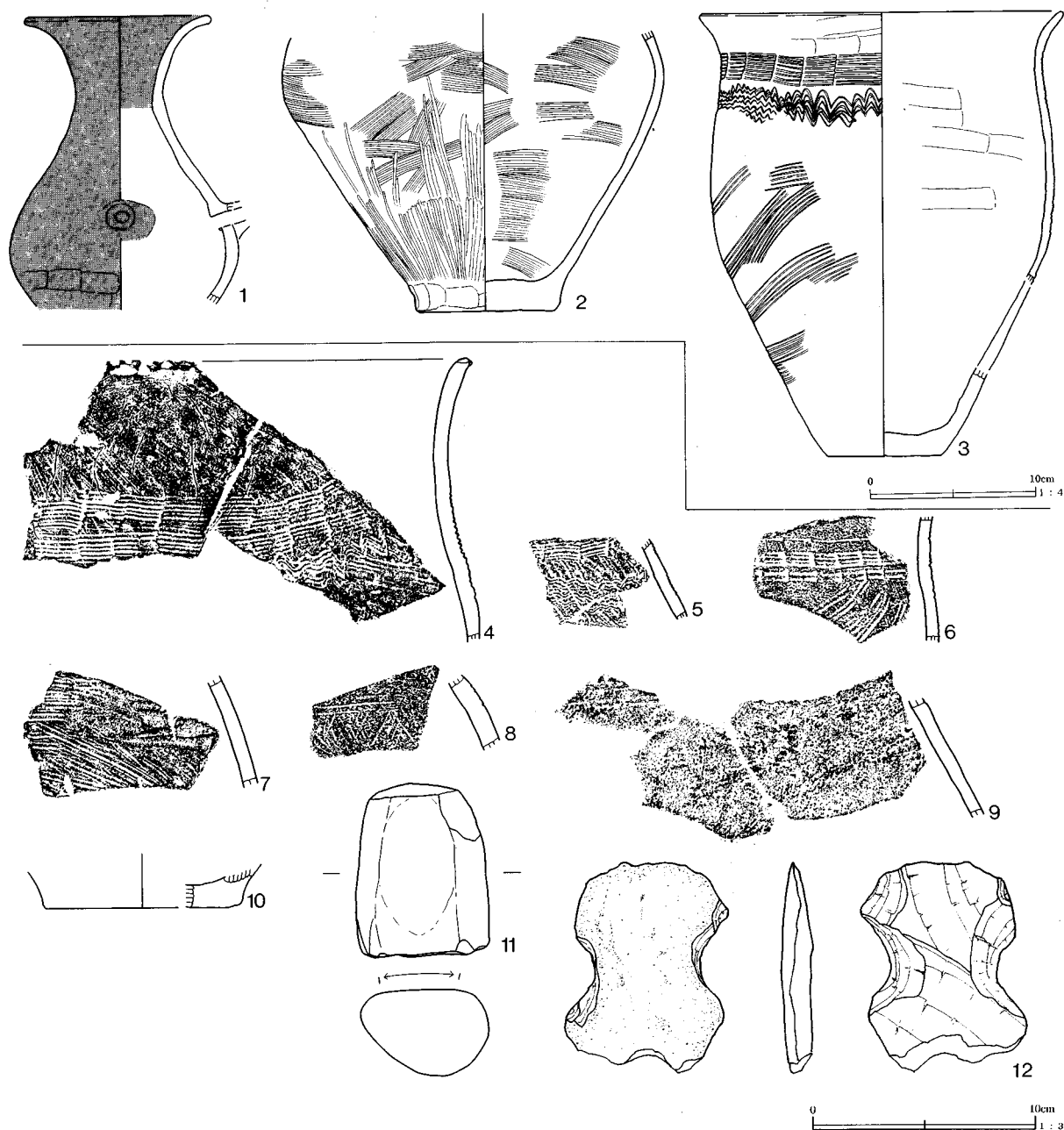
埋土は、自然堆積と考えられる。また、第3層中にFAと考えられる火山灰を確認した。

出土遺物は、狭い調査にも関わらず、本遺構も比較的多く検出できた。また、時期も幅広く弥生時代後期から9世紀後半までの遺物が見られた。弥生土器壺・甕、土師器高坏・坏・甕、須恵器坏・甕などが検出できた。FA降下以前以後の出土遺物と土層の年代観は完全に一致していた。

また、本遺構、第37号溝跡、第51号溝跡は、現況道路に沿って検出されているが、この道が旧河道を示す可能性があり、出土遺物の時期的差は若干見られるものの、これらの遺構がその裏付けとなり得ると考える。

第53号溝跡（第127図）

18・19-187グリッドから18・19-188グリッドにかけて位置する。北及び南側は調査区域外となっている。また、溝の検出中央部を横断して試掘調査時のトレンチが攪乱している。

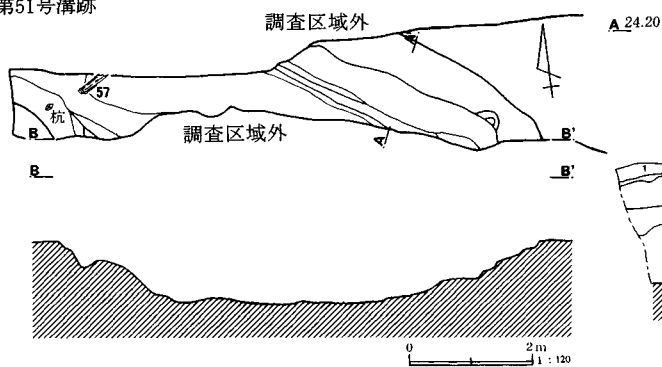


第126図 第50号溝跡出土遺物

第62表 第50号溝跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器注口土器	(10.7)	—	—	ABEGHJ	にぶい黄橙色	A	60%	頸部内面から外面赤彩。
2	弥生土器壺	—	—	8.2	ABEHMN	にぶい黄橙色	A	25%	外面刷毛目後縦位ミガキ。内面刷毛目。
3	弥生土器甕	(21.5)	27.0	6.7	AEN	黒褐色	C	35%	頸部櫛描簾状文及び波状文。胴部粗目刷毛目。
4	弥生土器甕	—	—	—	—	橙色	—	口縁部	キザミ口縁。刷毛目後櫛描簾状文2条及び櫛描波状文。
5	弥生土器甕	—	—	—	—	暗褐色	—	頸部	刷毛目後櫛描簾状文及び波状文。
6	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい褐色	—	頸部	刷毛目後櫛描簾状文。
7	弥生土器甕	—	—	—	—	褐灰色	—	胴部	刷毛目。
8	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	胴部	ヘラ描重ね鋸歯文。
9	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい橙色	—	胴部	刷毛目。
10	弥生土器壺	—	—	(8.7)	—	にぶい橙色	—	底部	—
11	磨石	長さ7.8	幅6.0	厚さ4.0	—	—	—	欠損	重さ300g。砂岩製。
12	打製石斧	長さ(9.4)	幅7.3	厚さ1.3	—	—	—	刃部欠損	重さ103g。粘板岩製。分銅形。

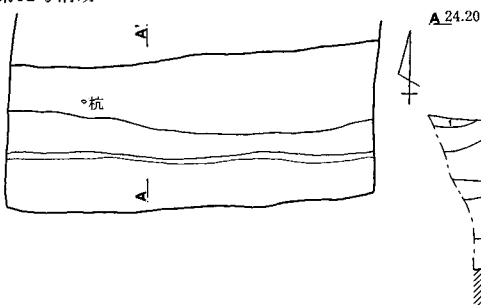
第51号溝跡



第51号溝跡

- 1 黄灰色粘土 (シルト多量に混じる、炭化物含む)
- 2 炭化した腐敗植物層
- 3 灰色粘土 (シルト多量に混じる)
- 4 灰色粘土 (灰白色粘土ブロック含む)
- 5 黄灰色粘土 (粘性強い、マンガン粒子若干含む)
- 6 灰色粘土 (粘性強い、灰白色粘土粒子若干含む)
- 7 灰色粘土 (灰白色シルト混じる)
- 8 暗灰色粘土 (粘性非常に強い)
- 9 灰色粘土 (粘性非常に強い、明黄灰色粘土ブロック含む)
- 10 黄灰色粘土 (粘性強い)
- 11 オリーブ黒色粘土 (粘性非常に強い)

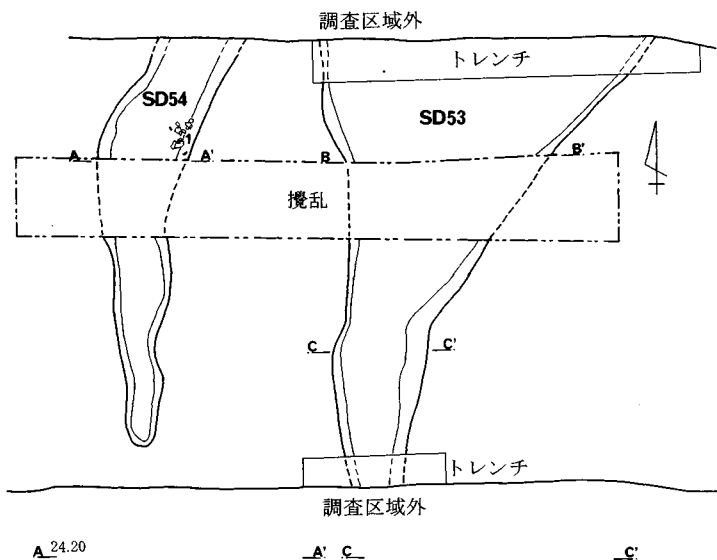
第52号溝跡



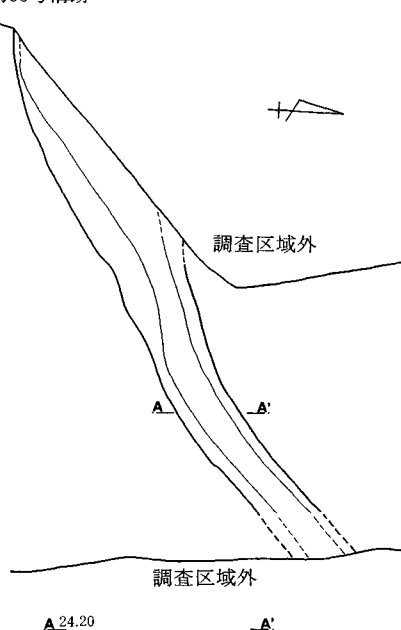
第52号溝跡

- 1 灰色土 (炭化物帯状に混じる、酸化鉄若干含む)
- 2 黄灰色土 (酸化鉄多量に含む)
- 3 灰色粘質土 (しまりない、炭化物帯状に多量に混じる、灰オリーブ色土ブロック、火山灰 (明黄褐色砂質) ブロック若干含む)
- 4 灰オリーブ色粘質土 (酸化鉄ブロック多量に含む)
- 5 灰色粘質土 (オリーブ灰色微細粒子多量に含む)
- 6 灰色粘質土 (酸化鉄多量に含む)
- 7 黄灰色土 (シルト質、火山灰と思われる白色粒子多量に含む)
- 8 灰色粘質土 (酸化鉄少量含む)
- 9 灰色粘質土 (明緑灰色粘質土ブロック状に混じる、酸化鉄多量に含む)

第53・54号溝跡



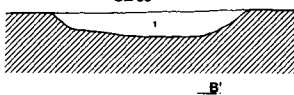
第55号溝跡



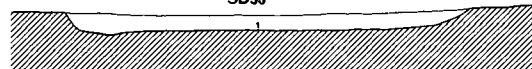
SD54



SD53



SD53



第53号溝跡

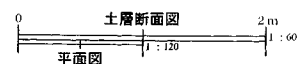
- 1 黒色粘土 (しまり強い、砂利、炭化物含む)

第54号溝跡

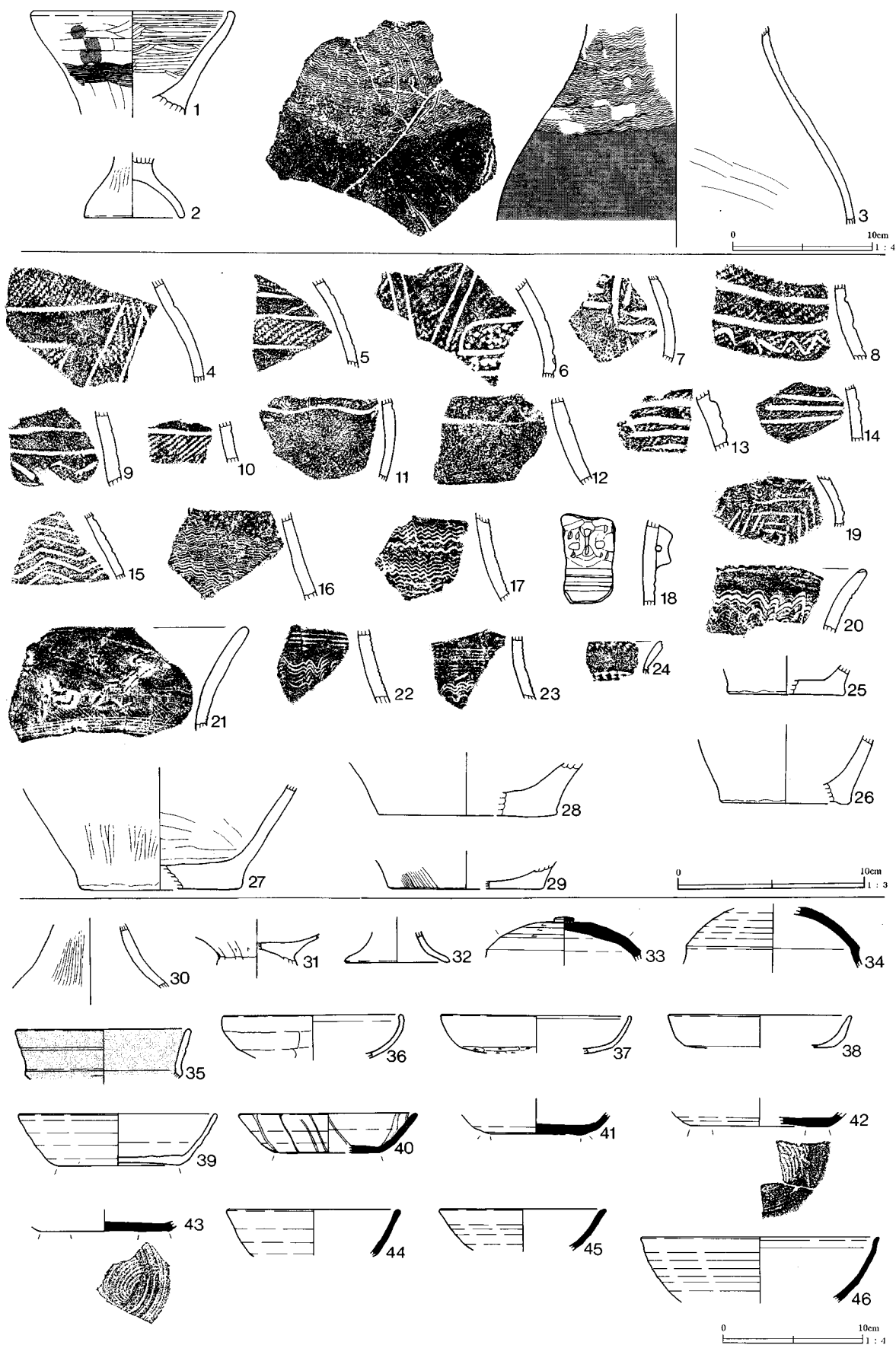
- 1 オリーブ灰色粘土 (しまり弱い)
- 2 黒色粘土 (しまり強い、やや泥炭化)

第55号溝跡

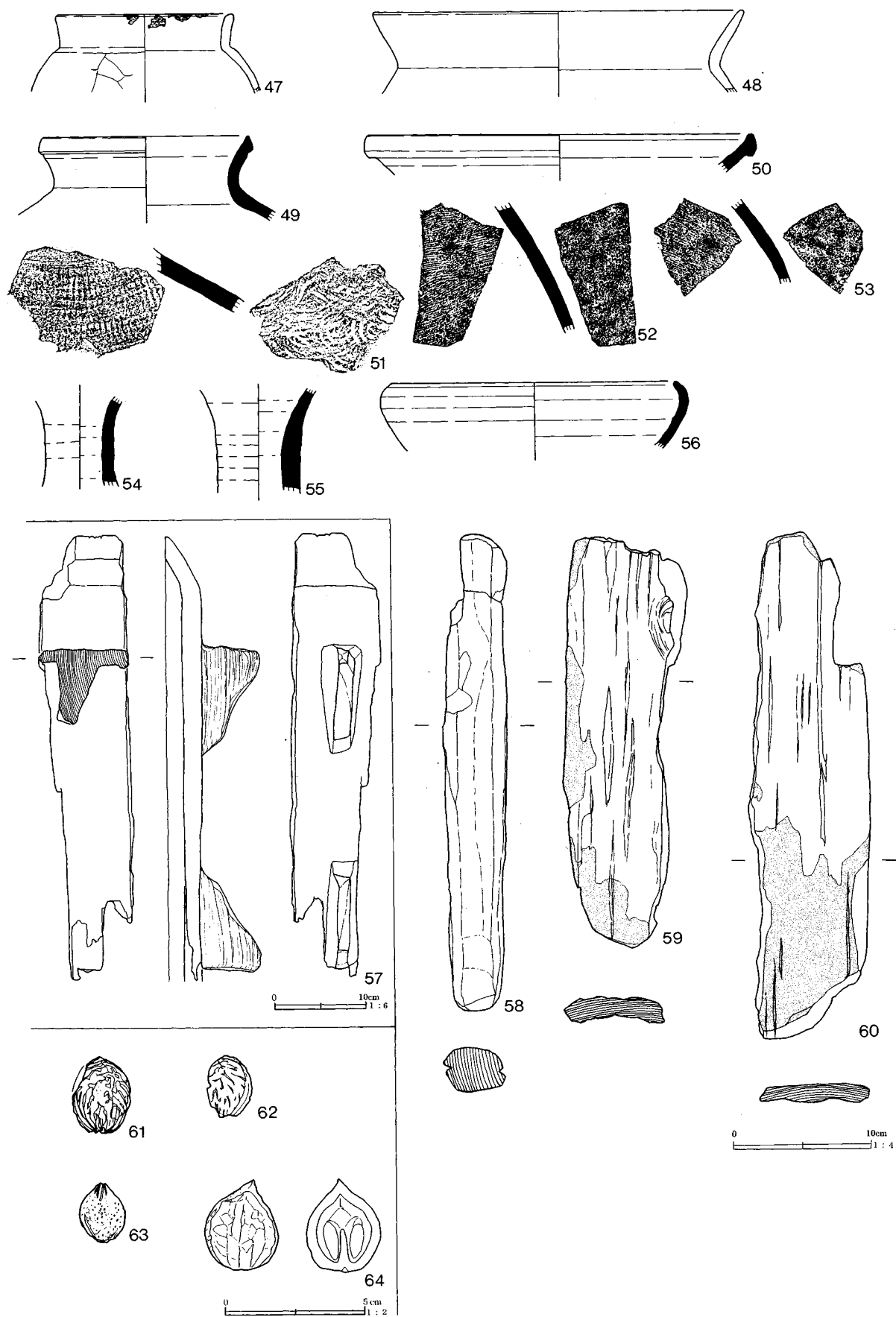
- 1 暗青灰色粘質土 (しまり強い)



第127図 第51～55号溝跡



第128図 第51号溝跡出土遺物 (1)



第129图 第51号溝跡出土遺物（2）

第63表 第51号溝跡出土遺物観察表

番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	色 調	焼成	残存率	備 考
1	弥生土器高坏	(14.2)	—	—	AMG	にぶい黄橙色	A	20%	外面ナシ、刷毛目。内面横位ミガキ。外面一部に赤彩。内面赤彩。
2	弥生土器高坏	—	—	(7.1)	AEGJ	浅黄橙色	A	30%	外面ミガキ。
3	弥生土器壺	—	—	—	AGHIKN	にぶい黄橙色	A	頸部～胴部	櫛描波状文。胴部外面赤彩。
4	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄褐色	—	胴部	沈線文区画内にL R 縄文。縄文部赤彩。
5	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい褐色	—	胴部	沈線文区画内にL R 縄文。縄文部赤彩。
6	弥生土器壺	—	—	—	—	橙色	—	胴部	沈線文区画内に刺突文。
7	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい赤褐色	—	胴部	地文縄文。重ね沈線文。
8	弥生土器壺	—	—	—	—	黄灰色	—	頸部	地文L R 縄文。沈線文。
9	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄褐色	—	胴部	沈線文。
10	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄褐色	—	胴部	L R 縄文。沈線文。
11	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄褐色	—	胴部	沈線文。
12	弥生土器壺	—	—	—	—	浅黄褐色	—	頸部	沈線文。
13	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄褐色	—	胴部	地文R L 縄文。沈線文。
14	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄褐色	—	胴部	地文L R 縄文。沈線文。
15	弥生土器壺	—	—	—	—	浅黄褐色	—	胴部	沈線文。
16	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄褐色	—	頸部	櫛描波状文。
17	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい褐色	—	頸部	櫛描波状文。
18	弥生土器壺	—	—	—	—	灰白色	—	頸部	
19	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい黄褐色	—	胴部	コの字重ね文。ボタン状貼付文。
20	弥生土器甕	—	—	—	—	灰黄褐色	—	口縁部	櫛描波状文。
21	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい褐色	—	口縁部	口縁部刷毛目。頸部櫛描簾状文。
22	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい黄褐色	—	頸部	櫛描簾状文及び波状文。
23	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい橙色	—	頸部	櫛描簾状文及び波状文。
24	弥生土器甕	—	—	—	—	橙色	—	口縁部	口唇部L R 縄文。頸部櫛描簾状文。
25	弥生土器壺	—	—	(6.1)	—	灰褐色	—	底部	
26	弥生土器壺	—	—	(7.1)	—	にぶい黄褐色	—	底部	
27	弥生土器壺	—	—	(8.6)	—	浅黄褐色	—	底部	外面ミガキ。
28	弥生土器甕	—	—	(9.6)	—	灰白色	—	底部	
29	弥生土器甕	—	—	(8.4)	—	浅黄褐色	—	底部	外面刷毛目。
30	土師器高坏	—	—	—	ABEHJ	にぶい黄褐色	B	10%	
31	土師器高坏	—	—	—	AEHJ	橙色	C	10%	
32	土師器高坏	—	—	(7.4)	AJM	にぶい橙色	A	10%以下	
33	須恵器蓋	—	—	—	ABGHKM	灰色	A	25%	
34	須恵器蓋	—	—	—	ABFG	灰色	A	10%	
35	土師器坏	—	—	—	AEHJK	にぶい黄褐色	B	10%	内外面黒色処理。
36	土師器坏	—	—	—	ADHJM	にぶい橙色	C	10%以下	
37	土師器坏	—	—	(13.6)	AHJKM	橙色	B	40%	
38	土師器坏	(13.0)	—	(2.2)	AIJ	橙色	A	10%以下	
39	須恵器坏	(14.2)	3.8	8.7	ABEGHLN	橙色	C	50%	未野産。
40	須恵器坏	(12.7)	2.9	(7.6)	ABFGM	灰色	A	25%	内外面火だすき痕。南比企産。
41	須恵器坏	—	—	(6.6)	ABFGN	灰色	A	15%	南比企産。
42	須恵器坏	—	—	(9.9)	ABFN	灰白色	A	40%	
43	須恵器坏	—	—	(9.1)	ABFGN	灰色	A	15%	南比企産。
44	須恵器坏	(12.2)	—	—	ABFH	灰白色	A	10%以下	南比企産。
45	須恵器坏	(11.8)	—	—	ABFN	オリーブ灰色	A	10%	南比企産。
46	須恵器碗	(17.1)	—	—	ABFG	灰色	A	10%以下	南比企産。
47	土師器壺	(12.5)	—	—	AG	にぶい黄褐色	A	10%	口縁部内外面漆状物質付着。漆壺用途？
48	土師器甕	(26.8)	—	—	AEHJM	橙色	A	10%	
49	須恵器甕	(14.8)	—	—	ABN	灰色	A	10%	外面口縁部内面自然釉。
50	須恵器甕	(27.6)	—	—	ABGN	青灰色	A	10%以下	
51	須恵器甕	—	—	—	AGH	灰色	A	胴肩部	外面格子叩き目。内面青海波文。
52	須恵器甕	—	—	—	ABFGN	灰色	A	胴部	外面平行叩き目。内面あて具痕。
53	須恵器甕	—	—	—	ABFGN	灰色	A	胴部	外面平行叩き目。内面あて具痕。
54	須恵器長頸壺	—	—	—	ABGH	灰白色	A	15%	内外面自然釉。
55	須恵器長頸壺	—	—	—	ABGN	灰色	A	10%	
56	須恵器鉢型土器	(20.6)	—	—	ABFG	灰色	A	10%以下	南比企産。
57	四脚盤	長さ48.7	幅9.4	高さ19.0	—	—	—	40%	脚の高さ6.2cm。平面方形の浅い容器と推定される。脚長辺と平行に2対4脚付くと推定される。底部は平坦。横木取り。
58	棒状木製品	長さ35.0	幅4.6	厚さ3.2	—	—	—	欠損	端部丸く加工されている。割材。用途不明。

番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	色 調	焼成	残存率	備 考
59	杭	長さ29.4	幅8.5	厚さ1.8	—	—	—	欠損	板目取り。先端及び側端炭化。
60	杭	長さ36.8	幅8.8	厚さ1.3	—	—	—	欠損	板目取り。先端及び周囲炭化。
61	種子桃	長さ2.8	幅2.1	厚さ1.4	—	—	—	一部欠損	重さ1.9g。左上故意による欠損。
62	種子桃	長さ2.2	幅1.7	厚さ1.3	—	—	—	一部欠損	重さ1.1g。
63	種子梅	長さ2.2	幅1.7	厚さ1.2	—	—	—	完存	重さ1.2g。
64	種子胡桃	長さ3.3	幅2.7	厚さ1.2	—	—	—	半欠損	重さ2.1g。

検出長7.5m、幅は南で狭く0.96m、北で広く5.05mを測る。深さは10cm前後～17cmを測る。断面形状は、底面が幅広のやや舟形状を呈する。

埋土は、単一層で、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、土師器の埴などの破片がごく少量検出できた。

時期は、古墳時代中期と考えられる。

第54号溝跡（第127・130図、第64表）

19・20-187グリッドから19・20-188グリッドにかけて位置する。北側は調査区域外となっている。また、溝の検出中央部を横断して試掘調査時のトレンチが攪乱している。

第53号溝跡と並行しており、検出長6.85m、幅は第53号溝跡と同様に南が狭く0.5m前後、北がやや広く1.5mを測る。深さは底面の起伏が激しく、15cm前後～20cm前後を測る。断面形状は、底面が幅広で壁面傾斜が緩やかな箱形状を呈する。

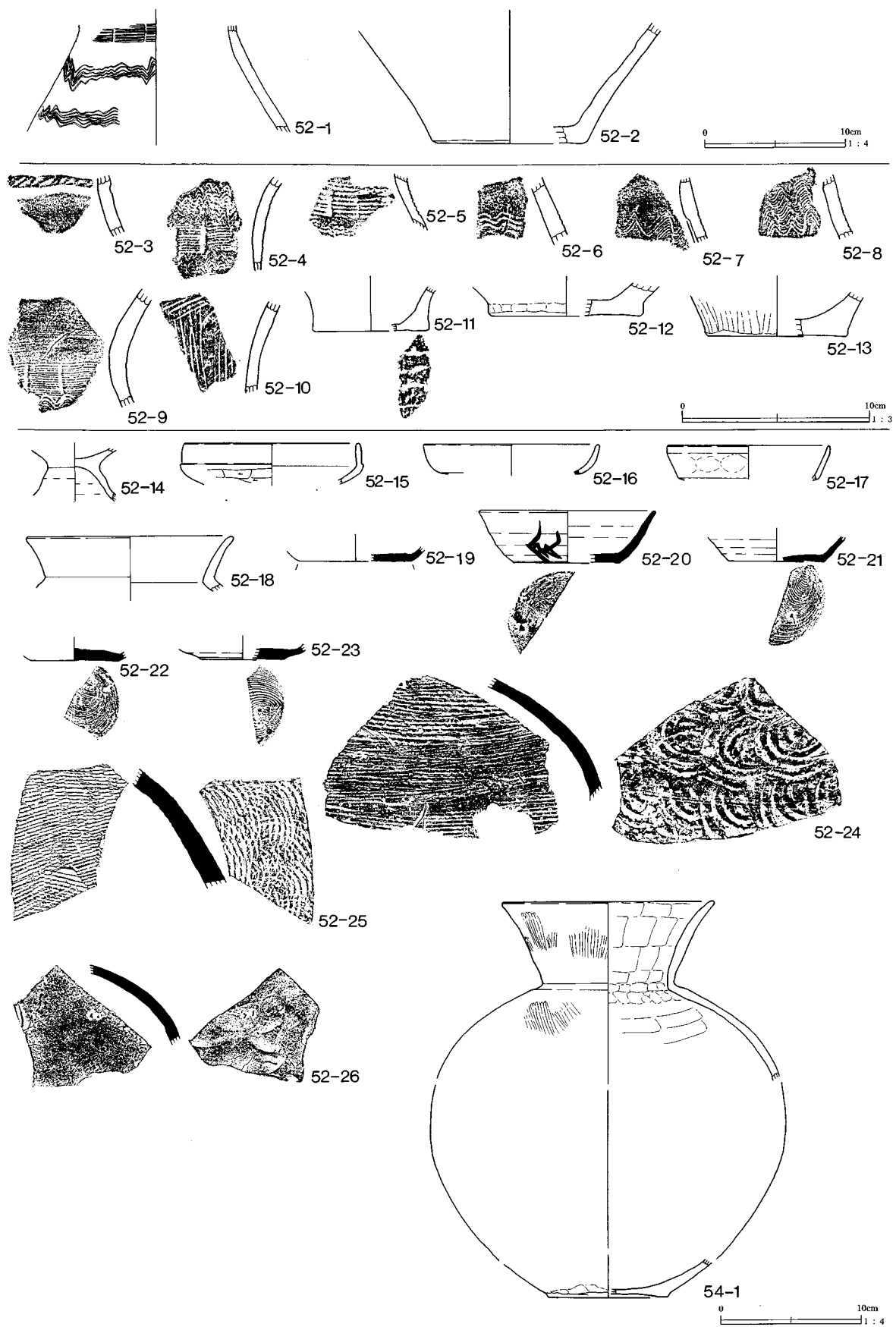
埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、土師器の壺などの破片がごく少量検出できた。

時期は、第53号溝跡と同様に古墳時代中期と考えられる。

第64表 第52・54号溝跡出土遺物観察表

番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	色 調	焼成	残存率	備 考
52-1	弥生土器壺	—	—	—	AEGHJMN	浅黄橙色	C	10%	櫛描簾状文及び波状文。
52-2	弥生土器壺	—	—	(11.1)	—	にぶい橙色	—	底部	
52-3	弥生土器壺	—	—	—	—	灰黄褐色	—	頸部	R L 縄文。
52-4	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄褐色	—	頸部	櫛描簾状文を挟んで櫛描波状文。
52-5	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい橙色	—	頸部	櫛描簾状文2条、櫛描波状文。
52-6	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい橙色	—	頸部	刷毛目後櫛描波状文。
52-7	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	頸部	櫛描波状文。
52-8	弥生土器壺	—	—	—	—	浅黄橙色	—	頸部	櫛描波状文。
52-9	弥生土器甕	—	—	—	—	浅黄橙色	—	口縁部～頸部	刷毛目後櫛描簾状文、櫛描波状文。
52-10	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい黄褐色	—	胴部	条痕文。
52-11	弥生土器壺	—	—	(6.0)	—	橙色	—	底部	木葉痕。
52-12	弥生土器壺	—	—	(7.9)	—	にぶい橙色	—	底部	
52-13	弥生土器甕	—	—	(7.3)	—	にぶい黄橙色	—	底部	内面煤付着。
52-14	土師器高坏	—	—	—	ADHJ	にぶい橙色	B	15%	
52-15	土師器坏	(12.2)	—	—	AEHJKM	橙色	C	10%	
52-16	土師器坏	(12.4)	—	(10.0)	AEGHJ	にぶい黄橙色	C	10%以下	
52-17	土師器坏	(11.4)	—	(10.0)	ABE	橙色	C	10%	
52-18	土師器甕	(14.6)	—	—	ACHKN	浅黄橙色	C	10%	
52-19	須恵器坏	—	—	(8.0)	ABFN	青灰色	A	15%	南比企産。
52-20	須恵器坏	(12.5)	3.7	(7.6)	ABGMN	灰白色	A	40%	体部外面墨書土器「衾」。
52-21	須恵器坏	—	—	(6.8)	ABF	灰色	A	15%	南比企産。
52-22	須恵器坏	—	—	(6.3)	ABFN	灰色	A	15%	南比企産。
52-23	須恵器坏	—	—	(6.0)	ABFH	灰白色	A	10%	南比企産。
52-24	須恵器甕	—	—	—	ABGN	灰白色	A	胴部	外面平行叩き目。内面青海波文。
52-25	須恵器甕	—	—	—	ABMN	青灰色	A	胴部	外面斜格子叩き目。内面青海波文。
52-26	須恵器甕	—	—	—	ABGK	灰白色	A	胴部	外面ナデ。内面あて具痕。外面自然釉。
54-1	土師器壺	(15.2)	(28.5)	(8.5)	ABGIJKN	橙色	C	30%	



第130図 第52・54号溝跡出土遺物

第55号溝跡（第127図）

10-186グリッドから22-187グリッドにかけて位置する。東及び西側は調査区域外となっている。

検出長9.0m、幅0.8m～1.15mを測る。深さは21cm前後を測る。断面形状は、箱葉研状を呈する。

埋土は、単一層で、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、検出できなかった。

第56号溝跡（第131・135図、第65表）

21-189グリッドから27-188グリッドにかけて位置する。西側は攪乱を受けている。また、南側は調査区域外となっている。

溝はほぼ東西に走り、検出残存長29.4m、幅0.8m～1.06m、深さは30cm前後を測る。断面形状は、舟底状を呈する。

埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、土師器壺・甕破片などが検出できた。

第57号溝跡（第132・135図、第65表）

31-188グリッドから39-187グリッドにかけて位置する。第59・60号溝跡と重複関係にあるが、直接切り合わず、上下の関係にある。すなわち、上下の関係は、第60号溝跡、本遺構、第59号溝跡の順に下面へいく。東側は攪乱を受けており、西端で試掘調査時のトレンチによりさらに攪乱を受けていた。また、西側は調査区域外となっている。

溝は、やや蛇行し幅を広げたり狭めたりしてほぼ東西に走り、検出残存長37.92m、幅0.56m～1.36m、深さ20cm～25cmを測る。断面形状は、箱形状を呈する箇所と舟底状を呈する箇所がある。

埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、弥生土器壺破片などが検出できた。

第58号溝跡（第132・135図、第65表）

35-187グリッドから38-186・187グリッドにかけて位置する。第60号溝跡と重複関係にあり、上下の関係にあるが、本遺構が切られている。南側を除いて調査区域外となっている。

溝は、やや蛇行するがほぼ東西に走り、検出長21.0m、幅3.6m前後、深さ1.02mを測る。断面形状は、葉研が崩れ、2段に掘り込まれた漏斗状を呈し、底面は30cm～50cmと上幅に比べると非常に狭い。

埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、弥生土器壺破片、土師器甕などが検出できた。

時期は、土師器が示す古墳時代と推定できる。

第59号溝跡（第132・135図、第65表）

33-188グリッドから39-188グリッドにかけて位置する。第57・60号溝跡と重複関係にあり、上下の関係にある。第60号溝跡、第57号溝跡、本遺構の順に下面へいく。東西が調査区域外となっている。また、西端で試掘調査時のトレンチによる攪乱を受けていた。

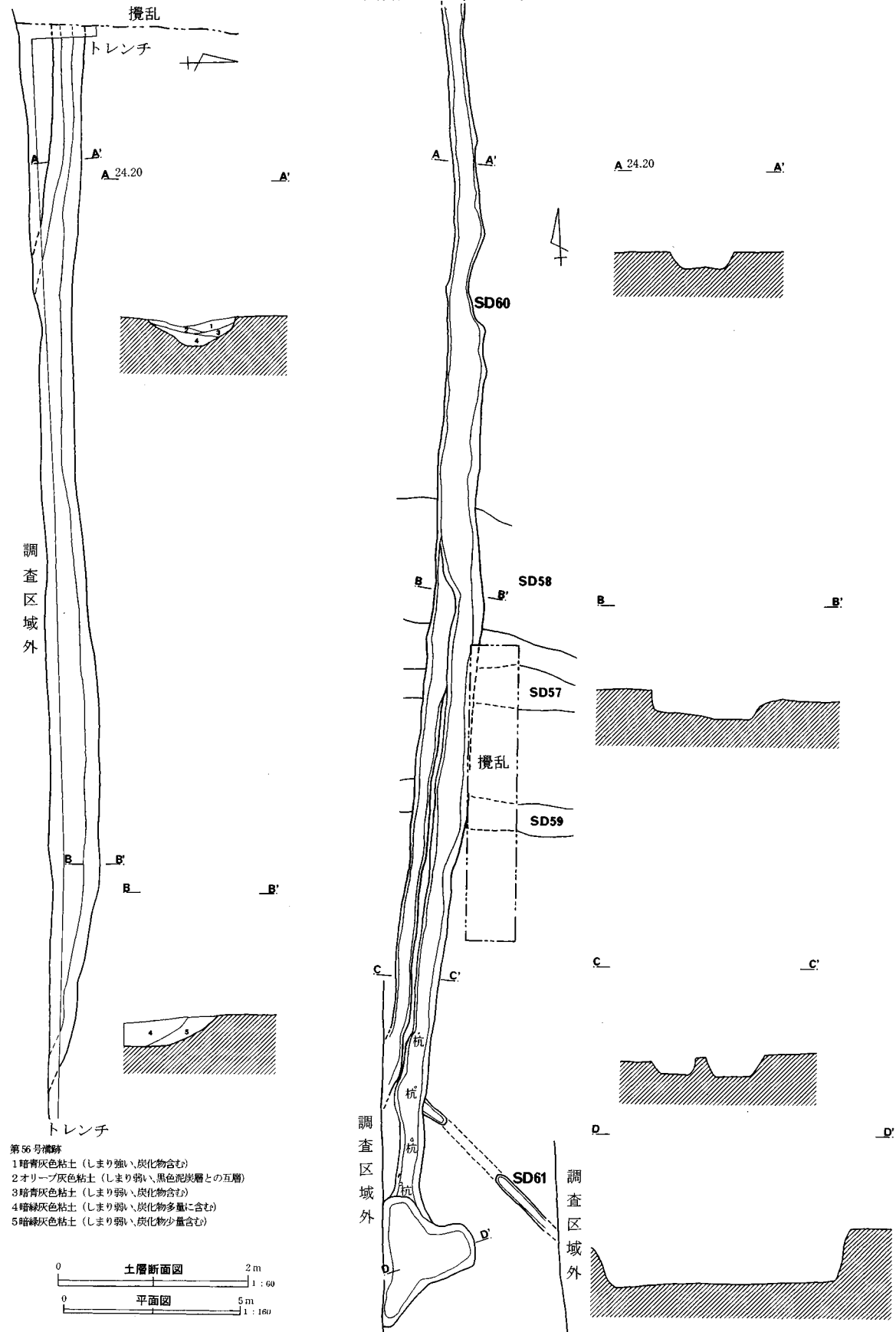
溝は蛇行して東西に走るもので、39-188グリッドから南西方向に向かい、38-188グリッドでやや北西方向に向きを変え、調査区域外へと至る。

検出長28.6m、幅0.7m～1.0m、深さ1.02mを測る。断面形状は、箱葉研状を呈する。

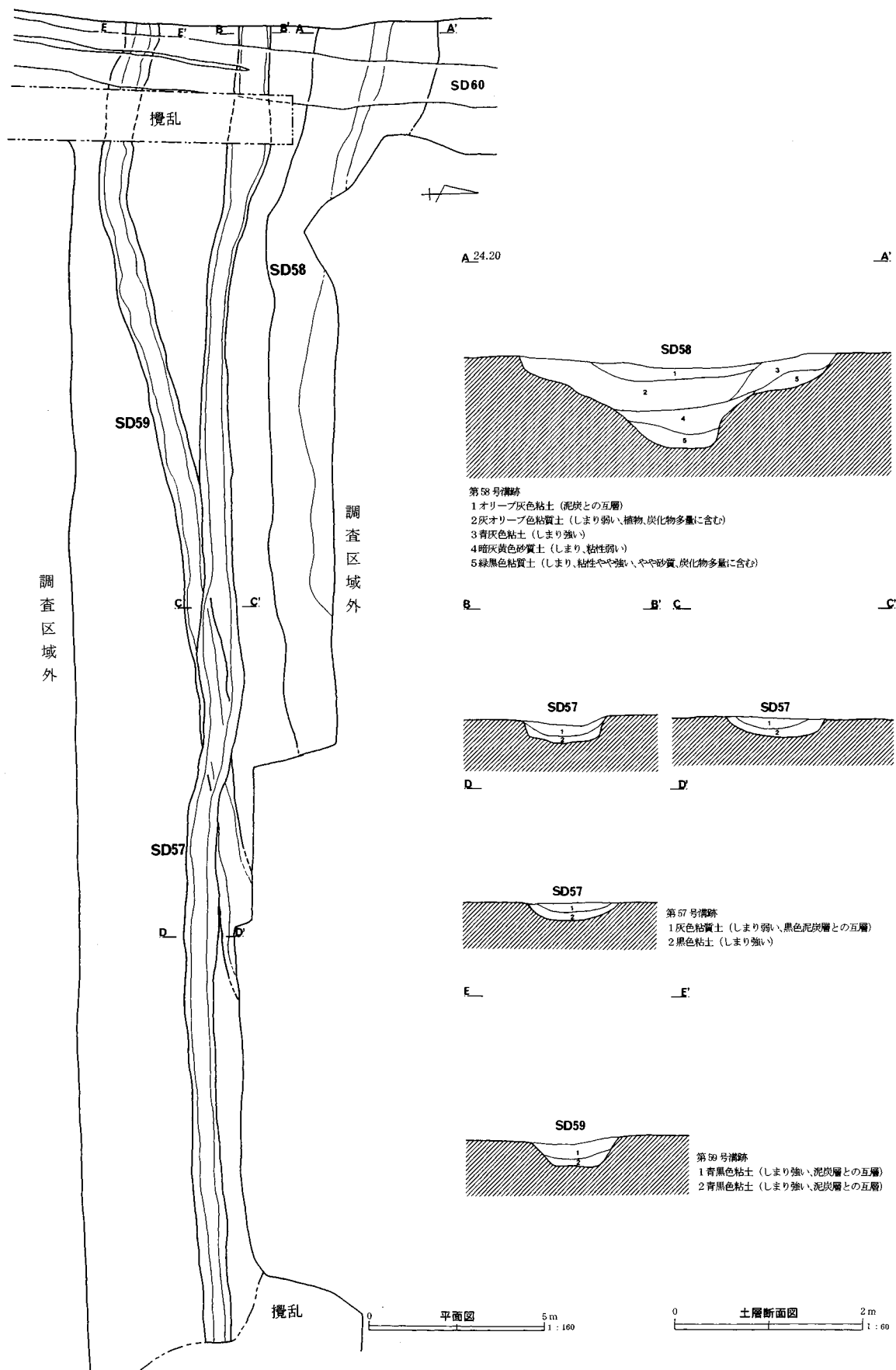
埋土は、自然堆積と考えられる。

第56号溝跡

第60・61号溝跡



第131図 第56・60・61号溝跡



第132図 第57～59号溝跡

出土遺物は、弥生土器甕破片がわずかに検出できた。

第60号溝跡（第131・135図、第65表）

38-184グリッドから39-191グリッドにかけて位置する。第57～59・61号溝跡と重複関係にあり、本遺構と第61号溝跡は、同一遺構確認面上の遺構で、その他の遺構は下面の遺構であり上下の関係にある。さらに、第58号溝跡とは直接切り合いの関係にあるが、第57・59号溝跡とは完全に隔絶している。また、第61号溝跡との新旧関係は、明確には判断できなかった。北及び南部の西側が調査区域外となっている。

溝は、33-184グリッドから若干西に傾きながら南北に走り、南端の水溜状遺構に至る。また、38-187グリッドから西側のもう1条と分岐し、並行して走る。

検出長37.8m、幅は東側の溝が0.44m～1.16m、西側の溝が0.36m～0.6mを測る。深さは、東側の溝が20cm～30cm、西側の溝が20cmを測る。断面形状は、やや不整形な箇所もあるが、基本的に箱形ないしは箱葉研状を呈する。一方、水溜状遺構は不整形なテトラポッド状の平面形で、南北幅3.7m、深さ55cmを測る。断面形状は、箱形状である。

また、溝南端の底面に杭が打たれているのが確認できた。およそ1.3mから1.5mの間隔で杭が4本検出され、長いもので35cmを測った。杭の先端は、20cm程地面に埋め込まれていた。

埋土は、溝本体、水溜状遺構とも自然堆積と考えられる。

出土遺物は、須恵器坏・長頸壺・甕、土師器甕などが検出できた。

第61号溝跡（第131図）

38・39-190グリッドに位置する。第60号溝跡と重複関係にあるが、明確に新旧関係を判断できなかった。東側は調査区域外となっている。

検出長は、途中が途切れているので、東側が2.1m、西側が0.9mを測り、総延長で4.96mを測る。幅は0.25m～0.35m、深さは非常に浅く3cm～4cmを測る。断面形状は、底面が幅広の箱形状を呈する。

出土遺物は、検出できなかった。

第62号溝跡（第133図）

38・39-191・192グリッドに位置する。第40・41号土坑と重複関係にあり、第40号土坑に本遺構が切られ、第41号土坑を切っている。西側は調査区域外となっている。

溝は、39-191グリッドの西調査区域外から39-192グリッドの西調査区域外まで弧を描くように屈曲した平面形である。検出長7.7m、幅0.85m～2.75m、深さ47cm～60cmを測る。屈曲部の底面は、さらに一段深い土坑状の掘り込みがあり底面が2段に掘り込まれている断面形状を呈する。その他の箇所は箱形状である。また、溝の南部では、底面に中の島状の隆起した箇所が存在する。

埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、検出できなかった。

第63号溝跡（第133図）

22-195グリッドに位置する。第19号住居跡と重複関係にあり、本遺構の上面が切られている。北側は攪乱を受けている。また、南側は調査区域外となっている。

検出残存長3.8m、幅は上面が第19号住居跡によって削平されているため現存幅であるが、0.4m～0.7mを測る。深さも現存値で18cm～22cmを測る。断面形状は、舟底状や箱形状を呈する。

埋土は、自然堆積と考えられる。

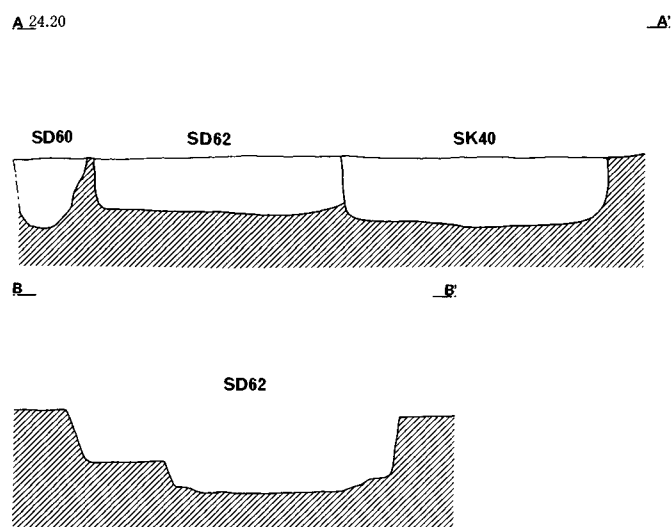
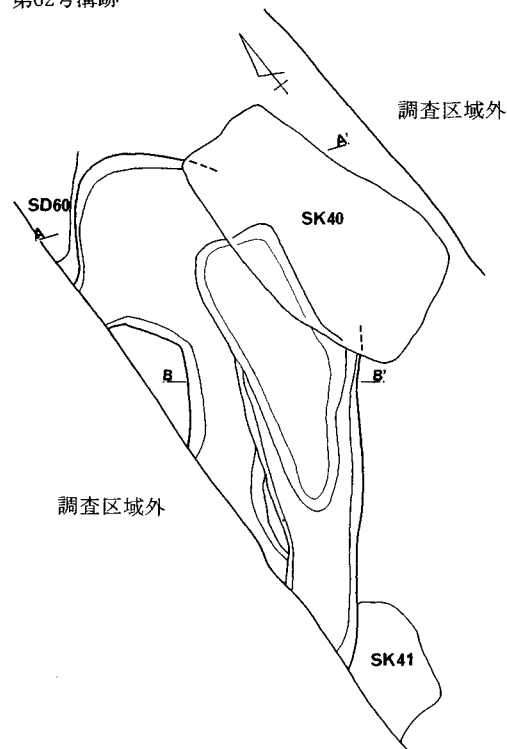
出土遺物は、検出できなかった。

時期は、少なくとも第19号住居跡（8世紀後半）より古くなる。

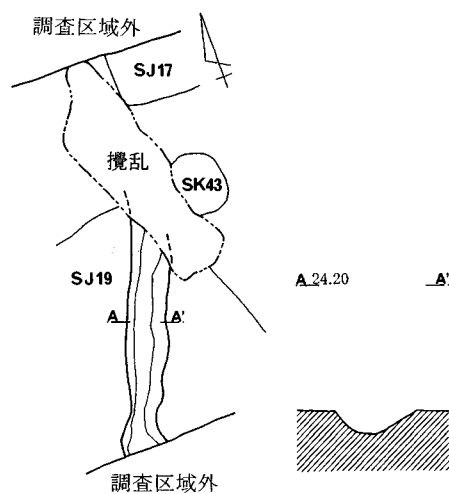
第64号溝跡（第133・135図、第65表）

27・28-194・195グリッドに位置する。南側が攪乱を受けている。また、北側は調査区域外となっている。

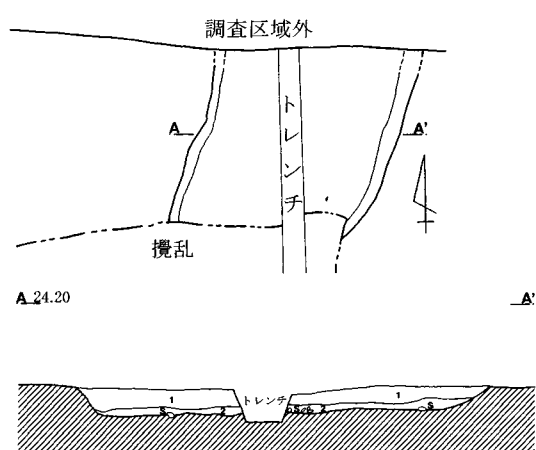
第62号溝跡



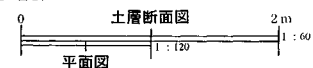
第63号溝跡



第64号溝跡



第64号溝跡
1 灰色粘質土（しまり強い、白色粒子多量に含む）
2 暗オリーブ灰色粘質土（しまり強い、白色粒子、砂利多量に含む）



第133図 第62～64号溝跡

検出残存長2.85m、幅2.85m～3.15m、深さ20cm前後を測る。断面形状は、底面が幅広で箱形状を呈する。

埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、土師器坏・甕、須恵器蓋・坏・甕・瓶などが検出できたが、図示可能な遺物はほとんどなかった。

時期は、8世紀前半と考えられる。

第65号溝跡（第134・135図、第65表）

29・30-195グリッドに位置する。第66号溝跡と重複関係にあり、本遺構が切られている。南側は調査区域外となっている。

検出残存長7.3m、幅は不明であるが、残存最大幅1.05mを測る。深さは20cm前後を測る。断面形状は、底面が幅広で箱形状を呈する。

埋土は、単一層で、自然堆積と考えられる。

出土遺物は比較的多く検出され、土師器高坏・坏・甕・甗などのほか、土錘が検出できた。

第66号溝跡（第134・135図、第65表）

29-195グリッドから31-194グリッドにかけて位置する。第65・67号溝跡と重複関係にあり、本遺構が第65号溝跡を切り、第67号溝跡に切られている。西側が攪乱を受けている。南側は調査区域外となっている。

溝は、29-195グリッドから北西方向に向かい、31-194グリッドの中央部付近で真西に向きを変え攪乱箇所へ至る。検出残存長12.95m、幅0.25m～0.55m、深さ44cmを測る。断面形状は、箱葉研状を呈する。

埋土は、単一層で、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、土師器坏・甕、須恵器坏・甕などが検出できた。

第67号溝跡（第134・135図、第65表）

30・31-194・195グリッドに位置する。第66号溝跡と重複関係にあり、本遺構が切っている。ちょうど検出中央部付近が攪乱を受けている。北及び南側は調査区域外となっている。

溝は南北に走り、南に向かうに従いやや東へ弧を描くように曲がる。検出長7.25m、幅0.35m～0.6m、深さ58cmを測る。断面形状は、箱葉研状を呈する。

埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、土師器坏・甕・台付甕などが検出できた。

時期は、第66号溝跡との切り合いも考慮に入れ8世紀前半と考えられる。

第68号溝跡（第134図）

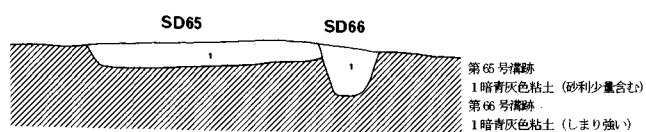
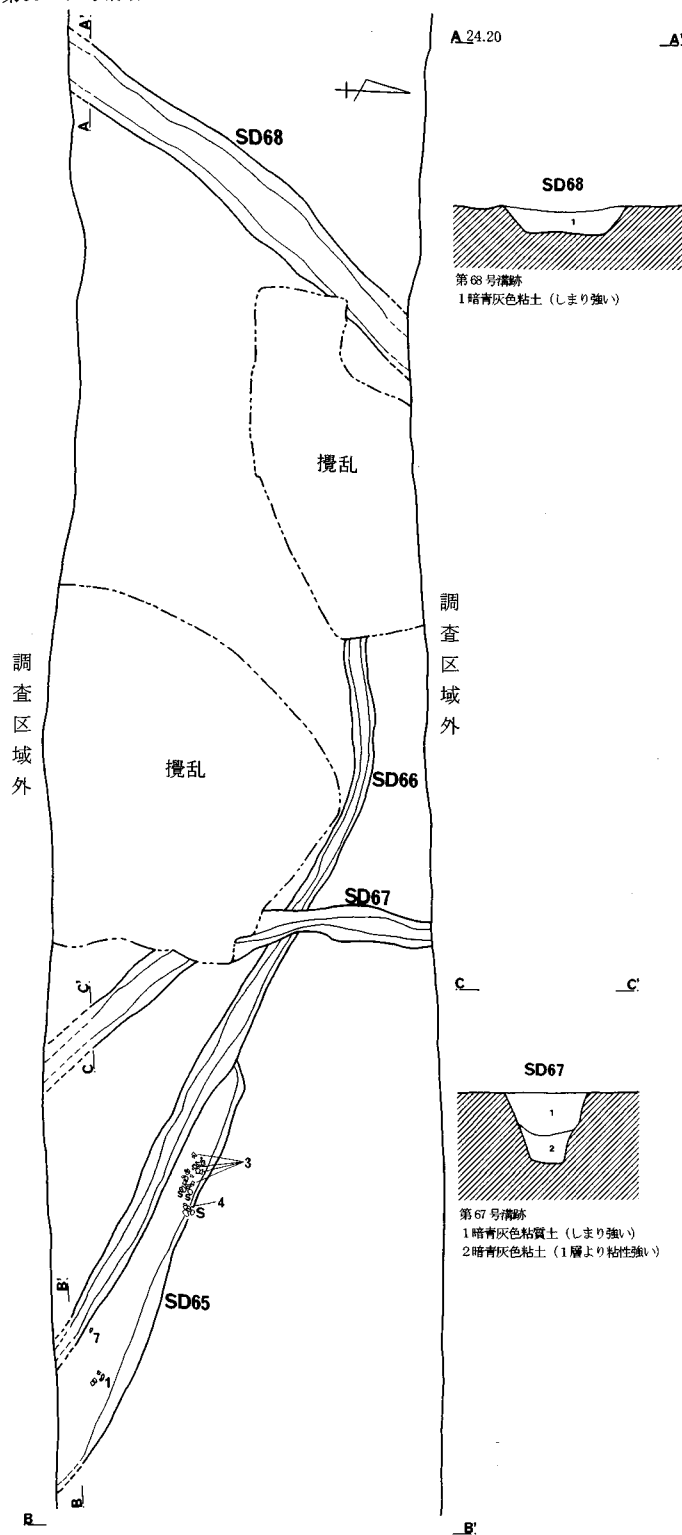
33-194・195グリッドを中心に位置する。北側の一部が攪乱を受けている。北及び南側は調査区域外となっている。

検出長7.85m、幅0.65m～1.0m、深さ24cm～28cmを測る。断面形状は、底面がやや幅広の箱葉研状を呈する。

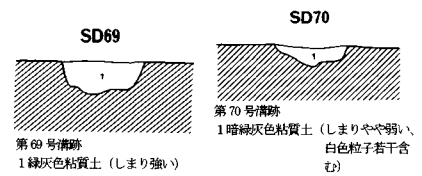
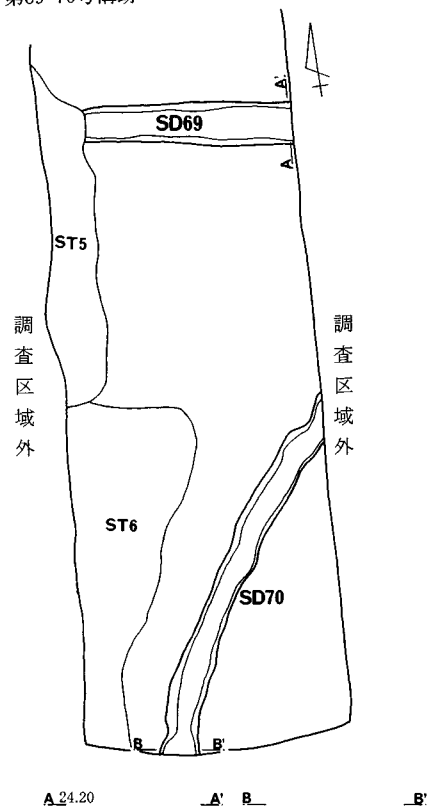
埋土は、単一層で、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、弥生土器壺、土師器坏・甕破片などが検出できたが、図示可能な遺物ではなかった。

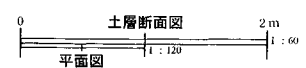
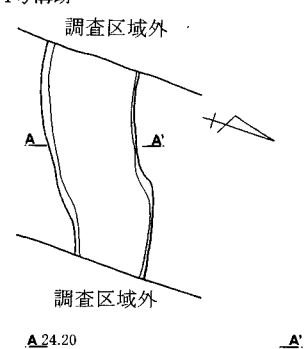
第65～68号溝跡



第69・70号溝跡



第71号溝跡



第134図 第65～71号溝跡

時期は、弥生土器が混入するが、土師器が示す古墳時代後期と考えたい。

第69号溝跡（第134図）

38・39-198グリッドに位置する。第5号竪穴状遺構と重複関係にあり、本遺構が切られている。東側は調査区域外となっている。

検出残存長3.4m、幅0.55m～0.7m、深さ28cm～37cmを測り、西に向かって傾斜していた。断面形状は、底面に起伏があり整いの悪い箱形状を呈する。

埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、土師器甕、須恵器坏破片などが検出できたが、図示可能な遺物ではなかった。

時期は、遺物の若干の混入が認められるが、第5号竪穴状遺構との切り合いを加味して古墳時代後期と考えたい。

第70号溝跡（第134図）

39-200グリッドを中心に位置する。東及び南側は調査区域外となっている。

検出長6.57m、幅0.4m～0.6m、深さ13cm～18cmを測り、南に向かって傾斜していた。断面形状は、底面にやや起伏があり整いの悪い舟形状を呈するが、本来箱形を呈する考えられる。

埋土は、単一で、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、検出できなかった。

第71号溝跡（第134図）

14・15-200グリッドに位置する。東及び西側は調査区域外となっている。

若干蛇行する溝で、検出長3.9m、幅1.2m～1.6m、深さは浅く15cmを測る。断面形状は、底面が幅広の箱形状を呈する。

出土遺物はわずかであったが、弥生土器壺・甕破片が検出できた。

第72号溝跡（第136・137図、第66表）

14・15-202グリッドを中心に位置する。東及び西側は調査区域外となっている。

検出長6.8m、幅0.55m～0.95m、深さは北で浅く5cm、南で深く18cmを測る。断面形状は、基本的には底面が幅広の箱形状を呈する。

埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、土師器坏・甕破片が検出できた。

第73号溝跡（第136図）

15・16-202・203グリッドに位置する。北及び南側は調査区域外となっている。

溝は、3条の溝に分岐した形態で、検出総延長は9.1m、幅は0.2m～0.6m、深さは浅く7cm～9cmを測る。断面形状は、底面が幅広の箱形状を呈する。

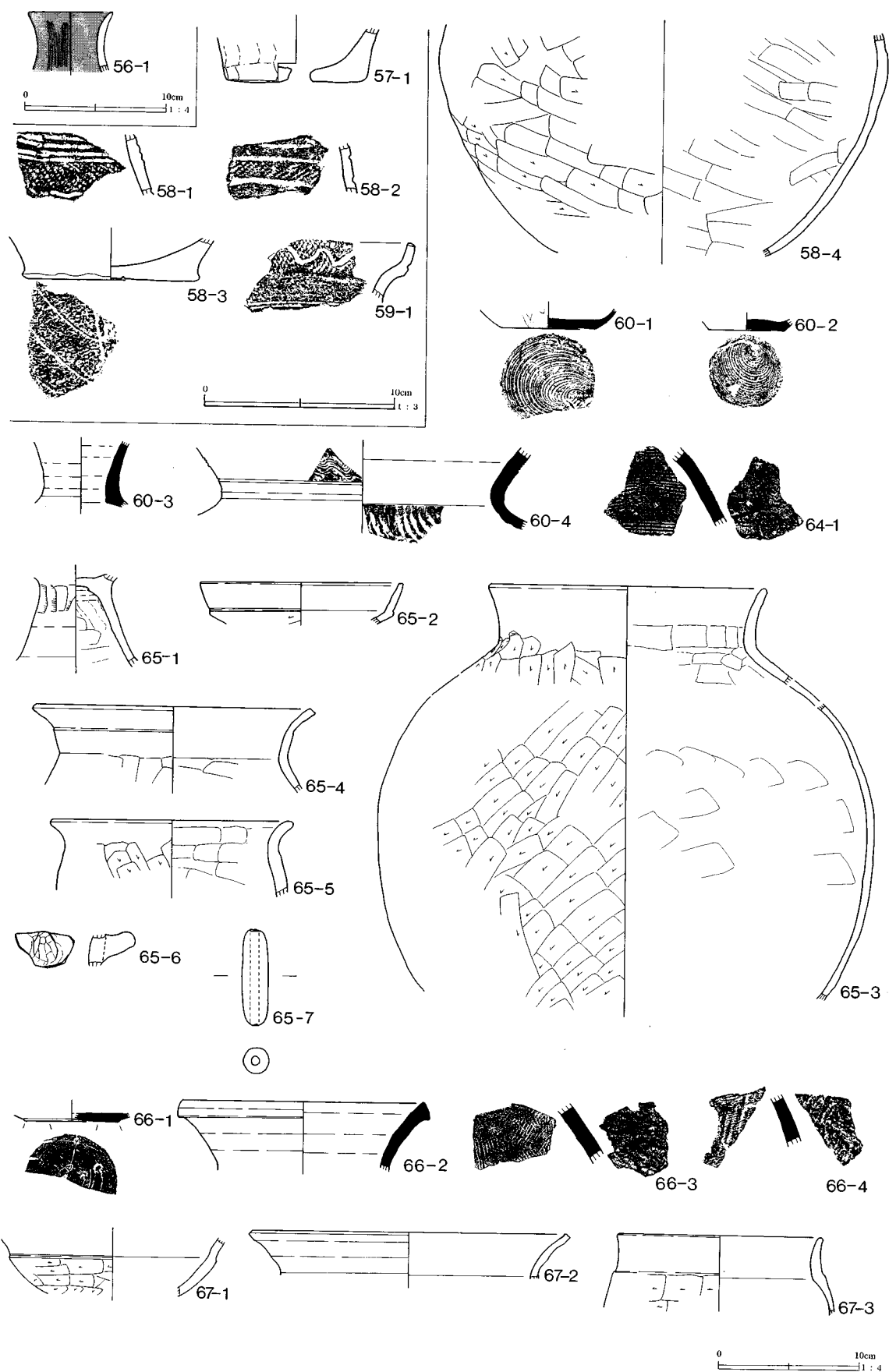
出土遺物は、検出できなかった。

第74号溝跡（第136・137図、第66表）

55・56-186・187グリッドに位置する。北及び南側は調査区域外となっている。

溝はやや蛇行して南北に走り、検出長は7.1m、幅は1.86m～2.65m、深さは68cmを測る。断面形状は、上幅が広く底面が非常に狭い葉研状を呈する。

埋土は、自然堆積と考えられる。



第135図 第56~60・64~67号溝跡出土遺物

第65表 第56～60・64～67号溝跡出土遺物観察表

番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	色 調	焼成	残存率	備 考
56-1	土師器壺	(6.0)	—	—	ABJM	にぶい黄橙色	C	10%	内外面赤彩。
57-1	弥生土器壺	—	—	7.2	—	にぶい橙色	—	底部	底部穿孔。
58-1	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	頸部	地文L R縄文。縄文施文部挟んで上平行沈線文、下波状沈線文。
58-2	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	頸部	平行沈線文間にR L縄文、無文部。
58-3	弥生土器壺	—	—	(8.8)	—	にぶい黄橙色	—	底部	木葉痕。
58-4	土師器甕	—	—	—	AEJKM	灰黄色	A	20%	外面煤付着。
59-1	弥生土器甕	—	—	—	—	黒褐色	—	口縁部	口縁部外面地文L R縄文、波状沈線文。口唇部縄文押圧。
60-1	須恵器杯	—	—	6.7	ABFGHMN	灰色	A	40%	内外面火だすき痕。南比企産。
60-2	須恵器杯	—	—	5.4	ABFHMN	灰色	A	35%	
60-3	須恵器長頸壺	—	—	—	ABH	灰白色	A	10%以下	内外面自然釉。
60-4	須恵器甕	—	—	—	ABH	灰色	A	10%以下	口縁部内面、肩部外面自然釉。内面青海波文。
64-1	須恵器瓶	—	—	—	ABH	灰色	A		胴部
65-1	土師器高杯	—	—	—	ABEM	橙色	A	15%	外面力キ目。内面青海波文。
65-2	土師器杯	(14.4)	—	—	AEN	にぶい橙色	A	10%以下	
65-3	土師器甕	(19.5)	—	—	ABDGHMN	灰黄褐色	A	30%	
65-4	土師器甕	(19.8)	—	—	ABEHM	橙色	C	10%以下	
65-5	土師器甕	(17.2)	—	—	ABHJM	暗灰黄色	B	10%以下	
65-6	土師器甕	—	—	—	ABEM	にぶい黄橙色	B	10%以下	
65-7	土 鍾	長さ6.8	幅1.8	厚さ1.8	—	灰黄色	—	完存	重さ26.7g。
66-1	須恵器杯	—	—	(6.6)	ABFHN	灰色	A	20%	南比企産。
66-2	須恵器甕	(17.2)	—	—	ABFGN	灰色	A	10%以下	南比企産。
66-3	須恵器甕	—	—	—	ABN	灰色	A	胴部	外面平行叩き目。内面あて具痕、ヨコナデ。
66-4	須恵器甕	—	—	—	ABHJN	灰色	A	胴部	外面平行叩き目。内面青海波文。
67-1	土師器杯	—	—	—	ACHK	橙色	C	10%	
67-2	土師器甕	(22.4)	—	—	AEGH	灰黄色	A	10%以下	
67-3	土師器台付甕	(14.4)	—	—	ACJK	橙色	C	10%以下	

出土遺物は、唯一磨石と考えられる石製品が検出できた。

第75号溝跡（第136・137図、第66表）

57-186グリッドから59-184グリッドに位置する。第11・13号方形周溝墓と重複関係にあり、本遺構が第13号方形周溝墓に切られている。一方、第11号方形周溝墓との新旧関係は明らかにできなかった。北側及び東側の一部は調査区域外となっている。

検出残存長14.15m、幅0.44m～0.8m、深さは50cm前後を測る。断面形状は、箱葉研状を呈する。

埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、弥生土器壺・甕破片が検出できた。

第76号溝跡（第136図）

59-187グリッドから60-186グリッドにかけて位置する。第77・78号溝跡と重複関係にあり、本遺構がそれぞれを切っている。新旧関係は、第77号溝跡、第78号溝跡、本遺構という順に新しい。北及び南側は調査区域外となっている。

検出長7.75m、幅0.73m～1.36m、深さは51cmを測る。断面形状は、箱葉研状を呈する。

埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、土師器甕破片などが検出できたが、図示可能な遺物ではなかった。

時期は、第78号溝跡との切り合いから、古墳時代後期でも7世紀後半と考えられる。

第77号溝跡（第136・137図、第66表）

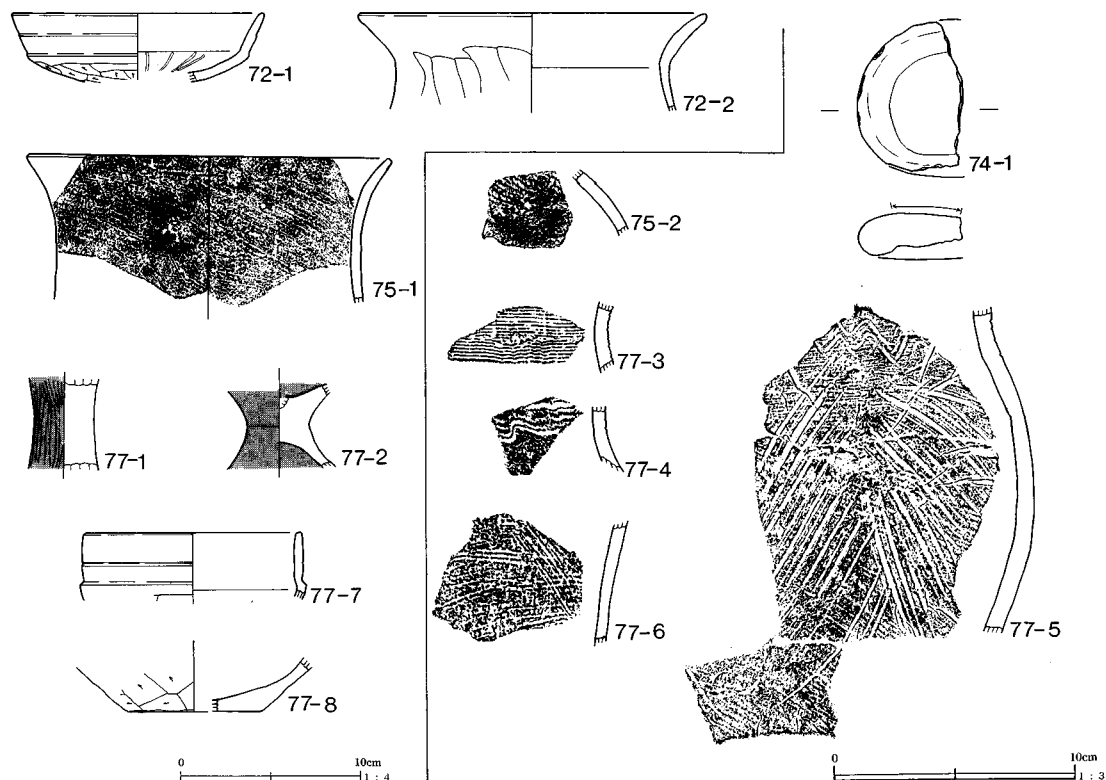
59-187グリッドから61-186グリッドにかけて位置する。第76・78号溝跡、第24号井戸跡と重複関係にあり、本遺構がそれぞれに切られている。新旧関係は、本遺構、第78号溝跡、第76号溝跡、第24号井戸跡という順に新しい。北及び南側は調査区域外となっている。

検出残存長13.25m、幅は推定0.95m前後、深さは51cmを測る。断面形状は、箱葉研状を呈する。

埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、弥生土器高坏・壺・甕、土師器坏・甕などが検出できた。弥生土器高坏は、赤彩が施してあった。また、土師器は、重複関係にある第78号溝跡からの混入遺物と考えられる。

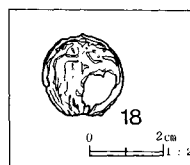
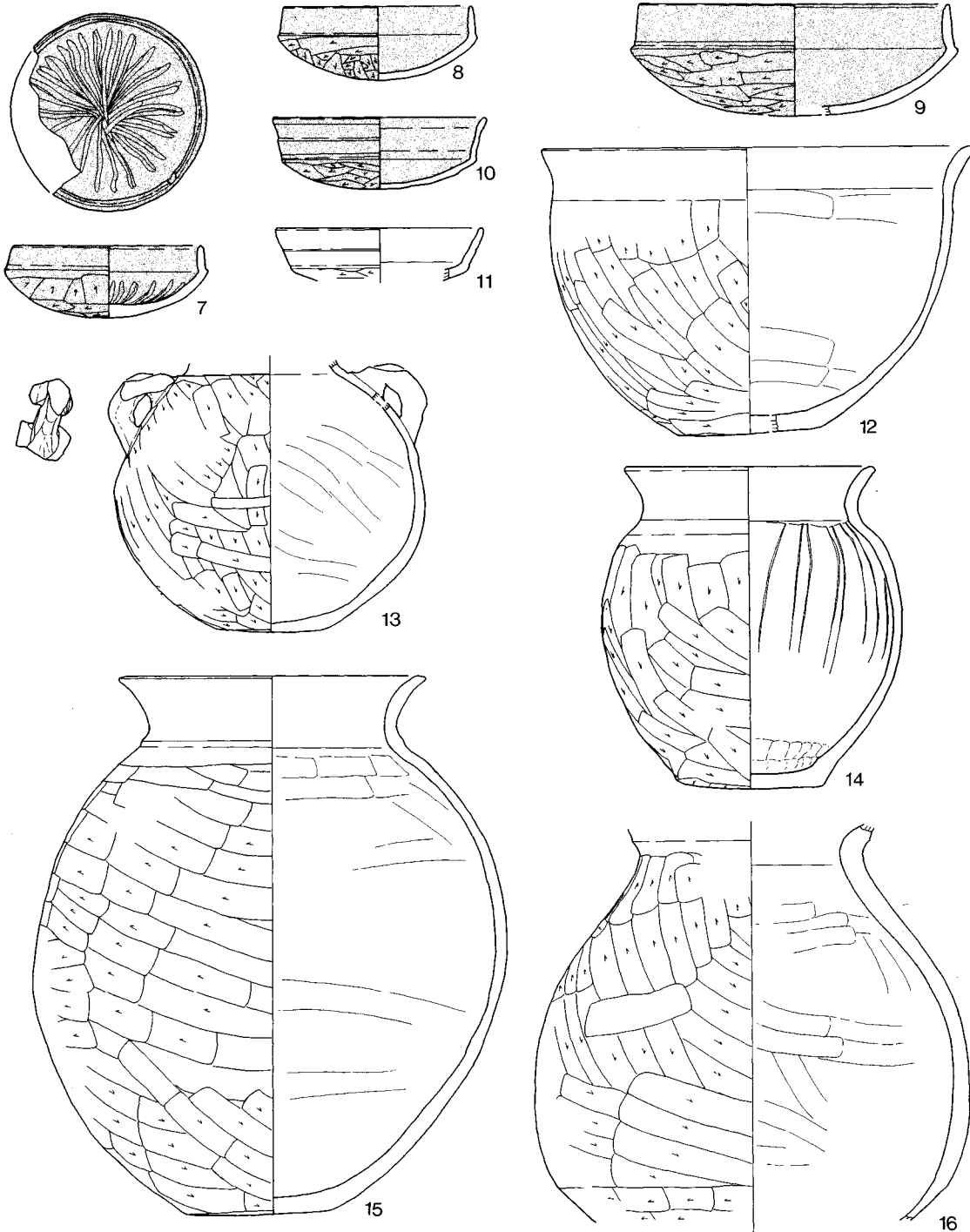
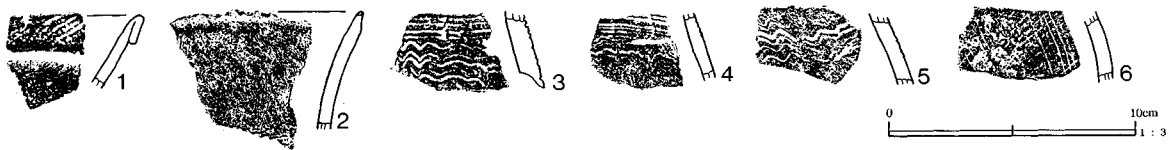
時期は、弥生土器が示す弥生時代後期と考えられる。



第137図 第72・74・75・77号溝跡出土遺物

第66表 第72・74・75・77号溝跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
72-1	土師器坏	(14.2)	—	—	AHJM	褐灰色	B	20%	内面放射状暗文。
72-2	土師器甕	(19.4)	—	—	AEGHMN	灰褐色	B	10%以下	
74-1	磨石	長さ6.1	幅4.2	厚さ1.5	—	—	—	欠損	重さ51.3g。輝石安山岩製。蔽石としての用途ももつ。
75-1	弥生土器甕	(20.0)	—	—	AGHJ	灰黄褐色	A	10%以下	内外面細目刷毛目。
75-2	弥生土器壺	—	—	—	—	黒褐色	—	胴部	無節R縄文。
77-1	弥生土器高坏	—	—	—	ADGKM	灰白色	A	10%	外面ミガキ。外面赤彩。
77-2	弥生土器高坏	—	—	—	AHIJKN	灰色	A	20%	内外面赤彩。
77-3	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい橙色	—	頸部	櫛描波状文の後櫛描簾状文。口縁部内面赤彩。
77-4	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい橙色	—	頸部	櫛描波状文。
77-5	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい褐色	—	胴部	横位及び斜位刷毛目後、櫛描波状文、条痕文。
77-6	弥生土器甕	—	—	—	—	黒褐色	—	胴部	刷毛目。
77-7	土師器坏	(12.0)	—	—	AEJ	にぶい褐色	A	10%	
77-8	土師器甕	—	—	(7.4)	ADJLMN	灰白色	A	10%以下	



第138図 第78号溝跡出土遺物

第67表 第78号溝跡出土遺物観察表

番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	色 調	焼成	残存率	備 考
1	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	口縁部	口縁部RL縄文。
2	弥生土器甕	—	—	—	—	灰黄褐色	—	口縁部	キザミ口縁。内外面刷毛目。
3	弥生土器甕	—	—	—	—	褐灰色	—	頸部	櫛描簾状文及び波状文。
4	弥生土器甕	—	—	—	—	明褐色	—	頸部	櫛描簾状文及び波状文。
5	弥生土器甕	—	—	—	—	黒褐色	—	胴部	櫛描波状文。
6	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい褐色	—	胴部	内外面刷毛目。
7	土師器坏	11.7	4.5	—	AEHJKM	にぶい橙色	C	85%	内面放射状暗文。内外面黒色処理。
8	土師器坏	11.7	4.6	—	AEHJKM	にぶい橙色	B	95%	内外面黒色処理。
9	土師器坏	(19.3)	(7.0)	—	AEHJ	灰黄褐色	B	30%	内外面黒色処理。
10	土師器坏	13.3	4.5	—	AHIJK	にぶい褐色	B	100%	内外面黒色処理。
11	土師器坏	(12.9)	—	—	AEGHJ	浅黄橙色	A	10%	
12	土師器鉢	(26.5)	18.2	(8.8)	ACHKMN	灰黄褐色	A	55%	
13	土師器壺	—	—	(6.5)	ABEHK	灰褐色	A	40%	外面煤ける。両把手かは不明。
14	土師器甕	(15.4)	20.0	9.2	AGHM	灰黄褐色	A	75%	
15	土師器甕	(18.0)	34.1	8.8	ABEGHKMN	にぶい橙色	A	65%	
16	土師器甕	—	—	—	ABEGKMN	灰黄色	A	25%	
17	土師器甕	—	—	—	ABGHLM	灰黄色	A	10%以下	
18	種子桃	長さ2.19	幅2.14	厚さ1.68	—	—	—	一部欠損	重さ2.5g。一部故意による欠損。

第78号溝跡（第136・138図、第67表）

59-187グリッドから61-185グリッドにかけて位置する。第76・77号溝跡と重複関係にあり、本遺構が第76号溝跡に切られ、第77号溝跡を切っている。北及び南側は調査区域外となっている。

検出残存長13.7m、幅は2.0m前後と推定され、深さは37cmを測る。断面形状は、やや不整形な舟形状を呈する。

埋土は、ほぼ並行に堆積しており、人為的に埋め戻された可能性が高い。

出土遺物は比較的多く、また、遺存状態が良好なものが多かった。弥生土器壺・甕破片、土師器坏・鉢・壺・甕などのほか、桃の種子が検出できた。土師器坏は大小あり、ほぼ完全な状態で上向きないしは下向きで出土した。また、ほとんどの個体が吸炭による黒色処理を施し、内面に放射状暗文を施す個体も見られた。壺は、把手が1ヶ所確認され、両耳壺の可能性が考えられる。また、外面が煤けており、この個体も吸炭による黒色処理を施している可能性が考えられた。一方、弥生土器破片は、第77号溝跡からの混入遺物と考えられる。

第79号溝跡（第139図）

52-192グリッドから53-190グリッドに位置する。東及び西側は調査区域外となっている。

検出長12.1m、幅は0.55m～0.1mと一定していない。深さは北で深く60cm、南で浅く20cmを測る。断面形状は、基本的には箱形状を呈するが、幅広の箇所は崩れた舟形に近い形状を呈する。

埋土は、単一層で、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、検出できなかった。

本遺構は、第75号溝跡の南延長上に所在し、同一の溝跡の可能性が考えられる。

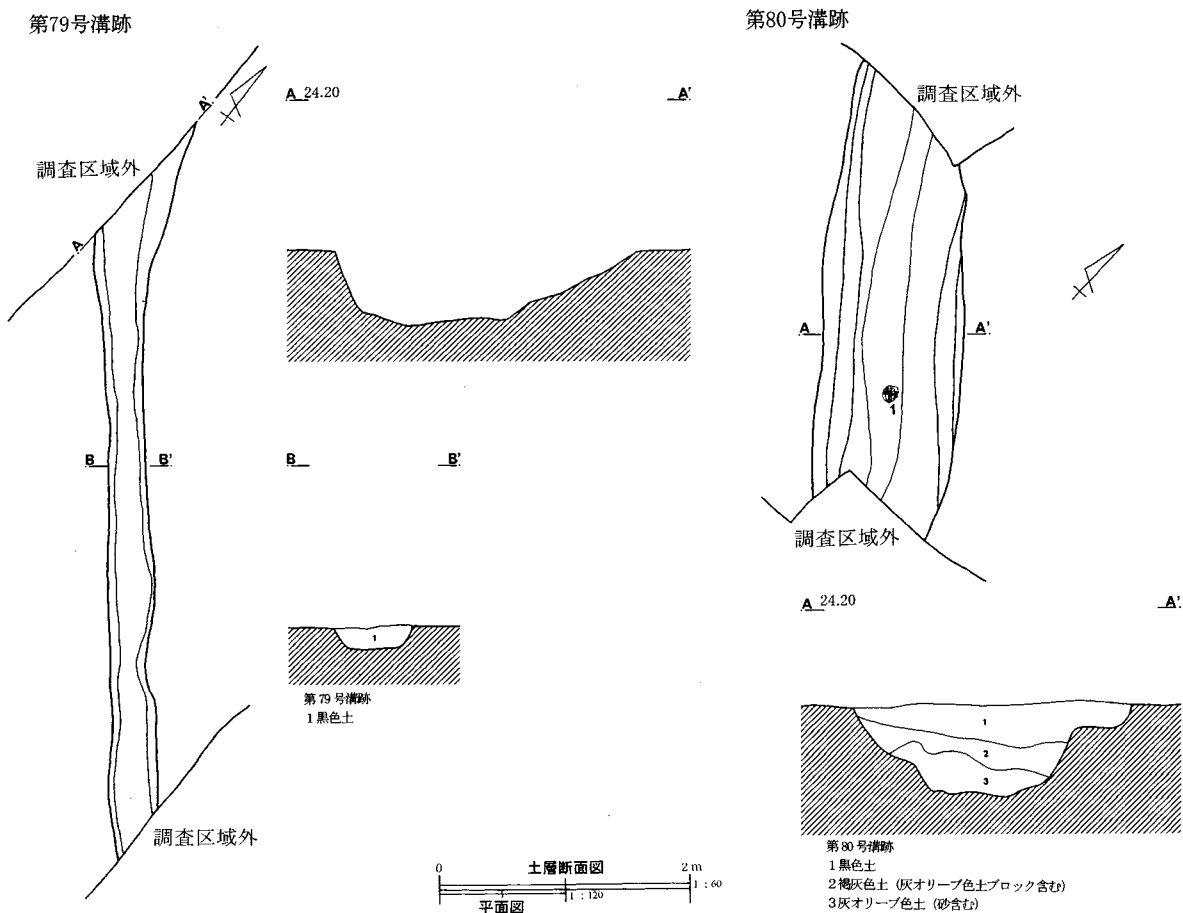
第80号溝跡（第139・140図、第68表）

67-192グリッドから68-191グリッドに位置する。北及び南側は調査区域外となっている。

検出長7.83m、幅1.9m～2.33mを測る。深さは北で56cm、南で80cmを測り南へ向かって傾斜している。断面形状は、整いの悪い箱葉研状を呈し、斜面の中間がテラス状になっている箇所がある。

埋土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、頸部より上が欠損する弥生土器壺が唯一、やや傾いていたがほぼ正位に検出された。

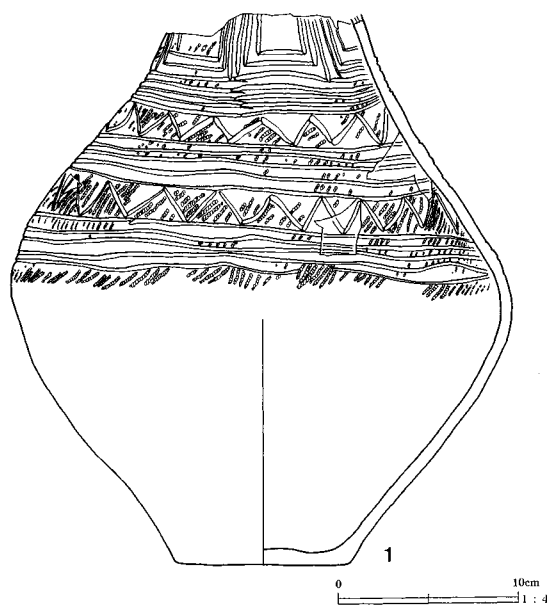


第139図 第79・80号溝跡

第68表 第80号溝跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調
1	弥生土器壺	—	—	9.0	ACHK	にぶい黄橙色

焼成	残存率	備考
C	70%	地文LR縄文。頸部から胴上半部方形区画重ね沈線文。その下4条の平行沈線文。胴中位連続山形文、5条の平行沈線文を交互に施文。胴下半部ヘラケズリ後、丁寧なヘラナデ、一部ミガキ。胴中位より下コゲ状物質付着。



第140図 第80号溝跡出土遺物

12 遺構外出土遺物

重機による表土除去の際に出土した遺物及び遺構外グリッド出土遺物を掲載する（第141～144図、第69表）。弥生時代から中世までの、土器、石器、瓦、土製品、石製品、古銭が出土した。

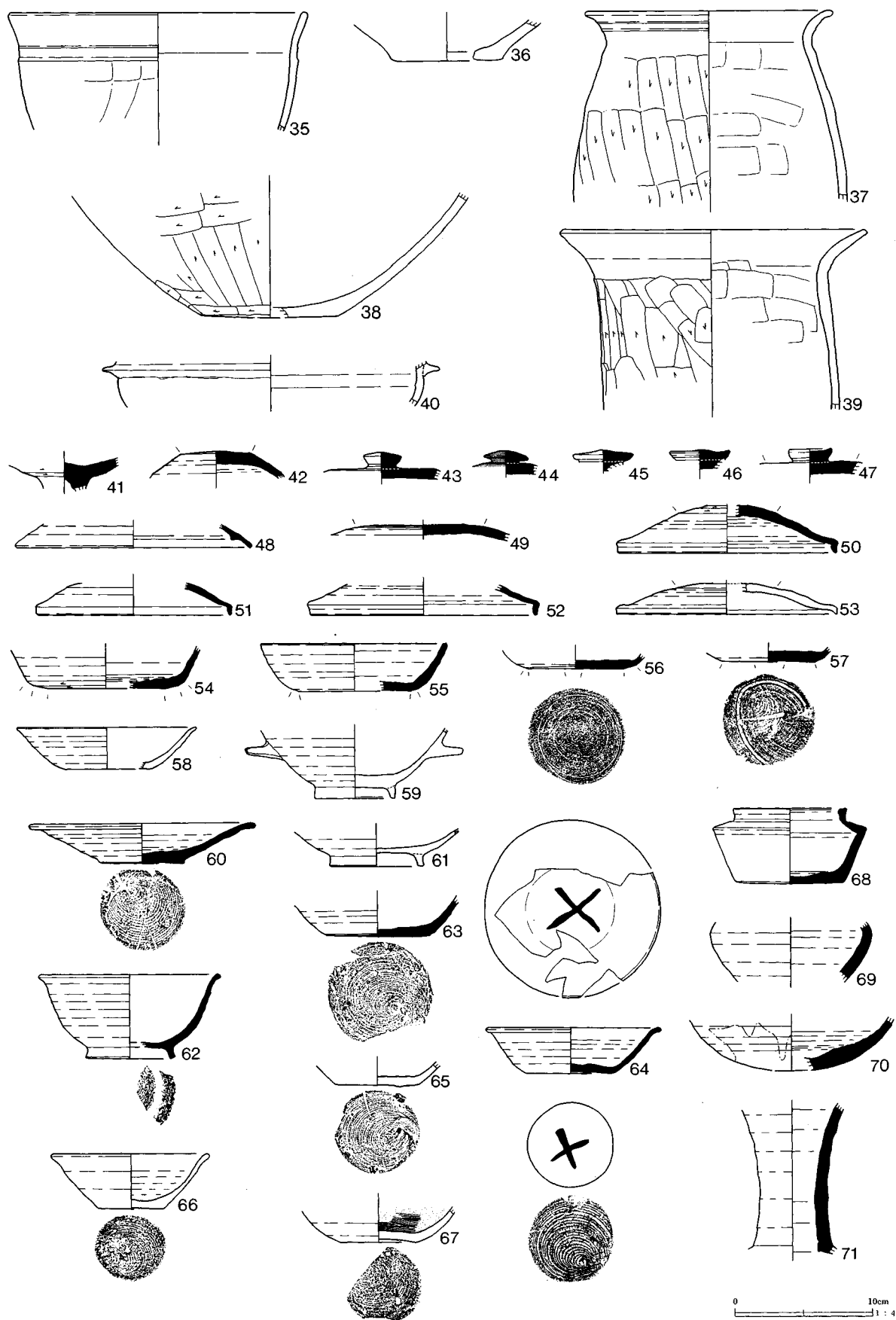
第69表 遺構外出土遺物観察表

番号	器 種	出土位置	口径	器高	底径	胎土	色 調	焼成	残存率	備 考
1	弥生土器壺	19-156	5.9	—	(4.8)	ABEGLN	にぶい橙色	A	15%	平行及び山形沈線文。
2	弥生土器壺	第6区	(25.3)	—	—	ACEJMN	にぶい橙色	C	10%	口縁部櫛描波状文。器面荒れる。
3	弥生土器甕	46-180	—	—	8.0	AEGJKN	にぶい褐色	B	35%	胴上半部刷毛目。下半部ミガキ、ヘラケズリ。
4	弥生土器甕	23-188	(19.2)	—	—	AEJM	にぶい黄橙色	A	20%	口唇部LR縄文。胴上半部縦位櫛描羽状文。内面横位ミガキ。口縁端部から内面赤彩。
5	弥生土器壺	第1区	—	—	—	—	浅黄橙色	—	胴部	方形区画及び弧状沈線文。刺突文。
6	弥生土器壺	19-162	—	—	—	—	明赤褐色	—	胴部	地文RL縄文。波状及び平行沈線文。刺突文。
7	弥生土器壺	46-179	—	—	—	—	にぶい黄褐色	—	胴部	沈線文。刺突文。
8	弥生土器壺	38-194	—	—	—	—	にぶい褐色	—	胴部	地文RL縄文。沈線文。
9	弥生土器壺	38-187	—	—	—	—	灰黄褐色	—	胴部	方形区画沈線文内RL縄文。
10	弥生土器壺	36-171	—	—	—	—	にぶい橙色	—	頸部	ヘラ描格子目文。
11	弥生土器壺	第6区	—	—	—	—	にぶい黄褐色	—	口縁部	口唇部櫛描波状文。外面刷毛目。
12	弥生土器壺	36-171	—	—	—	—	黒褐色	—	口縁部	
13	弥生土器壺	第6区	—	—	—	—	浅黄褐色	—	口縁部	
14	弥生土器壺	第7区	—	—	—	—	にぶい黄褐色	—	口縁部	口縁部上下端キザミ。
15	弥生土器壺	第7区	—	—	—	—	橙色	—	口縁部	櫛描波状文。ボタン状貼付文。
16	弥生土器甕	第6区	—	—	—	—	にぶい褐色	—	胴部	ボタン状貼付文。コの字重ね文（下方へややハの字に開く）。刷毛目の後櫛描波状文。
17	弥生土器甕	第2区	—	—	—	—	灰褐色	—	口縁部	櫛描簾状文。
18	弥生土器甕	第7区	—	—	—	—	にぶい橙色	—	口縁部	櫛描簾状文の後櫛描波状文。刷毛目。
19	弥生土器甕	46-179	—	—	—	—	黒色	—	胴部	櫛描簾状文及び波状文。刷毛目。
20	弥生土器甕	第2区	—	—	—	—	褐灰色	—	胴部	外面ミガキ。底部外面ナデ。外面赤彩。
21	弥生土器壺	39-179	—	—	6.2	—	にぶい黄褐色	—	底部	
22	弥生土器壺	第7区	—	—	6.9	—	橙色	—	底部	
23	弥生土器壺	36-171	—	—	4.5	—	にぶい橙色	—	底部	
24	弥生土器甕	第7区	—	—	7.9	—	明赤褐色	—	底部	内外面刷毛目。
25	弥生土器甕	46-180	—	—	11.9	—	浅黄褐色	—	底部	
26	土師器高坏	22-162	13.2	9.1	8.1	AELJKM	橙色	A	95%	
27	土師器坏	30-195	(12.2)	(3.5)	—	AEHJM	橙色	C	20%	
28	土師器坏	第6区	11.7	(3.8)	—	ABEHJM	橙色	C	80%	内外面黒色処理。
29	土師器坏	33-171	(12.5)	—	—	ADHJ	橙色	C	15%	
30	土師器坏	第4区	(12.9)	—	—	AHJKMN	橙色	C	15%	
31	土師器坏	第1区	(15.8)	—	—	ABEGJK	にぶい橙色	A	10%	内面放射状暗文。
32	土師器坏	22-154	(12.4)	—	—	AHJ	橙色	C	20%	
33	土師器坏	第1区	(12.9)	—	—	ABJK	にぶい橙色	A	20%	
34	土師器坏	第4区	(12.5)	(3.5)	(9.8)	ABHJM	橙色	A	30%	
35	土師器鉢	22-162	(21.3)	—	—	AGHJM	灰黄褐色	C	10%	
36	土師器壺	第2区	—	—	(8.0)	ADHIJ	浅黄褐色	B	10%以下	底部穿孔。
37	土師器甕	21-170	(17.6)	—	—	ABEJKM	橙色	A	10%	
38	土師器甕	第6区	—	—	(9.9)	ADGKMN	にぶい黄褐色	A	15%	
39	土師器甕	第6区	21.8	—	—	AEHJN	灰白色	B	30%	
40	土師器羽釜	第1区	—	—	—	ABEGHKM	にぶい橙色	B	10%以下	
41	須恵器高坏	第2区	—	—	—	AHN	青灰色	A	10%以下	
42	須恵器蓋	第4区	—	—	—	ABHN	灰白色	B	20%	
43	須恵器蓋	第3区	—	—	—	ABFN	灰色	A	10%以下	南比企産。
44	須恵器蓋	第2区	—	—	—	AGHJ	灰色	A	10%以下	外面赤彩?
45	須恵器蓋	第1区	—	—	—	ABGJN	灰色	B	10%以下	
46	須恵器蓋	第1区	—	—	—	ABGI	灰色	A	10%以下	

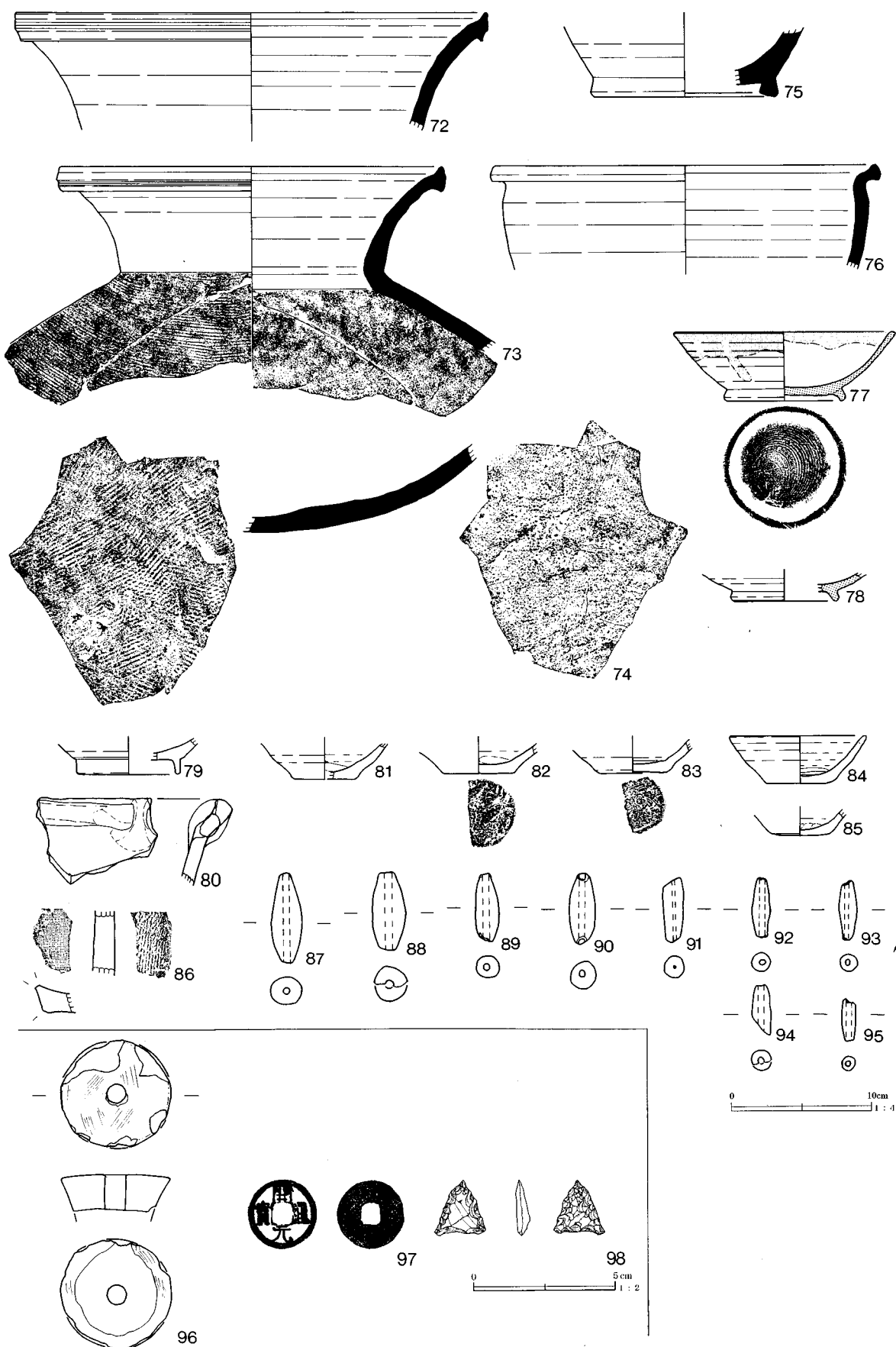
番号	器 種	出土位置	口径	器高	底径	胎土	色 調	焼成	残存率	備 考
47	須恵器蓋	27-195	—	—	—	ABFMN	灰色	A	10%以下	南比企産。
48	須恵器蓋	36-171	(17.0)	—	—	ABHJM	灰白色	B	10%以下	末野産。
49	須恵器蓋	第2区	—	—	—	ABFHN	灰色	A	20%	南比企産。
50	須恵器蓋	第4区	(15.8)	—	—	AFHN	灰白色	A	30%	南比企産。
51	須恵器蓋	19-195	(14.0)	—	—	AF	暗灰色	A	15%	南比企産。
52	須恵器蓋	第3区	(16.3)	—	—	AFN	灰色	A	10%	南比企産。
53	須恵器蓋	第1区	(16.0)	—	—	AGJKN	にぶい黄橙色	C	15%	
54	須恵器坏	30-195	—	—	(8.5)	AFGJ	灰色	A	15%	南比企産。
55	須恵器坏	第4区	(13.4)	3.4	(8.0)	ABFHN	灰色	A	25%	南比企産。
56	須恵器坏	20-195	—	—	7.0	ABFHN	灰色	A	40%	南比企産。
57	須恵器坏	第5区	—	—	6.6	ABDFHKM	灰白色	B	40%	南比企産。
58	須恵器坏	第4区	(12.9)	3.0	(6.2)	ABLMN	灰白色	C	30%	末野産。
59	須恵器双耳坏	第4区	—	—	5.8	ABEK	橙色	C	55%	
60	須恵器皿	20-165	(16.0)	2.9	6.2	ABFGN	灰色	A	30%	南比企産。
61	須恵器皿	第1区	—	—	(6.7)	ABJ	灰色	C	30%	
62	須恵器碗	22-154	(12.9)	6.0	(5.9)	ABGMN	灰色	B	25%	末野産。
63	須恵器坏	第1区	—	—	7.6	ADHLMN	灰色	A	35%	
64	須恵器坏	39-40-180-181	(12.2)	3.3	6.1	AEHN	にぶい褐色	B	60%	底部内外面墨書「×」。
65	須恵器坏	第1区	—	—	(6.0)	ABFGHN	褐色	C	40%	南比企産。
66	須恵器坏	第2区	(11.2)	4.0	4.7	AJN	明赤褐色	C	30%	内外面油煙付着。灯明皿用途か？
67	須恵系土師質土器坏	20-162	—	—	(5.6)	AEJ	にぶい褐色	C	25%	内面ミガキ、黒色処理。
68	須恵器短頸壺	第4区	(8.0)	5.5	(7.8)	ABHMN	灰色	A	40%	
69	須恵器壺	第2区	—	—	—	ABLN	灰色	A	10%以下	
70	須恵器壺	第3区	—	—	—	ABN	灰白色	A	10%	外面自然釉。
71	須恵器長頸壺	第1区	—	—	—	ABN	灰白色	A	10%	外面自然釉。
72	須恵器甕	第1区	(33.8)	—	—	ABHN	灰色	A	10%以下	
73	須恵器甕	第4区	(27.4)	—	—	ABGHN	灰白色	A	15%	外面平行叩き目。内面あて具痕。外面自然釉。
74	須恵器甕	第2区	—	—	—	AHLN	灰色	A	底部	外面平行叩き目。内面ナデ。外面自然釉。
75	須恵器甕	第1区	—	—	(13.0)	ABN	灰色	A	10%以下	
76	須恵器甕	第1区	(27.4)	—	—	ABFGN	青灰色	A	10%	南比企産。
77	灰釉陶器碗	第5区	(15.5)	5.0	8.1	AB	灰白色	A	60%	回転糸切り後高台ナデツケ。灰釉ツケガケ。東濃産？
78	灰釉陶器碗	第3区	—	—	—	ABLN	灰白色	A	10%	高台ケズリ込み。東濃産？
79	陶器碗	第1区	—	—	(7.0)	灰白色	—	—	10%	灰釉。瀬戸・美濃産？
80	瓦質土器内耳鍋	第1区	—	—	—	灰白色	—	—	10%以下	在地産。
81	土師質土器坏	第1区	—	—	(4.3)	AEJK	浅黄橙色	A	15%	底部内面ユビナデ圧痕。底部外面未調整。ロクロ成形。
82	土師質土器坏	第1区	—	—	(5.0)	AEHJ	褐色	A	25%	底部内面ユビナデ圧痕。ロクロ成形。
83	土師質土器坏	第1区	—	—	(4.7)	EJHM	浅黄橙色	B	20%	底部外面底目痕。底部内面ユビナデ圧痕。ロクロ成形。
84	土師質土器坏	第1区	—	—	(4.5)	AEJ	浅黄橙色	A	50%	底部内面ユビナデ圧痕。ロクロ成形。
85	土師質土器坏	第1区	—	—	(4.1)	AEJ	浅黄橙色	A	15%	底部内面ユビナデ圧痕。底部外面未調整。ロクロ成形。
86	平瓦	第1区	長さ1.5	—	—	ABH	灰白色	A	—	凹面布目痕(9×9本/cm)。凸面縄叩き目。
87	土鍾	32-171	長さ6.3	幅2.3	厚さ2.0	—	褐色	—	完存	重さ26.9g。
88	土鍾	第3区	長さ5.5	幅2.4	厚さ(2.6)	—	褐色	—	半欠損	重さ16.7g。
89	土鍾	39-40-180-181	長さ4.8	幅1.2	厚さ1.6	—	にぶい褐色	—	一部欠損	重さ13.3g。
90	土鍾	第3区	長さ5.0	幅1.9	厚さ1.9	—	にぶい褐色	—	完存	重さ16.4g。
91	土鍾	第3区	長さ4.5	幅1.55	厚さ1.6	—	褐色	—	一部欠損	重さ10.9g。
92	土鍾	19-195	長さ4.2	幅1.35	厚さ1.3	—	褐色	—	完存	重さ6.7g。
93	土鍾	第3区	長さ4.2	幅1.3	厚さ1.2	—	にぶい褐色	—	一部欠損	重さ6.5g。
94	土鍾	36-171	長さ3.65	幅1.4	厚さ(1.45)	—	にぶい褐色	—	欠損	重さ4.5g。
95	土鍾	第4区	長さ3.0	幅1.05	厚さ1.0	—	明赤褐色	—	一部欠損	重さ2.6g。
96	紡錘車	第1区	広面径3.9	狭面径—	厚さ1.3	—	—	—	欠損	重さ27.8g。滑石製。
97	古銭	第1区	直径2.45	—	—	—	—	—	完形	開元通寶。真書体。初鑄年唐621年。裏面摩滅。
98	石鏃	34-171	長さ1.9	幅1.8	厚さ0.4	—	—	—	完形	重さ1.2g。チャート製。
99	打製石斧	28-195	長さ12.1	幅6.0	厚さ1.6	—	—	—	完形	重さ145g。中粒砂岩製。分銅形。
100	打製石斧	第2区	長さ(13.6)	幅10.5	厚さ3.0	—	—	—	基部欠損	重さ550g。中粒砂岩製。撥形。



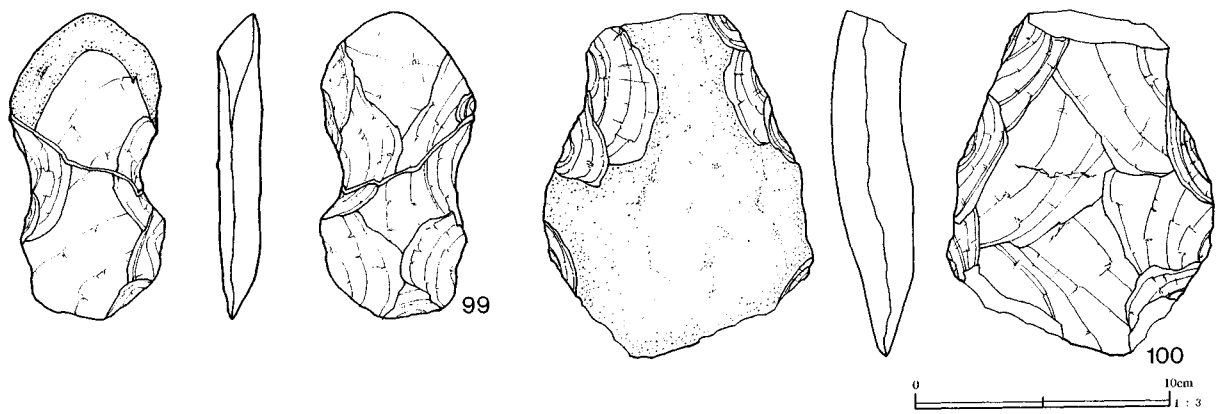
第141図 遺構外出土遺物 (1)



第142図 遺構外出土遺物（2）



第143図 遺構外出土遺物 (3)



第144図 遺構外出土遺物（4）

V 調査のまとめ

前中西遺跡についての小結その2

(1) はじめに

上之土地区画整理事業地内には、本遺跡のほか諏訪木遺跡、藤之宮遺跡の3遺跡が存在する。前中西遺跡の調査は、調査原因の違いはあるが平成14年度までに6次を数える。ちなみに、諏訪木遺跡は4次、藤之宮遺跡は1次である。

本遺跡の調査報告は、第1・2次の調査にあたる平成8・9年度調査分については平成13年度に既に報告済みであり、今回はそれに続く2回目となり、第4・5・6次調査地点の報告である（第3次は熊谷市前中西遺跡調査会調査箇所）。平成10・11・12年度に調査を実施した箇所の内、第1・2次調査地点の東で、その第1・2次調査地点と地形が連続すると考えられる箇所及びその南にやはり東西に細長く展開すると考えられるもう一つの自然堤防上の遺構の調査報告となる。今回も、主に弥生時代の集落、墓域が発見された成果である。特に、墓域としては、方形周溝墓が13基、土器棺墓が3基、今回初めて木棺墓1基が確認された。本遺跡での通算にすると、方形周溝墓16基、土器棺墓6基となり、さらに初めて木棺墓という墓制が発見され、本遺跡さらには当地域における弥生時代の墓制が徐々にではあるが明確になりつつある。しかし、区画整理事業に伴う調査という性格上、街路築造箇所部分の調査に代表される制約があり部分調査に終始してしまい、なかなかそれぞれの遺構全体を把握するに至っていないのが現状である。しかしながら、このような現状ではあるが、前中西遺跡の全貌を明らかにするという命題の解決を実現すべく調査にあたっている。

それでは今回報告の概要を述べることにしたい。

(2) 第4・5・6次調査の成果（第145図）

今回報告の第4・5・6次調査地点で検出された主な遺構は、住居跡28軒、掘立柱建物跡18棟、掘立柱列1列、方形周溝墓13基、土器棺墓3基、木棺墓1基、土坑47基、井戸跡25基、溝跡80条で、弥生時代中期後半から後期、古墳時代後期を中心にして、奈良・平安時代そして中世にまで及ぶ集落跡及び墓地跡である。

それでは最初に、本遺跡の立地する地形を見てみたい。遺跡の立地する地区は、JR熊谷駅にもそれほど遠くなく、近年市街化が進み住宅が増加傾向にあるが、まだまだ水田や畑が多く存在する地区である。こういった状況から、依然旧地形を読みとるには十分な状態で、区画整理事業に伴う試掘調査の結果や発掘調査の成果などと合わせて旧地形が推定できる。これらから、本遺跡には、大きく3つの東西に横たわる微高地である自然堤防の存在が推定できた。この微高地は、現河道及び旧河道の名残りであると推定される現況道路や現況河川などから判断できるものである。その旧河道は、遺跡の北端を東西に走る現況道路（河川①とする）、第1・2次調査地点の北を東西に流れ、河川①に接続する現況河川（河川②とする）、第1・2次調査地点の南を流れる現況河川及び本報告の第1・2区と他の区を南北に分けて東西にはしる現況道路（河川③とする）、そして、遺跡の南端をかすめるように東西に流れる現況河川（河川④とする）の4本の河川で、微高地はその河川によって分かたれるものである。河川①は、現況道路が東西の直線道路に整備され、その傍らを側溝として流れる河川に変貌しているが、下流の東

これを地形から見ると、弥生時代の住居跡は主に微高地②に散見され、1軒だけ微高地③に離れて所在する。古墳時代後期の住居跡は大半が微高地②に分布する。一方、奈良時代の住居跡は微高地③に大半が所在し、微高地②にはわずかである。そして、平安時代になると、初期から9世紀前半は引き続き奈良時代と同じ微高地③の地区に分布し、9世紀後半から10世紀初頭には再び微高地②の古墳時代後期から奈良時代に集落が営まれた地区に住居跡が展開するといった傾向が見られた。

一方、掘立柱建物跡を見てみると、こちらは、第1・2次調査地点の8世紀代を中心とした大型掘立柱建物跡で構成される状況と異なり、小規模な掘立柱建物跡が中心であった。しかし、時期が明確でできなかった建物が多い中、時期的には幅広く確認された地点であった。6世紀末から7世紀後半までの掘立柱建物跡が6棟と実に多く、第1号掘立柱建物跡の柱穴からは、赤彩が施された比企型坏が出土している。次に8世紀代のものが2棟、そして、平安時代おそらく9世紀代でも後半から末にピークがあると考えられる。また、規模を見てみると、7世紀代に大型の建物が2棟見られるが、同時期、他時期とも柱穴が小さく柱材も15cmから20cmと比較的小さな建物が大半であった。ただし、掘立柱建物跡に関しては、調査の制約もあり、建物全体を調査できたものは、わずか1棟に過ぎなかった。

これをまた、地形から見ると、古墳時代後期は住居跡とほぼ同じ状態で分布し、奈良時代まで継続されて営まれている傾向にあるが、奈良時代の住居跡が集中する地区には掘立柱建物跡は所在せず、奈良時代は同じ微高地②でもやや距離を置く位置に集中して所在する。そして、平安時代でも特に後半になると、古墳時代後期の掘立柱建物跡が所在した箇所には再びつくられるといった特徴があった。

さらに、ここで集落の構成要素でもある溝跡、井戸跡を見てみる。溝跡については、所属時期が比較的分かるものについて数を見てみると、古墳時代後期にピークをもち23条、次に平安時代（9世紀後半が最も多い）の17条、そして弥生時代中・後期の16条となる。奈良時代、中世は非常に少ない。これらを地形で見ると、弥生時代、古墳時代、及び平安時代において微高地②には多くの溝が存在し、住居跡と掘立柱建物跡の状況とほぼ符合する。また、奈良時代についても同じ状況がみられ、微高地②に展開する住居群に近い位置に溝が所在する。しかし、同時期の住居が展開しない微高地③に弥生時代や古墳時代中・後期の溝が多数所在し、特異な様相を示している。ところで、弥生時代の溝に関しては、微高地③の西には弥生時代の住居跡1軒の他に方形周溝墓群が展開しているが、これらとの関連を考慮しなければならないと考える。

ところが一方、井戸跡の分布を見てみると、ほとんどが微高地②に集中しており、時期にも偏りがあった。そのほとんどが中世に所属し、平安時代、特に9世紀代が数基で次点である。その中世の井戸跡が集中分布する箇所は、大きく2箇所に分かれ、1つは古墳時代後期から平安時代に集落が展開した地区で、もう一つは、弥生時代、古墳時代後期の住居が散見された地区に集中している。こうしてみると、中世段階には、それ以前の時期に集落が営まれていたところに引き続き集落の展開があったと推定できる。

以上が、狭い範囲での見解ではあるが、集落の様相について時期を通じて見てきたものである。おおまかな傾向が読みとれたと思う。では、次に、弥生時代中期から後期という限られた時期ではあるが、墓域としての本遺跡の状況を見ていきたいと思う。

弥生時代の墓域はいくつかのゾーンに分かれて所在する。それは、微高地②の東、第1区の中央部箇所、同じく微高地②のやや中央寄り第2区の南端の河川③に沿った箇所、そして、微高地③の中央部で

あり河川③に沿い、かつ第二のゾーンと河川③を挟んで対岸の箇所3つである。第1のゾーンには、方形周溝墓が2基所在する。さらに、弥生土器を出土する両端が閉じる溝跡がいくつか所在するので、これらが方形周溝墓と把握できれば数基増えることになる。第2ゾーンには、方形周溝墓が7基、土器棺墓が3基、木棺墓と判断した墓が1基所在する。第3ゾーンには、大型の方形周溝墓が混在し4基所在する。いずれの方形周溝墓も中期後半から後期に所属し、土器棺墓は中期末から後期に所属する。木棺墓については、管玉の検出だけで時期が明確ではないが弥生時代のほぼ同じ時期であると考えたい。再葬墓の系譜を引く墓制である土器棺墓と外来の墓制である方形周溝墓が混在する状況は、第1・2次調査地点と同じであるが、第1・2次調査地点の場合は、方形周溝墓群と土器棺墓が所在する場所が分離していたが、今回の調査地点では、どちらの墓制も同じ箇所につくられていることが相違する点である。地形的には、前述したが河川③沿いに集中して分布する。このことは、第1・2次調査地点でも言えることで、やはり河川③沿いに分布していた。なお、木棺墓については、方形周溝墓の主体部とも考えたが、周溝が確認できなかったため単独墓として把握した。

以上が、弥生時代の墓域の状況であるが、調査を重ねるたびに弥生時代の墓制の状況が明らかになってきている。ちなみに、今回報告の対象外ではあるが、もう1つの第6次調査地点が位置する微高地①でも河川①沿いと考えられる箇所で、弥生時代中期後半の集落と伴に方形周溝墓が3基確認されていることから、今後さらに状況がつかめてくると期待したい。この第6次調査地点の方形周溝墓などの内容に関しては、次年度以降の報告となるのでここでは割愛する。

このように本遺跡における弥生時代の墓制が明らかになる中で、方形周溝墓、土器棺墓の検出件数が増加しているので、ここで若干まとめておきたいと思う。

(3) 方形周溝墓 (第146図)

本遺跡における方形周溝墓の検出数は、既に19基に及ぶ。その中で、本報告を含めて成果を報告できたものは、16基を数えることからこの時点での状況を簡単にまとめておくことにする。

まず、形態的特徴は、規模の大小はあるものの四隅が切れるタイプが大半で、唯一第1・2次調査地点第3号方形周溝墓が溝の全周するタイプである。

次に、分布については、前述したとおり河川③沿いに集中し、しかもある一定の群を形成している。同じ地形と考える微高地②における状況は、本報告第1区に所在する第1グループは溝外法一辺8mから11mと推定される方形周溝墓が点在する。ただし、本報告第1号墓と第2号墓は、未調査部分を挟んで約17mの距離で近接しており、この未調査部分に数基存在していた可能性が考えられる。また、本報告第18号溝跡は遺物が検出できなかったが、7世紀後半及び9世紀後半の溝に切られ、さらに第1号墓とほぼ同じ主軸をとっていることから方形周溝墓の北溝の可能性が考えられる溝である。

次の第2グループは、本報告第2区の河川③沿いに集中分布するグループである。大小の墓が混在し、切り合いの関係にある墓も存在する。第5号墓や第6号墓はやや小さく溝外法6mから6.5m前後の規模で、その他の第3・4・7・8・9号墓は、8m前後から9.5m前後の大規模なものである。特に第7号墓は大きく溝外法9.6×9.1mを測った。大規模墓同士の切り合いもあるが、傾向として大規模なものを小規模なものが切っている傾向にあった。第4・7・8号墓と第5・6・9号墓がそれぞれほぼ同じ主軸方向を示していた。切り合いと絡めて形成された順を推定すると、第3号墓が最初で、次に第4・7・8号墓、最後に第5・6・9号墓という順になる。概ね大規模墓から小規模墓へという形成変遷を

とる。

同地形のもう一つの第4グループは、第1、第2グループよりさらに西に所在し第2グループと同じく河川③沿いに形成された群で、第1・2次調査地点第1～3号墓である。規模は、溝外法13m前後から14mのものと、17mから18mのものがある。第3号墓は溝が全周することなどから他の2基より後出するものと考えられる。本グループは、規模を見ると最大級規模の墓を含んでいるが、平均規模は報告16基中の中間の位置にあたる。

最後の第3グループは、本報告第10～13号墓が該当し、第1・2・4グループと地形を異にし微高地③に所在するが、他グループと同じく河川③沿いで、ちょうど第2グループと河川を挟んで対岸の位置にあたる。ここに所在する墓は、全グループ中で最大級の墓が所属する群であり、第10号墓や第12号墓は、推定規模が溝外法で17mから18mのかなり大きなものである。第2グループ中最大規模の墓のちょうど2倍の大きさである。ちなみに、第11・13号墓は10m前後と推定される規模である。

以上が、非常に簡単ではあるが方形周溝墓群の様相である。いずれも数基で群を構成しており、河川沿いに近い箇所には近い箇所に分布する。一方、規模を見ると西、すなわち河川の上流部に大規模なものを中心として構成された群が分布する傾向にある。

(4) 土器棺墓 (第147図)

本遺跡における土器棺墓の検出数は、総数6基を数える。全てが、1つの墓壇に1つの棺を納めており、時期は弥生時代中期末から後期に所属する。形態的にも、時期的にも再葬墓の範疇には入らないものであるため土器棺墓と考える。その分布状況は、第1・2次調査地点の3基はそれぞれある一定の距



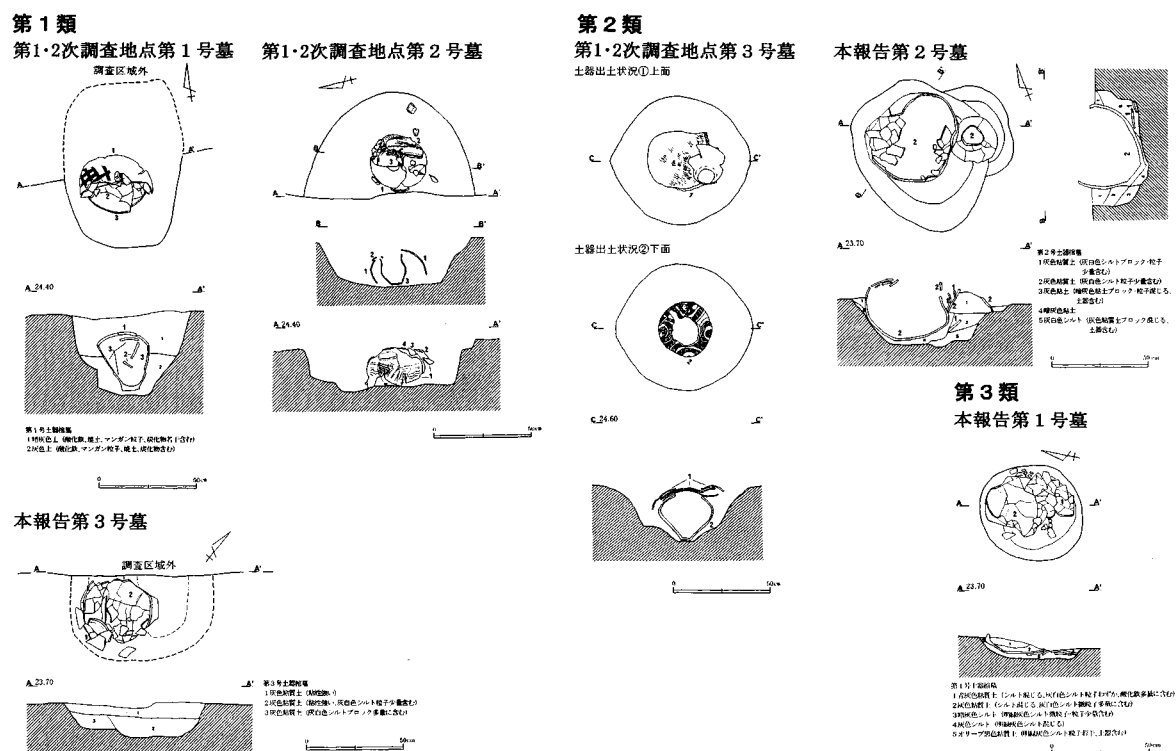
第146図 前中西遺跡方形周溝墓分布図

離をおいて分布し、さらに方形周溝墓群とも距離をおいて所在した。一方、本報告の3基はそれぞれ近接し、方形周溝墓群中に所在した点が様相を異にする。時期的には、前者の3基が後者の3基より先行すると考えられる。

それでは、それぞれの埋葬状態を順番に見ていきたいと思う。

第1・2次調査第1号墓は、表土除去の際に発見されたため詳細がやや不明ではあるが、大型の甕を棺身として墓壇内に据え、棺蓋として、別個体の壺胴中部部をおそらく倒立させて被せ、さらに同じく別個体の甕胴下半部を正位に被せていたと推定している。同調査第2号墓もやはり表土除去の際に発見され、墓壇のプランの約半分を削平してしまったが、墓壇内に棺身として小型の甕を埋設し、別個体の壺胴下半部を倒立させ棺蓋として覆っていた。同調査第3号墓は、弥生時代の住居跡の床面下に墓壇を掘り込み、頸部より上半を横截した壺を棺身として据え、棺蓋として大型の甕の胴部、底部が被せられていた。これらの土器は住居床面より下に検出されたが、棺蓋の甕は、破碎されて被せられていたのか、倒立させて被せられていたものが土圧で破碎されたかのように検出されたのかは検討の余地があると考ええる。

一方、本報告の土器棺墓については、やはり表土除去の際の掘削でかなり削平を受け、実際の埋葬状態を復元するには限界があった。第1号墓は、墓壇の掘り方が床面からわずかに10cm程しか残っておらず、土器の大部分を失っていた。棺身であるやや小型の甕を倒立させ墓壇内に据え、棺蓋として壺の胴下半部を倒立させ被せていたと推定した。第2号墓は、本報告3基の中では比較的遺存状態が良かったが、埋葬の詳細については明確に把握できなかった。検出時には斜位に検出されたが、棺身の壺を正位に墓壇内に据え、棺蓋として別個体の壺を覆い被せたと推定した。しかし、調査段階では、棺身の壺の上半



第147図 前中西遺跡土器棺墓

部がスライドし、下半部の脇に落ちており、その隙間ないしはその下で棺蓋の壺破片を検出したので、実際どのような埋葬状態だったかは不明確な状態である。第3号墓は、土層断面観察からほとんどを推定したため非常に不明確な状態である。また、棺身の壺は完全に横たわって検出されたため墓壇内に斜位に据えたのか、正位に据えたのか不明である。棺蓋と推定した別個体の壺も倒立して被せられていたと推定したに過ぎない。結果的にいずれも非常に曖昧な状態になってしまった。

それぞれの埋葬形式をまとめてみると、推定した土器棺墓の埋葬状態も含めての分類であるが、2形式ないし3形式に分類される。第1類は、正位の棺身（上半が横截されている場合を含む）に、蓋として別個体の倒立した土器を覆う例である。第2類は、第1類に似た形態であるが、正位の棺身に、蓋として別個体の土器の胴部破片を被覆する例である。第3類は、横截された胴上半部を倒立伏位に置いて棺身として、別個体の横截された土器の胴下半部を倒立させ覆う例である。第1類が最も多く、第1・2次調査地点第1号墓、同第2号墓、同第3号墓、本報告第3号墓の4例が該当する。（ただし、第1・2次調査地点第3号墓は第2類の可能性ももつ。）第2類には、第1・2次調査地点第3号墓が検出状態と同じ形態ならば該当し、さらに本報告第2号墓が該当する。第3類には、本報告の第1号墓の1例が該当する。6基という少ない例ではあるが、第1類が最も多いという事実は、近畿から関東地方における他の例の土器棺墓形式もこの形式が他を圧倒しているという事実とも合致していることになる。

次に、器種構成についてだが、壺と甕の組合せ構成を本遺跡例において見てみる。棺蓋+棺身の順で記述すると、壺+甕が3例、甕+壺1例、壺+壺が2例となり、棺身が壺、甕如何に関わらず棺蓋は壺の場合が多い結果となった。また、棺身・棺蓋に使用される器種は、大小はあるものの壺が圧倒的に多いという結果になった。さて、棺身についてだが、中に遺骸を納める関係で、横截しているしていないに関わらず口径が問題となると思われる。本遺跡例では、第1・2次調査地点第1号墓甕が頸部の内径で最大値22.5cm、第1・2次調査地点第2号墓甕が頸部内径で最小9cm弱を測った。この最小例の甕は、器高も小さく内側で約14.5cmを測るに過ぎないものであった。ちなみに棺身内側の最大高を測る本報告第2号墓は54cm程であった。ただし、この棺身は頸部内径が小さく11cmしかないものである。一般的に土器棺は、埋葬時の棺身の口径規模から被葬者を、胎児を始め、乳児、幼児まで想定しているが、この口径値から、やはり小さなものについては、不幸にして死産した胎児、早産にて早くに死亡した嬰兒、大きなものについては、不慮の事故などで死亡した乳児、幼児が想定できると考える。

以上が、本遺跡における弥生時代の墓制について概観をまとめたものであるが、今回初めての例として確認された木棺墓については報文中の事実報告に止め、ここでは言及を避けたいと思う。

以上、本報告を含めて過去に実施された調査及び今回の報告にあたって特筆すべき点を取り上げたものである。今後、本報告以降の調査地点の報告がまとまるにしたがい前中西遺跡の性格がより明らかになることを期待してまとめに代えたいと思う。

なお、引用・参考文献について、紙面の都合もあり割愛した。

写真図版

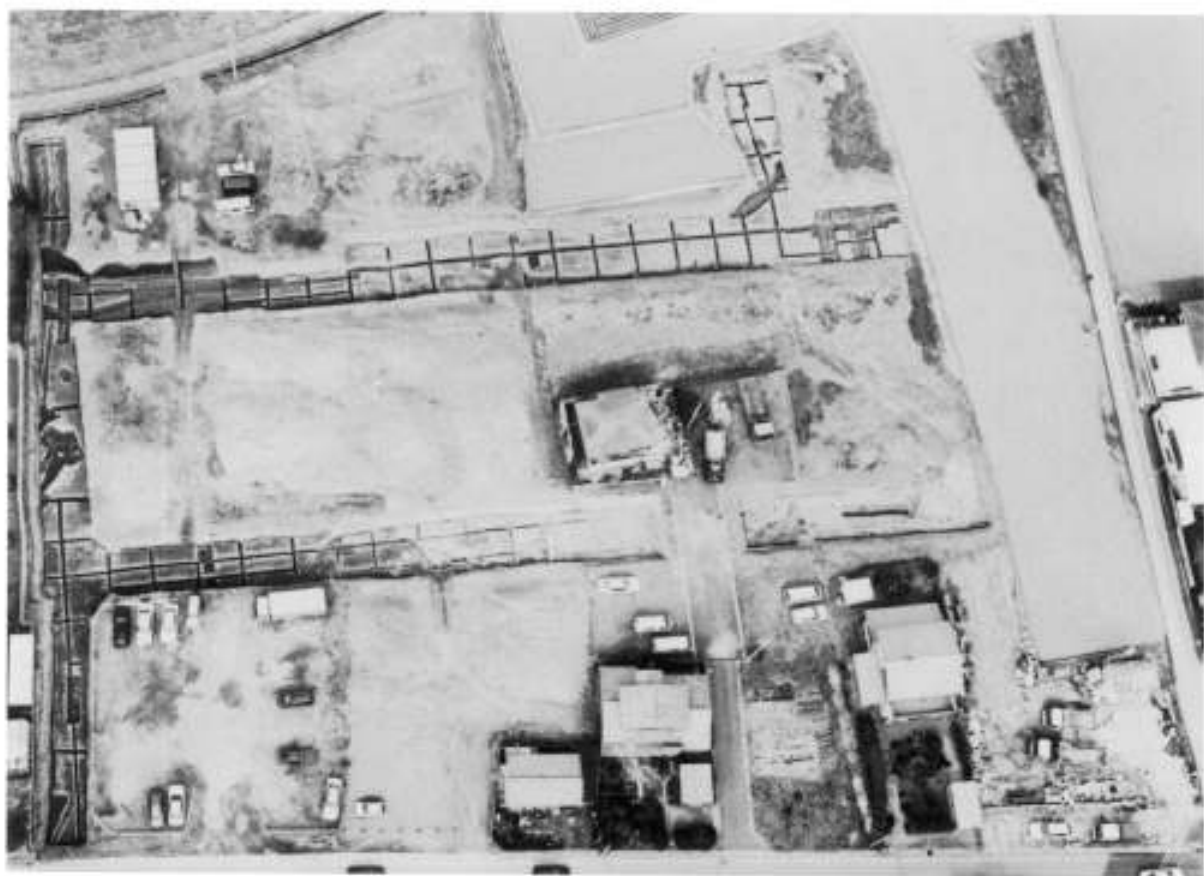


前中西遺跡全景 [第1区] (右が北)

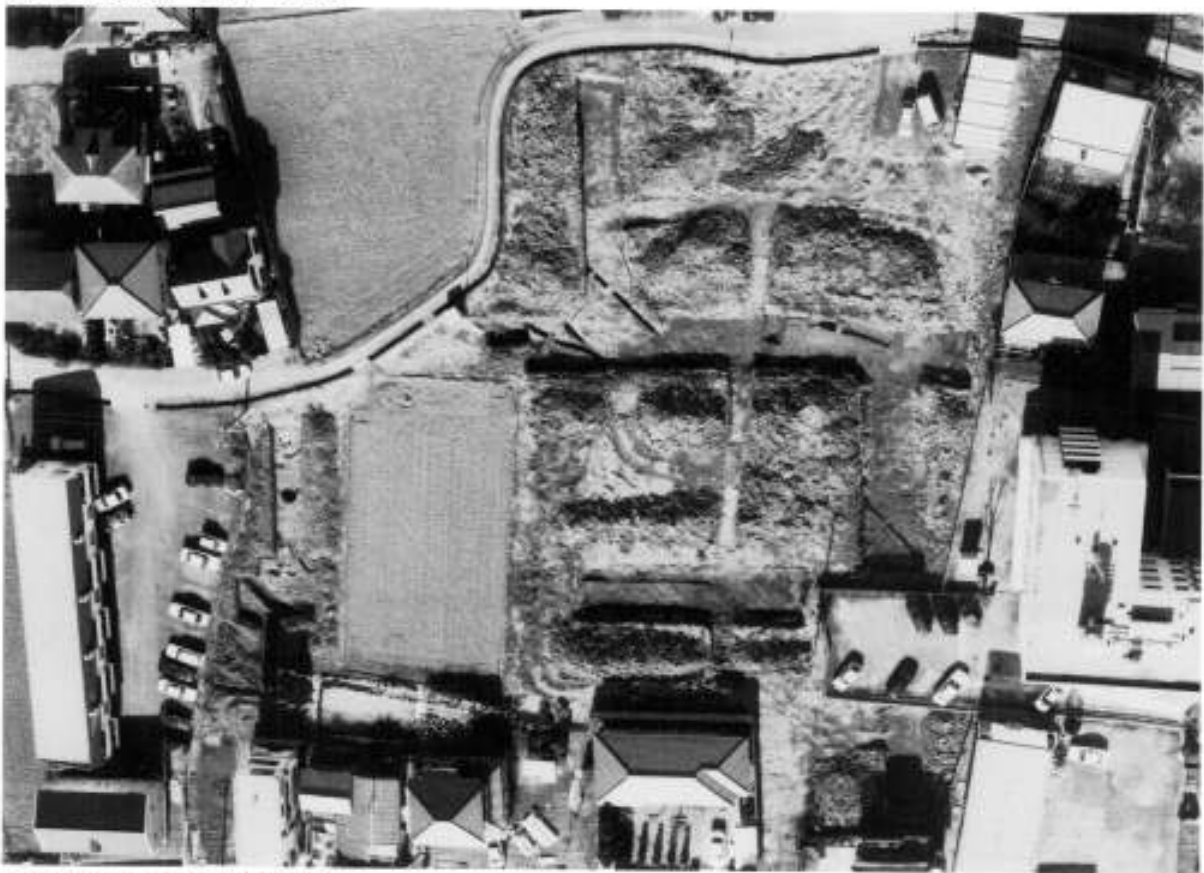


前中西遺跡全景 [第2区]

図版 2



前中西遺跡全景〔第3～5区〕



前中西遺跡全景〔第6～8区〕



第3号住居跡



第4号住居跡



第5号住居跡、第47号溝跡 (奥)



第6号住居跡



第7号住居跡、第4号土坑 (手前)



第9号住居跡



第9号住居跡カマド土師器出土状況



第10号住居跡

図版 4



第11号住居跡、第13号井戸跡（奥）



第12号住居跡



第13号住居跡、第3号溝跡（左）



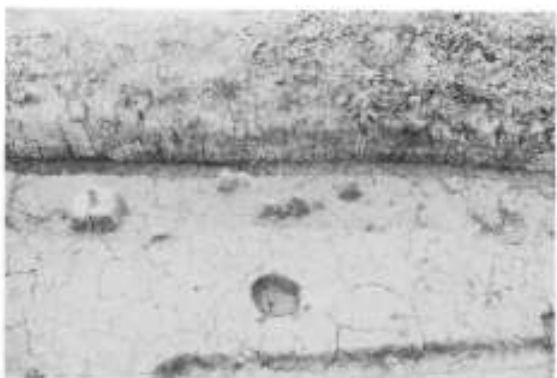
第14号住居跡、第12号土坑（奥）



第15号住居跡



第16号住居跡



第17号住居跡



第18号住居跡



第19・24号住居跡(手前)、第18・22号住居跡(奥)



第22号住居跡



第22号住居跡須恵器出土状況



第22号住居跡石製紡錘車出土状況



第23号住居跡



第24号住居跡



第24号住居跡ピット1須恵器出土状況



第24号住居跡土師器出土状況



第26号住居跡カマド土師器出土状況



第27号住居跡



第2号掘立柱建物跡



第3号掘立柱建物跡、第1号方形周溝墓南溝(右)、
第18~20号溝跡(左)



第5号掘立柱建物跡、第1号土坑(中央)



第6・11号掘立柱建物跡



第7号掘立柱建物跡



第12号掘立柱建物跡、第28号住居跡(左)、第13号土坑(奥)



第16号掘立柱建物跡(左)、第1号掘立柱列(中央)、
第21号井戸跡(右)



第1～3号竪穴状遺構



第4号竪穴状遺構



第6号竪穴状遺構、第70号溝跡(手前)



第1号方形周溝墓南溝弥生土器出土状況



第2号方形周溝墓東溝弥生土器出土状況



第2号方形周溝墓東溝

図版 8



第5号方形周溝墓、第18号掘立柱建物跡（手前）、
第3・4号方形周溝墓（奥）



第6号方形周溝墓



第7号方形周溝墓、第50号溝跡（奥）



第7号方形周溝墓南溝弥生土器出土状況



第8号方形周溝墓、第33・34号土坑



第9号方形周溝墓



第9号方形周溝墓北溝弥生土器出土状況



第9号方形周溝墓東溝弥生土器出土状況



第10号方形周溝墓



第11号方形周溝墓



第11号方形周溝墓北溝弥生土器出土状况



第11号方形周溝墓南溝弥生土器出土状况



第12号方形周溝墓東溝打製石斧出土状况



第12号方形周溝墓南溝

图版10



第1号土器棺墓



第1号土器棺墓弥生土器出土状况



第2号土器棺墓



第2号土器棺墓弥生土器出土状况(1)



第2号土器棺墓弥生土器出土状况(2)



第3号土器棺墓弥生土器出土状况



第1号木棺墓



第2号土坑



第14号土坑、第70号ビット



第16号土坑 (中央)



第19号土坑 (手前)、第20号土坑 (奥)



第21号土坑



第21号土坑弥生土器出土状況



第25号土坑



第26号土坑



第36号土坑

图版12



第40号土坑



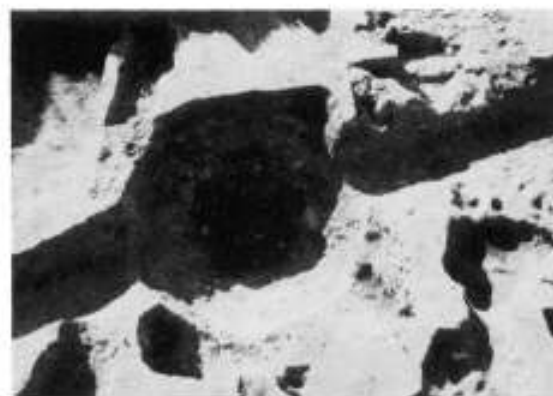
第43号土坑



第42号土坑



第1号井戸跡



第3号井戸跡



第4号井戸跡、第16号溝跡（右）



第6号井戸跡



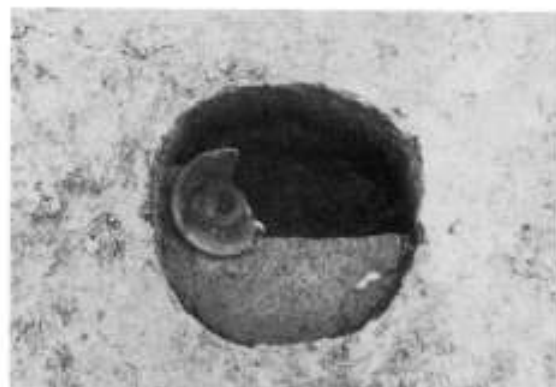
第11号井戸跡



第12号井戸跡



第18号井戸跡



第19号井戸跡瓦質土器出土状況



第21号井戸跡



第22号井戸跡



第23号井戸跡（底面曲物井戸杵）



第25号井戸跡

図版14



第8号溝跡(右)、第9号溝跡(左)



第10号溝跡



第11号溝跡(手前)、第12号溝跡(手前から奥)



第14号溝跡(中央)、第13号溝跡(左)、第15号溝跡(右)



第15号溝跡(中央に第4号井戸跡)、第6号井戸跡(埋戻後、手前)



第17号溝跡(手前)、第18号溝跡(手前から奥)



第22号溝跡(中央)、第21号溝跡(左)、
第26号住居跡、第17・18号土坑(中央左)



第23～28号溝跡



第27号沟迹



第30号沟迹



第31号沟迹



第31号沟迹弥生土器出土状况



第32号沟迹



第32号沟迹弥生土器出土状况



第33号沟迹 (中央)



第34・35号沟迹



第37号沟跡



第43号沟跡、第44号沟跡（奥）



第44号沟跡水溜伏遺構



第45号沟跡弥生土器出土状況



第40号沟跡



第45号沟跡



第48号沟跡



第49号溝跡



第51号溝跡



第51号溝跡木製品出土状況



第52号溝跡



第53号溝跡



第54号溝跡（中央）



第55号溝跡



第62号溝跡、第40号土坑（手前）



第57号溝跡（中央）、第58号溝跡（右）、第59号溝跡（左）



第60号溝跡



第65号溝跡（中央右）、第66号溝跡（中央左）、第67号溝跡（左）



第65号溝跡土師器出土状況



第76号溝跡（手前）、第77号溝跡（中央）、第78号溝跡（奥）



第78号溝跡土師器出土状況



第75号溝跡、第13号方形周溝墓北溝（手前）



第79号溝跡



第80号溝跡



第80号溝跡弥生土器出土状況



図版20



第125図49-1



第106図13-1



第106図13-2



第128図 2



第126図 1



第 8 図 1



第83図 1



第59図 3



第58図 1



第59図 1



第59図 2



第66図 6



第66図 8



第70図 1



第73図 2



第74図 1



第74図 2



第75図 2



第82図21-1



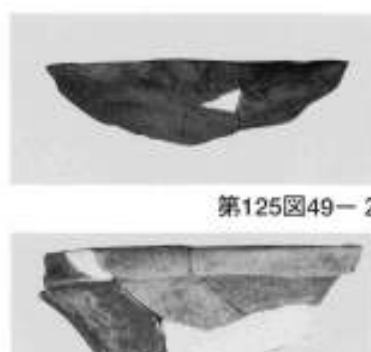
第106図13-4



第111図 9-2



第123図45-1



第125図49-2



第141図 2



第126図 2



第140図 1



第141図 1

図版22



第66図 9



第70図 4



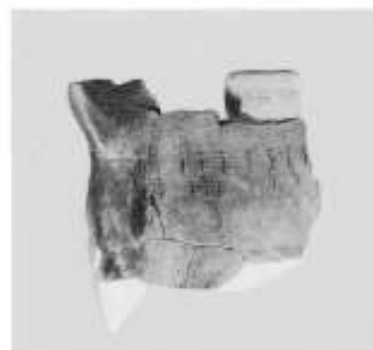
第73図 1



第106図13- 9



第112図 5



第112図 6



第112図 7



第112図10



第118図32- 2



第122図 2



第126図 3



第141図 3



第141图4



第113图12-1



第138图7



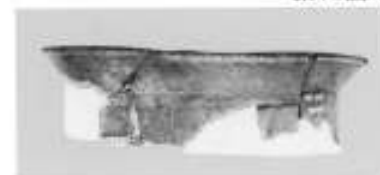
第13图3



第52图11-1



第15图1



第15图2



第141图26



第138图9



第138图10



第128图37



第138图12



第13图5



第52图1-2



第138图8



第141图27



第116图14-1



第33图4



第142图39



第13图6

图版24



第13图 4



第138图14



第138图15



第33图10



第15图 3



第138图13



第130图54-1



第120图36-2



第113图12-13



第142图68



第23图 1



第24图 1



第24图 2



第28图 1



第113图11-1



第22图 1



第22图 3



第28图 4



第30图 9



第30图 10



第30图 18



第30图 19



第107图 13—30



第128图 39



第130图 52—20



第142图 66



第33图 6



第57图 1



第142图 64



第34图 3



第34图 4



第116图 17—1



第142图 60



第113图 12—12



第120图 35—5



第142图 59

図版26



第142図71



第107図13-35



第143図73



第33図9



第143図77



第104図6-9



第104図7-8



第143図84



第113図11-10



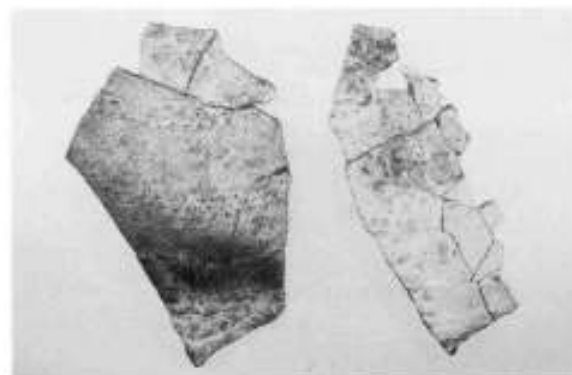
第107図19-4



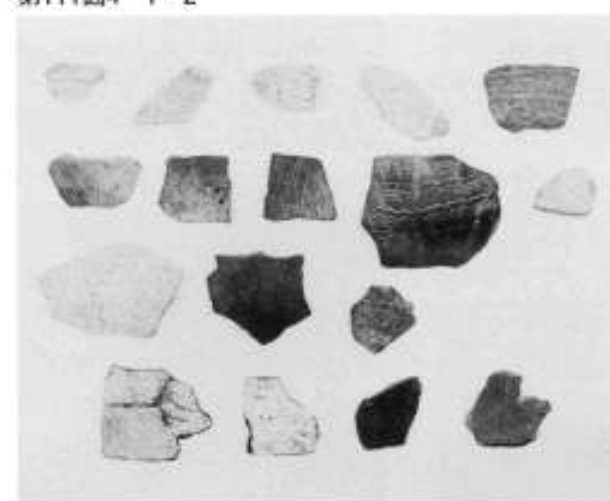
第107図19-5



第111図4-1・2



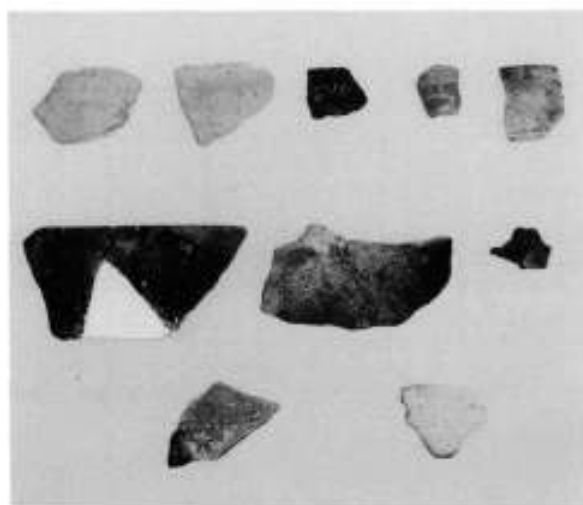
第83図2・3



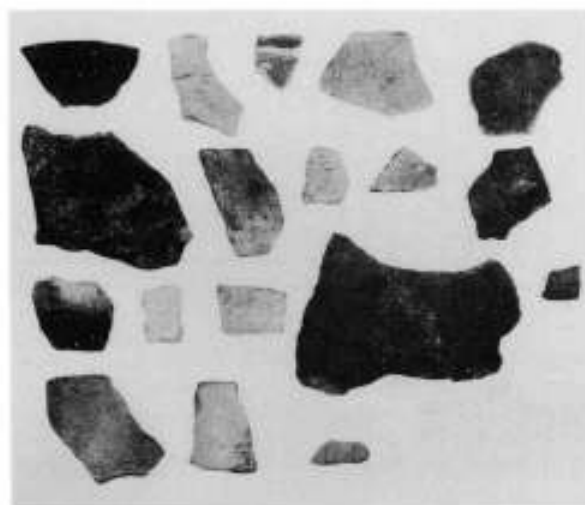
第7図1~5、第8図2~4、第9図1~3、第10図2・3
第11図1~4



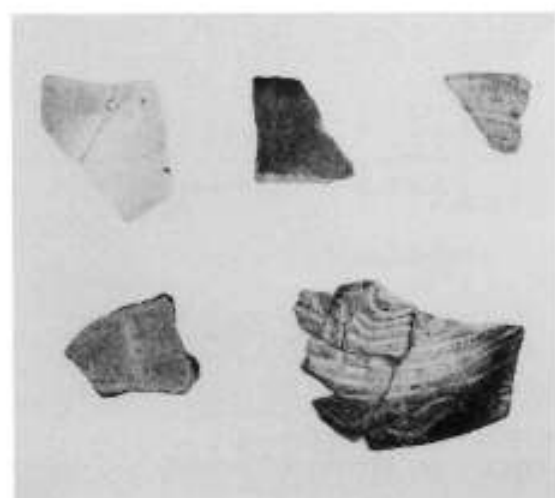
第83図4~6



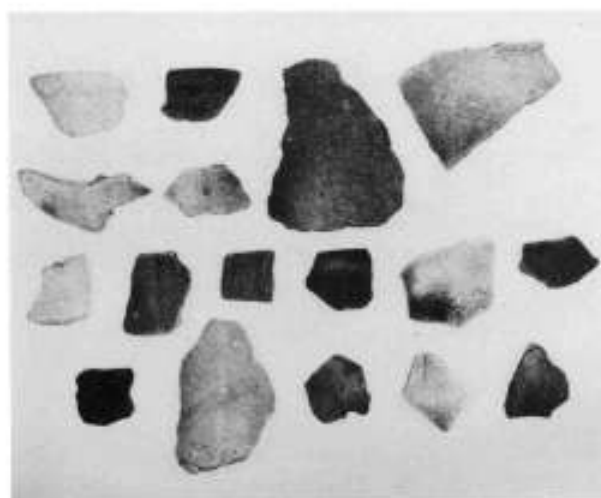
第60図 3-1~3、4-1、5-1
第61図 1~5



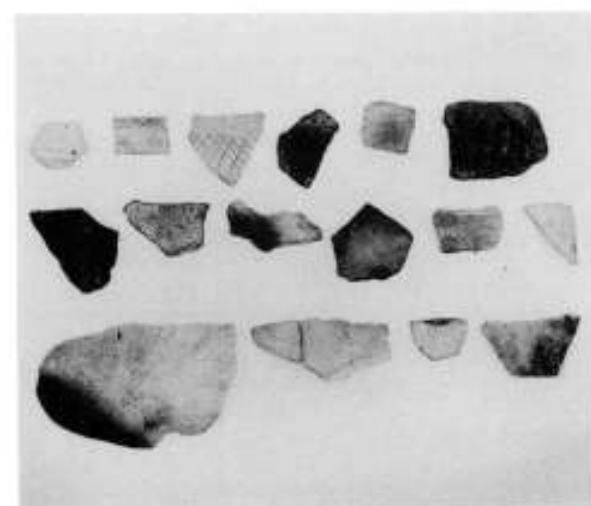
第63図 3~5・7~21



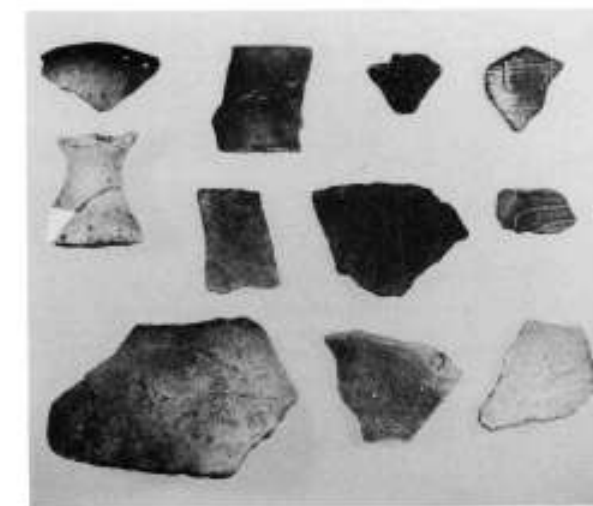
第64図 1~5



第66図 7
第67図 10~25

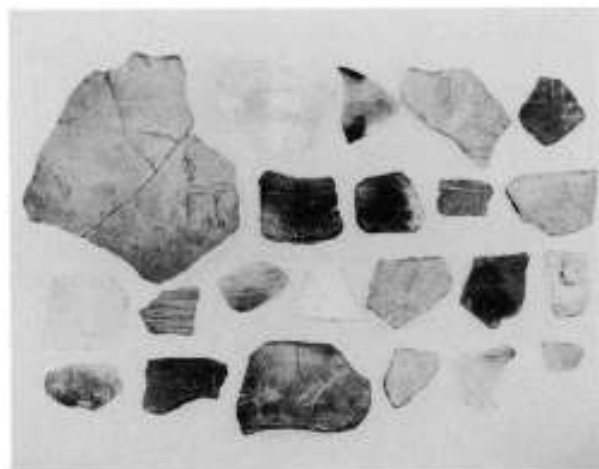


第69図 1~11・15
第70図 2、第71図 1~3

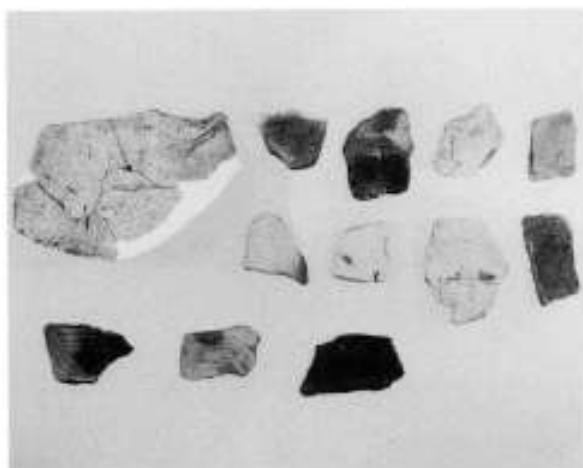


第122図 1・3~11

図版28



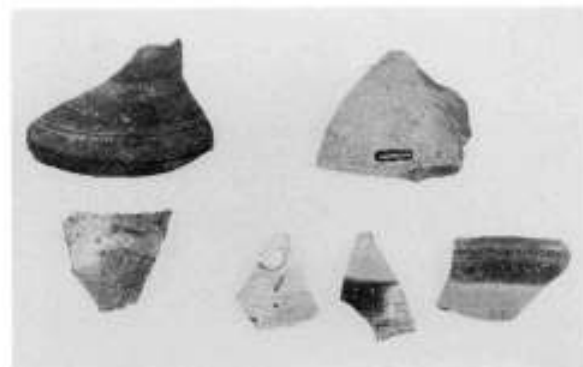
第128図 3～24



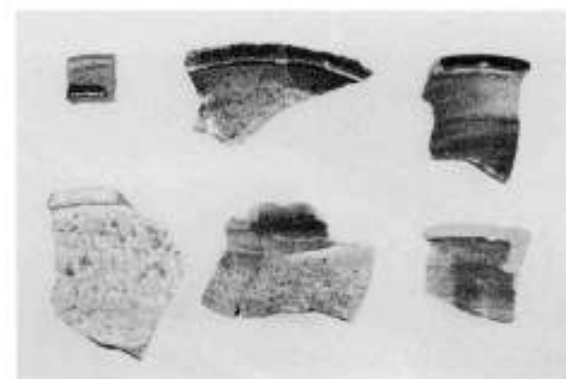
第130図 52-1・3～10
第135図 58-1・2、59-1



第137図 75-1・2、77-3～6
第138図 1～6



第113図 10-3、第116図 22-6
第128図 33・34、第129図 56



第120図 36-3、40-4、第123図 44-5
第125図 48-3、第129図 49、第135図 66-2



第143図 72・74～76



第102図1-16、3-4・5、4-13
第104図6-10、7-10~14
第106図12-7、第109図20-3、21-2



第143図81~83・85



第20図7、第23図9、第24図21、第28図8、第31図29、第33図14、第118図27-8、第120図40-7、第135図65-7（1列目）第143図87~95（2列目）



第116図15-5



第143図86（凹）



（凸）



第76図1~6



第113図12-17



第67図26



第100図149-1



第113図11-11



第17図17、第28図9（広端面）
第143図96、第31図31



（狭端面）

图版30



第31图30、第34图9



第143图98



第102图3-6(表) (裏)



第71图4、第122图18·19、第125图49-11
第126图12、第144图99·100



第107图19-6



第129图59·60



第129图57



第129图58



第113图11-12、第143图97



第125图48-4



第102图3-7、4-14、第107图18-6、
第109图23-2、第125图48-5、
第129图61~64、第138图18、第69图16

報 告 書 抄 録

ふりがな		まえなかにしいせきさん							
書名		前中西遺跡Ⅲ							
副書名		熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書Ⅱ							
シリーズ名		平成14年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書							
編著者名		吉野 健							
編集機関		埼玉県熊谷市教育委員会							
所在地		〒360-8601 埼玉県熊谷市宮町二丁目47番地 1 TEL048-524-1111							
発行年月日		西暦2003（平成15）年 3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地		コード 市町村 遺跡番号		北緯 (° ' ")	東経 (° ' ")	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
まえなかにしいせき 前中西遺跡	さいたまけんくまがやしおおあざかみの 埼玉県熊谷市大字上之 2656番地 1 他		11202	107	36° 8' 39"	139° 24' 24"	19981001~ 19990331 19991001~ 20000218 20000918~ 20010330	5,241.17	土地区画 整理事業 街路工事
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構			主な遺物		特記事項	
前中西遺跡	集落跡 墓地跡	縄文時代 弥生時代 古墳時代 奈良時代 平安時代 中 世	住居跡6 方形周溝墓13 土器棺墓 3 木棺墓 1 土坑 4 溝跡16 住居跡 7 掘立柱建物跡 6 土坑 5 井戸跡 2 溝跡27 住居跡 6 掘立柱建物跡 2 土坑 4 井戸跡 1 溝跡 3 住居跡 8 掘立柱建物跡 7 土坑 8 井戸跡 5 溝跡17 土坑 4 井戸跡11 溝跡 3			土器 土器 石器 木器 管玉 石剣 砥石 土師器 須恵器 紡錘車 勾玉 土師器 須恵器 土製品 土師器 須恵器 灰釉 陶器 瓦 土製品 紡錘車 砥石 馬歯 陶磁器 瓦質土器 土師質土器 木器 古銭		方形周溝墓、土器 棺墓、木棺墓の 3 種類の墓制が検出 された。	

平成14年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書
－熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書Ⅱ－

前中西遺跡Ⅲ

平成15年3月31日発行

発行／埼玉県熊谷市教育委員会

印刷／株式会社 博文社



さくらのまち“熊谷”